山口県埋蔵文化財センター調査報告　第98集

下 津 令 遺 跡 4

（沖ノ下2地区、下瑞光寺地区）

2017

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
防 府 市 教 育 委 員 会

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第98集

下津令遺跡4

（沖ノ下2地区、下瑞光寺地区）

2017

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
防府市教育委員会

序

本書は、防府市大字台道地内での農地整備事業の実施に先立ち、山口県山口農林事務所から委託を受けて、同地内に所在する下津令遺跡において、公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが防府市教育委員会と共同で実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整を図りながら記録保存をすることとしております。

この下津令遺跡の発掘調査は、平成 25 年度（沖ノ下 1 地区、西尾崎 1 地区）、平成 26 年度（西尾崎 2・3 地区、向条谷地区、中ヶ原地区、毛無尾地区）、平成 27 年度（毛無尾地区、西柿ノ木地区）に引き続いて 4 年目となり、最終年度の今年度は沖ノ下 2 地区と下瑞光寺地区の 2 か所で実施いたしました。調査総面積は約 6,560 ㎡で、沖ノ下 2 地区では平成 25 年度の 1 地区での発掘調査と同様に中世の集落の遺構が確認され、下瑞光寺地区では古墳時代の竪穴建物や中世の掘立柱建物を中心とする井戸や溝で構成される集落の遺構が確認されました。また、鍋のほか皿や漆器などたくさんの出土遺物とともに、朝鮮半島から輸入された象嵌青磁や県内でも出土例の少ない陶器瓶（徳利）なども発見されるなど、幅広い年代において当時の人々の生活文化や社会の状況等を知る上で数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

本遺跡の 4 年に渡る発掘調査を通して、この地域では古代から多くの人々が生活し、脈々と歴史が受け継がれてきた様相をうかがい知ることができました。

この発掘調査をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深めるとともに、教育及び文化の振興並びに学術研究の資料として広く活用されることはもとより、本書を通し、ふるさとの歴史や文化を改めて知っていただくことで、郷土に愛着をさらにもつ契機となり、活力とうるおいに満ちた郷土の創造と発展に寄与することを心から祈念する次第です。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、御指導及び御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成２９年３月

公益財団法人山口県ひとづくり財団

理事長　松　永　貞　昭

序

本書は、防府市大字台道地内での農地整備事業に伴い、公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターと防府市教育委員会が、平成 25 年度から平成 28 年度までの４か年にわたり実施した下津令遺跡の発掘調査の最終年度の報告です。

防府市は、多くの歴史的遺産に恵まれた環境にあります。特に、古代律令体制の時代には周防国の国府や国分寺が置かれ、「周防国衙跡」「周防国分寺旧境内」は国の史跡に指定されており、広範囲にわたる遺構が確認されています。中世以降は下右田遺跡などの大きな集落が営まれていたこともわかっています。

このたびの下津令遺跡調査において、古墳時代の竪穴建物と、溝・井戸・掘立柱建物で構成される室町時代の集落跡を確認しました。室町時代の遺物には、全国的にも発見例が少ない朝鮮半島産の陶磁器類があり、その所有者ひいては集落の性格を考える上で、貴重な発見となりました。

これまでの４か年を通じた調査の成果をふりかえると、下津令遺跡には平安時代には鋳造工房が存在し、中世には有力者が居住していたと考えられます。水陸交通の利便の地であるここ下津令では、こうした有力者を中心に多くの人々が集まり生活していたと考えられます。

調査の実施にあたり、下津令地区の皆様方には長期間にわたり多大なるご協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成２９年３月

防府市教育委員会

教育長　杉　山　一　茂

例　言

1　本書は、平成28年度に実施した下津令遺跡（沖ノ下２地区、下瑞光寺地区）（山口県防府市大字台道地内）の発掘調査報告書である。

2　調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県山口農林事務所の委託〔契約名：農業競争力基盤整備事業　下津令地区　平成27年度埋蔵文化財発掘調査業務２号、および平成28年度埋蔵文化財発掘調査業務〕を受けて、防府市教育委員会と共同で実施した。

3　調査組織は、次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター	
	防府市教育員会	
調査担当	調査第一課課長	上　山　佳　彦
	同　主任	宮　下　孝　優
	文化財専門員	井　上　広　之
	文化財専門員	西　尾　健　司
	文化財専門員	中　里　伸　明
	文化財専門員	小　河　泰　史
	調　　査　　員	河　村　美　沙
	埋蔵文化財係長	杉　原　和　惠（防府市教育委員会）

4　本書の第１図は、山口県山口農林事務所提供の地図を元に作成した。第２図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「防府」「小郡」を複製使用した。

5　本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北、標高は海抜高度（m）で示している。

6　本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。

7　図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

8　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＩ：竪穴建物　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＡ：柵列　ＳＥ：井戸　ＳＴ：墓
ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＰ：柱穴　ＳＸ：性格不明遺構

9　出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。

10　報告書作成の過程で、石製品の石材については亀谷敦氏（山口県立山口博物館）に御教示を頂いた。

11　資料の鑑定・分析に関して、放射性炭素年代測定（AMS法）、樹種同定、土壌理化学分析を業者に委託した。以上の成果は第Ⅵ章に掲載した。

12　本書の作成・執筆は、上山・宮下・井上・西尾・中里が共同で行い、編集は宮下が行った。なお、本書の執筆分担は、次のとおりである。

Ⅰ　宮下　Ⅱ　上山　Ⅲ　井上　Ⅳ　西尾　Ⅴ　中里　Ⅵ　業者委託　Ⅶ　宮下

本文目次

Ⅰ　調査の経緯と概要 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の概要 …… 2

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　沖ノ下２地区の調査成果 …… 5
　1　調査区の概要 …… 5
　　（1）概要 …… 5
　　（2）層序 …… 5
　2　遺構 …… 7
　　（1）掘立柱建物 …… 7
　　（2）柵列 …… 9
　　（3）井戸 …… 11
　　（4）土坑 …… 14
　　（5）溝 …… 16
　　（6）柱穴 …… 18
　3　遺物 …… 21
　　（1）掘立柱建物出土遺物 …… 21
　　（2）柵列出土遺物 …… 21
　　（3）井戸出土遺物 …… 21
　　（4）土坑出土遺物 …… 25
　　（5）溝出土遺物 …… 25
　　（6）柱穴出土遺物 …… 25
　　（7）遺構に伴わない遺物 …… 25

Ⅳ　下瑞光寺地区（１区）の調査成果 …… 29
　1　調査区の概要 …… 29
　　（1）概要 …… 29
　　（2）層序 …… 29
　2　古代以前の遺構 …… 32
　　（1）竪穴建物 …… 32
　　（2）土坑・柱穴 …… 33
　3　中世の遺構 …… 36
　　（1）掘立柱建物 …… 36
　　（2）井戸 …… 37
　　（3）土坑 …… 38
　　（4）溝 …… 41
　　（5）柱穴 …… 42
　　（6）性格不明遺構 …… 47
　4　古代以前の遺物 …… 51
　　（1）竪穴建物出土遺物 …… 51
　　（2）土坑・柱穴出土遺物 …… 51
　　（3）遺構に伴わない遺物 …… 53
　5　中世の遺物 …… 56
　　（1）井戸出土遺物 …… 56
　　（2）土坑出土遺物 …… 56
　　（3）溝出土遺物 …… 59
　　（4）柱穴出土遺物 …… 59
　　（5）性格不明遺構出土遺物 …… 62
　　（6）遺構に伴わない遺物 …… 63

Ⅴ　下瑞光寺地区（２区）の調査成果 …… 71
1　調査区の概要 …… 71
（1）概要 …… 71
（2）層序 …… 71
2　古代以前の遺構 …… 75
（1）井戸 …… 75
3　中世の遺構 …… 75
（1）掘立柱建物・柵列 …… 75
（2）井戸 …… 78
（3）墓 …… 80
（4）土坑 …… 81
（5）溝 …… 89
（6）柱穴 …… 95
（7）性格不明遺構 …… 96
4　古代以前の遺物 …… 99
（1）井戸出土遺物 …… 99
5　中世以降の遺物 …… 99
（1）掘立柱建物・柵列出土遺物 …… 99
（2）井戸出土遺物 …… 100
（3）墓出土遺物 …… 107
（4）土坑出土遺物 …… 108
（5）溝出土遺物 …… 118
（6）柱穴出土遺物 …… 124
（7）遺構に伴わない遺物 …… 134
6　谷状地形 …… 134
（1）谷状地形 …… 134
（2）谷状地形内出土遺物 …… 137

Ⅵ　自然科学分析 …… 155
1　はじめに …… 155
2　各調査区の放射性炭素年代測定・樹種同定 …… 155
（1）試料 …… 155
（2）分析方法 …… 156
（3）沖ノ下２地区 …… 157
（4）下瑞光寺地区（１区） …… 160
（5）下瑞光寺地区（２区） …… 164
3　下瑞光寺地区（２区）の土壌理化学分析 …… 167
（1）試料 …… 167
（2）分析方法 …… 167
（3）結果及び考察 …… 167

Ⅶ　総　括 …… 173
1　はじめに …… 173
2　沖ノ下２地区 …… 173
3　下瑞光寺地区 …… 174
4　下津令遺跡（平成 25 ～ 28 年度）の成果 …… 177

挿図目次

第１図　下津令遺跡の各調査区 …… 1
第２図　下津令遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 3
第３図　沖ノ下２地区遺構配置図 …… 6
第４図　沖ノ下２地区壁面土層断面図 …… 7
第５図　SB101・102 実測図…… 8
第６図　SB103 実測図 …… 9
第７図　SA101・102・103 実測図 …… 10
第８図　SA104・105 実測図…… 11
第９図　SE101・102 実測図…… 12
第10図　SE103 実測図 …… 13
第11図　SK101 実測図 …… 14
第12図　SK103・108・109・111 実測図 …… 15
第13図　SD102 実測図 …… 17
第14図　SD109 実測図 …… 18
第15図　SP1014・1015・1069・1070・1071 実測図 …… 19
第16図　掘立柱建物・井戸出土遺物実測図 … 22
第17図　井戸出土遺物実測図 …… 23
第18図　土坑・溝出土遺物実測図 …… 24
第19図　柱穴出土・遺構に伴わない遺物実測図 …… 26
第20図　下瑞光寺地区（１区）西壁面土層断面図 …… 29
第21図　下瑞光寺地区（１区）遺構配置図 … 30
第22図　SI201 実測図 …… 32
第23図　SI201 カマド実測図 …… 33
第24図　SK229、SP2237、SK221・230 実測図 …… 34
第25図　SP2174・2184・2204・2239 実測図　35
第26図　SB201・202 実測図…… 36
第27図　SE201・202 実測図…… 37
第28図　SK203・202 実測図…… 38
第29図　SK212 実測図 …… 39
第30図　SK214、SX203、SK217 実測図 …… 40
第31図　SK234・241 実測図…… 41
第32図　SD212 実測図 …… 42
第33図　SP2022・2084・2085・2101・2110 実測図 …… 43
第34図　SP2142・2143・2168・2182・2183 実測図 …… 44
第35図　SP2216・2262・2265 実測図 …… 45
第36図　SX202 実測図 …… 46
第37図　SX204 実測図 …… 47
第38図　SX205 実測図 …… 48
第39図　竪穴建物出土遺物実測図 …… 51
第40図　土坑・柱穴出土遺物実測図 …… 52
第41図　柱穴出土遺物実測図 …… 53
第42図　遺構に伴わない遺物実測図（１） … 54
第43図　遺構に伴わない遺物実測図（２） … 55
第44図　井戸出土遺物実測図 …… 56
第45図　土坑出土遺物実測図（１） …… 57
第46図　土坑出土遺物実測図（２） …… 58
第47図　土坑出土遺物実測図（３） …… 59
第48図　溝出土遺物実測図 …… 60
第49図　柱穴出土遺物実測図（１） …… 61
第50図　柱穴出土遺物実測図（２） …… 62
第51図　性格不明遺構出土遺物実測図 …… 63
第52図　遺構に伴わない遺物実測図（１） … 64
第53図　遺構に伴わない遺物実測図（２） … 65
第54図　下瑞光寺地区（２区）　壁面土層断面図 …… 72
第55図　下瑞光寺地区（２区）　遺構配置図 …… 73
第56図　SE306 実測図 …… 75
第57図　SB301 実測図 …… 76
第58図　SB302・303 実測図…… 77
第59図　SB304、SA301 実測図…… 78
第60図　SE301・302・303・304・305 実測図 …… 79
第61図　ST301・302 実測図…… 81
第62図　SK301・302・303・304・305 実測図 …… 82
第63図　SK306・313・314 実測図 …… 83

第 64 図　SK320・324・325・329 実測図 …… 84
第 65 図　SK331 実測図 …… 85
第 66 図　SK332・334 実測図…… 86
第 67 図　SK336 実測図（１）…… 87
第 68 図　SK336 実測図（２）…… 88
第 69 図　SK343・347 実測図…… 89
第 70 図　SD301・303 実測図…… 90
第 71 図　SD305・306 実測図…… 91
第 72 図　SD307・311・312・313 実測図 …… 92
第 73 図　SP3014・3015・3027・3184・3197
実測図 …… 93
第 74 図　SP3250・3296・3367・3530・
3600・3670 実測図…… 94
第 75 図　SX301 実測図 …… 96
第 76 図　井戸出土遺物実測図 …… 99
第 77 図　掘立柱建物・柵列出土遺物実測図 … 100
第 78 図　井戸出土遺物実測図（１） …… 101
第 79 図　井戸出土遺物実測図（２） …… 102
第 80 図　井戸出土遺物実測図（３） …… 103
第 81 図　井戸出土遺物実測図（４） …… 104
第 82 図　井戸出土遺物実測図（５） …… 105
第 83 図　井戸出土遺物実測図（６） …… 106
第 84 図　井戸出土遺物実測図（７） …… 107
第 85 図　墓出土遺物実測図 …… 108
第 86 図　土坑出土遺物実測図（１） …… 109
第 87 図　土坑出土遺物実測図（２） …… 111
第 88 図　土坑出土遺物実測図（３） …… 112
第 89 図　土坑出土遺物実測図（４） …… 113
第 90 図　土坑出土遺物実測図（５） …… 114
第 91 図　土坑出土遺物実測図（６） …… 115
第 92 図　土坑出土遺物実測図（７） …… 116
第 93 図　土坑出土遺物実測図（８） …… 117
第 94 図　溝出土遺物実測図（１） …… 119
第 95 図　溝出土遺物実測図（２） …… 120
第 96 図　溝出土遺物実測図（３） …… 121
第 97 図　溝出土遺物実測図（４） …… 122
第 98 図　溝出土遺物実測図（５） …… 124
第 99 図　柱穴出土遺物実測図（１） …… 125
第 100 図　柱穴出土遺物実測図（２）…… 127
第 101 図　柱穴出土遺物実測図（３）…… 129
第 102 図　柱穴出土遺物実測図（４）…… 131
第 103 図　柱穴出土遺物実測図（５）…… 133
第 104 図　遺構に伴わない遺物 …… 133
第 105 図　谷状地形実測図 …… 135
第 106 図　谷状地形内出土遺物実測図（１）… 136
第 107 図　谷状地形内出土遺物実測図（２）… 138
第 108 図　谷状地形内出土遺物実測図（３）… 139
第 109 図　谷状地形内出土遺物実測図（４）… 141
第 110 図　沖ノ下２地区における暦年較正
結果の比較 …… 158
第 111 図　下瑞光寺地区（１区）における
暦年較正結果の比較 …… 161
第 112 図　下瑞光寺地区（２区）における
暦年較正結果の比較 …… 165
第 113 図　木材図版 …… 170
第 114 図　炭木材図版（１） …… 171
第 115 図　炭木材図版（２） …… 172
第 116 図　沖ノ下１・２地区主要遺構配置図　174
第 117 図　下瑞光寺地区遺構配置図 …… 175
第 118 図　下津令遺跡の時期別遺構分布図 … 178

表目次

第 1 表　沖ノ下２地区掘立柱建物一覧表 …… 20
第 2 表　沖ノ下２地区柵列一覧表 …… 20
第 3 表　沖ノ下２地区井戸一覧表 …… 20
第 4 表　沖ノ下２地区土坑一覧表 …… 20
第 5 表　沖ノ下２地区溝一覧表 …… 20
第 6 表　沖ノ下２地区出土土器・土製品観察一覧表 …… 27
第 7 表　沖ノ下２地区出土石器・石製品観察一覧表 …… 28
第 8 表　沖ノ下２地区出土木製品観察一覧表 …… 28
第 9 表　下瑞光寺地区（１区）竪穴建物一覧表 …… 49
第 10 表　下瑞光寺地区（１区）掘立柱建物一覧表 …… 49
第 11 表　下瑞光寺地区（１区）井戸一覧表 …… 49
第 12 表　下瑞光寺地区（１区）土坑一覧表 …… 49
第 13 表　下瑞光寺地区（１区）溝一覧表 …… 50
第 14 表　下瑞光寺地区（１区）性格不明遺構一覧表 …… 50
第 15 表　下瑞光寺地区（１区）出土土器・土製品観察一覧表 …… 66
第 16 表　下瑞光寺地区（１区）出土石器・石製品観察一覧表 …… 70
第 17 表　下瑞光寺地区（１区）出土金属製品観察一覧表 …… 70
第 18 表　下瑞光寺地区（１区）出土木製品観察一覧表 …… 70
第 19 表　下瑞光寺地区（２区）掘立柱建物・柵列一覧表 …… 96
第 20 表　下瑞光寺地区（２区）井戸一覧表 …… 97
第 21 表　下瑞光寺地区（２区）墓一覧表 …… 97
第 22 表　下瑞光寺地区（２区）土坑一覧表 …… 97
第 23 表　下瑞光寺地区（２区）溝一覧表 …… 98
第 24 表　下瑞光寺地区（２区）性格不明遺構一覧表 …… 98
第 25 表　下瑞光寺地区（２区）出土土器・土製品観察一覧表 …… 142
第 26 表　下瑞光寺地区（２区）出土石器・石製品観察一覧表 …… 154
第 27 表　下瑞光地区（２区）出土金属製品観察一覧表 …… 154
第 28 表　年代測定・樹種同定資料一覧 …… 155
第 29 表　沖ノ下２地区の放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 158
第 30 表　沖ノ下２地区の樹種同定結果 …… 159
第 31 表　下瑞光寺地区（１区）の放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 161
第 32 表　下瑞光寺地区（１区）の樹種同定結果 …… 163
第 33 表　下瑞光寺地区（２区）の放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 165
第 34 表　下瑞光寺地区（２区）の樹種同定結果 …… 166
第 35 表　土壌理化学分析結果 …… 168
第 36 表　下津令遺跡各地区の存続期間 …… 177
第 37 表　下津令遺跡で検出された古墳時代の竪穴建物一覧 …… 179

図版目次

沖ノ下２地区

扉　沖ノ下２地区遠景（南東上空から）
図版１　１　沖ノ下２地区遠景（北東上空から）
　　２　沖ノ下２地区全景（西上空から）
図版２　１　壁面①土層断面状況（東から）
　　２　壁面②土層断面状況（東から）
　　３　壁面③土層断面状況（南から）
　　４　壁面④土層断面状況（南から）
　　５　SB101 ～ 103、SA101 ～ 105 完掘状況（南上空から）
図版３　１　SE101 置石出土状況（南から）
　　２　SE102 掘込状況（南から）
　　３　SE103 土層断面状況（南から）
　　４　SE103 完掘状況（南から）
　　５　SK103 遺物・石出土状況（南から）
図版４　１　SK101 完掘状況（東から）
　　２　SK108 土層断面状況（北西から）
　　３　SK109 土層断面状況（西から）
　　４　SK111 土層断面状況（南西から）
　　５　SK111 炭層断面状況（南西から）
　　６　SK111 完掘状況（南西から）
　　７　SD102 土層断面・遺物出土状況（南から）
　　８　SD109 土層断面状況（南東から）
図版５　１　SP1014 遺物出土状況（西から）
　　２　SP1015 遺物出土状況（西から）
　　３　SP1069 土層断面状況（西から）
　　４　SP1070 遺物出土状況（南西から）
　　５　SP1071 遺物出土状況（東から）
図版６　沖ノ下２地区出土遺物（１）
図版７　沖ノ下２地区出土遺物（２）
図版８　沖ノ下２地区出土遺物（３）

下瑞光寺地区（1区）

扉　下瑞光寺地区（１区）遠景（北東上空から）
図版９　１　下瑞光寺地区（１区）全景（東上空から）
　　２　下瑞光寺地区（１区）近景（東上空から）
図版 10　１　西壁面土層断面状況（東から）
　　２　SI201 カマド検出状況（南から）
　　３　SI201 検出状況（南から）
　　４　SK229 遺物出土状況（南から）
　　５　SP2237 遺物出土状況（南から）
図版 11　１　SK221 遺物出土状況（東から）
　　２　SK230 遺物出土状況（北から）
　　３　SP2184 遺物出土状況（東から）
　　４　SP2204 遺物出土状況（南東から）
　　５　SP2239 遺物出土状況（東から）
図版 12　１　SE201 完掘状況（南から）
　　２　SE202 掘込状況（南から）
　　３　SK202 遺物出土状況（北から）
　　４　SK202 遺物出土状況（南から）
　　５　SK203 遺物出土状況（北西から）
図版 13　１　SK212 遺物出土状況（北から）
　　２　SK214、SX203 完掘状況（南から）
　　３　SK217 遺物出土状況（北から）
　　４　SK241 漆器椀出土状況（北から）
　　５　SK234 石塊出土状況（南から）
図版 14　１　SD212 遺物出土状況（南西から）
　　２　SD212 遺物出土状況（北西から）
　　３　SD212 土層断面状況（北東から）
　　４　SP2084 遺物出土状況（西から）
　　５　SP2101 遺物出土状況（南西から）
図版 15　１　SP2085 遺物出土状況（東から）
　　２　SP2022 遺物出土状況（東から）
　　３　SP2110 遺物出土状況（北西から）
　　４　SP2142 遺物出土状況（南西から）
　　５　SP2143 遺物出土状況（南から）
図版 16　１　SP2168 遺物出土状況（南から）
　　２　SP2182 遺物出土状況（南から）
　　３　SP2183 遺物出土状況（北から）
　　４　SP2216 遺物出土状況（南から）
　　５　SP2265 遺物出土状況（南から）
図版 17　１　SP2262 遺物出土状況（西から）
　　２　SX202 遺物出土状況（南東から）
図版 18　１　SX204 遺物出土状況（東から）
　　２　SX205 遺物出土状況（北東から）
図版 19　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（１）
図版 20　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（２）
図版 21　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（３）
図版 22　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（４）
図版 23　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（５）
図版 24　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（６）
図版 25　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（７）
図版 26　下瑞光寺地区（１区）出土遺物（８）

下瑞光寺地区（2区）

扉　下瑞光寺地区（２区）遠景（北東上空から）
図版 27　１　下瑞光寺地区（２区）全景（北東上空から）
　　２　下瑞光寺地区（２区）全景（東上空から）
図版 28　１　下瑞光寺地区（２区）西側調査区近景（北東上空から）
　　２　下瑞光寺地区（２区）東側調査区近景（北東上空から）

図版 29　1　西側調査区壁面①土層断面状況（西から）
2　西側調査区壁面①土層断面状況（東から）
3　西側調査区壁面②土層断面状況（南西から）
4　西側調査区壁面②土層断面状況（西から）
5　東側調査区壁面③土層断面状況（北から）
6　東側調査区壁面③土層断面状況（西から）
7　SE306 土層断面状況（南から）
8　SE306 完掘状況（南から）
図版 30　1　SB301 完掘状況（西から）
2　SB302・303、SA301 完掘状況（北東上空から）
3　SB304 完掘状況（北東上空から）
図版 31　1　SE302 遺物出土状況（南から）
2　SE302 完掘状況（南から）
3　SE305 遺物出土状況（東から）
4　SE301 掘込状況（南西から）
5　SE304 遺物出土状況（南から）
図版 32　1　ST301 遺物出土状況（東から）
2　ST302 遺物出土状況（西から）
図版 33　1　SK304・305 遺物出土状況（南から）
2　SK304 遺物出土状況（東から）
3　SK305 土層断面・遺物出土状況（北西から）
4　SK305 遺物出土状況（東から）
5　SK305 遺物出土状況（北から）
図版 34　1　SK301 土層断面状況（南から）
2　SK302 土層断面状況（南から）
3　SK303 土層断面状況（南から）
4　SK303 遺物出土状況（南から）
5　SK306 土層断面状況（南西から）
6　SK306 遺物出土状況（南西から）
7　SK313 土層断面状況（北から）
8　SK314 遺物出土状況（南から）
図版 35　1　SK324 石塊出土状況（西から）
2　SK320 土層断面状況（西から）
3　SK325 土層断面状況（南東から）
4　SK329 土層断面状況（南東から）
5　SK331 土層断面状況（東から）
図版 36　1　SK332 石塊・遺物出土状況（南から）
2　SK334 石塊・遺物出土状況（南から）
3　SK343 完掘状況（西から）
4　SK347 遺物出土状況（北から）
5　SK347 遺物出土状況（東から）
図版 37　1　SK336 石塊・遺物出土状況（南から）
2　SK336 石塊・遺物出土状況（東から）
3　SK336 完掘状況（南から）
図版 38　1　SD301・303 土層断面状況（東から）
2　SD303 土層断面状況（南東から）
3　SD301 遺物出土状況（東から）
4　SD301 遺物出土状況（南東から）
5　SD301 遺物出土状況（南から）
6　SD303 遺物出土状況（南から）
図版 39　1　SD305・306 土層断面状況（西から）
2　SD307 土層断面状況（東から）
3　SD312 土層断面状況（東から）
4　SD313 土層断面状況（東から）
5　SP3014 遺物出土状況（東から）
6　SP3015 遺物出土状況（南西から）
7　SP3027 遺物出土状況（南東から）
図版 40　1　SP3184 遺物出土状況（東から）
2　SP3184 遺物出土状況（北から）
3　SP3197 遺物出土状況（東から）
4　SP3250 遺物出土状況（南から）
5　SP3296 遺物出土状況（北から）
図版 41　1　SP3367 遺物出土状況（南から）
2　SP3670 遺物出土状況（西から）
3　SP3600 遺物出土状況（北から）
4　SP3600 遺物出土状況（北から）
5　SP3530 遺物出土状況（南から）
図版 42　1　谷状地形全景（東上空から）
2　谷状地形 TR301 土層断面状況（北東から）
3　谷状地形 TR301 土層断面状況（南東から）
4　谷状地形 TR302 土層断面状況（北東から）
5　谷状地形 TR302 土層断面状況（南東から）
図版 43　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（１）
図版 44　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（２）
図版 45　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（３）
図版 46　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（４）
図版 47　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（５）
図版 48　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（６）
図版 49　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（７）
図版 50　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（８）
図版 51　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（９）
図版 52　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（10）
図版 53　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（11）
図版 54　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（12）
図版 55　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（13）
図版 56　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（14）
図版 57　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（15）
図版 58　下瑞光寺地区（２区）出土遺物（16）

Ⅰ　調査の経緯と概要

１　調査に至る経緯

山口県山口農林事務所は、防府市大字台道における農村の活性化や農業の競争力強化を図る目的で、農地整備事業（経営体育成型）および農業競争力強化基盤整備事業を進めている。山口県教育委員会は、事業の実施に先立ち、対象地内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成 22 年度に試掘調査を行った。その結果、土坑や柱穴等の遺構のほか、土師器や瓦質土器等の中世の遺物を確認し、中世を中心とする広範囲におよぶ集落跡の存在が推定されるに至った。これを受けて、山口県教育委員会と事業主体である山口県山口農林事務所は遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事により遺構が削平される約 29,000 ㎡について、平成 25 年度から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成 25 年度は、沖ノ下１地区（2,812 ㎡）と西尾崎１地区（1,144 ㎡）、平成 26 年度は、西尾崎２地区と３地区（1,808 ㎡）、向条谷地区（2,160 ㎡）、中ヶ原地区（7,513 ㎡）のほか、追加で毛無尾地区の一部（1,122 ㎡）、平成 27 年度は毛無尾地区（2,246 ㎡）と西柿ノ木地区（5,492 ㎡）について、いずれも山口県山口農林事務所の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターと、文化庁国庫補助事業として防府市教育委員会が発掘調査を実施した（第１図）。調査の結果、古墳時代から中世にかけての集落跡の様相が明らかとなった。各年度の調査成果は、『下津令遺跡１』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第 86 集）・『下津令遺跡２』（同第 90 集）・『下津令遺跡３』（同第 93 集）として刊行している。

平成 28 年度は、沖ノ下２地区（745 ㎡）と下瑞光寺地区（5,817 ㎡）について、山口県山口農林事務所の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターと、文化庁国

第１図　下津令遺跡の各調査区

庫補助事業として防府市教育委員会が発掘調査を実施することとなった（第１図）。調査成果は、沖ノ下２地区と、下瑞光寺地区の調査をあわせて、本書において報告する。なお、下瑞光寺地区については、調査区が東西に分かれることから、西側を１区、東側を２区と呼称した。

２　調査の概要

平成 28 年度の調査は事前の諸準備を経て、平成 28 年４月 22 日には発掘作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図り、同日には農事組合法人下津領の用地内に仮設事務所を設置した。

調査は沖ノ下２地区から着手し、４月 25 日から 28 日まで重機による表土除去作業を実施した。４月 28 日から機材搬入を行い、発掘作業員による壁面清掃や客土除去、遺構検出作業、国土座標杭設置の業務委託を行った。５・６月には一時、下瑞光寺地区の遺構検出のため調査を中断したが、遺構の掘り込みを行い、５月 23 日からは調査員によるトータルステーションを用いたグリッド実測図の作成を開始した。調査員が必要に応じて、各遺構の実測図作成や記録写真撮影等を行い、６月 10 日には空中写真撮影を実施した。遺構の実測図作成等の終了後、７月 13 日に現地調査を無事終了した。出土遺物は、調査中より随時、山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を進めて、調査後は出土遺物の実測図作成および写真撮影を行い、本報告書作成のための資料整理を行った。

下瑞光寺地区の調査は、沖ノ下２地区と並行して行い、５月２日から 26 日まで重機による表土除去作業・国土座標杭設置の業務委託を１・２区の順番で実施した。５月 17 日から１区の遺構検出を行い、６月 17 日から２区の遺構検出により調査区全体の遺構分布状況を把握し、７月 14 日から１区の掘り込みを開始するとともに、グリッド測量図の作成を行った。８月 30 日から２区の掘り込みを開始し、10 月 13 日には空中写真撮影を実施し、20 日には現場での調査をほぼ終えた。

重機による表土除去

作業風景

10 月１日には現地説明会を開催し、地元住民を中心に約 70 人の方々に参加していただいた。10 月 27 日には機材の搬出を行い、発掘作業員の稼動を終了した。31 日に半年にわたるすべての現地作業を終了した。

出土遺物は、随時、山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を行い、炭化材や採取土壌から良好な試料を抽出し、業務委託による自然科学分析を実施した。

現地作業終了後は、調査中に進めていた記録類の整理に本格的に着手し、調査資料の整理・検討を行い、出土遺物の実測図作成および写真撮影を行った。あわせて挿図・写真図版の作成、原稿執筆などの作業を継続し、本報告書を刊行するに至った。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

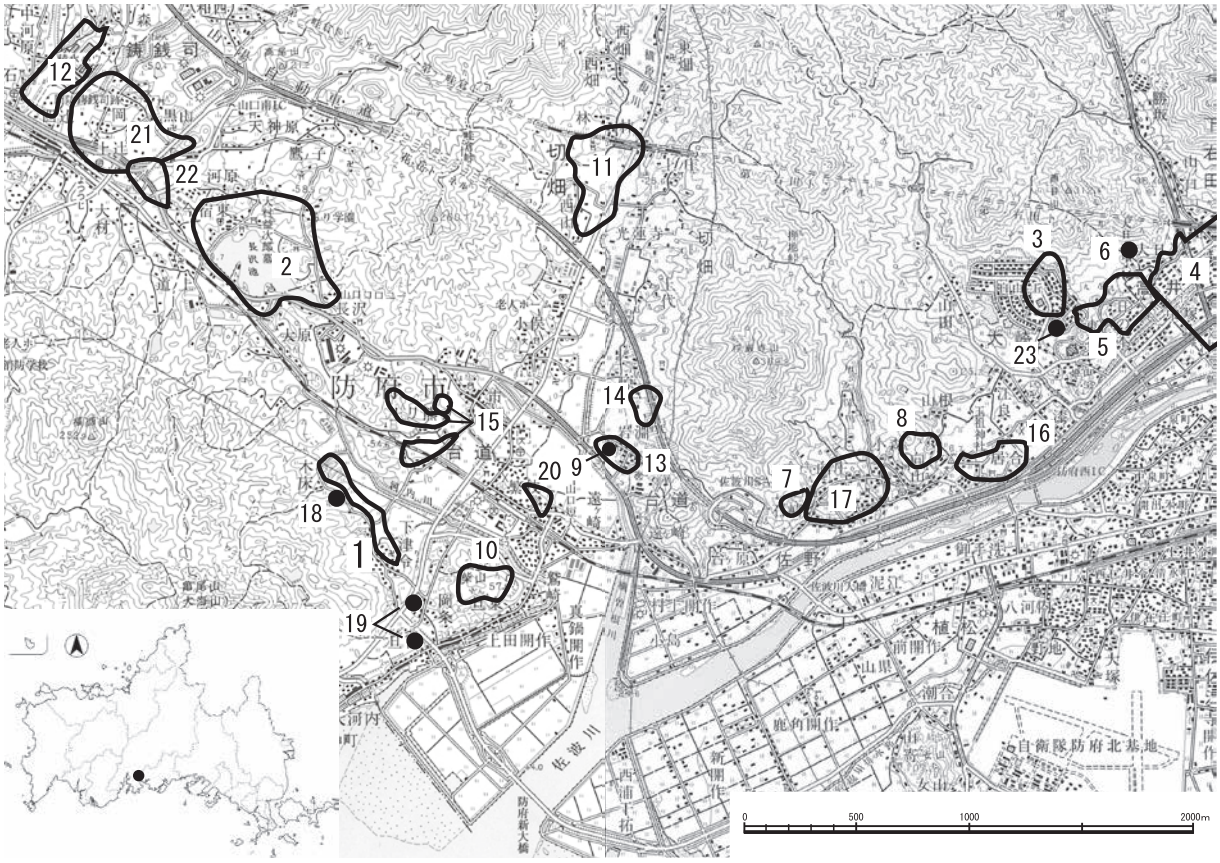
下津令遺跡は、防府市大字台道地内に所在する（第２図　１）。遺跡の所在する大道地区は、防府平野の西側に位置し、東に楞厳寺（りょうごんじ）山、北に金山（かなやま）・花ヶ岳、西に亀尾山（大海山）と三方を山に囲まれ、南は大海湾に面している。周辺の山々は主に花崗岩質の地盤から成り、風化した土砂が河内・横曽根川の流下により堆積して沖積平野が形成された。1605 年頃の「慶長国絵図控図周防国」（宇部市所蔵）を見ると、大海湾が内陸に入り込み、中世末には海岸線が遺跡の周辺近くまで及んでいたと推定できる。

２　歴史的環境

下津令遺跡の周辺では、旧石器・縄文時代にさかのぼる人びとの活動の痕跡を示す石器が長沢池遺跡（２）などで採集されている。河内川左岸に位置する上り熊遺跡（15）でも縄文土器や耳飾・石鏃などが出土したが、明確な遺構に伴う生活の痕跡は確認されていない。

弥生時代では、大道地区周辺の遺跡状況は不明な点が多いが、下津令遺跡から約４km 北東に所在する佐波川右岸の下右田遺跡（４）は、弥生時代後期の拠点的大集落跡として広く知られている。

古墳時代には、防府市域で前期の古墳はほとんど見られず、集落の減少化傾向を反映するが、平成 27 年度の下津令遺跡（西柿ノ木地区）の調査で、前期の竪穴建物内に廃棄された大量の土師器が出土し、



1 下津令遺跡　2 長沢池遺跡　3 奥正権寺遺跡　4 下右田遺跡　5 大崎遺跡　6 大日古墳　7 佐野峠古墳群　8 向山古墳群　9 岩淵古墳
10 柴山古墳群　11 切畑南遺跡　12 周防鋳銭司遺跡　13 岩淵遺跡　14 原遺跡　15 上り熊遺跡　16 玉祖遺跡　17 佐野窯跡群
18 下山ノ口遺跡　19 旦六百人塚・旦二百人塚　20 台道繁枝砂丘遺跡　21 東禅寺・黒山遺跡　22 今宿遺跡　23 大崎岡古墳

第２図　下津令遺跡の位置と周辺の主な遺跡

情報の少ないこの時期の様相を伝える資料となった。古墳時代後期以降には、佐波川流域に次々と大型古墳や群集墳が築造された。国指定史跡の大日古墳（６）は、石室規格から畿内との密接な関係を示す地域を代表する前方後円墳であり、群集墳としては佐野峠古墳群（７）、向山古墳群（８）などがある。下津令遺跡の周辺では、北部九州系譜の竪穴系横口式石室を持つ岩淵古墳（９）や両袖式の横穴式石室墳を有する柴山古墳群（10）が造営された。古墳時代後期の防府地域では、九州系の要素とともに畿内勢力との結びつきも見られ、複合的影響を受けていた点に地域的特色がうかがわれる。

古代には、大道地区は、重要な幹線路であった山陽道が横断していたと考えられており、東の周防国府と西の周防鋳銭司（12）とを結ぶほぼ中間地点に位置するという地理的条件にも恵まれていた。このため、こうした要因を反映した一定規模の集落遺跡が確認されている。大道地区北部に所在する切畑南遺跡（11）は、古代から中世にかけての集落遺跡で、平安時代後半の銅製錬工房と推定される建物や精錬炉が検出され、銅製錬に関わった工人の集落であった可能性が指摘されている。遺跡北西部に位置する金山が『続日本紀』に記載された「達理山」に当たるとして、金山から産出した銅鉱石を切畑南遺跡周辺で精錬し、周防鋳銭司に供出したとする見解もある。

中世中期以降には、大内弘世が山口に拠点を移したことに伴い、南北を結ぶ山口道が整備された。海上交通でも大海湾が山口方面への荷揚げ港として瀬戸内地域や東九州地域との交易拠点となった。こうして、中世の下津令地域は、陸海交通の要衝として重要な位置を占めたと考えられる。近辺の岩淵遺跡（13）や原遺跡（14）では瓦質土器の焼成窯跡が見つかり、生産拠点地域であったことが明らかになった。また、室町時代に大内氏の所領となっていた下津令で塩の生産が行われ、足利義持の死に際して正長元年（1428 年）、大内盛見が仏事料として下津令の塩を国清寺（現洞春寺）に寄進した証文が『防長風土注進案』に記されている。こうしたことから、下津令周辺地域では、瓦質土器や塩などの生産や取り引きが盛んに行われていたと推測される。下津令遺跡に近い上り熊遺跡（15）は、14 ～ 16 世紀の中世主体の集落であり、掘立柱建物群や区画溝、倒置土器棺墓などの特殊な墓制を伴った集落の継続的な変遷状況が発掘調査で判明した。下右田遺跡（４）は、平安時代末から室町時代にかけて散村形態から集村形態への変遷が追える全国的にも著名な中世集落遺跡である。このように、周辺の遺跡を通じて、大道地域における中世の集落の形成と展開の様子をうかがい知ることができる。このほか、下津令遺跡（西柿ノ木地区）の西側近くの丘陵に位置する下山ノ口遺跡（18）では、五輪塔を設置した石積みの基壇と、火葬骨が入れられた蔵骨器を石で囲った特異な形態の埋葬施設が確認され、中世末から近世初頭にかけての地域色を反映した墓地として注目される。

なお、今回の発掘調査対象である下瑞光寺地区の字名に関わる「瑞光寺」について、『防長風土注進案』の廃寺（豊臣秀吉の九州平定頃）記載以外、時期や規模などの詳細は文献資料では確認されていない。

引用・参考文献

防府市教育委員会 1956『防府市史』上巻、続防府市史刊行会 1960『続防府市史』

防府市史編纂委員会 2000『防府市史』史料Ⅰ、同 2004『防府市史』通史Ⅰ　原始・古代・中世、同 2004『防府市史』資料Ⅱ　考古資料・文化財編

山口県埋蔵文化財センター 2001『岩淵遺跡』、同 2001『原遺跡』、同 2008『上り熊遺跡Ⅰ』、同 2009『上り熊遺跡Ⅱ』、同 2010『上り熊遺跡Ⅲ』

山口県埋蔵文化財センター・防府市教育委員会 2014『下津令遺跡１』、同 2015『下津令遺跡２』、同 2016『下津令遺跡３』

防府市教育委員会 2001『井上山経塚・下山ノ口遺跡発掘調査報告』、山口県文書館 1964『防長風土注進案』第 14 巻　小郡宰判

Ⅲ　沖ノ下２地区の調査成果

１　調査区の概要

（１）概要

沖ノ下２地区は南西から北東に舌状に伸びる低丘陵の先端部に立地し、標高約 5.65 m～ 5.8 mの平坦面に所在する。

今回の調査では柱穴 268 個を検出し、掘立柱建物を３棟復元した。また、柵列５列、井戸４基、土坑 13 基、溝 11 条を検出している（第３図）。

検出した掘立柱建物や柵列の構成柱穴からは土師器や瓦質土器が出土しているが、そのほとんどが小片のため、一部を除き図化には至っていない。構成柱穴以外の柱穴である SP1065 からは北島編年大内ⅡＢ式の土師器皿、SP1015 からは同、大内ⅡＡ式の土師器皿が出土している（北島 2010）。井戸 SE103 からは多量の瓦質土器足鍋・擂鉢・火鉢・湯釜、木製品等が出土している。柱穴や土坑、溝から出土した遺物も含めて総合的に判断し、生活が営まれた主な時期は室町時代中頃と考える。この地の集落建物は 14 世紀末～ 15 世紀前半頃に設営され、16 世紀末頃には廃絶に至ったと考える。

平成 25 年度の沖ノ下１地区調査で確認した中世遺構と比較すると、溝の主軸等は共通しており、建物や柵列は地形に影響された感が強い。１地区と時期差もほとんどないが、１地区の西方に展開する２地区は遺構面の標高が約１m高く、１地区より半世紀ばかり遡る遺構が埋存している。

古代の須恵器も数点出土しているが、遺構に伴うものではなく、流込であることを確認している。

（２）層序

沖ノ下２地区では、調査区の壁面①～④の４か所で土層を観察した。その結果、基本層序は、表土（真砂土：現代）→耕作土（現代）→盤土（現代）→旧耕作土（近世以降）→旧盤土（近世以降）→灰色土（中世以降）→地山（花崗岩表層風化砂質土：バイラン土）とまとめることができる。

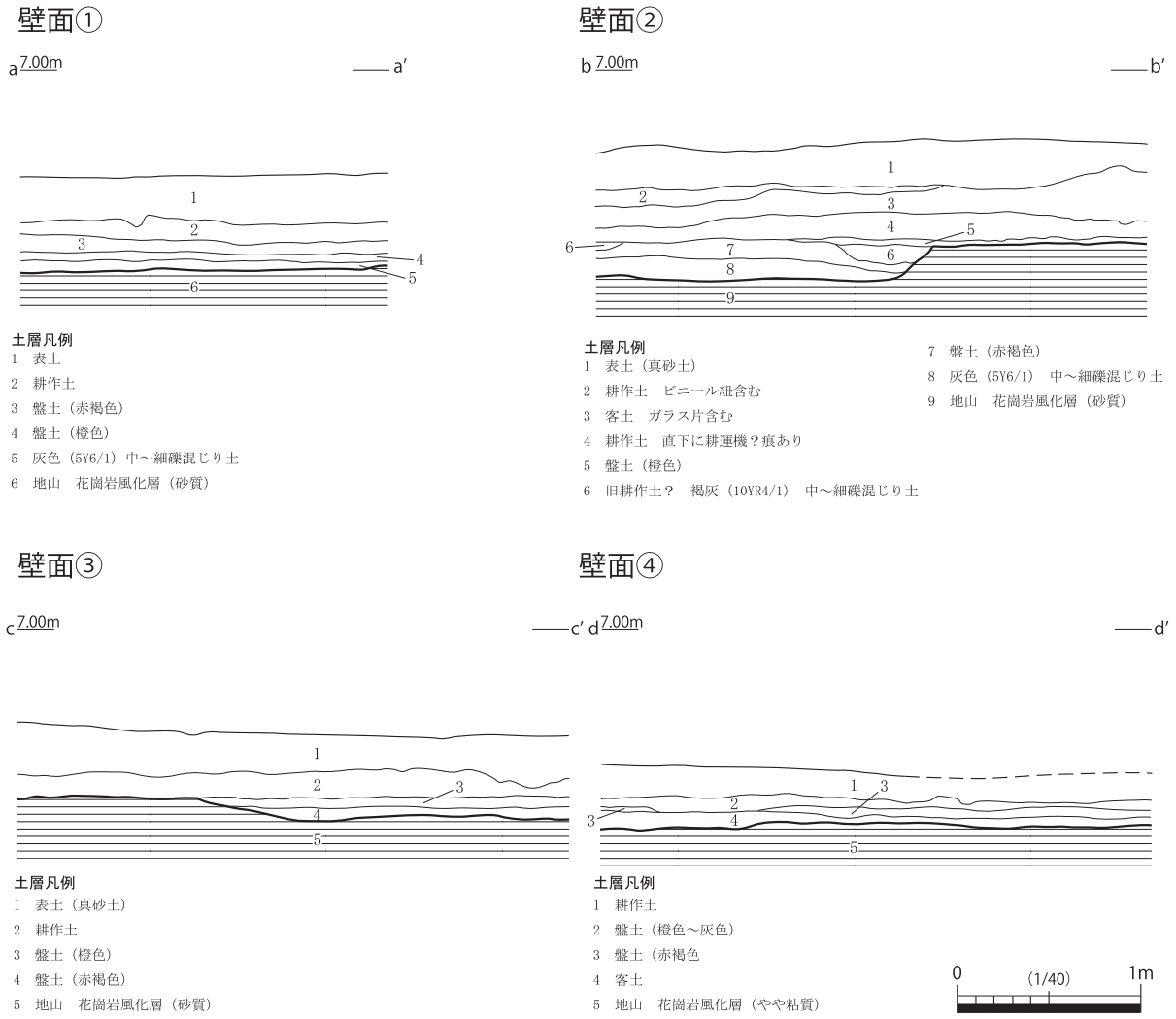
壁面①（第４図　図版２）　１層は表土で、現存の道路整備の際に盛られたものである。２層は現代の水田の耕作土、３層は同盤土である。４層は旧水田の盤土、５層は灰色土（旧表土または堆積土）、その下６層は地山となっている。５層は中世以降の堆積土と考える。５層下に遺構が埋存する。

壁面②（第４図　図版２）　１層は表土で、現存の道路整備の際に盛られたものである。２層はその直前の耕作土（または耕作土と同等の客土）、３層もかさ上げのために盛られた客土と考える。４層は現代の水田の耕作土、５層は同盤土である。６層は旧水田の耕作土の一部で、溝状に残る。７層は旧水田の盤土。８層は中世以降の堆積土、９層は地山である。７・８・９層（壁面①では４・５・６層に相当）を残して現代の水田構築のために削平が行われており、旧水田の耕作土は一部を除き残っていない。

壁面③（第４図　図版２）　１層は表土で、現存する民家建設のために盛られ、整地されたものである。２・３層はそれぞれ現代の水田の耕作土･盤土である。４層は旧水田の盤土、５層は地山である。

壁面④（第４図　図版２）　１層は現代の水田の耕作土、２層は同盤土である。３層は旧水田の盤土である。４層はそれ以前の客土である。

第３図　沖ノ下２地区遺構配置図



第４図　沖ノ下２地区壁面土層断面図

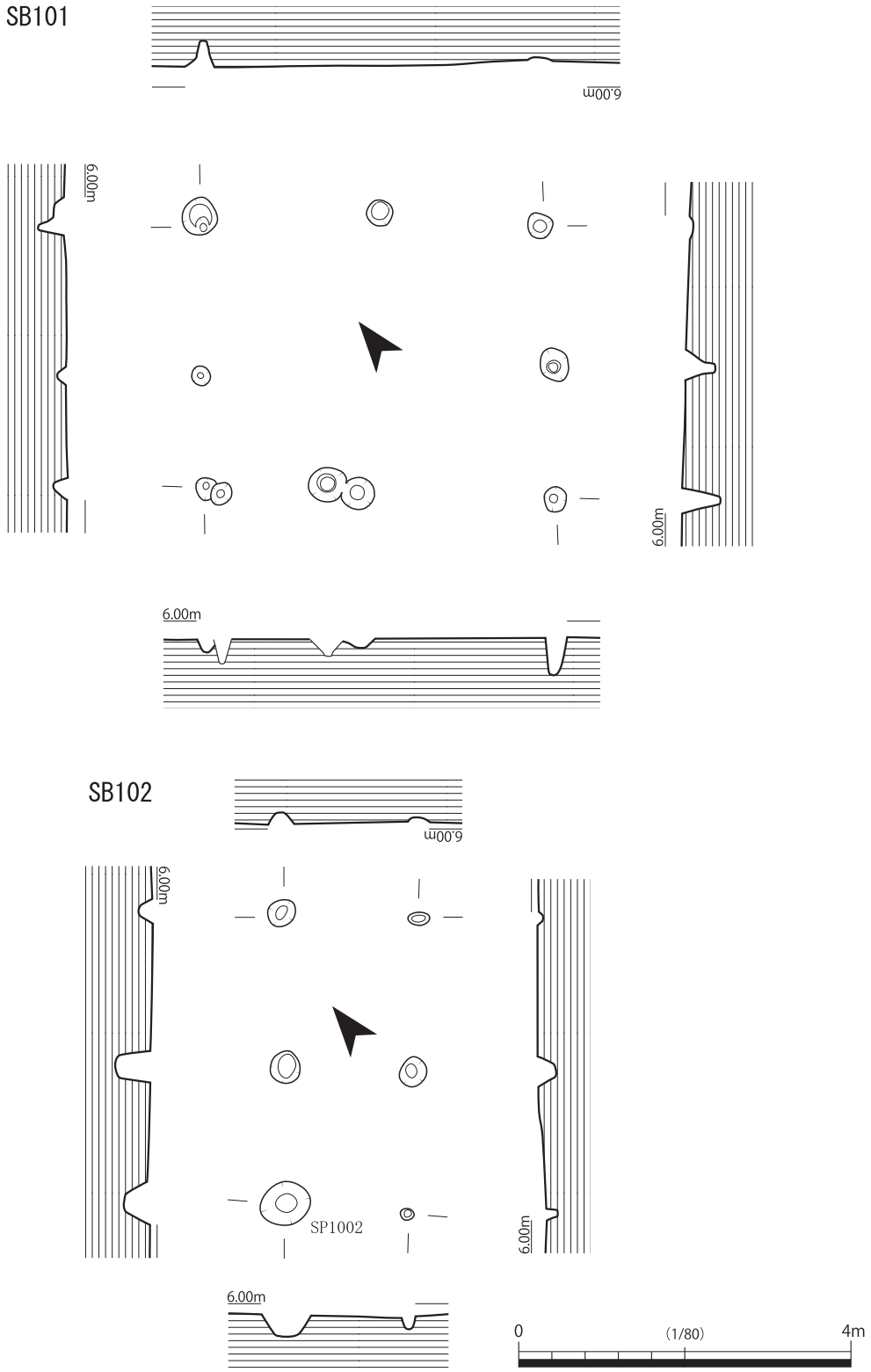
２　遺構

（１）掘立柱建物

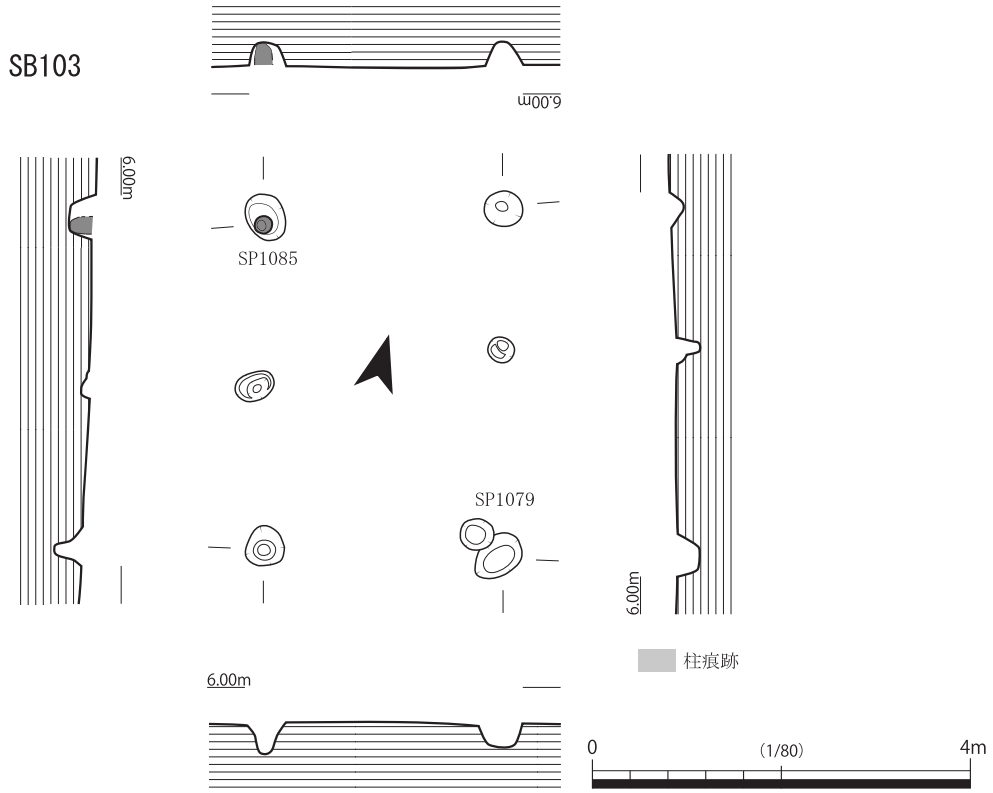
今回復元できた掘立柱建物は３棟である。床面積は 5.4 ㎡～ 13.53 ㎡で、規模や棟方向は同じと言えないが、隣接する溝の向きや柵列の主軸方向とはほぼ一致しており、地形に合わせて設営されたと考える。構成柱穴の中には、下部で湧水を伴い柱材が残るものもあった。

SB101（第５図　図版２）　調査区中央部北東寄りに位置する建物で、桁行２間（4.1 m）×梁行２間（3.3 m）、床面積 13.53 ㎡を測り、復元できた３棟中で最大規模を誇る。棟方向は N52°　W で、後述の SA101・102 の主軸方向とほぼ一致し、SB102 の棟方向とは直交する。また、隣接の SD102・103・110 に囲まれるように立つ。地形に沿って建てられたと考える。構成柱穴は８個で、柱穴から遺物は発見されなかったが、周辺遺構との関連から、同時期の設営と考える。

SB102（第５図　図版２）　調査区中央部北西寄りに位置する建物で、桁行２間（3.6 m）×梁行１間（1.5 m）、床面積 5.40 ㎡を測る。棟方向は N42°　E である。構成柱穴は６個で、SP1002 から瓦質土器鍋（１）が出土している。室町時代の建物と考える。



第５図　SB101・102 実測図



第６図　SB103 実測図

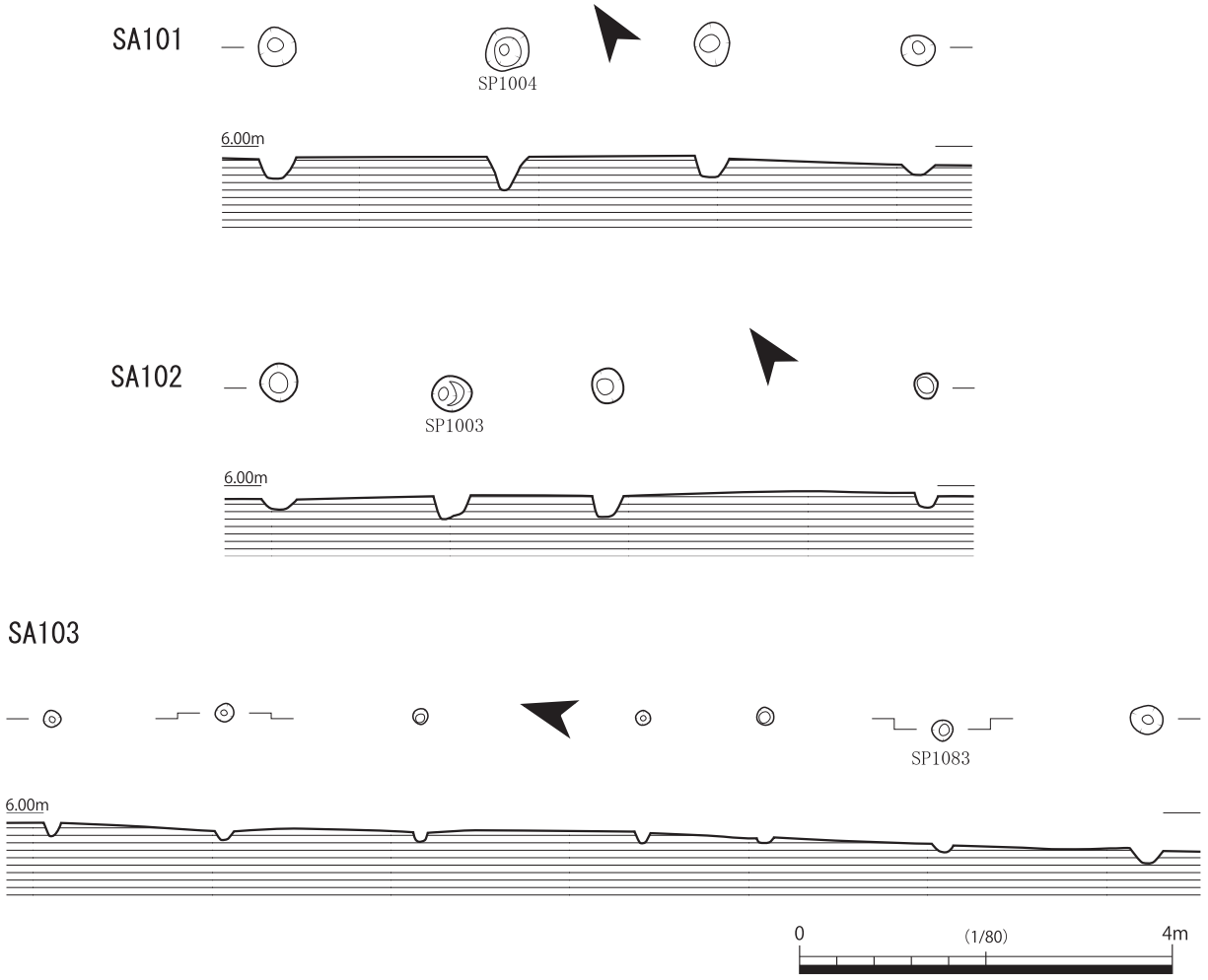
SB103（第６図　図版２）　調査区南端部に位置する建物で、桁行２間（3.8 m）×梁行１間（2.5 m）、床面積 9.50 ㎡を測る。棟方向は N18°　W で、SA103 の主軸方向とほぼ一致する。構成柱穴は６個で、SP1079 から土師器皿（２）、瓦質土器鍋が出土している。隅柱にあたる SP1085 では、柱材を検出した。室町時代の建物と考える。

（２）柵列

柵状に並ぶ柱穴列を５列確認した。直径や深さ、柱間はまちまちであるが、主軸方向でほぼ一致するもの（SA101 と 102、SA104 と 105）がある。方向については、地形および掘立柱建物や溝と関連があると考える。

SA101（第７図　図版２）　調査区中央部西寄りに位置し、４個の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 6.9 m（柱間は南方から 2.2 m・2.2 m・2.5 m）で、主軸方向は N55°　W である。SP1004 からは、河原から持ち込まれたと思われる丸石が出土している。他の構成柱穴からの出土遺物はない。

SA102（第７図　図版２）　調査区中央部西寄りに位置し、４個の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 7.0 m（柱間は南方から 3.5 m・1.7 m・1.8 m）で、主軸方向は N52°　W である。SA101 とほぼ並行に設営される。SP1003 から出土した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）結果により、15 世紀前半～中頃の遺構に比定できる。

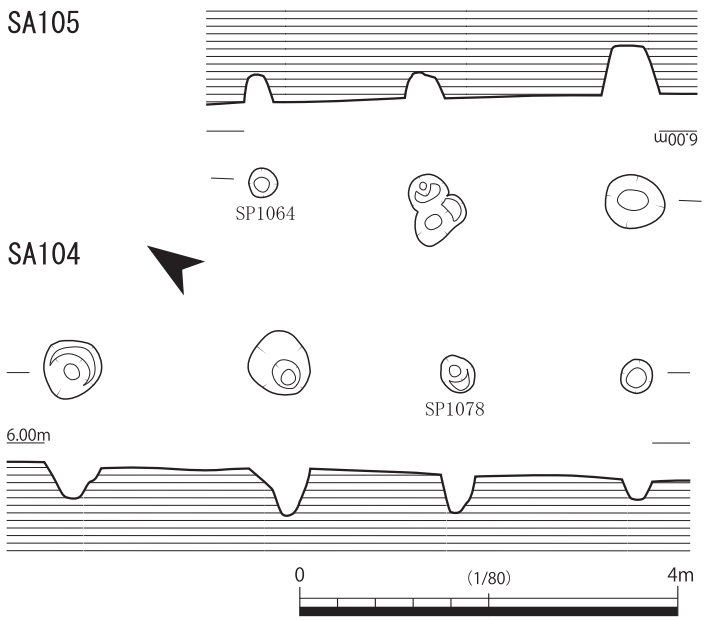


第７図　SA101・102・103 実測図

SA103（第７図　図版２）　調査区南部に位置し、７個の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 11.8 m（柱間は南方から 2.2 m・1.9 m・1.3 m・2.4 m・2.2 m・1.8 m）で、主軸方向は N14°　W である。SP1083 から土師器が出土しているが、小片のため図化には至らなかった。室町時代の遺構と考える。他の構成柱穴からの出土遺物はない。

SA104（第８図　図版２）　調査区南部に位置し、４個以上の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 6.0 m（柱間は南方から 1.9 m・1.8 m・2.3 m）以上で、主軸方向は N35°　W である。SP1078 から瓦質土器が出土しているが、小片のため図化には至らなかった。室町時代の遺構と考える。

SA105（第８図　図版２）　調査区南部に位置し、３個以上の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 4.0 m（柱間は南方から 2.3 m・1.7 m）以上で、主軸方向は N32°　W である。SA104 とほぼ並行に設営される。SP1064 から土師器皿が出土しているが、小片のため図化には至らなかった。室町時代の遺構と考える。他の構成柱穴からの出土遺物はない。



第８図　SA104・105 実測図

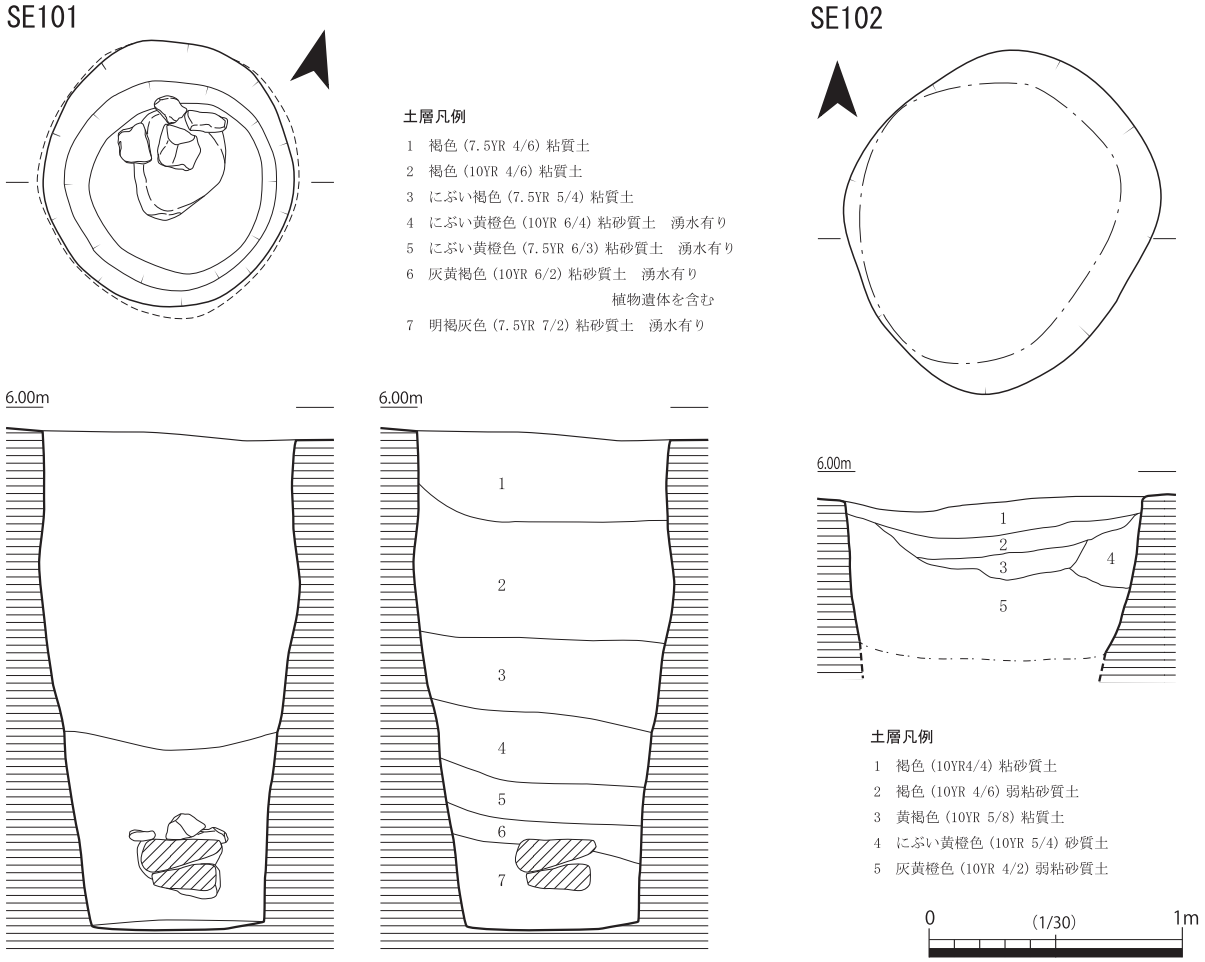
（３）井戸

４基の井戸を検出した。いずれも地山を素掘りしてつくられたものである。沖ノ下１地区SE101（平成25年度調査）に隣接して掘られており、一連の井戸群を形成する。平面形が円形または楕円形で直径１ｍ前後の小型のものが２基、不整楕円形で2.5ｍを超える大型のものが２基である。井戸の壁面上位は、いずれも花崗岩表層風化砂質土のため、非常にもろい。井戸埋土の土層断面検視で壁面崩落の様相が確認できるものもあった。壁面中位は徐々に粘質土化し、下位では湧水を伴う。規模の大小による用途の使い分けは明らかではないが、壁面崩落や地下水脈の移動に伴い新設されていったものと推測できる。

設営時期は、出土遺物から周辺の掘立柱建物や柵列、溝の設営と同時期か、わずかに時期を異にするものと考える。

SE101（第９図　図版３）　調査区北端部に位置する素掘りの井戸で、平面形は長さ106cm、幅99cmのほぼ円形を呈する。深さは196cmを測る。主軸方位はN26°Ｗである。土層は７層に分かれる。最下層の上面（床面から16cm～36ｃｍ）に天部がわずかに出るように２個の石を重ねて設置している。石天部は平坦面を有しており、井戸水を汲み上げる際に、釣瓶が下層泥に触れて濁水になるのを防ぐものと考える。杓子形木製品（３）や瓦質土器足鍋（４）が出土している。出土遺物から、室町時代に比定する。

SE102（第９図　図版３）　調査区北部やや中央よりに位置する素掘りの井戸で、平面形は長さ137cm、幅116cmの円形を呈する。主軸方位はＮ８°Ｅである。湧水による崩落の危険性が大きかったため、作業の安全上深さ75cmで堀込を中止した。土層は５層以上に分かれる。木枠の痕跡等は確認できなかった。瓦質土器鍋（５）、陶器が出土している。出土遺物から、室町時代に比定する。

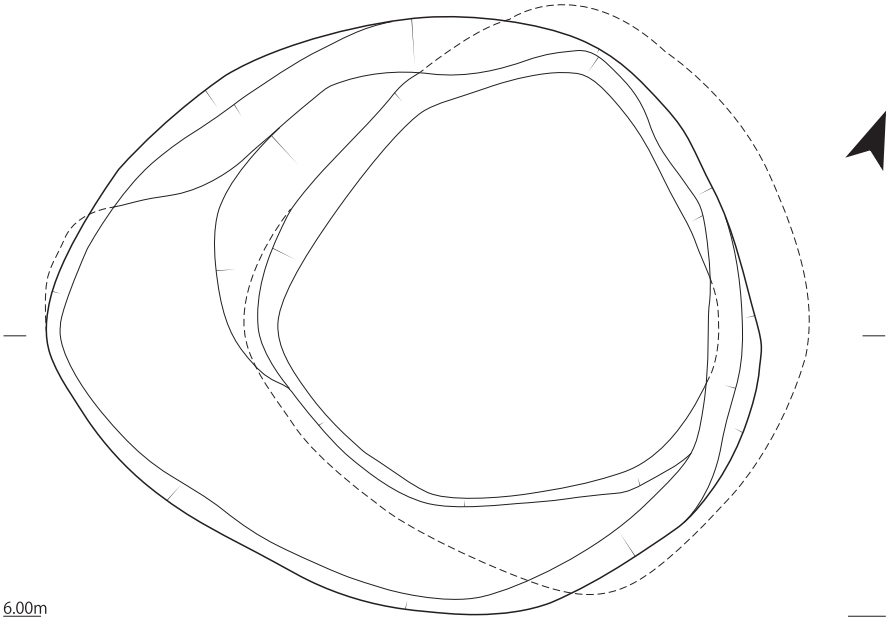


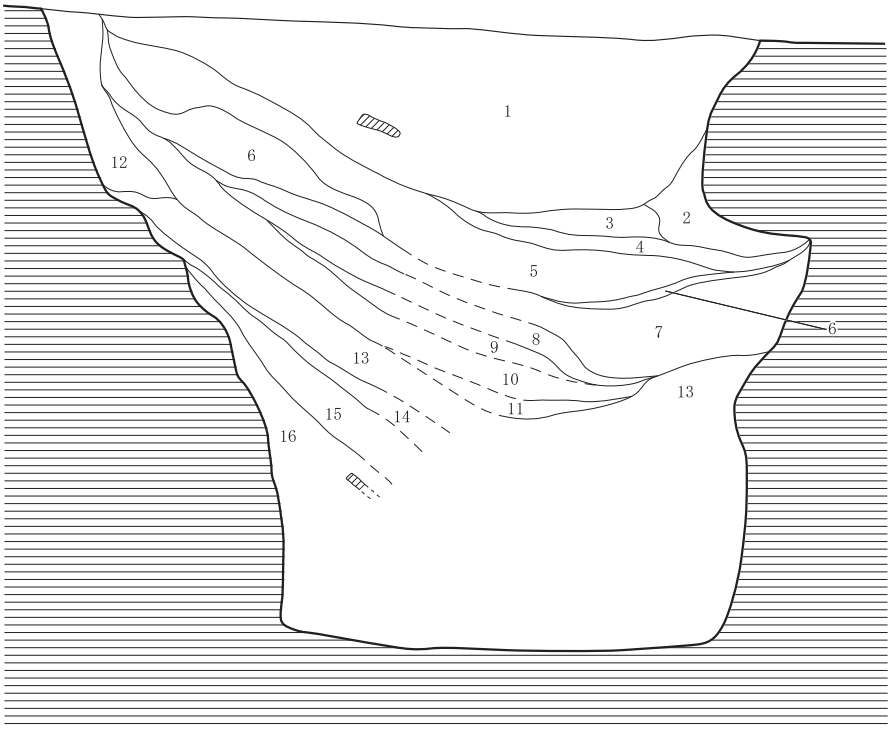
第９図　SE101・102 実測図

SE103（第 10 図　図版３）　調査区北東部に位置する素掘りの井戸で、平面形は長さ 284cm、幅 237cm の楕円形を呈する。深さは 246cm を測る。主軸方位は N69°　E である。16 層以上に分かれる。大型の井戸で湧水量が多く、壁面の崩落により下層の図化は断念した。２～ 16 層は上方からの自然堆積で、うち２層・12 層は上位壁面が崩落して堆積したものと考える。１層は開墾時に井戸を塞ぐために投入されたものと考える。９・10 層、16 層は遺物包含層である。16 層からは土師器皿（６）、瓦質土器鍋（８）･足鍋（９）･擂鉢（23）が出土した。15 世紀代（室町時代中頃）に比定できる。９・10 層からは褐釉陶器椀（７）､瓦質土器足鍋（10 ～ 19）･擂鉢（20 ～ 22）･火鉢（24 ～ 26）･湯釜（27）、艇形木製品（28）が出土した。16 世紀代（室町時代末）に比定できる。そのほか須恵器高杯（29）・壺（30）が出土しているが、この２点は流込と考える。

SE104（第３図）　図版調査区南東部に位置する素掘りの井戸で、撹乱により完掘していないため個別で図化掲載はしていないが、検土壌ステッキによる土層確認により、井戸と判断した。平面形は長さ 340cm、幅 200cm 以上（調査区外へ伸びるため不明）の楕円形を呈するものと考える。主軸方向および深さは不明である。

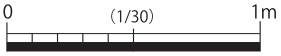
SE103





土層凡例

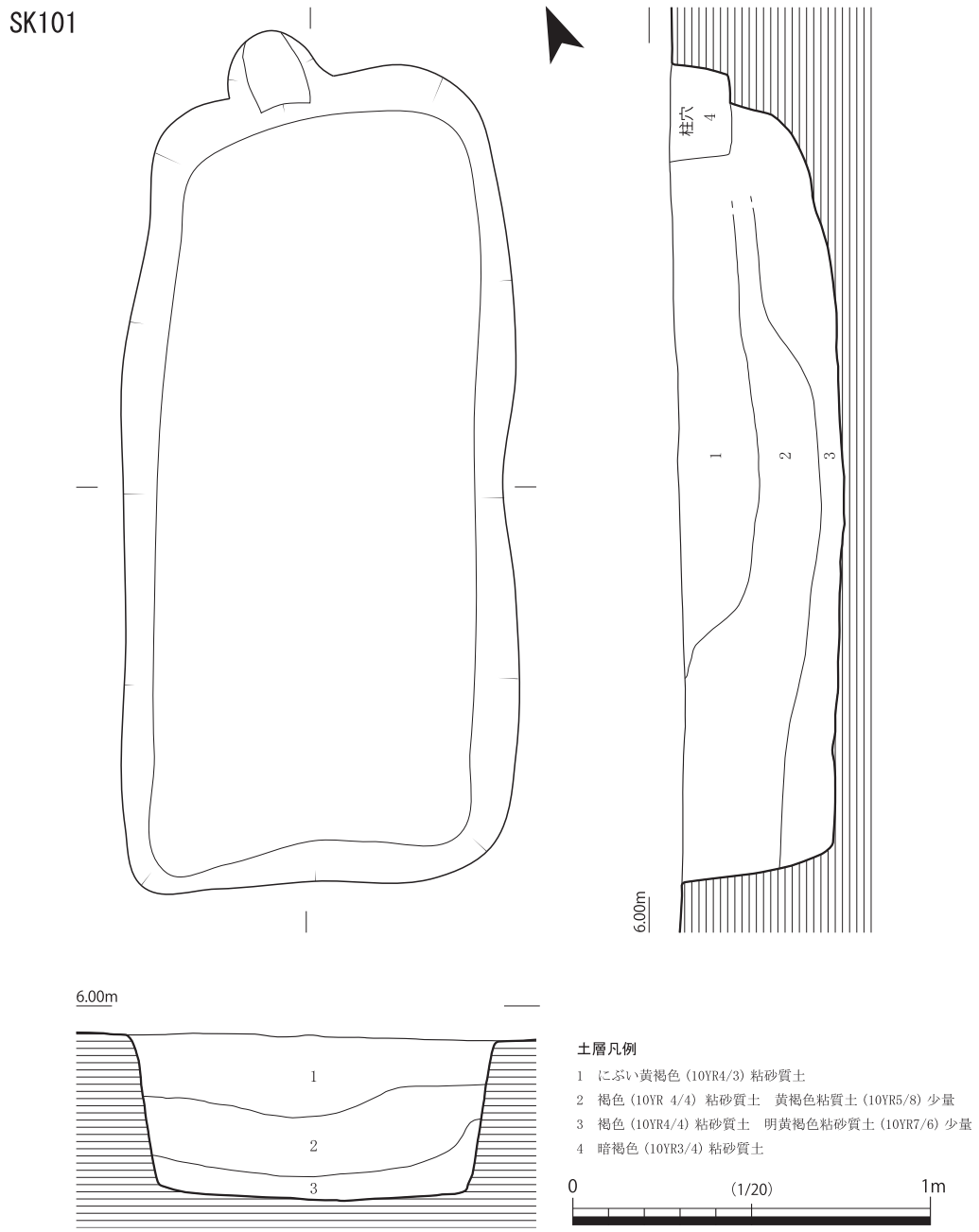
1	にぶい黄褐色（10YR5/6）	粘砂質土
2	にぶい黄橙色（10YR6/4）	粘質土
3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘質土
4	にぶい黄橙色（10YR6/3）	粘質土
5	橙色（7.5YR6/6）	砂質土
6	明黄褐色（10YR6/8）	粘質土
7	黄橙色（10YR7/8）	砂質土
8	にぶい橙色（7.5YR7/3）	粘砂質土
9	褐灰色（7.5YR4/1）	粘質土
10	褐灰色（7.5YT5/1）	粘質土
11	青灰色（10BG6/1）	砂質土
12	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘砂質土
13	灰色（7.5Y4/1）	粘質土
14	明褐色（7.5YR5/8）	砂質土
15	にぶい黄橙色（10YR7/3）	砂質土
16	褐灰色（10YR5/1）	粘砂質土



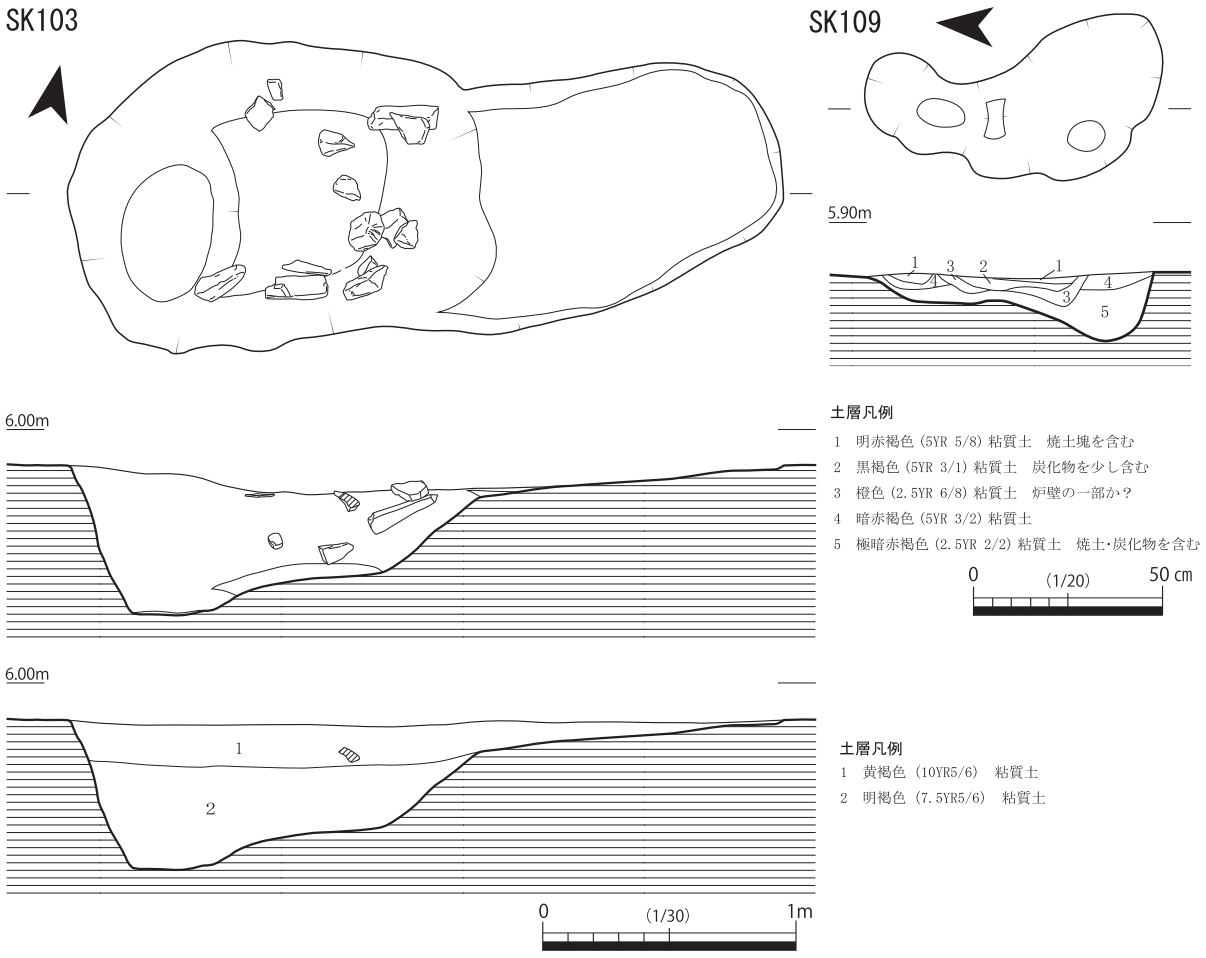
第 10 図　SE103 実測図

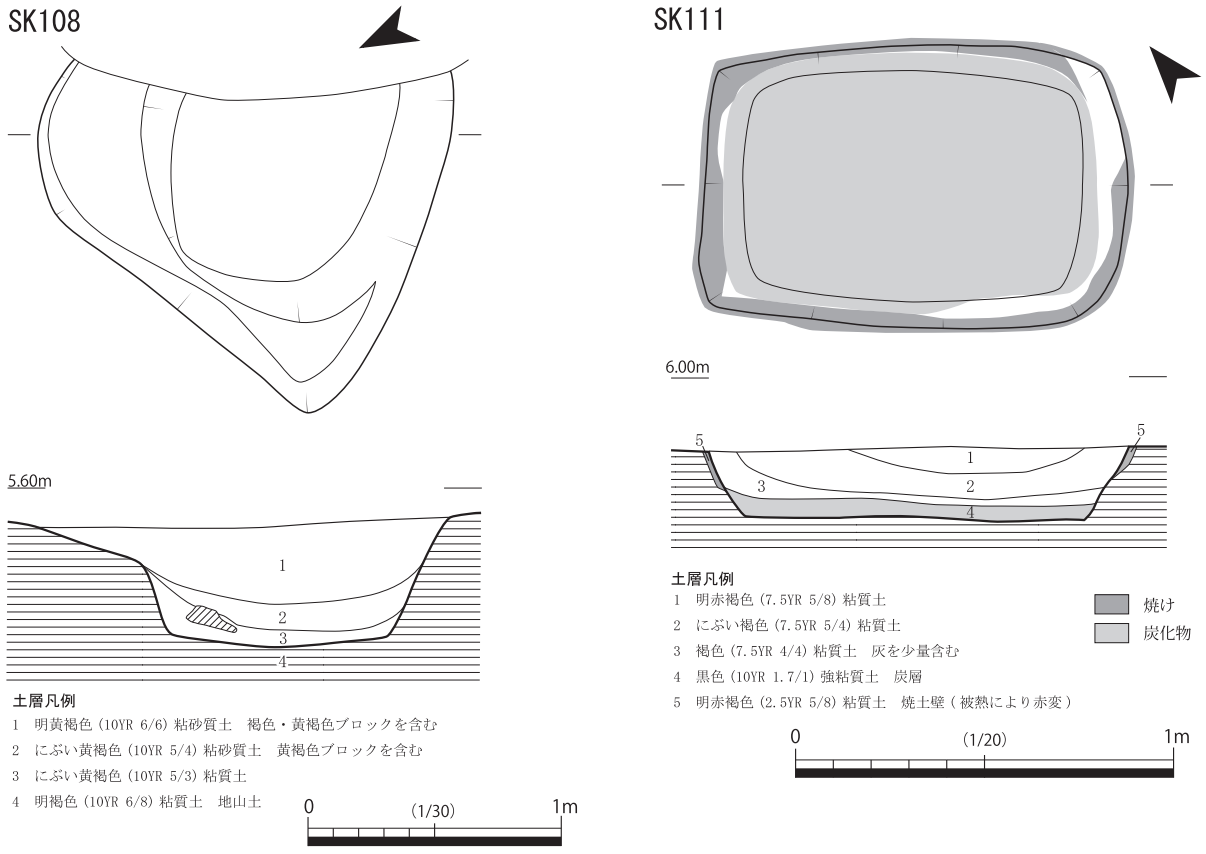
（４）土坑

13 基の土坑を検出した。長さが 2.0 ｍを超えるものは４基、1.0 ｍを超え 2.0 ｍ未満ものは４基、1.0 ｍ未満のものが５基であり、規模は均等に分散している。平面形も長方形、円形、楕円形、不整形とまちまちである。深さは約 60 ～ 15 ㎝とまばらであるが総じて浅く、全体的に強い削平を受けていると考える。皿状のもの、やや深い擂鉢状のもの、筒状あるいは箱状に掘り込まれたものなど様々である。13 基のうち約半数の７基の土坑から遺物が出土したが、遺物の時期は他遺構出土遺物と大差はない。炭化材や焼土塊が出土したごく一部の土坑を除き特殊な土坑はなく、遺物の出土しなかった土坑も含め、ほとんどが室町時代の遺構と考える。



第 11 図　SK101 実測図





第 12 図　SK103・108・109・111 実測図

SK101（第 11 図　図版４）　調査区南西部に位置する箱状竪穴土坑で、平面形は長方形を呈する。規模は長さ 228cm、幅 110cm、深さ 46cm を測る。主軸方位は N22°　E である。東西壁と南壁はほぼ垂直で、埋土は３層にわかれる。土層断面から判断し、掘削後に人為的に埋め戻されたものと考える。埋葬施設の可能性もあるが、根拠となる遺物は出土していない。瓦質土器鍋（31）・足鍋（32）が出土した。出土遺物から、室町時代の遺構と考える。

SK103（第 12 図　図版３）　調査区北部中央に位置する擂鉢状竪穴土坑で、平面形は西側隅丸長方形に東側長方形の浅いテラスがついた不整長方形を呈する。規模は長さ 285cm、幅 122cm、深さ 57cm を測る。主軸方位は N70°　E である。廃棄用に掘られた土坑で、瓦質土器鍋・足鍋・火鉢（34）、陶器が出土している。擂鉢状に落ち込む部分で、多くの石とともに遺物を検出した。出土遺物から、室町時代の遺構と考える。

SK108（第 12 図　図版４）　調査区東部に位置する擂鉢状土坑で、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長さ 164cm、幅 124cm 以上、深さ 48cm を測る。主軸方位は N63°　W である。須恵器（35）が出土しているが、流込の可能性が高い。遺構の時期および性格は不明である。

SK109（第 12 図　図版４）　調査区中央部やや東寄りに位置する浅い皿状の土坑で、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長さ 80cm、幅 41cm、深さ 16cm を測る。主軸方位は N6°　W である。焼土、炭化材が出土した。上部の削平のため遺構の性格をとらえにくいが、炉跡の可能性がある。

SK111（第 12 図　図版４）　調査区南部に位置する浅い箱状竪穴土坑で、平面形は長方形を呈する。規模は長さ 112cm、幅 75cm、深さ 20cm を測る。主軸方位は N50°　W である。土坑壁は被熱により約２cm幅で赤変しており、床面では約５cmの炭層の堆積を確認した。木炭焼成坑の可能性が高い。出土炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）結果により、６世紀代の遺構に比定できる。

（５）溝

11 条の溝を検出した。後世の削平によって上流域あるいは上位部が消滅しており、総じて浅く、確認長は 1.2 ～ 13.5 ｍとまちまちである。溝の規模で分類すると、幅 40 ㎝未満の SD101・110・104・105、幅 40 ～ 50 ㎝の SD103・107、幅 60 ㎝以上の SD102・109・111 の３つに分かれ、それぞれのグループ内では、溝と溝がほぼ直線延長上に存在するか直交する形をとる。接点がほとんどないため、溝と溝との繋がりや、切り合いによる時期差は不明である。

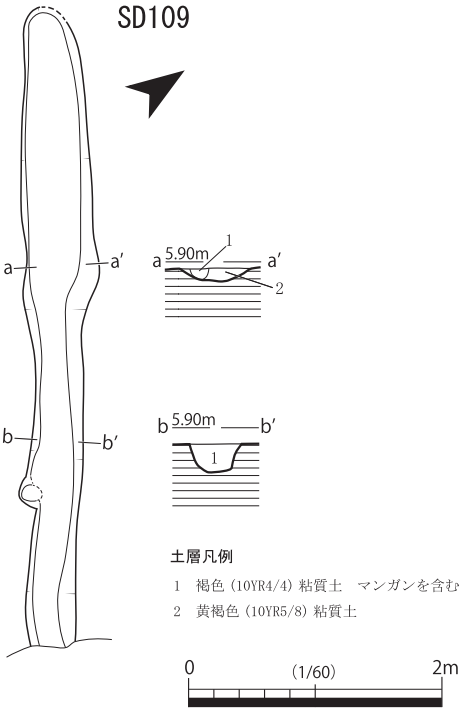
SD102（第 13 図　図版４）　調査区の北東部を南流後屈曲して緩やかに東流する。確認長は 13.5 ｍ、幅 75 ～ 125 ㎝、標高差 52 ㎝である。屈曲部分上流は床底がえぐれて、やや深くなっている。屈曲後は強い削平をうけており、溝床底面が僅かに確認できる程度である。溝で囲まれる東側平坦面に柱穴群が存在し、調査区外に広がりをみせる。区画溝の機能をもつ可能性が高い。平成 25 年度に調査した下津令遺跡沖ノ下 1 地区における SD113 に繋がると考えられる。南北に伸びる上流部分約５ｍの埋土中からは、瓦質土器足鍋（37）・把手付鍋（38）・擂鉢（39）、須恵器杯（40）が出土している。40 は流込と考える。出土遺物から、15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考える。

SD109（第 14 図　図版４）　調査区の南西端を東西に伸びる溝で、緩やかに東流する。確認長は 5.1 ｍ、幅 34 ～ 60 ㎝、標高差 26 ㎝である。下流部分は後世の撹乱により消滅しているが、SD102 の東流部と主軸方向が一致しており、区画溝の一部と考える。瓦質土器鍋、陶器が出土している。出土遺物から、

第 13 図　SD102 実測図

室町時代の遺構と考える。

SD111（第３図） 調査区の中央部東端を南北に伸びる溝で、緩やかに北流する。確認長は 12.8 m、幅 90 ～ 138 ㎝（溝右肩立ち上がり部分は全範囲で調査区外のため未確認。推定幅は２ｍを超える）、標高差 31 ㎝である。西岸は幅約 80 ㎝のテラスをもつ。主軸方向が SD102・SD109 とほぼ直交する。切合いから、SD102 より新しい時期の区画溝の可能性が高い。平成 25 年度に調査した下津令遺跡沖ノ下 1 地区における SD108 と主軸方向が一致しており、18 ｍ～ 19 ｍの間隔を置いて並行に走っている。瓦質土器足鍋（41）・擂鉢（42）・火鉢（43）が出土しており、出土遺物から、16 世紀代の遺構と考える。



第 14 図　SD109 実測図

（６）柱穴

検出された柱穴は 268 個で、そのうち約３分の１の 86 個の柱穴から遺物が出土した。調査区北西部は土坑・柱穴ともに検出されなかったが、後世の削平により消滅したと考える。また、南西部についても削平・撹乱により遺構が消滅している。その他の範囲では残存状況に多少の違いはあるが、平均的な密度で柱穴を検出している。柱穴の深さは、30 ㎝を超えるものは少なく、深いものでも 50 ㎝未満である。

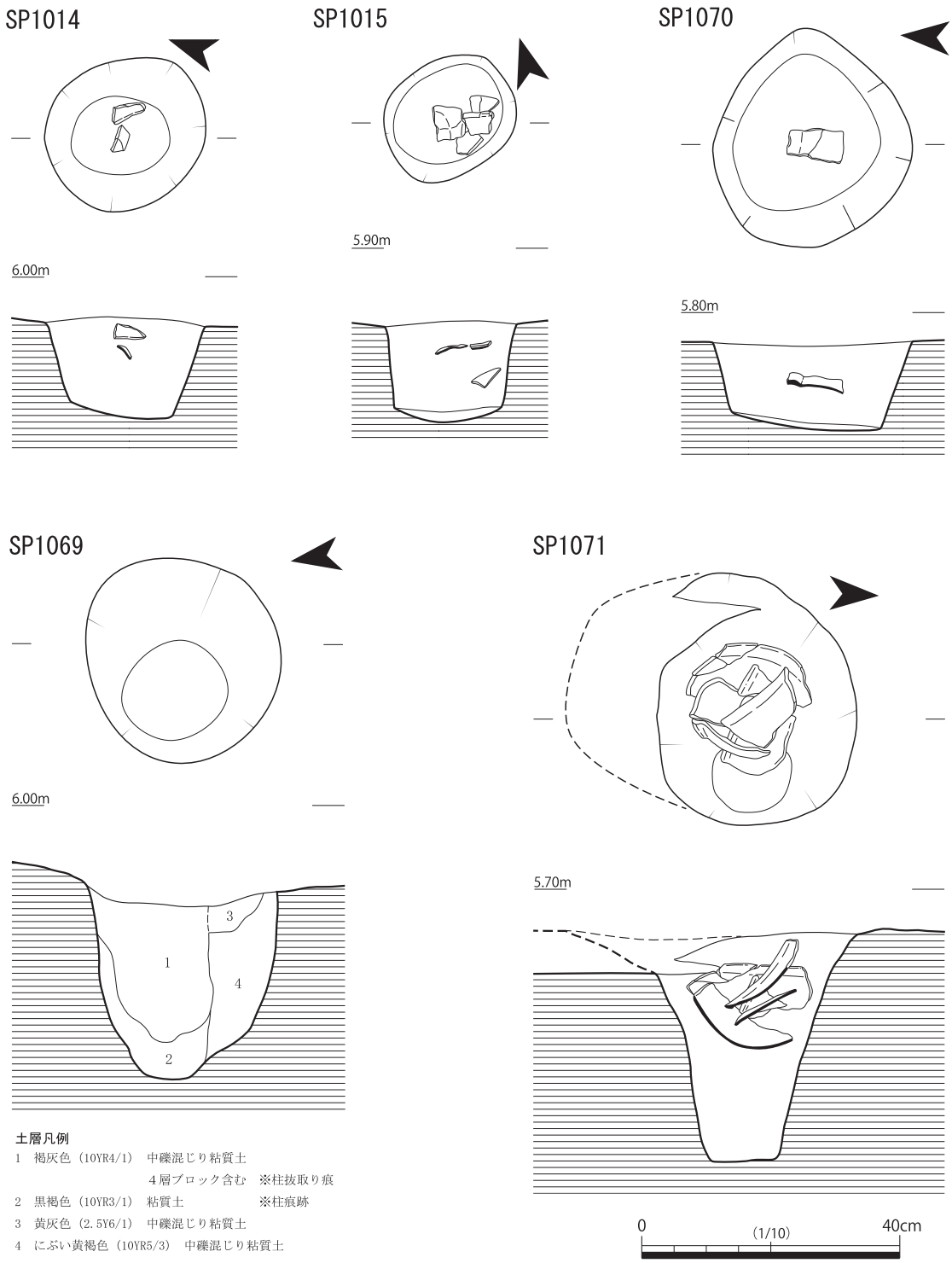
SP1014（第 15 図　図版５） 調査区中央部に位置し、規模は直径 22 ～ 26 ㎝、深さ 16 ㎝を測る。埋土中から瓦質土器擂鉢片が出土した。出土遺物から 15 世紀代の遺構と考える。

SP1015（第 15 図　図版５） 調査区中央部、SB101 の北西側に位置し、規模は直径 17 ～ 22 ㎝、深さ 16 ㎝を測る。埋土中から土師器皿（45）が出土した。出土遺物から 14 世紀末～ 15 世紀前半の遺構と考える。

SP1069（第 15 図　図版５） 調査区中央部やや西寄り、SB102 の北西側に位置し、規模は直径 29 ～ 32 ㎝、深さ 29 ㎝を測る。遺構面で柱抜取り痕を確認した。土層断面から、柱を設置した後に北側から埋め固めた様子がわかる。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

SP1070（第 15 図　図版５） 調査区南部、SB103 の北側に位置し、規模は直径 30 ～ 34 ㎝、深さ 14 ㎝を測る。埋土中から瓦質土器足鍋（49）が出土した。出土遺物から 15 世紀代の遺構と考える。

SP1071（第 15 図　図版５） 調査区中央部東隅に位置し、SD111 に接する。規模は直径 31 ～ 35 ㎝、深さ 35 ㎝を測る。埋土中から瓦質土器足鍋（50）が出土した。東側調査区外に展開する掘立建物構成柱穴のひとつと考え、遺物は建物廃絶期に埋められたものと推測する。出土遺物から 15 世紀前半～中頃の遺構と考える。



土層凡例

1　褐灰色（10YR4/1）　中礫混じり粘質土
　　４層ブロック含む　※柱抜取り痕
2　黒褐色（10YR3/1）　粘質土　※柱痕跡
3　黄灰色（2.5Y6/1）　中礫混じり粘質土
4　にぶい黄褐色（10YR5/3）　中礫混じり粘質土

第 15 図　SP1014・1015・1069・1070・1071 実測図

第１表　沖ノ下２地区掘立柱建物一覧表

※：南東隅の柱穴から測れなかった場合

遺構番号	規模（間）	棟方向	桁行（ｍ）建物の南東隅から	梁行（ｍ）建物の南東隅から	床面積（㎡）	関連柱穴	出土遺物	時代	備　　考
SB101	２×２	N52°　W	4.10 (2.30・1.80)	3.30 (1.60・1.70)	13.53	—	—	—	構成柱穴８個
SB102	２×１	N42°　E	3.60 (1.70・1.90)	1.50	5.40	SP1002	瓦質土器鍋	室町	構成柱穴６個 須恵器片（流込）
SB103	２×１	N18°　W	3.80 (2.30・1.50)	2.50	9.50	SP1079、SP1085	土師器皿 瓦質土器鍋	室町	構成柱穴６個

第２表　沖ノ下２地区柵列一覧表

遺構番号	規模（間）	主軸方向	全長（m）南方から	関連柱穴	出土遺物	時代	備　　考
SA101	3	N55°　W	6.90（2.20・2.20・2.50）	SP1004	丸石（河原石）	—	構成柱穴４個
SA102	3	N52°　W	7.00（3.50・1.70・1.80）	SP1003	炭化材	—	構成柱穴４個 15C 前半～中頃（AMS 法）
SA103	6	N14°　W	11.80 (2.20・1.90・1.30・2.40・2.20・1.80)	SP1083	土師器	室町	構成柱穴７個
SA104	3	N35°　W	6.00（1.90・1.80・2.30）	SP1078	瓦質土器	室町	構成柱穴４個以上
SA105	2	N32°　W	4.00（2.30・1.7）	SP1064	土師器皿	室町	構成柱穴３個以上

第３表　沖ノ下２地区井戸一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SE101	円形	N26°　W	106	99	196	瓦質土器足鍋、木製品	室町	
SE102	楕円形	N8°　E	137	116	75 以上	瓦質土器鍋、陶器	室町	須恵器杯（流込）
SE103	楕円形	N69°　E	284	237	246	土師器皿、瓦質土器足鍋・擂鉢・火鉢・湯釜、陶器椀、木製品	室町	須恵器壷（流込）
SE104	楕円形	—	340	200 以上	—	—	—	

第４表　沖ノ下２地区土坑一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SK101	長方形	N22°　E	228	110	46	瓦質土器鍋・足鍋	室町	
SK102	円形	—	90	86	8	—	—	
SK103	不整長方形	N70°　E	285	122	57	瓦質土器鍋・足鍋・火鉢、陶器	室町	
SK104	不整楕円形	N37°　W	225	70	9	—	—	
SK105	楕円形	N30°　W	85	62	9	—	—	
SK106	長方形	N58°　E	120	85	11	—	—	
SK107	不整形	—	50 以上	45 以上	10	瓦質土器鍋	室町	
SK108	不整楕円形	N63°　W	164	124 以上	48	—	—	須恵器（流込）
SK109	不整楕円形	N6°　W	80	41	16	焼土、炭化材	室町か	
SK110	隅丸長方形	N77°　W	145	123	33	瓦質土器鍋・足鍋	室町	須恵器壷（流込）
SK111	長方形	N50°　W	112	75	20	炭化材	古墳末～古代	木炭焼成坑 6C 代（AMS 法）
SK112	—	—	290	110 以上	10	土師器、瓦質土器	室町	
SK113	—	—	90 以上	25 以上	15	—	—	

第５表　沖ノ下２地区溝一覧表

遺構番号	長さ（ｍ）	幅（cm）	標高差（cm）	出土遺物	時代	備　　考
SD101	2.50	28	9	瓦質土器鍋	室町	
SD102	13.50	125	52	瓦質土器足鍋・擂鉢	室町	
SD103	5.20	40	21	瓦質土器	室町	須恵器壷（流込）
SD104	2.30	32	11	瓦質土器	室町か	
SD105	1.20	24	6	—	—	
SD106	2.00	44	32	瓦質土器、炭化材	室町か	※炭化材は４C 後半～５C（AMS 法）を示す（流込か）
SD107	8.90	50	27	—	—	
SD108	4.20	77	14	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	
SD109	5.10	60	26	瓦質土器鍋、陶器	室町	
SD110	2.50	37	23	瓦質土器鍋	室町	
SD111	12.80	138	31	瓦質土器足鍋・擂鉢・火鉢	室町	須恵器杯蓋・大甕（流込）

３　遺物

沖ノ下２地区で出土した主な遺物は、土師器、瓦質土器で、このほかに陶器、木器、石製品などがある。また、古代の須恵器も数点出土している。

柱穴・土坑から出土した遺物は少量かつ小片のため、遺構全体を通して図化できる点数は少ない。その中において、SE103 では瓦質土器を中心に良好な一括資料となる遺物が出土している。

柱穴からは主に土師器皿が出土しており、14 世紀末～ 15 世紀前半に比定できる遺物が多い。土坑・溝からは 15 世紀代、井戸からは 15 世紀代～ 16 世紀前半に比定できる遺物が出土する割合が高い。ここでは、主な遺物について解説を加えることとする。各遺物の法量等については、遺物観察一覧表を参照していただきたい。

（１）掘立柱建物出土遺物（第 16 図）

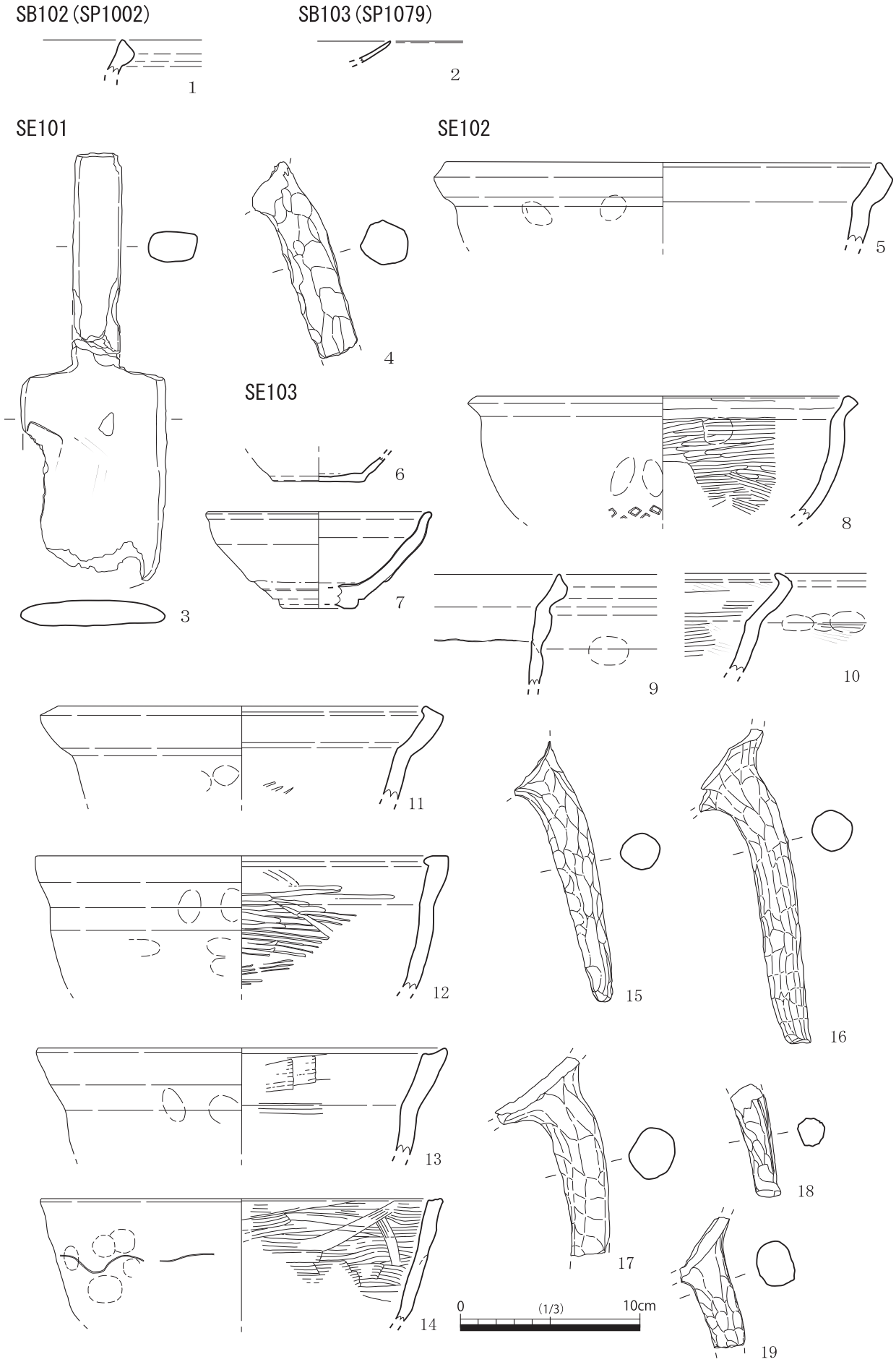
掘立柱建物を構成する柱穴からは、土師器、瓦質土器等が出土している。１は SP1002 から出土した瓦質土器足鍋の口縁部片である。口唇外面が肥厚し、口縁下にくびれをもつ。２は土師器皿の口縁部片である。口唇はやや尖り、器壁は薄い。いずれも 14 世紀末～ 15 世紀前半の遺物と考える。

（２）柵列出土遺物

柵列を構成する柱穴からは、土師器皿や瓦質土器が出土しているが、小片であるため図化していない。いずれも 14 世紀末～ 15 世紀代の遺物と考える。

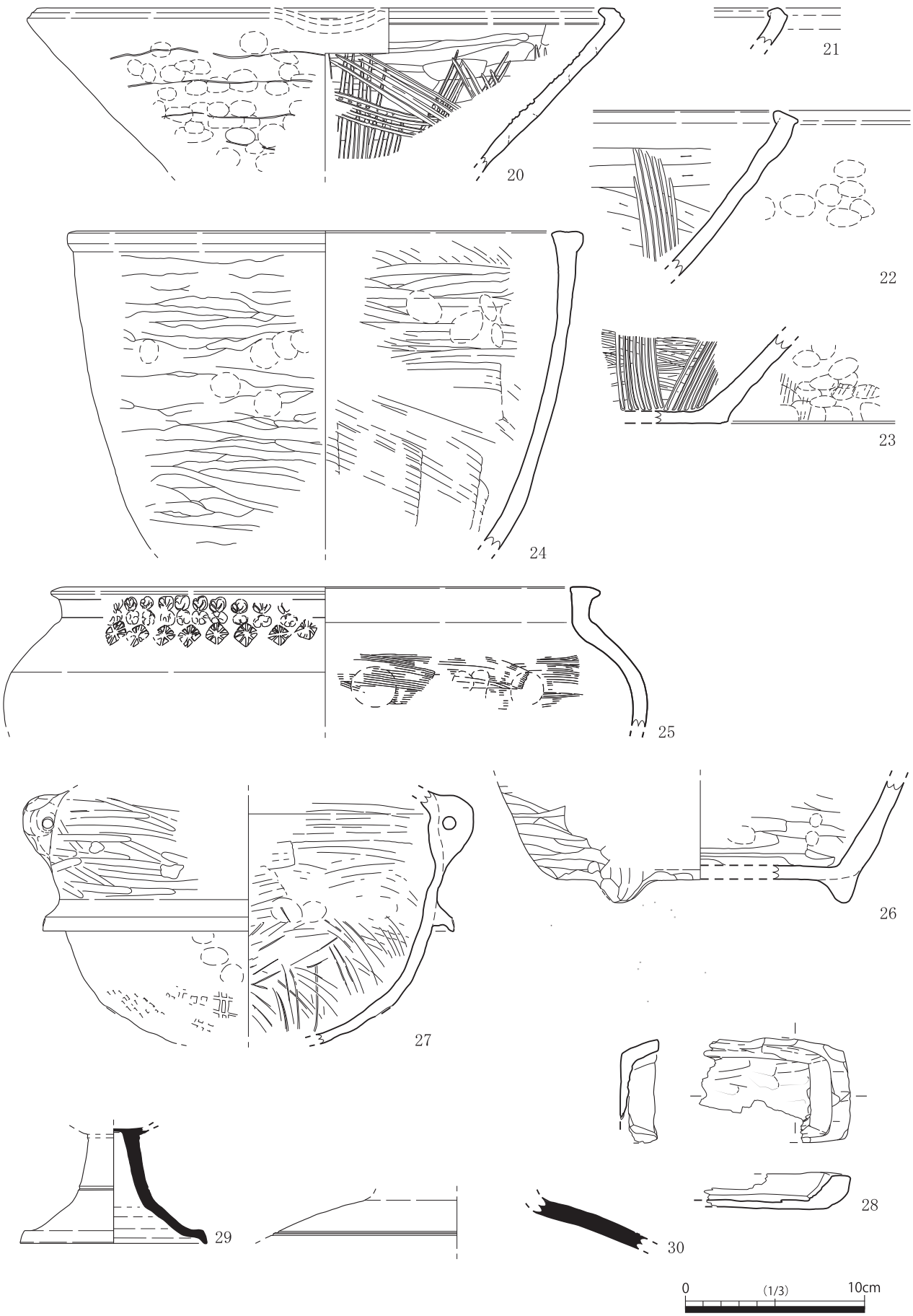
（３）井戸出土遺物（第 17 図　図版６・７）

３～ 30 は各井戸から出土した遺物である。３・４は SE101 から出土した。３は杓子形木製品である。一木ケズリ出しによる成形で、樹種はアカマツまたはクロマツである。身部表面は偏平、断面は長楕円形、把手部は断面隅丸長方形を呈す。飯用杓子と考えるが、正確な用途は不明である。４は瓦質土器足鍋の脚部である。指頭成形で、造りは荒い。５は SE102 から出土した瓦質土器足鍋である。口縁部は逆ハ字形に外傾し、外面肥厚。口縁下にくびれをもつ。６～ 30 は SE103 から出土した。６は土師器皿の底部で、内面立ち上がり部分に明瞭な稜がたつ。底部に板目圧痕を有す。７は褐釉陶器椀である。内外面に褐釉が施され、ケズリ出し高台で底部外面は無釉。美濃産の天目茶椀と考える。８は内面にミガキが施された特異な瓦質土器鍋で、最下層から出土した。外面底部は格子目タタキによる調整。体部は内湾して立ち上がったのち外傾して口縁部に至る。口縁先端は短く肥厚し、口縁下に明瞭なくびれをもつ。15 世紀代の遺物と考える。９～ 19 は瓦質土器足鍋である。９の体部はやや外傾して直線的に上方に伸びたのち逆ハ字形に外反して端部に至る。口唇はやや肥厚し、口縁下に明瞭なくびれをもつ。15 世紀代の遺物と考える。10 ～ 12 の体部はやや内湾して立ち上がったのち、外傾してやや長めに伸びて口縁部に至る。口唇は内側に摘みあげておわる。13・14 は口唇が平坦またはやや凹みをもつ。10 は 15 世紀後半、11 ～ 14 は 16 世紀代の遺物と考える。15 ～ 19 は脚部である。いずれも指頭成形で、15 の脚先端はやや尖る。16・17 の脚先端は外側に摘み出すように整形する。いわゆる獣足タイプである。20 ～ 23 は瓦質土器擂鉢である。いずれも体部は逆ハ字状に 45°開いて直線的に立ち上がる。20 ～ 23 の口縁は内側やや上方に摘み上げておわる。20 は４条、22・23 は７条のオロシ目を有す。24 ～ 26 は瓦質土器火鉢である。24 の体部は緩やかに内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口唇外面肥厚。内外面はミガキ調整。25 は胴部最大径が 35

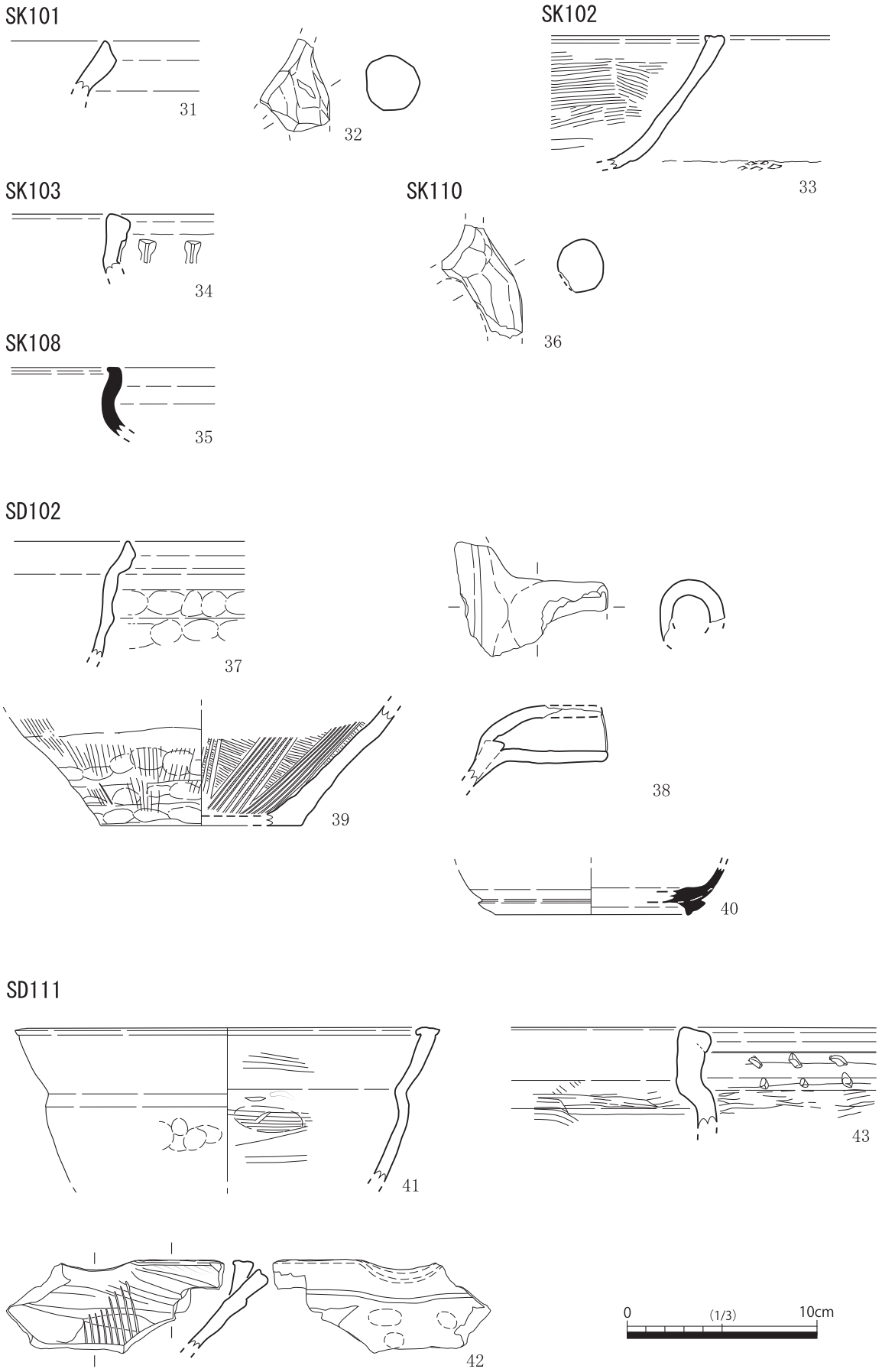


第 16 図　掘立柱建物・井戸出土遺物実測図

SE103



第 17 図　井戸出土遺物実測図



第 18 図　土坑・溝出土遺物実測図

cmを超える大型の丸形火鉢で、口縁外面に３列の印花紋が巡る。26は貼付三脚高台をもち、内外面はミガキ調整。底面に板目圧痕を有す。27は瓦質土器湯釜である。肩部に一対の吊下用有孔耳を有す。また、体部中央に貼付鍔が巡る。底部外面は格子目タタキによる調整を施す。28は艇形木製品である。一木ケズリ出しによる成形で、樹種は針葉樹（マツ属等）である。用途は不明だが、井戸祭祀に関連する遺物の可能性がある。29は須恵器高杯の脚部で、裾部はハ字状に立ち上がったのち上方で屈曲して受部底面に至る。中央付近に一条の沈線が巡る。30は須恵器壺の肩部片である。張肩で、肩部から体部への屈曲先端付近に１条の沈線が巡る。長頸壺で８世紀後半～９世紀代の遺物である。

（４）土坑出土遺物（第18図　図版８）

31～35は各土坑から出土した遺物である。31・32はSK101から出土した瓦質土器足鍋である。31の口縁部は外傾し、先端は上方に摘み上げておわる。33はSK102から出土した瓦質土器鍋である。口唇は平坦で、一条の凹みを有す。34はSK103から出土した瓦質土器火鉢で、口縁下に１条の断面三角形状の押圧紋が巡る。35はSK108から出土した須恵器壺の口縁部片である。36はSK110から出土した瓦質土器足鍋の脚部で、中央～先端部を欠損している。

（５）溝出土遺物（第18図　図版８）

37～43は各溝から出土した遺物である。37～40はSD102から出土した。37・38は瓦質土器鍋である。38は円筒状の把手をもつ。39は瓦質土器擂鉢で、７条のオロシ目を有す。40は須恵器長頸壺の底部である。断面三角形の貼付輪状高台を有す。法量や出土状況からみて、近接遺構SE103出土の30と同一個体の可能性がある。41～43はSD111から出土した。41は瓦質土器足鍋である。42は瓦質土器擂鉢片口部で、９条のオロシ目を有す。43は瓦質土器火鉢口縁部片で、外面口縁下に２列の刺突紋が巡る。

（６）柱穴出土遺物（第19図　図版８）

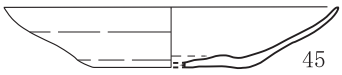
44～52は各柱穴から出土した遺物である。44はSP1008から出土した土師器皿底部片で、体部立ち上がり外面に明瞭な稜が立つ。北島編年大内ⅢＡ１式に比定する。45はSP1015から出土した土師器皿で、器壁は薄く、底面から体部立ち上がり部分に凹みを有す。ロクロ目の凹凸は弱い。北島編年大内ⅡＡ式に比定する。46はSP1065から出土した土師器皿で、器壁は薄く、ロクロ目の凹凸はやや強い。体部の立ち上がりが強く底面は小ぶりである。内外面に赤色塗彩が施されている。北島編年大内ⅡＢ式に比定する。47はSP1042から出土した陶器椀である。内外面に灰白色の釉を施す。48はSP1049から、49はSP1070から、50はSP1071から出土した瓦質土器足鍋で、いずれも口縁下外面に明瞭なくびれを有す。50は底部と脚部を除き、ほぼ１個体分が柱穴上位に投棄された形で検出された。15世紀前半～中葉の遺物である。51はSP1044から出土した瓦質土器甕である。口縁は内側に肥厚し、平坦面を有す。52はSP1060から出土した泥岩製の砥石である。仕上砥で、２面使用している。

（７）遺構に伴わない遺物（第19図）

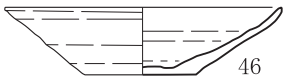
53・54は調査区内表面採集の瓦質土器足鍋で、どちらも口縁が肥厚し、先端は上方やや内側に摘み上げておわる。口縁下外面に明瞭なくびれを有す。55は表土除去時に採取した須恵器長頸壺である。頸部中央にヘラ状工具による２条沈線を有す。

SP1008

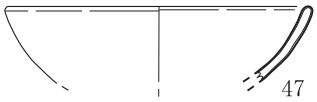
SP1015



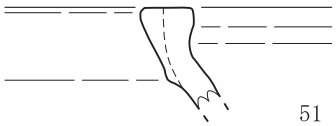
SP1065



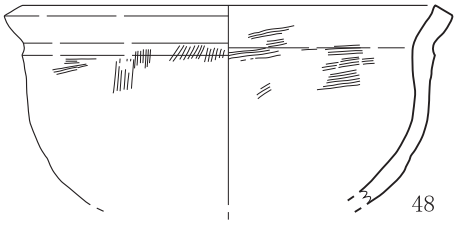
SP1042



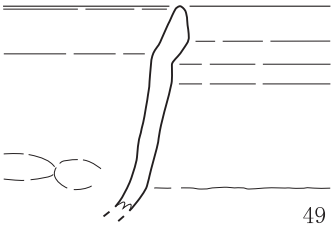
SP1044



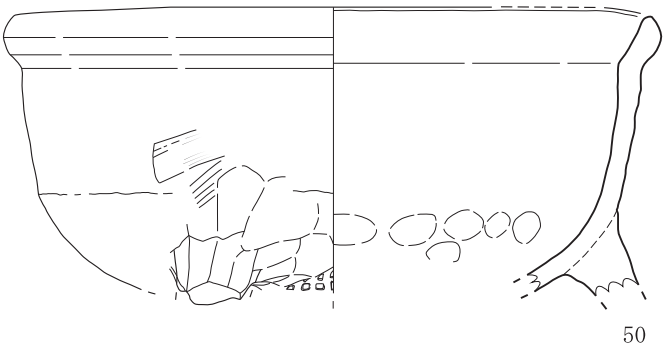
SP1049



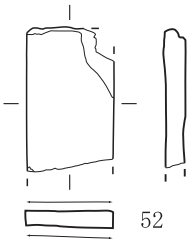
SP1070



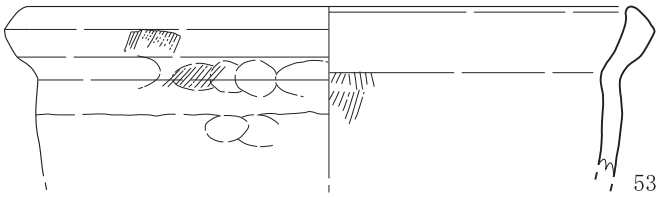
SP1071

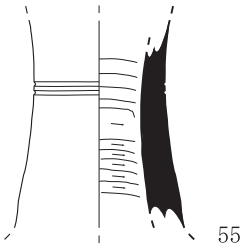


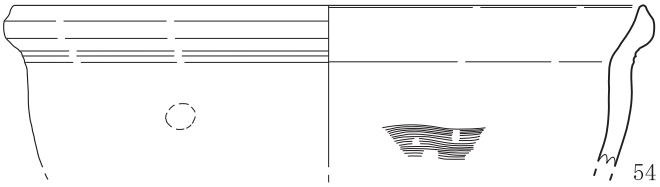
SP1060

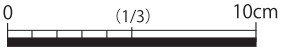


遺構に伴わない遺物









第 19 図　柱穴出土・遺構に伴わない遺物実測図

第６表　沖ノ下２地区出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
1	16		SB102 (SP1002)	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	[2.0]	－	やや良	良	内外面：灰白色 5Y5/1	ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅲ型式古）
2	16		SB103 (SP1079)	土師器	皿	－	[1.15]	－	精良	良	内面：灰黄褐色 10YR6/2 外面：褐灰色 10YR4/1	回転ナデ 回転ナデ	
4	16	6	SE101	瓦質土器	足鍋	－	[10.8]	－	やや粗	やや良	内面：灰白色 2.5YR8/2 外面：灰黄色 2.5YR6/2	指オサエ 指オサエ	
5	16	6	SE102	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(25.0)	[4.4]	－	やや粗	良	内外面：灰白色 2.5Y7/1	ヨコナデ ヨコナデ、指オサエ	外面に煤付着
6	16	6	SE103	土師器	皿	－	[1.4]	(5.0)	精良	良	内面：灰白色 2.5YR8/2 外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕
7	16	6	SE103	褐釉陶器	椀	(12.2)	5.3	(4.0)	精良	良	胎土：淡黄色 2.5Y8/3 釉：黒褐色 7.5YR2/2	回転ナデ後施釉 回転ナデ後施釉	天目（美濃）　削出高台
8	16	6	SE103 最下層	瓦質土器	鍋	(20.4)	[6.7]	－	やや良	やや良	内面：暗灰色 N3/ ～ 灰色 N7.5Y5/1 外面：黒色 N2/	ミガキ、口縁部ヨコナデ ハケ後ナデ、口縁部ヨコナデ、下位タタキ	
9	16	6	SE103	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	[6.05]	－	やや粗	良	内面：灰白色 N7/ 外面：灰色 N6/	ヨコナデ ヨコナデ後指オサエ	外面に煤付着
10	16	6	SE103	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	[5.4]	－	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：黒色 N2/	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ ハケ後ナデ	外面に煤付着
11	16	6	SE103	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(10.2)	[5.1]	－	やや良	やや良	内面：灰色 N5/ 外面：黄灰色 2.5Y5/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	外面に煤・炭化物付着
12	16	6	SE103 北東部	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(22.6)	[7.3]	－	やや良	やや良	内面：灰白色 5Y7/1 外面：灰白色 5Y7/1	口縁部ナデ、ハケ後ヘラ状工具によるナデ 口縁部ナデ、ハケ後ナデ、指オサエ	
13	16	6	SE103	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(22.4)	[5.8]	－	やや良	やや良	内面：黄灰色 2.5Y4/1 外面：黒色 5Y2/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ	外面に煤・炭化物付着
14	16	6	SE103	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(22.0)	[6.7]	－	やや精良	良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 N5/	ハケ後静止ナデ ヨコナデ、指オサエ	外面煤付着
15	16	7	SE103	瓦質土器	足鍋	－	[14.7]	－	やや良	やや良	外面：灰白色 2.5Y8/2 ～ 灰色 N4/	指オサエ	
16	16	7	SE103 北西部	瓦質土器	足鍋	－	[17.2]	－	精良	良	外面：灰色 7.5Y6/1 ～ 黒色 N2/	指オサエ	
17	16	7	SE103 北東部	瓦質土器	足鍋	－	10.9	－	やや良	やや良	内面：灰白色 N7/ 外面：灰色 N5/	ハケ後ナデか 指オサエ、ナデ	
18	16	7	SE103	瓦質土器	足鍋	－	[6.2]	－	やや粗	不良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	指オサエ	
19	16	7	SE103	瓦質土器	足鍋	－	[7.2]	－	やや良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰白色 N7/	ハケ目、指オサエ後ナデ 指オサエ	外面に煤付着
20	17	7	SE103	瓦質土器	擂鉢	(30.0)	[9.0]	－	精良	良	内外面：灰白色 10YR7/1	ヨコナデ後 ヨコナデ後指オサエ	内面にオロシ目有す
21	17	7	SE103	瓦質土器	鉢	－	[2.05]	－	やや良	良	内面：灰白色 2.5YR8/1 外面：灰白色 N8/	ヨコナデ ヨコナデ	
22	17	7	SE103	瓦質土器	擂鉢	－	[9.1]	－	やや粗	良	内外面：灰白色 2.5Y8/1	ヨコナデ ヨコナデ後指オサエ、静止ナデ	内面にオロシ目有す　内外面に黒斑を有す
23	17	7	SE103	瓦質土器	擂鉢	－	[4.9]	－	やや良	良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 N6/	ハケ後 ハケ後ナデ、指オサエ	内面にオロシ目有す（単位７条）
24	17	7	SE103	瓦質土器	火鉢	(25.0)	[17.5]	－	やや良	良	内面：灰白色 N7/ 外面：灰白色 5Y7/1	口縁部ハケ後ヨコナデ、ハケ後ナデ消し、指オサエ ヨコナデ、指オサエ、ミガキ	
25	17	7	SE103	瓦質土器	火鉢	(27.0)	[7.7]	－	やや良	良	内面：灰色 N5/ 外面：灰色 N5/	ヨコナデ、ハケ後指オサエ ヨコナデ後刻印	
26	17	7	SE103	瓦質土器	火鉢	－	[6.6]	(16.0)	精良	良	内面：灰色 5Y6/1 外面：灰白色 5Y7/1	ヨコナデ、指オサエ ハケ後ナデ、底面ハケ目	脚貼付 くさり礫を少量含む
27	17	7	SE103	瓦質土器	湯釜	－	13.9	－	やや良	良	内面：黒色 7.5Y3/1 外面：オリーブ黒色 7.5Y3/1	ハケ後ナデ、指オサエ ハケ後ナデ、ミガキ、下位タタキ	外面に煤付着　貼付耳（穿孔有す）　胴部中位に貼付鍔
29	17	7	SE103	須恵器	高杯	－	[6.2]	(10.2)	やや良	良	内外面：灰白色 N7/	回転ナデ、ケズリ 回転ナデ、	底部歪形か
30	17		SE103	須恵器	壺	－	[2.8]	－	精良	良	内面：灰白色 5Y7/1 外面：灰白色 5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ	陶窯系か（短頸か長頸かは不明）　頸部から肩部にかけて「八字」状に大きく開く 肩部と体部の境目に２条の沈線を有す
31	18		SK101	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	[2.9]	－	やや良	良	内面：灰白色 2.5Y7/1 外面：黄灰色 2.5Y6/1	ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅲ型式新）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内）（外）	備　　考
						口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）					
32	18		SK101	瓦質土器	足鍋	－	［4.8］	－	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：暗灰色 N3/1	ハケ後ナデか 指オサエ	
33	18	8	SK102	瓦質土器	鍋	－	［6.9］	－	やや良	やや良	内面：暗灰色 N3/ 外面：黒褐色 2.5Y3/1	ハケ後ナデ ナデ	外面に煤付着　口唇に沈線状の凹みを１条有す　ハケ目単位８条か
34	18	8	SK103	瓦質土器	火鉢	－	［3.1］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y6/1 外面：灰色 5Y5/1	ヨコナデ ヨコナデ	口唇下外面に断面三角形状の押圧紋（スタンプ）を有す
35	18	8	SK108	須恵器	壺	－	［3.5］	－	精良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 N5/	回転ナデ 回転ナデ	
36	18	8	SK110	瓦質土器	足鍋	－	［5.9］	－	やや良	やや良	内面：灰白色 N7/ 外面：灰白色 2.5Y7/1	ナデ 指オサエ	
37	18	8	SD102	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［6.0］	－	やや良	良	内面：灰白色 N7/ 外面：灰白色 2.5Y7/1	ナデ 指オサエ、ナデ	
38	18	8	SD102	瓦質土器	把手付鍋	－	［8.0］	把手幅 3.3	やや良	良	内外面：暗灰色 N3/	ナデ、ナデ消し ナデ消し	
39	18	8	SD102	瓦質土器	擂鉢	－	［6.2］	（10.4）	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 7.5Y5/1	ハケ（ヨコ方向）後ナデ ハケ（タテ方向）後ナデ、指オサエ	内面にオロシ目有す（単位７条）
40	18	8	SD102	須恵器	壺	－	［2.4］	（5.0）	やや粗	良	内面：灰白色 2.5Y8/1 外面：灰白色 N7/	回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ	貼付高台　ロクロ回転右
41	18	8	SD111	瓦質土器	鍋（足鍋）	（20.2）	［8.0］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y6/1 外面：灰色 5Y6/1	ハケのちナデ、指オサエ ハケのちナデ、指オサエ	口縁部内外面ナデ
42	18	8	SD111	瓦質土器	擂鉢	－	［4.8］	－	やや良	良	内面：灰色 N5/ 外面：灰色 N4/	ハケ後ヨコナデ ヨコナデ後指オサエ	内面にオロシ目有す
43	18	8	SD111	瓦質土器	火鉢	－	［5.2］	－	精良	良	内面：黄灰色 2.5Y5/1 外面：黄灰色 2.5Y6/1	ハケ後ヨコナデ ヨコナデ後ヘラ状工具による刺突　ミガキ	断面内面に黒化層を有す　くさり礫を含む
44	19	8	SP1008	土師器	皿	－	［0.9］	（5.0）	精良	良	内外面：淡黄色 2.5Y8/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕　北島編年（大内ⅢＡ１式）
45	19	8	SP1015	土師器	皿	（13.2）	2.4	（6.2）	やや良	良	内面：灰白色 2.5Y8/2 外面：明褐灰色 7.5YR7/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有す 北島編年（大内ⅡＡ式）
46	19	8	SP1065	土師器	皿	11.0	2.7	4.4	精良	良	内外面：淡黄色 2.5Y8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切りのち板目圧痕 内外面に赤色塗彩（橙色 5YR7/6） 北島編年（大内ⅡＢ式）
47	19	8	SP1042	陶器	椀	（12.0）	［3.0］	－	精良	良	胎土：淡黄色 2.5Y8/3 釉：灰白色 5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	内外面施釉
48	19	8	SP1049	瓦質土器	鍋（足鍋）	（16.4）	［7.9］	－	やや良	良	内面：黒色 5Y2/1 外面：黒色 N2/	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、口縁部ナデ	外面に煤多量に付着
49	19	8	SP1070	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［8.1］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y6/1 外面：黒褐色 2.5Y3/1	ハケ後ナデか ハケ後ナデか	口縁部ナデ
50	19	8	SP1071	瓦質土器	足鍋	25.3	［11.8］	－	やや良	やや良	内面：黄灰色 2.5Y6/1 外面：灰黄色 2.5Y6/2	ハケ後ナデ ハケ後ナデ	底部と頸部を欠損　外面に多量の煤・炭化物付着
51	19	8	SP1044	瓦質土器	甕	－	4.0	－	やや粗	やや良	内外面：灰色 N5/	ナデ ナデ	口縁は内側に肥厚
53	19		表面採集	瓦質土器	鍋（足鍋）	（24.0）	［6.7］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y6/1 外面：灰色 5Y5/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ	口縁部内外面ナデ（ヨコナデ） 外面に煤・炭化物多量に付着
54	19		表面採集	瓦質土器	鍋（足鍋）	（25.0）	［6.4］	－	やや粗	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰白色 2.5Y7/1	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、指オサエ	
55	19		表土除去中	須恵器	壺	頸部（6.6）	［8.2］	－	精良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 10Y4/1	ケズリ 回転ナデ	長頸壺　外面頸部中央辺りにヘラ状工具による２条沈線を有す

参考文献（第Ⅲ章の執筆にあたっては以下の文献を参考にした。著者名は五十音順）
岩崎仁志 1999「足鍋再考」『陶塤』第 12 号（財）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター
北島大輔 2010「大内式の設定－中世山口における遺物編年の細分と再編－」『大内氏館跡XI』山口市教育委員会 175 ～ 258 頁

第７表　沖ノ下２地区出土石器・石製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			重さ（g）	石材	備　　考
						長さ［残存値］	幅	厚さ			
52	19	8	SP1060	石製品	砥石	［5.7］	3.5	0.85	25.2	泥岩	仕上砥、２面使用

第８表　沖ノ下２地区出土木製品観察一覧表

NO.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			備　　考
						長さ［残存値］	幅［残存値］	厚さ	
3	16	6	SE101	木製品	杓子形	23.5	鋤部幅 8.5 柄幅 2.6	1.4 ～ 1.7	アカマツまたはクロマツ　長さ 11.5 ｃｍ断面隅丸方形状の柄がつく身部に近い柄の左右に抉状の凹み有り　縄を縛った痕か又は握った際の指頭圧によるものか
28	17	7	SE103 下層	木製品	艇形	縦 ［8.4］	横 ［5.6］	2.0	針葉樹（マツ属等）

Ⅳ　下瑞光寺地区（１区）の調査成果

１　調査区の概要

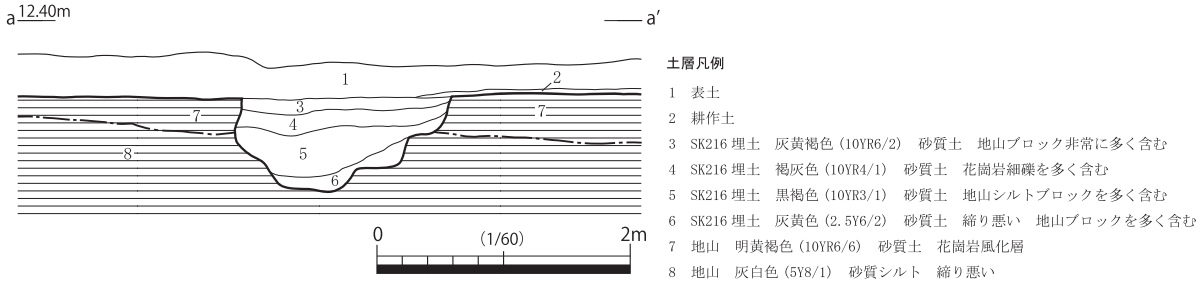
（１）概要

下瑞光寺地区（１区）は、北側と南側の一部に谷筋を含み、亀尾山から派生し東西に伸びる舌状丘陵の先端部に位置する。標高は、西側で約 11.6 m、東側で約 9.2 mと、地形は西から東に向かって緩やかに傾斜する。

今回の調査では、柱穴約 930 個を検出し、中世の掘立柱建物を２棟復元した。その他にも、竪穴建物１棟、井戸２基、土坑 38 基、溝 15 条、性格不明遺構８基を検出した（第 21 図）。遺物が出土した柱穴は 306 個で、全体のおよそ３分の１であった。遺構面は１面で、北側と南側の一部や切土によって遺構密度の低い一帯があるものの、全体的には「やや疎」の密度で遺構を検出した。集落としての営みが確認できたのは古墳時代と中世で、中心時期は中世である。古墳時代の遺構の大半は、調査区の北東側、範囲 20 m以内に集中している。その古墳時代の主な遺構に竪穴建物があり、北壁に造り付けのカマドを確認した。中世の掘立柱建物は、いずれも小規模な建物で、調査区南側で検出した遺物包含層の下の面から検出した。現在この辺りは、遺構面がほぼ湧水レベルに該当することから、当時の水脈は現在とは多少異なっていたと推測できる。遺物包含層は、調査区中央付近と南側の２か所で確認し、縄文時代から中世末までの遺物を包含していることが判明した。近世以降については手掛かりに乏しく断定はできないが、遺構や遺物が確認できないことや、検出した中世の溝と現在の地割の向きに共通性が認められることなどから判断すると、近世の初頭頃には耕作地として利用され始め、大小の地形の改変を受けながら現在に至っているものと考える。

（２）層序（第 20 図　図版 10）

下瑞光寺地区（１区）では、西壁の１か所で調査区壁の土層を観察した（第 20 図）。その結果、基本層序は、表土および耕作土（現在）→地山（遺構面）で、遺物の包含は認められなかった。いわゆる耕作土直下が遺構面で、他の西壁においても同様の状況であった。この結果からも、近世の早い時期には、耕作地として利用され始めたと判断できる。



第 20 図　下瑞光寺地区（１区）西壁面土層断面図

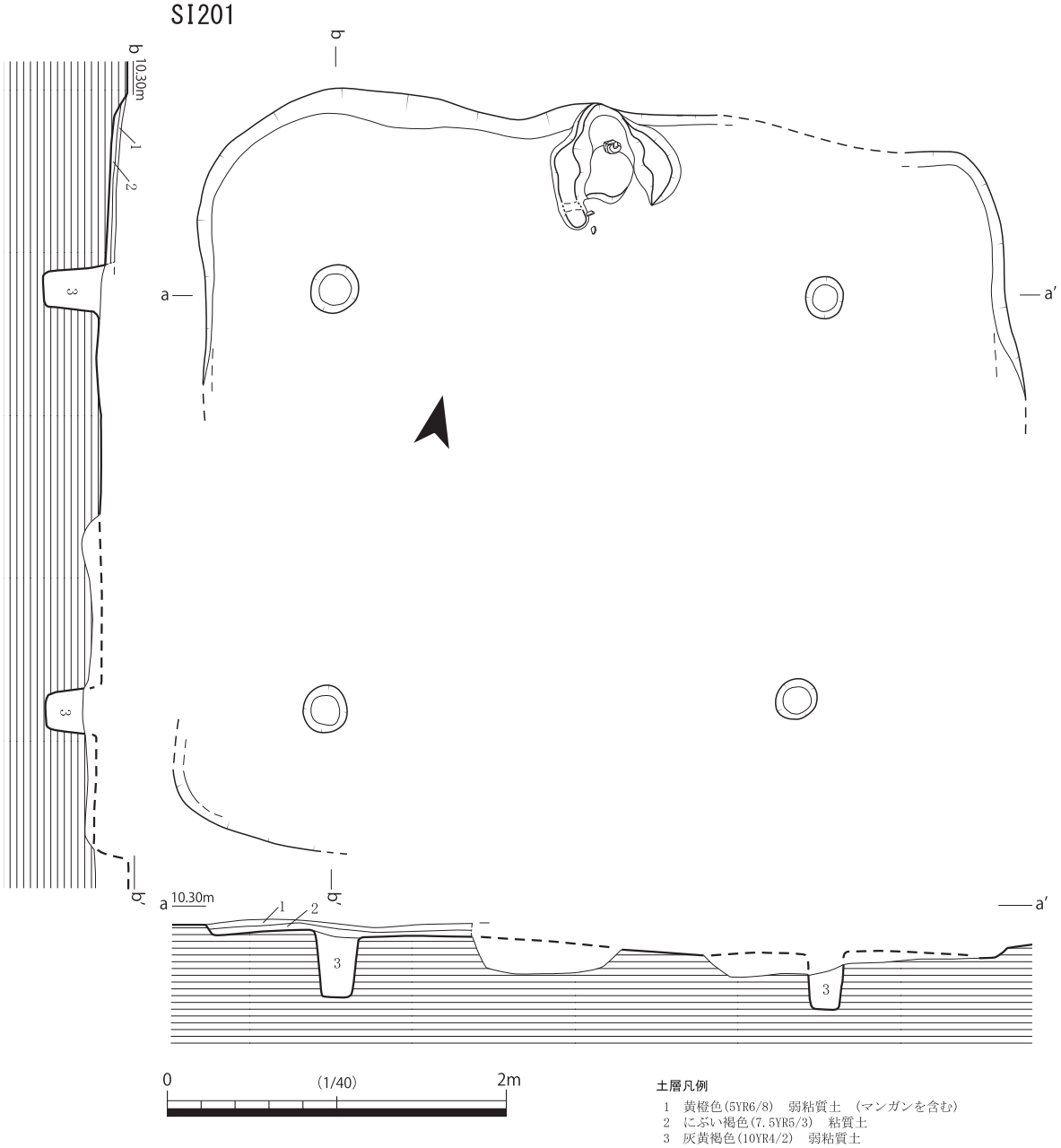
第 21 図　下瑞光寺地区（１区）遺構配置図

X=-215770m
X=-215780m
X=-215790m
X=-215800m
Y=-64060m
Y=-64050m
Y=-64040m
Y=-64030m
Y=-64020m
Y=-64010m
a
a'
西壁面土層
SK216
SK215
SK212
SK214
SD202
SK210
SD201
SP2012
SK211
SK206
SK201
SK208
SK204
SX203
SK217
SE202
SK205
SK220
SK213
SD203
SK203
SK207
SX204
SP2022
SP2018
SP2032
銅銭出土地点
SD203
SD208
SX202
SD209
SD210
SD204
SD205
SK230
SX201
SK219
SK218
SP2188
SP2085
遺物包含層②
SP2090
SP2142
SP2092
SP2084
SP2174
SK228
SP2191
SP2183
SD211
SP2190
SK236
SP2184
SK231
SK222
SK235
SI201
SP2182
SP2240
SD207
SD206
SP2237
SX207
SK221
SP2167
SP2143
SK229
SP2239
SP2168
SD214
SK239
SX205
SK225
SK223
SX208
SK227
SP2110
SP2101
SK224
SK226
11.50m
10.75m
10.50m
11.00m
10.25m
10.00m
9.75m
0
(1/250)
10m

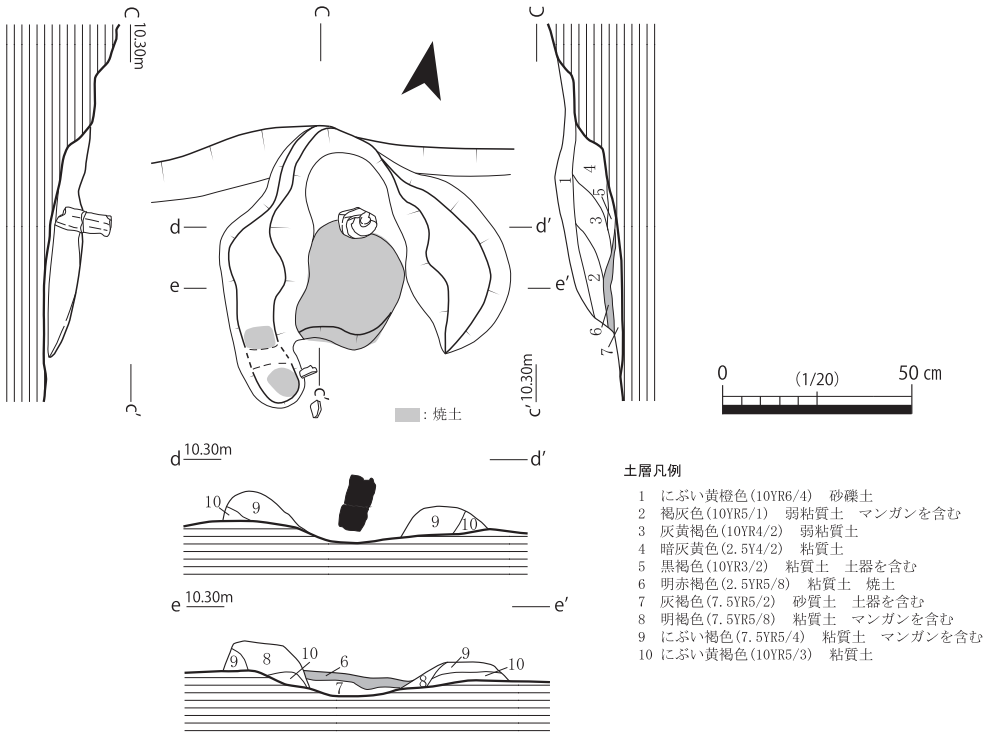
２　古代以前の遺構

（１）竪穴建物

SI201（第 22・23 図　図版 10）　調査区の中央やや東寄りに位置する方形の竪穴建物で、標高約 10.2 ｍに位置する。規模は南北に 4.50 ｍ、東西に 4.68 ｍ、床面積 21.06 ㎡を測る。主柱穴は４本、規模は径 24 ～ 29cm で平均 26.3cm、深さ 34 ～ 38cm で平均 36cm である。残存壁高は西壁北側で９cm と浅い。また、南東側の壁面は後世の削平を強く受けており、検出できなかった。北壁中央には造り付けのカマドがつく。焚口幅 40cm、両袖幅 76cm、燃焼部の縦幅 58cm を測る。煙道は、明確には断定できないが、土層から判断すると、燃焼部後方から約 50°の角度で直線的にせり上がっている様子が読み取れる。壁への切り込みはわずかである。焚口から燃焼部床面にかけて、被熱による焼土や炭化材を検出した。また、燃焼部中央には、土製支脚（１・２）が据えられた状態で出土し



第 22 図　SI201 実測図



第 23 図　SI201 カマド実測図

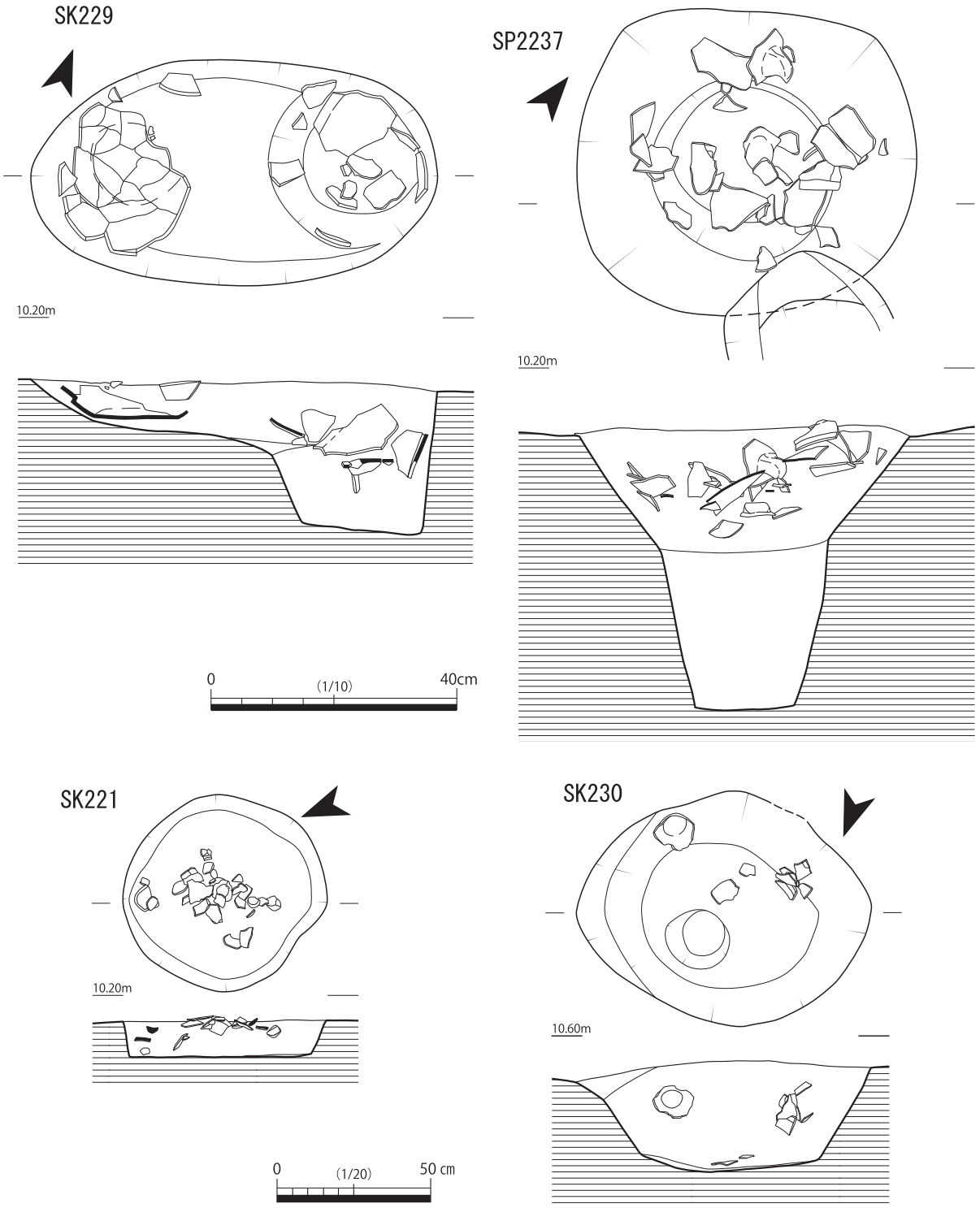
た。支脚は２段重ねになっており、土器の大きさに合わせて着脱が可能になっている。カマドの廃棄儀礼の痕跡は認められなかった。遺物は支脚以外にも須恵器杯身や土師器甕が出土しているが、少量細片のため図化には至っていない。遺構の規模や特徴、出土遺物など、昨年度の調査で検出した SI203（『下津令遺跡３』2016）に類似している。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代後期と考える。カマド内から採取した炭化材について、放射性炭素年代測定（AMS 法）を実施した結果、６世紀後半～７世紀前半という結果を得た。

（２）土坑・柱穴

下瑞光寺地区（１区）で土坑は 38 基検出し、時期を特定できる遺物が出土したものは 32 基であった。その内で中世のものが 28 基と大半を占め、古墳時代のものは、わずか４基にすぎなかった。

SK229、SP2237（第 24 図　図版 10） SK229 は調査区の北東側、SI201 の北東方向約８ｍの位置にあり、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ 66cm、幅 37cm、深さ 24cm を測る。主軸方位は N72°Ｅで標高約 10.1 ｍに位置する。断面形は左右非対称で西側にテラスをもつ。SP2237 は SK229 の北側に切り合って位置しており、平面形は円形を呈する。規模は直径 57cm、深さ 45cm を測り、標高約 10.1 ｍに位置する。断面形は逆台形を呈する。両者には遺構の深さに違いが認められるが、遺物を包含している標高は、9.8 ～ 10.0 ｍと一致する。さらに、それぞれから出土した土器片の一部が接合し、土師器甑（６）、把手付甕（７）として復元した。以上のことから、両者は同時期の遺構と考える。また、SP2237 からは他にも土師器甕（８）や製塩土器（９）などが出土した。出土遺物から、遺構の時期は SI201 とほぼ同時期の古墳時代後期と考える。

SK221（第 24 図　図版 11） 調査区の北東側、SI201 の北方向約 10 ｍの位置にあり、平面形は円形を呈する。規模は直径 131cm、深さ 12cm を測り、標高約 10.1 ｍに位置する。断面形は逆台形を呈

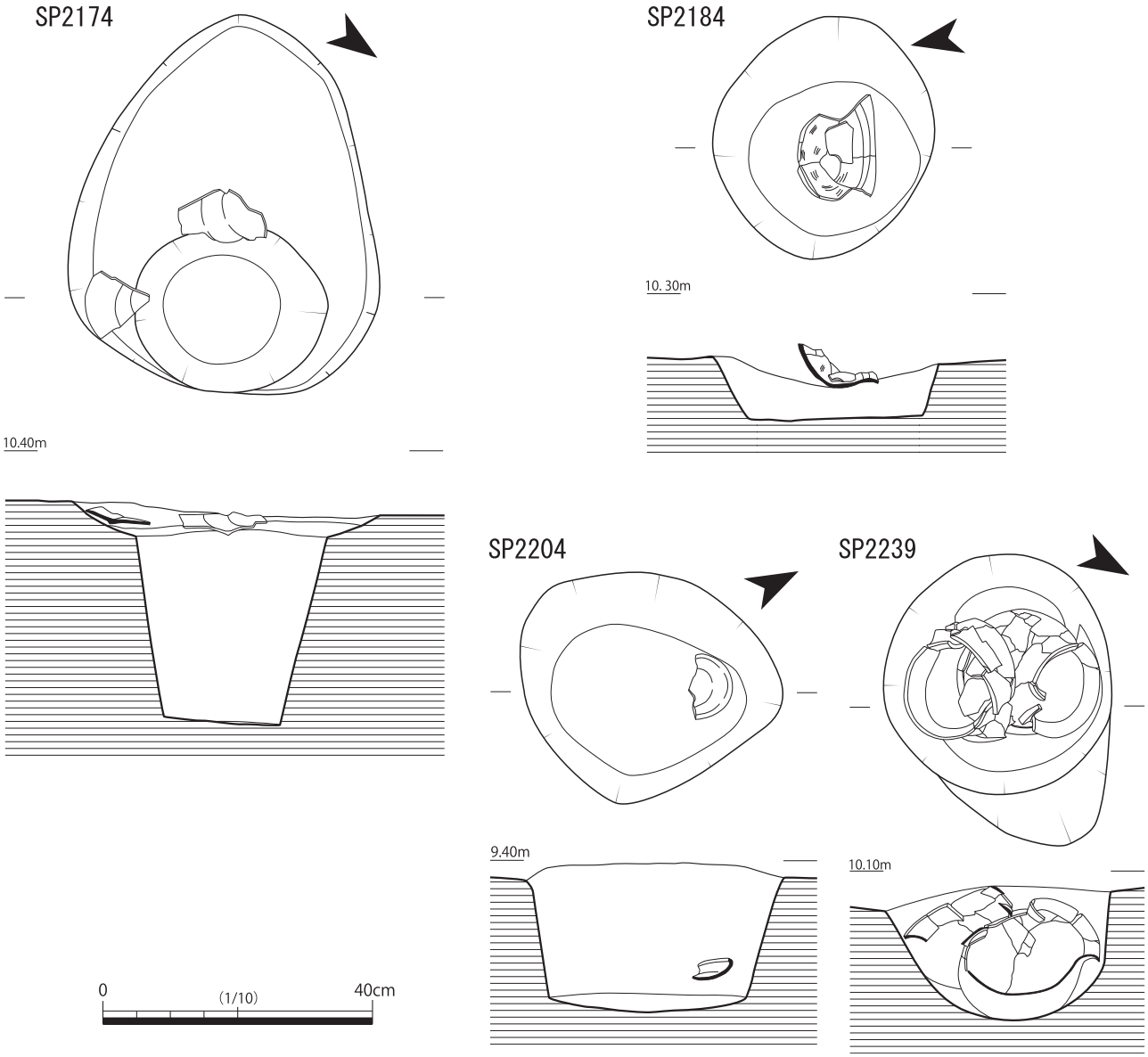


第 24 図　SK229、SP2237、SK221・230 実測図

する。甕の胴部片とともに、土製支脚（５）が出土した。これは、SI201 から出土した支脚（１・２）と大きさや形などで共通性が認められる。したがって、遺構の時期は SI201 とほぼ同時期の古墳時代後期と考える。

SK230（第 24 図　図版 11）　調査区の中央やや北寄り、SI201 の北西方向約 10 ｍの位置にあり、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ 96cm、幅 77cm、深さ 35cm を測る。主軸方位は N69°Ｅで標高約 10.5 ｍに位置する。断面形は逆台形を呈する。土師器鉢（３）と高杯（４）が出土した。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代と考える。

SP2174（第 25 図）　調査区の中央付近標高約 10.3 ｍの位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は



第 25 図　SP2174・2184・2204・2239 実測図

長さ 56cm、幅 46cm、深さ 31cm を測る。西側にテラスを有する。埋土上層から土師器甕が出土している。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代と考える。

SP2184（第 25 図　図版 11）　調査区の中央やや東寄り、SI201 の北側に近接する位置にあり、また多量の炭化材が出土した SK236 に接している。平面形は楕円形を呈する。規模は長さ 36cm、幅 32cm、深さ 19cm を測る。標高約 10.2 mにあり、断面形は逆台形を呈する。土師器甕(10)が出土した。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代と考える。

SP2204（第 25 図　図版 11）　調査区の南東側の位置にあり、遺構上面には遺物包含層が広がる。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 40cm、幅 30cm、深さ 22cm を測る。標高約 9.4 mにあり、断面形は逆台形を呈する。土師器鉢（15）が出土した。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代と考える。

SP2239（第 25 図　図版 11）　調査区の北東側、SI201 の北方向約 10 mの位置にあり、他の古墳時代の遺構と近接する。平面形は楕円形を呈し、北側にテラスをもつ。規模は長さ 45cm、幅 34cm、深さ 20cm を測る。標高約 10.1 mにあり、断面形は擂鉢状を呈する。土師器甕（13・14）が重なり合って出土しており、煎熬用の製塩土器の可能性がある。周辺の出土状況を考慮すると、遺構の時期は古墳時代が妥当だが、土器製塩の終末である 8 世紀末まで時期幅を持たせておきたい。

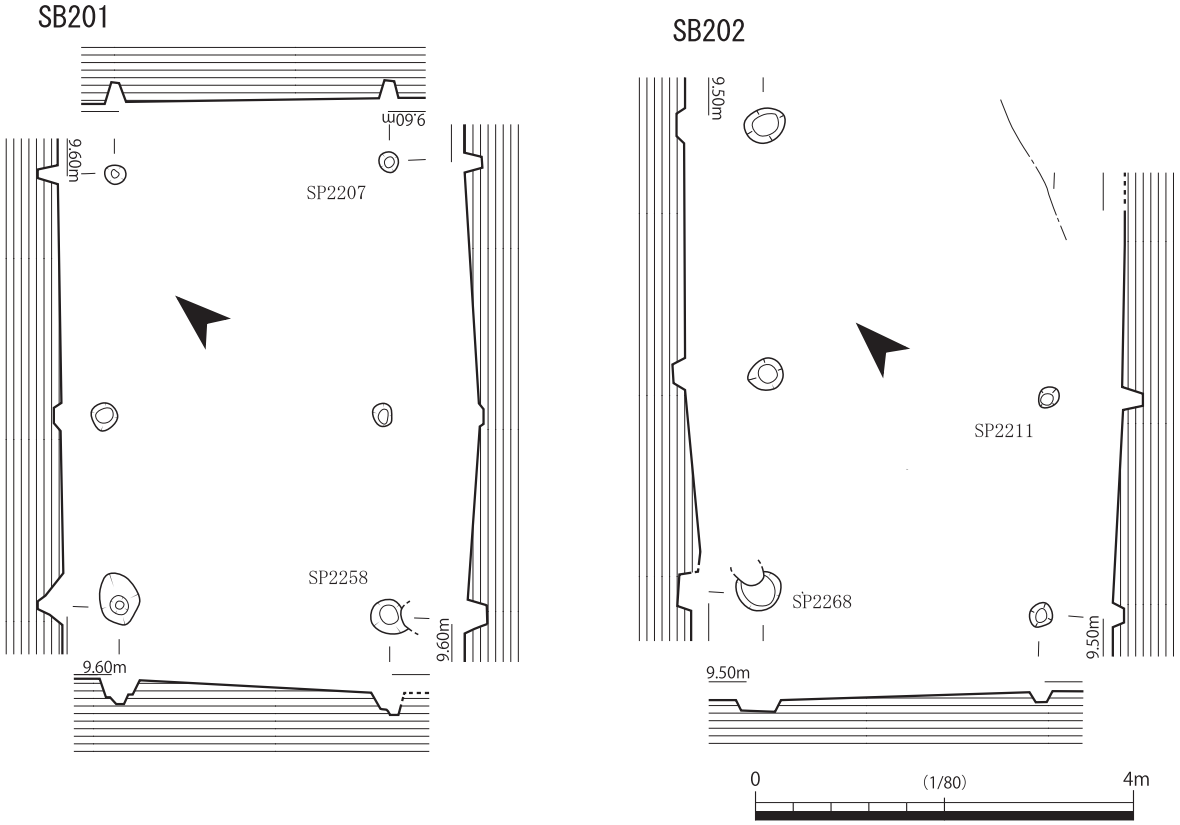
３　中世の遺構

（１）掘立柱建物

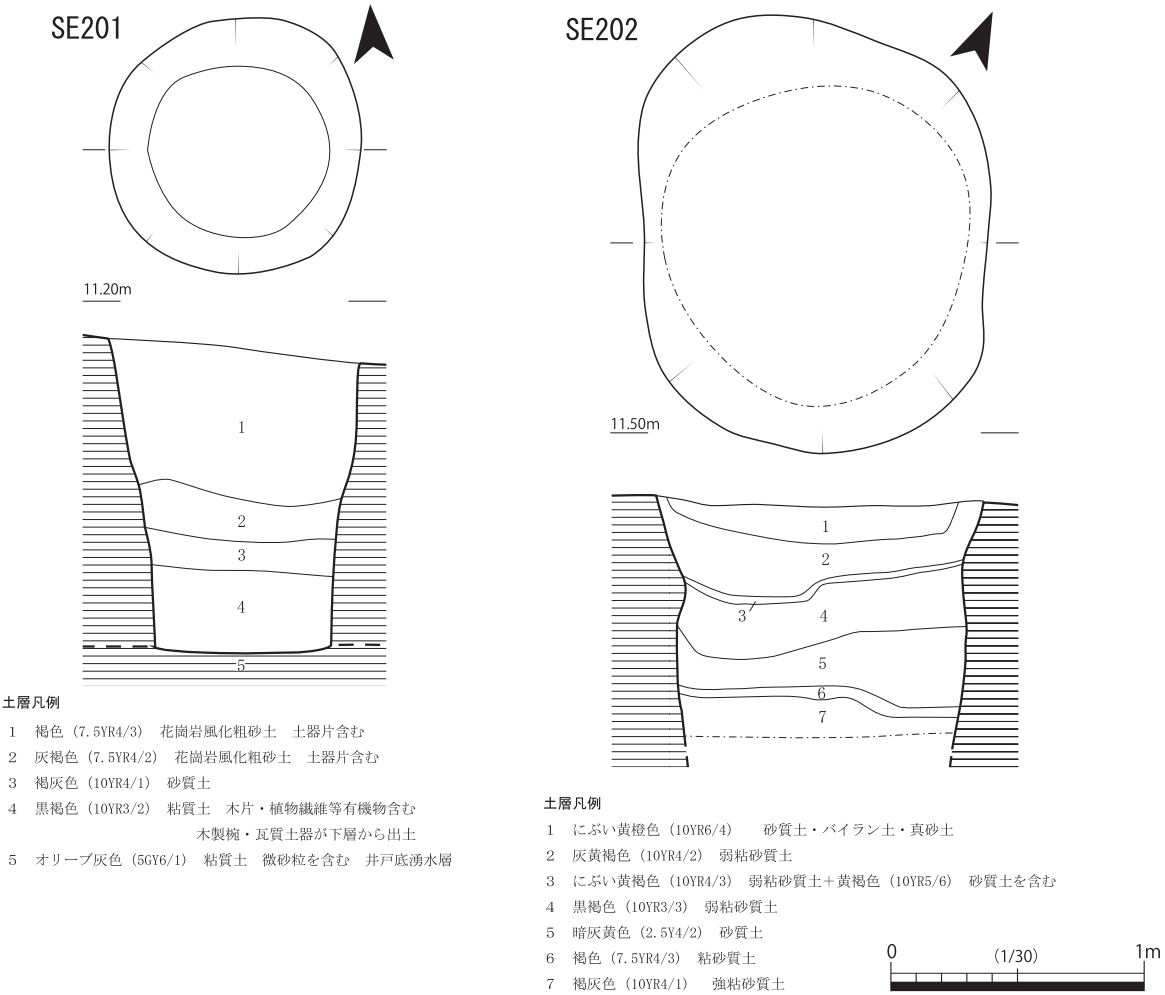
今回の調査では、下瑞光寺地区（１区）で２棟の掘立柱建物を復元した。どちらも床面積が 20 ㎡未満の小規模な建物で、遺物包含層①の下の面からの検出であった。建物の地盤は砂質で、一部で湧水も認められた。当時の水脈が現在と異なっていたとしても、居住に適した空間であったとは考えにくい。したがって、倉庫などの付属棟か家畜用の建物ではないかと考える。

SB201（第 26 図）　調査区南側やや東寄りに位置し、規模は桁行２間（4.80 ｍ）×梁行１間（2.85 ｍ）、床面積 13.68 ㎡を測る。棟方向は N47°　E で標高 9.5 ｍ前後に展開する。構成柱穴は６個で、規模は直径が 26 ～ 58cm で平均が 34.3cm、深さは 10 ～ 28cm で平均が 20cm である。遺物は２個の柱穴 SP2207、SP2258 から土師器片が出土した。いずれも少量細片のため図化には至っていない。出土遺物から中世の建物と考える。

SB202（第 26 図）　調査区南東隅に位置し、隅柱が１個調査区外となり検出できなかった。規模は桁行２間（5.00 ｍ）×梁行１間（3.00 ｍ）、床面積 15.00 ㎡を測る。棟方向は N45°　E で標高 9.4 ｍ前後に展開する。構成柱穴は５個で、規模は直径が 26 ～ 50cm で平均が 39.2cm、深さは 12 ～ 24cm で平均が 18.4cm である。遺物は２個の柱穴 SP2211 から瓦質土器鍋、SP2268 から土師器杯が出土した。いずれも少量細片のため図化には至っていない。出土遺物から中世の建物と考える。SB201 とは規模や棟方向に共通性が認められるが、先後関係については出土遺物が乏しく困難である。また、２棟の間隔が 1.5 ｍであることから併存の可能性もある。



第 26 図　SB201・202 実測図



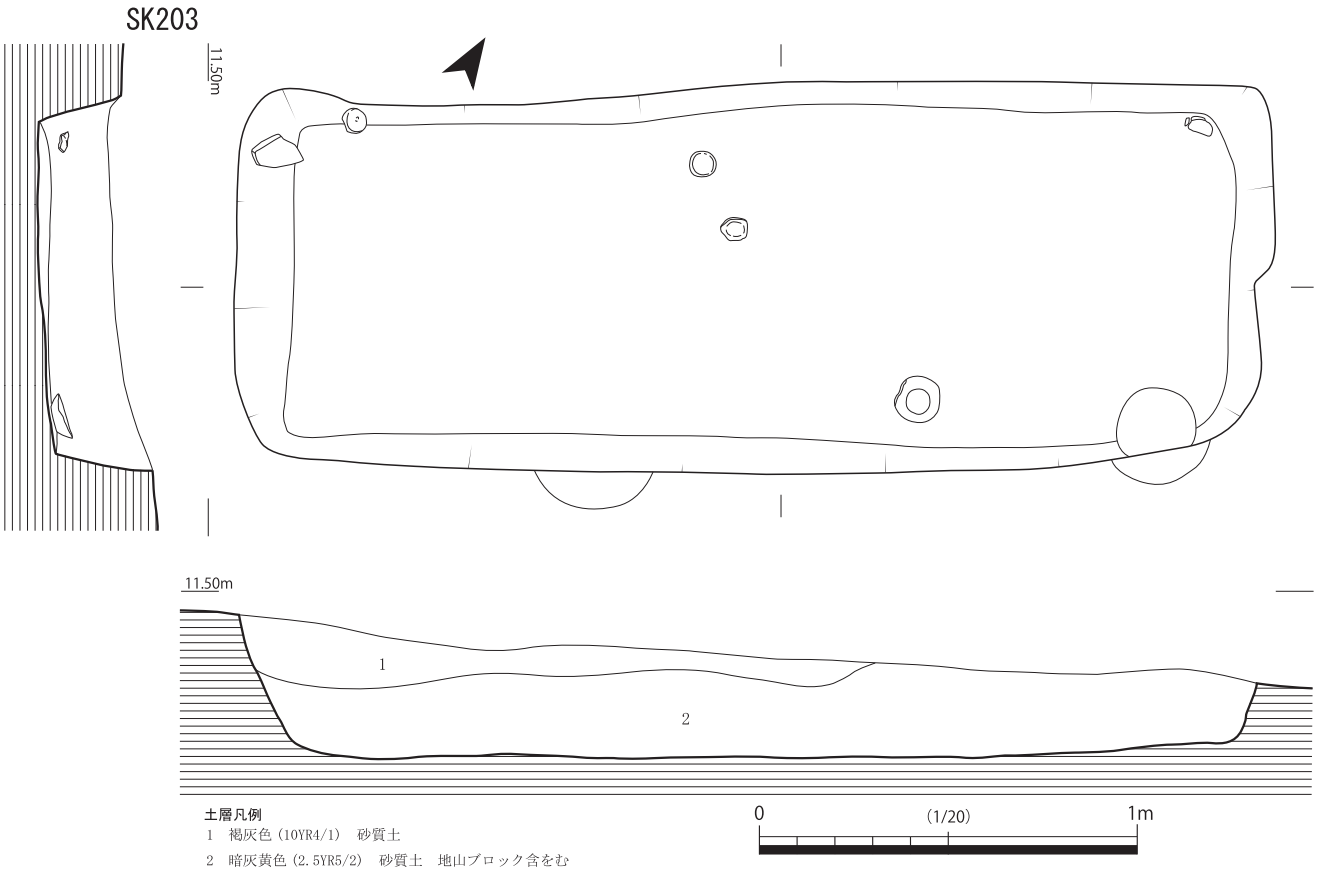
第 27 図　SE201・202 実測図

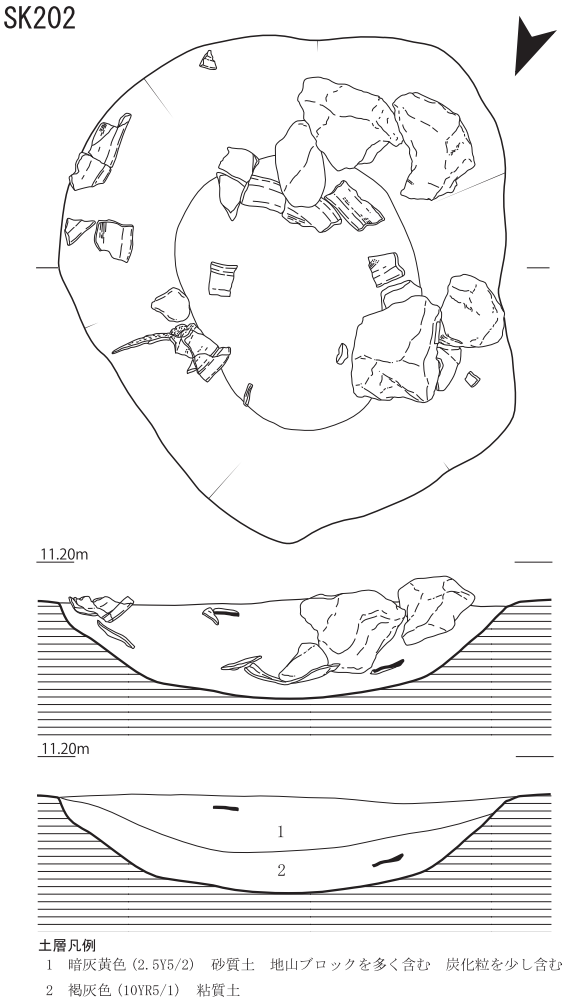
（２）井戸

今回の調査では、下瑞光寺地区（１区）で２基の井戸を検出した。標高 11.0 ｍを少し超え、調査区では最も高台に位置する。どちらも素掘りの井戸で上部構造は不明で、井底部に石組み等は認められなかった。用途について、生活用か灌漑用かの特定までには至らなかった。

SE201（第 27 図　図版 12）　調査区南側西寄り標高約 11.1 ｍの高台に位置する。後世の削平を著しく受けていると思われ、周辺には柱穴などの浅い遺構はほとんど認められない。平面形は円形を呈し、規模は長さ 108cm、幅 103cm、深さ 122cm を測る。どの層からも土師器皿や瓦質土器擂鉢や鍋の土器片が出土した。下層からは漆器椀（41・42）や竹製品（43）も出土した。最下層付近に湧水があり、廃絶時の祭祀の跡は認められなかった。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅲ型式古・新段階に該当することから、遺構の廃絶時期は 15 世紀後半頃と考える（岩崎 1999）。

SE202（第 27 図　図版 12）　調査区中央西寄り標高約 11.3 ｍの高台に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 180cm、幅 150cm、深さ 92cm、主軸方位は N46°　W を測る。埋土中から瓦質土器鉢（44）、鍋（45）が出土した。この他にも土師器皿や杯、瓦質土器擂鉢や鍋の土器片が出土した。深さ 90cm 付近の湧水が激しく、壁面の崩落が認められたため、それ以上掘り進めることは中止した。SE201 同様廃絶時の祭祀の形跡は認められなかった。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅲ型式新段階、ⅥA 型式新段階に該当することから、遺構の廃絶時期は 16 世紀中頃と考える。



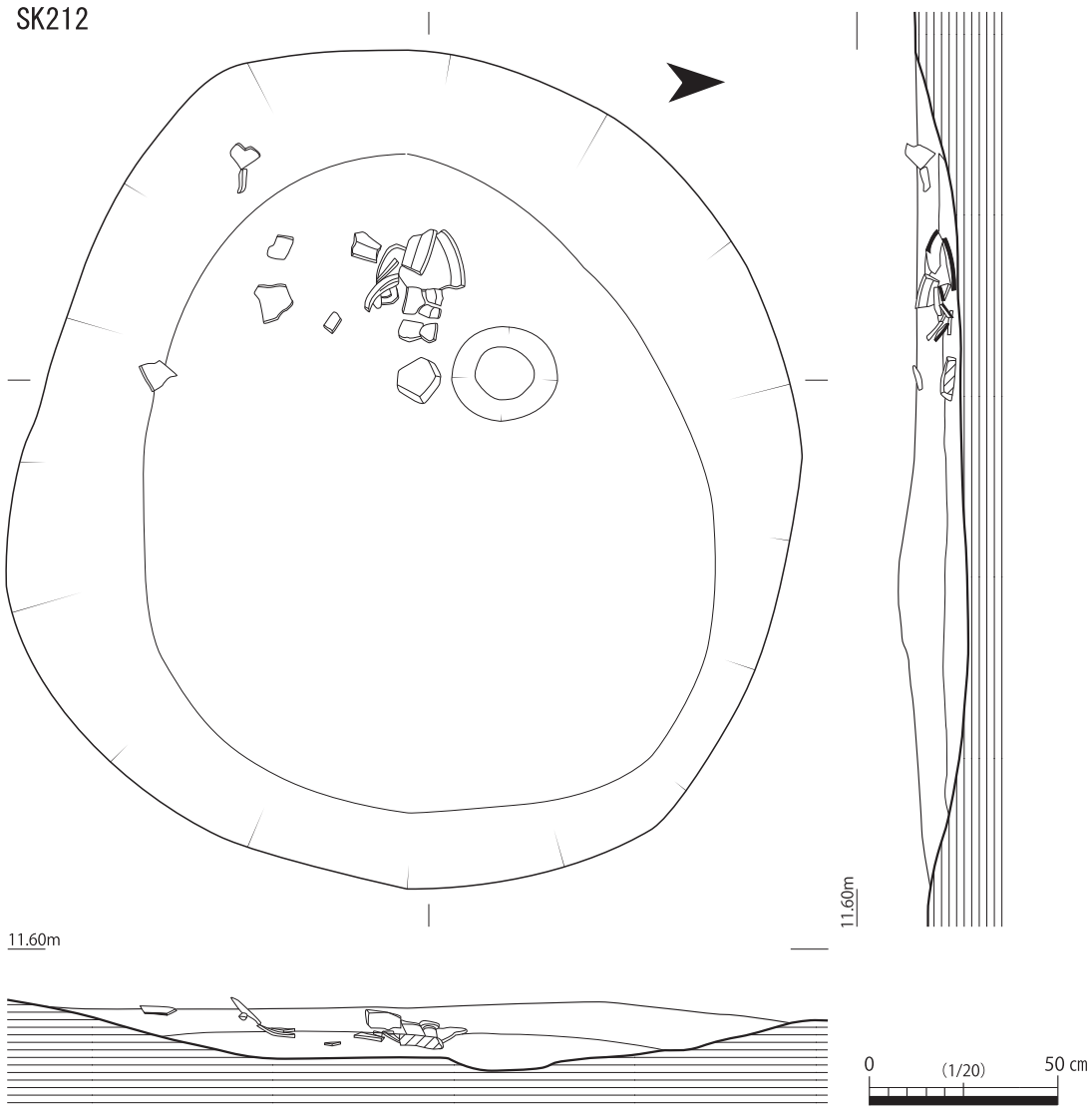


第 28 図　SK203・202 実測図

（３）土坑

SK203（第 28 図　図版 12）　調査区中央西寄り標高約 11.4 mの高台に位置する。平面形は長方形を呈する。規模は長さ 275cm、幅 104cm、深さ 33cm を測る。主軸方位は N60°　E で、床面はフラットで断面形は逆台形を呈する。埋土下位から土師質土器擂鉢（56）、瓦質土器羽釜（57）が出土し、床面からは土師器小皿（53・54）と杯（55）が出土した。杯の内面には赤色塗彩が施さていた。遺構の性格として墓の可能性も考えられるが、土層から切り合いは認められず、規模が大きすぎることから積極的には肯定できない。出土遺物から 14 世紀の遺構と考える。

SK202（第 28 図　図版 12）　調査区中央西端標高約 11.1 mの高台に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長さ 135cm、幅 128cm、深さ 25cm を測る。主軸方位は N75°　W で、断面形は緩やかな擂鉢状を呈する。埋土から瓦質土器鍋や足鍋（46 ～ 52）や土師器片が中程度の石と共に出土した。典型的な廃棄土

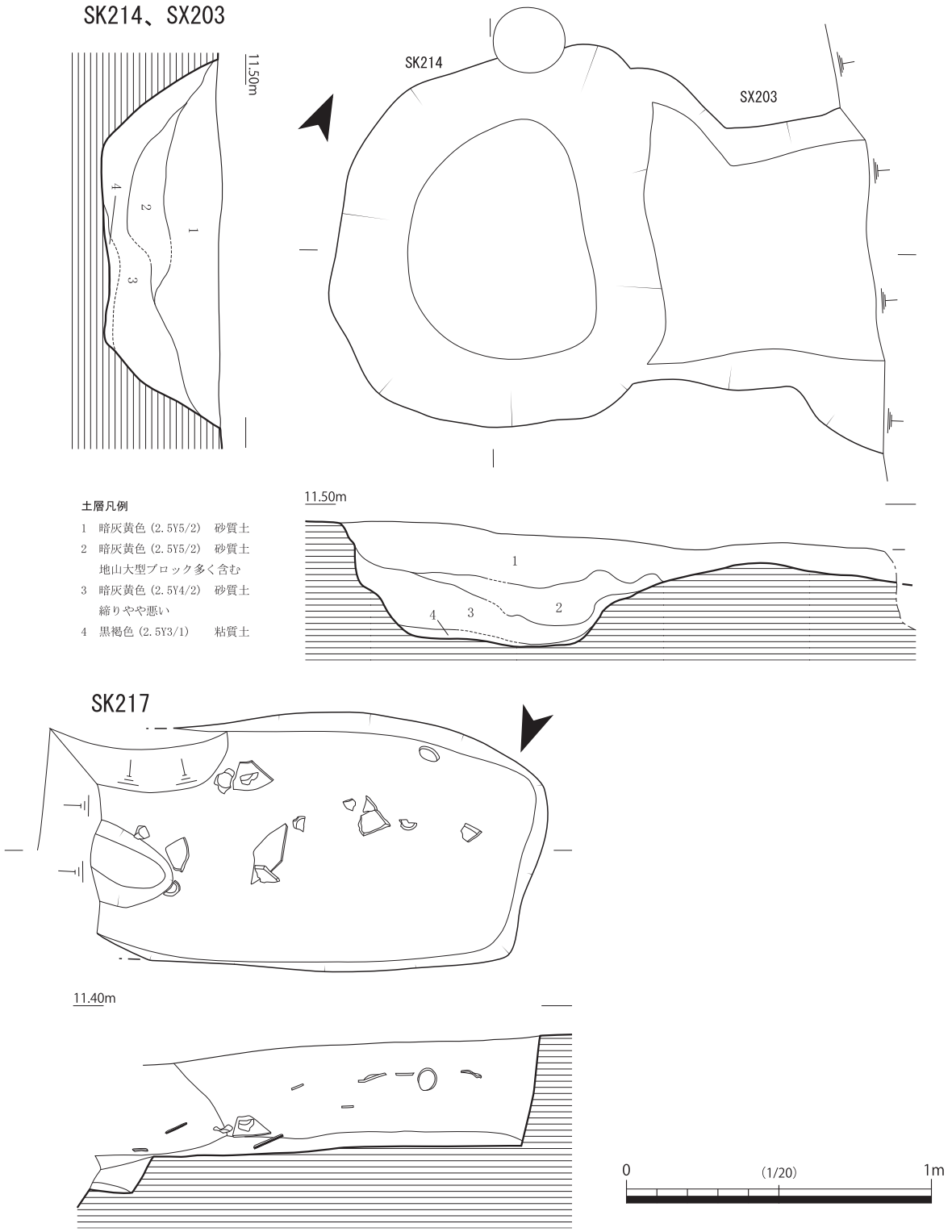


第 29 図　SK212 実測図

坑と考える。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅳ、ⅥＢ型式に該当することから、遺構の時期は 16 世紀と考える。

SK212（第 29 図　図版 13）　調査区北側西端標高約 11.5 ｍの高台に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長さ 231cm、幅 217cm、深さ 18cm を測る。断面形は緩やかな擂鉢状を呈する。調査区の壁面に近く、平面形の規模に対して非常に浅いことから、後世の削平を強く受けていることを窺わせる。埋土から瓦質土器擂鉢（64）、鉢（65）、足鍋（66）、鍋（67）や陶器片が出土した。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年ⅥＢ型式に該当することから、遺構の時期は 16 世紀と考える。

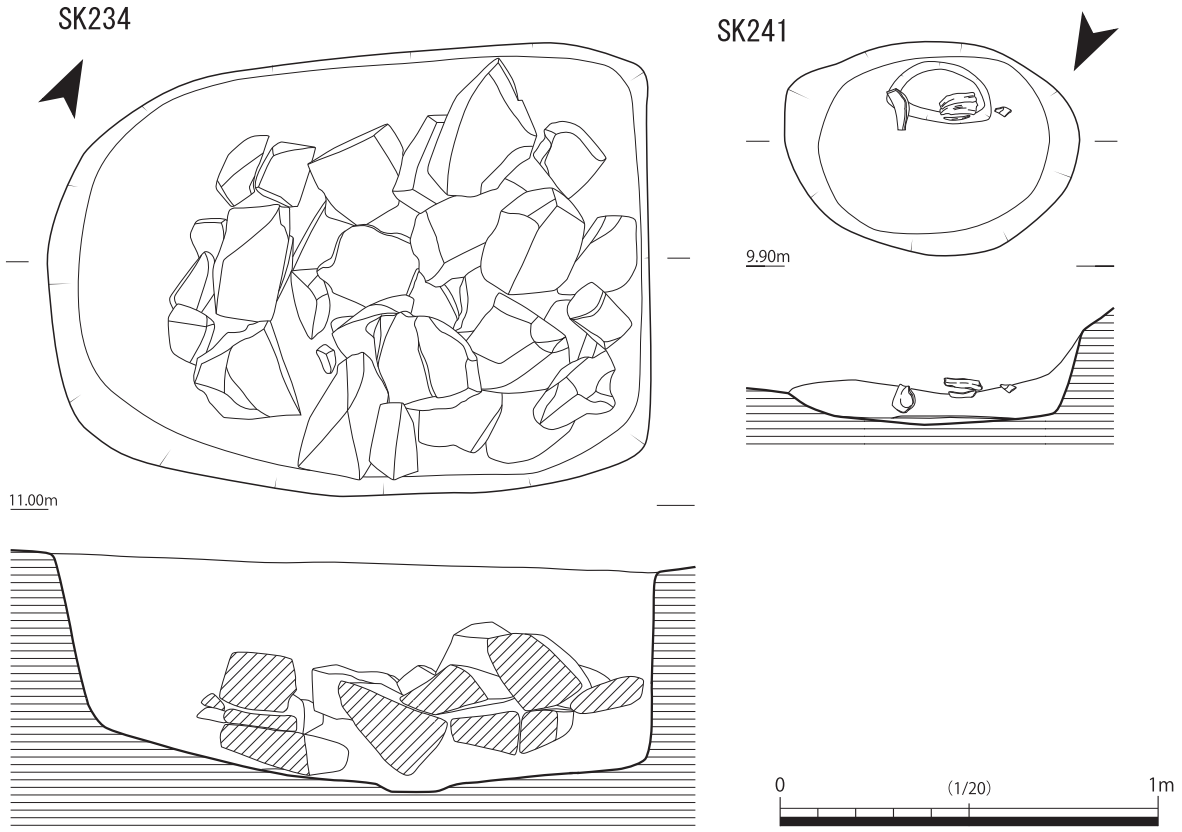
SK214、SX203（第 30 図　図版 13）　調査区北側西寄り標高約 11.4 ｍの高台に位置する。土層から２基の遺構には切り合いはなく、同時に埋まったことが読み取れる。平面形が長方形に近い SK214 にテラス状を呈する一段浅い SX203 が接しており、断面形は柄杓形を呈する。SX203 のもう一方の掘り方は、削平により不明である。規模は SK214 が長さ 135cm、幅最大値 102cm、深さ 37cm を測り、断面形は逆台形を呈する。SX203 は長さ 138cm、幅最大値 95cm、深さ 10cm を測る。SK214 からは土師器杯（68）、瓦質土器鍋（69）、鉄製品（70）が出土し、SX203 からは土師器皿（127）が出土した。



第 30 図　SK214、SX203、SK217 実測図

出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅳ型式に該当することから、遺構の時期は 15 世紀後半から 16 世紀前半頃と考える。

SK217（第 30 図　図版 13）　調査区北側西寄り標高約 11.3 mの高台に位置する。平面形は東端が削平により不明なため不整形とする。規模は長さ最大値 146cm、幅 86cm、深さ 35cm を測る。床面はフラットで残存部の断面形は逆台形を呈する。埋土中層から土師器皿（71）が、その他にも土師器や瓦質土器、陶器片が出土した。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考える。



第 31 図　SK234・241 実測図

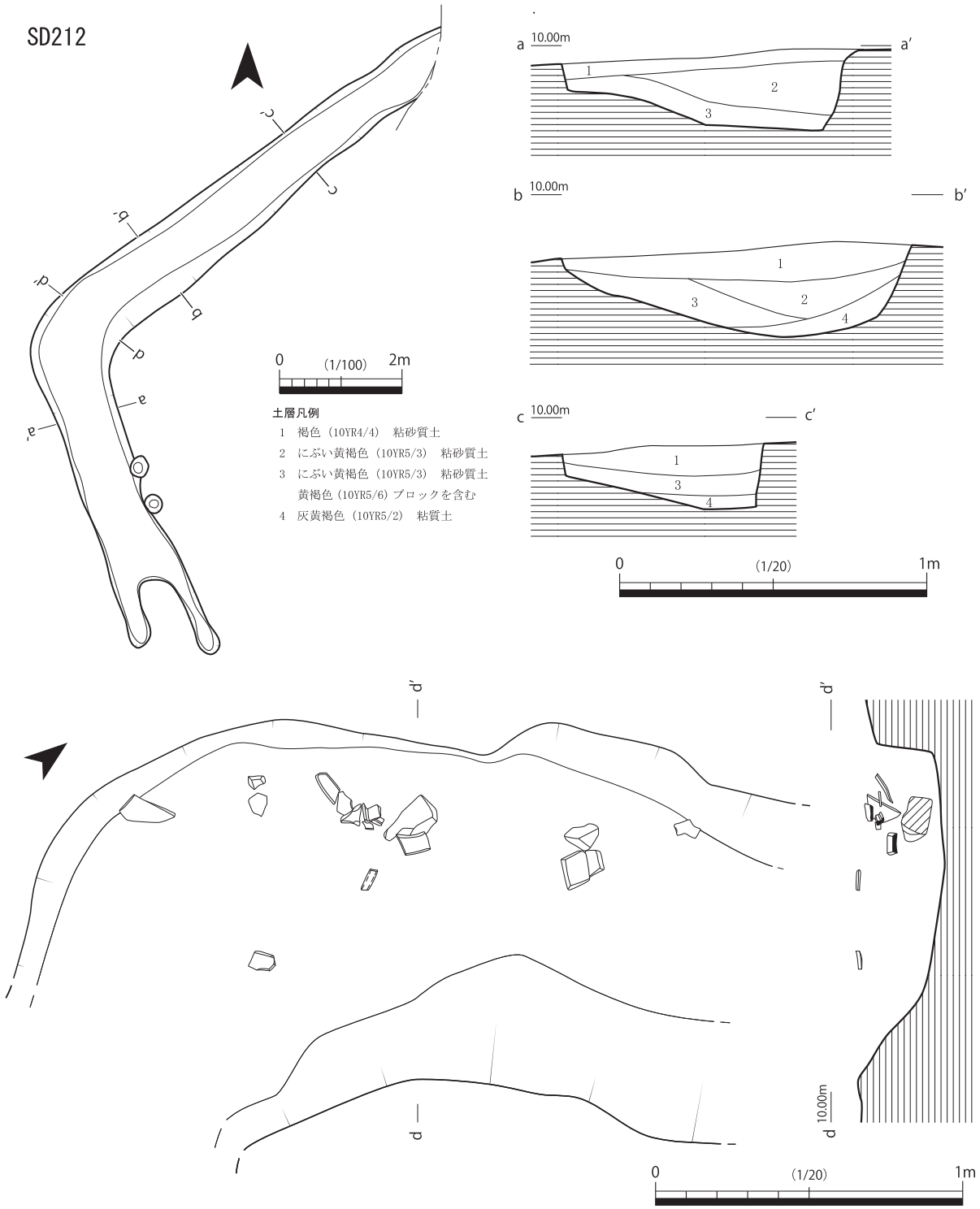
SK234（第 31 図　図版 13）　調査区南側西寄り標高約 10.9 ｍの高台に位置する。平面形は長方形で主軸方位は N34°　E である。規模は長さ 175cm、幅 130cm、深さ 60cm を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土から多量の石が出土した。大きさは 30 ～ 40cm 程度のものがほとんどで、意図的に投棄したものと考える。北方向 3.5 ｍの位置には SE201 が存在するが、関係は不明である。石に混じって瓦質土器鍋（76）や土師器、陶器片が出土した。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年ⅥＢ型式に該当することから、遺構の時期は 16 世紀と考える。

SK241（第 31 図　図版 13）　調査区南側標高約 9.7 ｍの低地に位置する。平面形は楕円形で主軸方位は N84°　E である。規模は長さ 78cm、幅 57cm、深さ 10cm を測る。西壁以外は後世の削平を著しく受けており、遺構の残存状況は決して良好ではないが、埋土上層から漆器椀（79）が、その他にも瓦質土器片が出土した。谷筋に近く遺構下位には湧水も認められた。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考える。

（４）溝

今回の調査では、下瑞光寺地区（１区）で 15 条の溝を検出した。その内 12 条の溝から破片資料ではあるが遺物が出土し、時期を特定することができた。ただ、半数近くの７条が長さ３ｍにも満たない溝で、10 ｍを超えたものは、わずか３条であった。

SD212（第 32 図　図版 14）調査区南側に位置し、標高 10.0 ｍ前後に展開する。規模は長さ 13.00 ｍ、幅 45cm、標高差９cm を測る。溝は南から北に向かって流れ、５ｍ程のところで屈曲して向きを東に変える。その後８ｍ程の地点で後世の削平により検出不能となる。土層断面からは溝の外側の浸食が激しいことが読み取れる。したがって、ある程度の勢いで水は流れていたと推定できる。遺物は

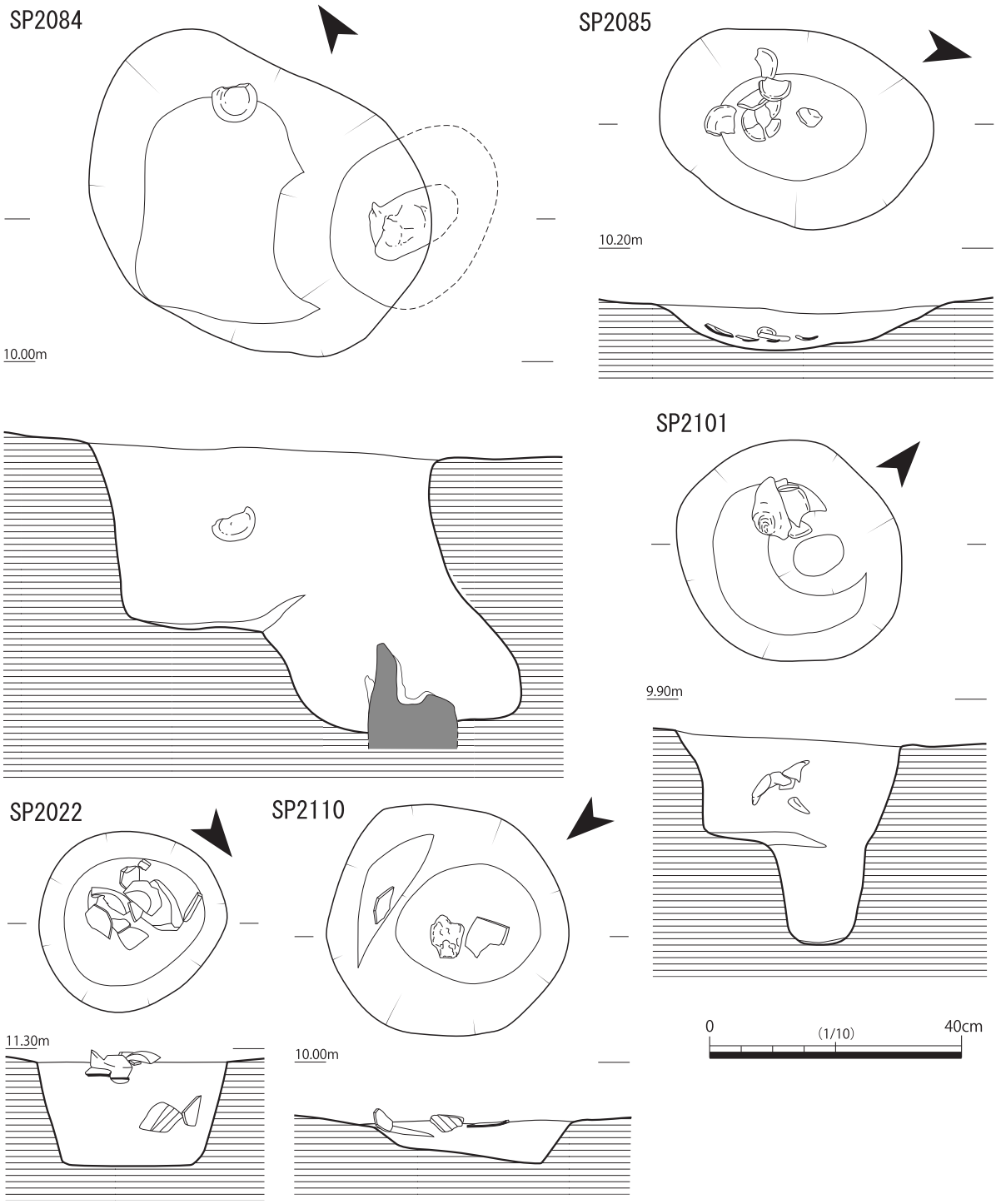


第 32 図　SD212 実測図

瓦質土器鍋（86）や大甕の土器片が出土している。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅲ型式新段階に該当することから、遺構の時期は 15 世紀後半から 16 世紀初頭頃と考える。

（5）柱穴

SP2084（第 33 図　図版 14）　調査区の北側やや東寄り標高約 9.9 mのやや軟弱な地盤の位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 58cm、幅 45cm、深さ 45cm を測る。西側にテラスを有し、一段深い東側には柱根が残存する。埋土上層から土師器皿（95）が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考える。

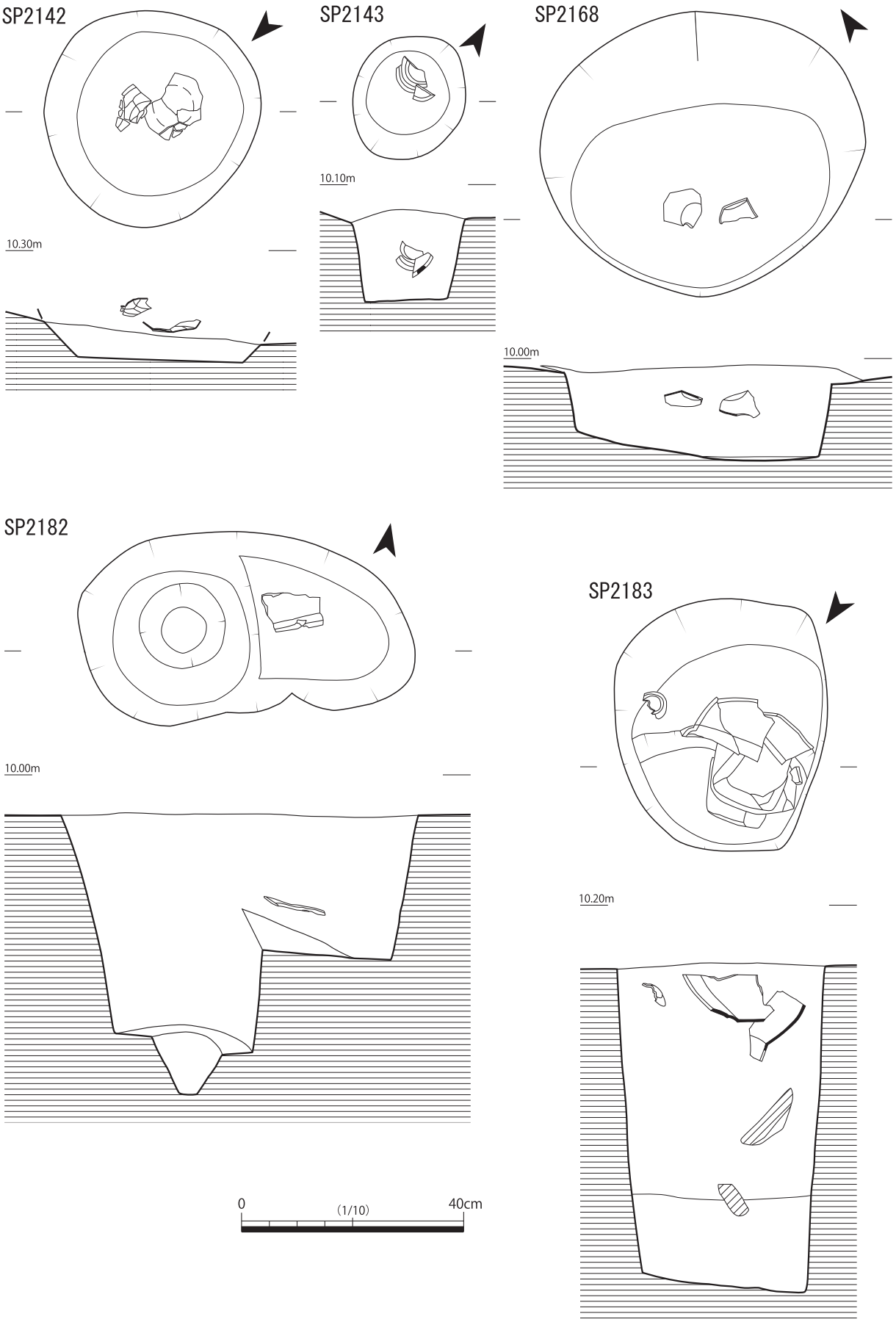


第 33 図　SP2022・2084・2085・2101・2110 実測図

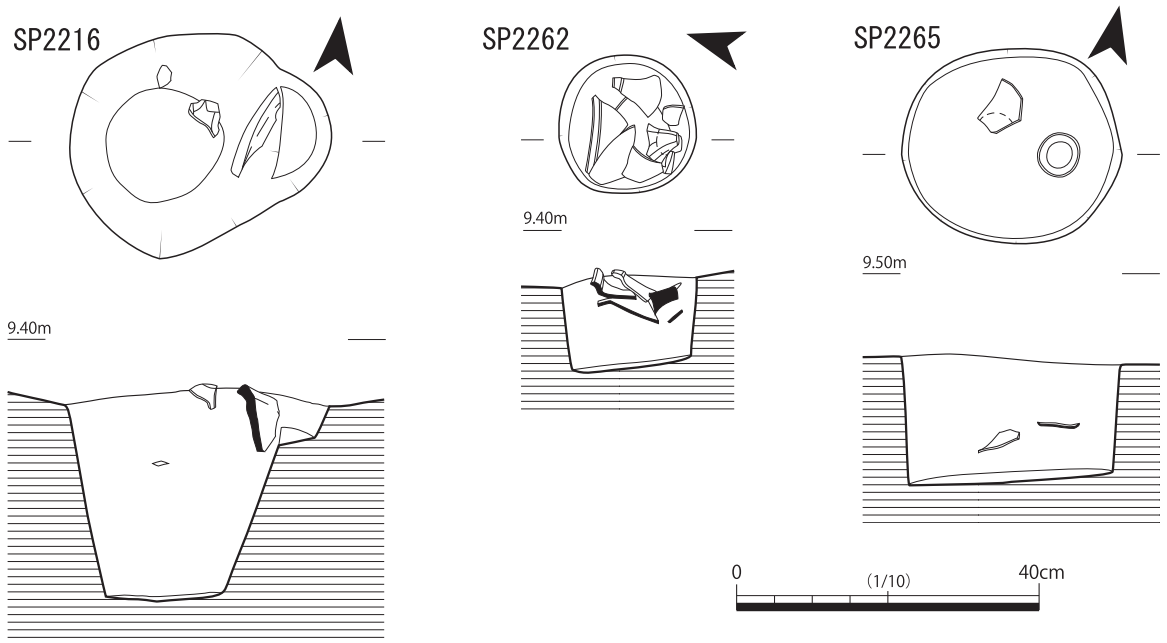
SP2085（第 33 図　図版 15）　調査区の北側やや東寄り標高約 10.1 ｍの位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 43cm、幅 31cm、深さ 7cm を測る。断面形は緩やかな擂鉢状を呈する。埋土下層から土師器皿（101 ～ 104）が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考える。

SP2101（第 33 図　図版 14）　調査区の北側東端標高約 9.9 ｍの位置にある。平面形は円形を呈し、規模は長さ 37cm、幅 33cm、深さ 32cm を測る。南側にテラスを有する。埋土上層から土師器杯（100）が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代前半と考える。

SP2022（第 33 図　図版 15）　調査区の中央やや西寄り標高約 11.3 ｍの高台にある。平面形は円形を呈し、規模は長さ 30cm、幅 28cm、深さ 17cm を測る。断面形は逆台形を呈し、埋土上層および中



第 34 図　SP2142・2143・2168・2182・2183 実測図



第 35 図　SP2216・2262・2265 実測図

層から土師器皿や杯、瓦質土器鍋、陶器などの土器片が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代後半と考える。

SP2110（第 33 図　図版 15）　調査区の北側東端標高約 9.9 ｍの位置にある。平面形は円形を呈し、規模は長さ 39cm、幅 37cm、深さ 8cm を測る。東側にテラスを有する。埋土上層から瓦質土器擂鉢が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代後半と考える。

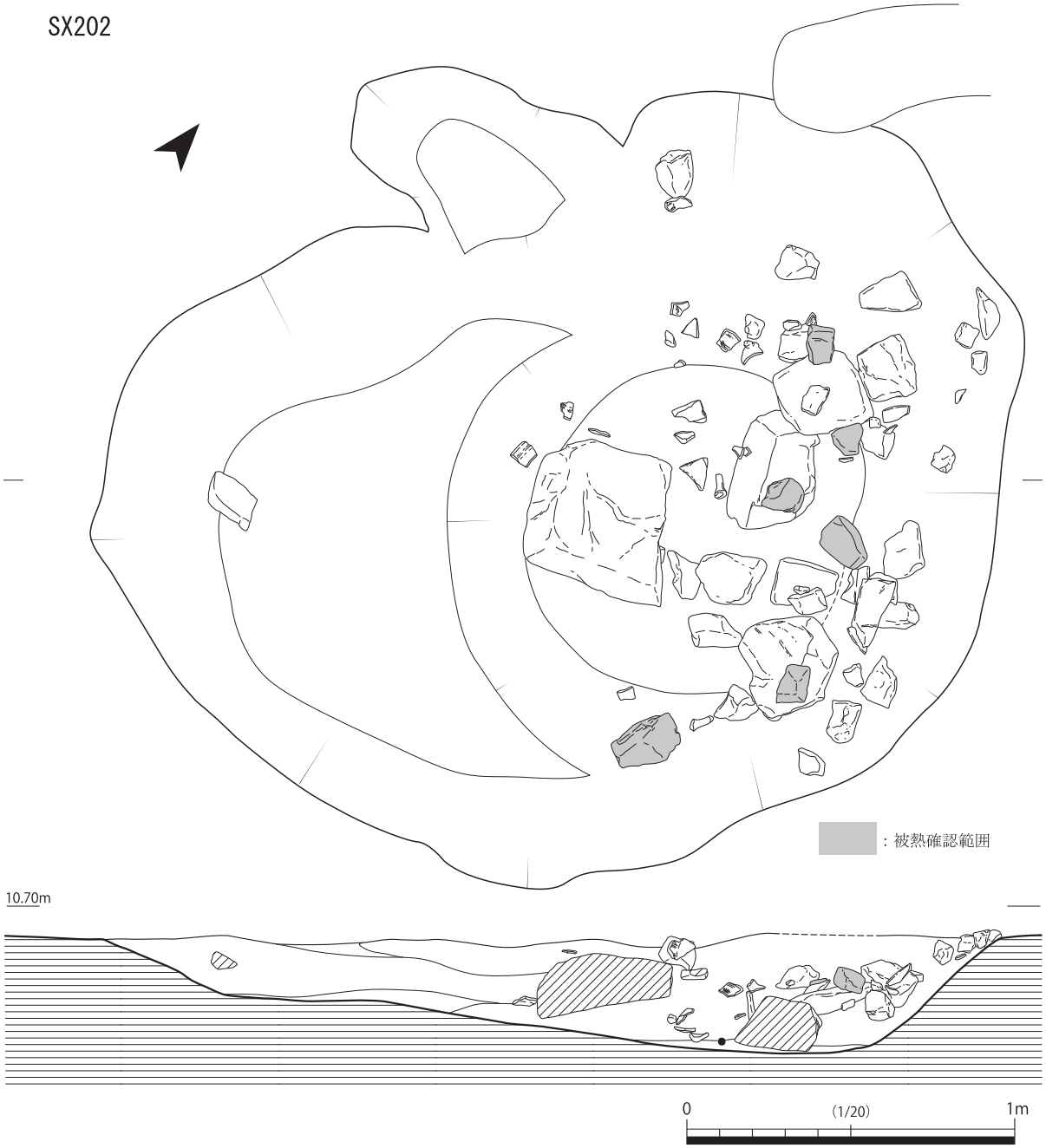
SP2142（第 34 図　図版 15）　調査区の北側東寄り標高約 10.2 ｍの位置にある。平面形は円形を呈し、規模は直径 39cm、深さ 6 cm を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土上層から土師器皿（110）が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考える。

SP2143（第 34 図　図版 15）　調査区の中央東寄り標高約 10.0 ｍの位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 24cm、幅 20cm、深さ 16cm を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土中層から土師器皿（105）や石製品（119）が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考える。

SP2168（第 34 図　図版 16）　調査区の北東側標高約 10.0 ｍの位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 58cm、幅 51cm、深さ 16cm を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土中層から土師器皿（111）が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代後半と考える。

SP2182（第 34 図　図版 16）　調査区の中央東寄り標高約 9.9 ｍの位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 61cm、幅 34cm、深さ 50cm を測る。東側にテラスを有する。埋土中層から瓦質土器鍋（118）が出土している。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅲ型式新段階に該当することから、遺構の時期は 15 世紀後半から 16 世紀前半頃と考える。

SP2183（第 34 図　図版 16）　調査区の中央東寄り標高約 10.1 ｍの位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 45cm、幅 39cm、深さ 55cm を測る。南側にテラスを有する。埋土上層から土師器皿（97・98）と瓦質土器足鍋（99）が出土している。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年ⅥＡ型式新



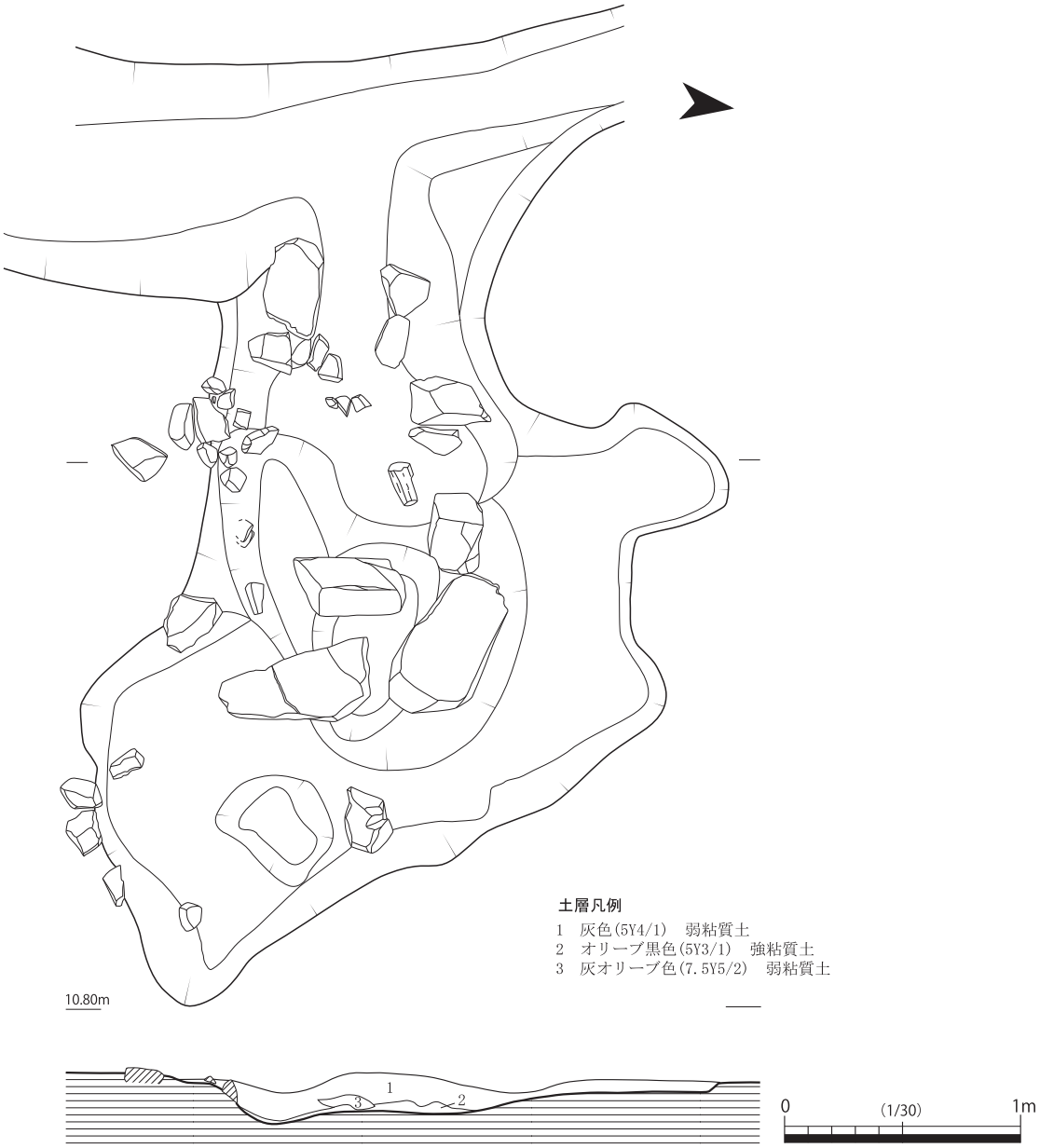
第 36 図　SX202 実測図

段階に該当することから、遺構の時期は 16 世紀後半と考える。

SP2216（第 35 図　図版 16）　調査区の南東側標高約 9.3 mのやや軟弱な地盤の位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 35cm、幅 29cm、深さ 27cm を測る。東側にテラスを有する。埋土上層から瓦質土器鍋（116）が出土している。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅲ型式古段階に該当することから、遺構の時期は 15 世紀と考える。

SP2262（第 35 図　図版 17）　調査区の南東側標高約 9.3 mの位置にある。平面形は円形を呈し、規模は直径 19cm、深さ 12cm を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土中層から上層にかけて瓦質土器足鍋（117）が出土している。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅲ型式新段階に該当することから、遺構の時期は 15 世紀後半から 16 世紀前半と考える。

SX204



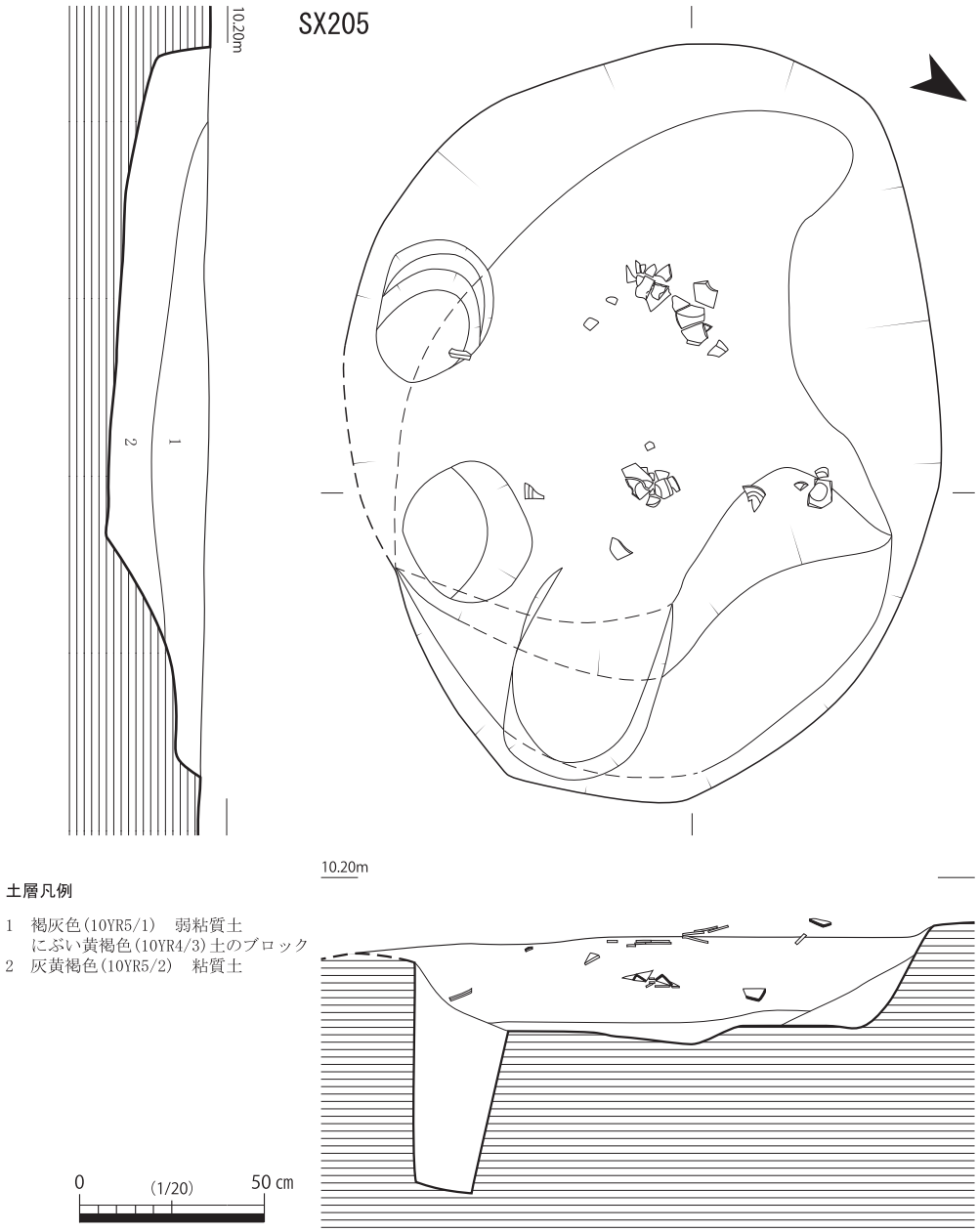
第 37 図　SX204 実測図

SP2265（第 35 図　図版 16） 調査区の南東側標高約 9.4 mのやや軟弱な地盤の位置にある。平面形は円形を呈し、規模は直径 28cm、深さ 17cm を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土中層から土師器皿（106）や皿（107）が出土している。出土遺物から、遺構の時期は室町時代と考える。

（６）性格不明遺構

今回の調査では、下瑞光寺地区（１区）で用途を特定できなかった遺構を９基検出した。調査区内に点在しており、その全てで遺物が出土したため、時期を特定することができた。規模や形も様々で、他の遺構と切り合うものもあった。

SX202（第 36 図　図版 17） 調査区の中央付近標高約 10.6 mの位置にある。この辺りは後世の削平を受け、遺構は浅いものが多く密度も疎である。遺構内からは投棄されたと思われる大小の石や瓦質土器鍋（120 ～ 122）が出土した。中規模の石で被熱により赤変したものも同時に出土した。出土



第 38 図　SX205 実測図

した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅳ やⅥ B 型式に該当することから、遺構の時期は 16 世紀と考える。

SX204（第 37 図　図版 18） 調査区の北側標高約 10.5 m の位置にあり、西側は SD203 と接する。SX202 と同様に遺構内からは投棄されたと思われる大小の石や瓦質土器擂鉢（123）や足鍋、土師器片などが出土した。溝に付随する施設かは不明である。出土遺物から室町時代後半と考える。

SX205（第 38 図　図版 18） 調査区の中央東側標高約 10.1 m の位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ 208cm、幅 167cm、深さ 25cm を測る。主軸方位は N82° E である。埋土上層には焼土塊が含まれていたが遺構に伴うかは不明である。埋土中層から上層にかけて土師器杯（124、125）や鍋（126）、瓦質土器片などが出土した。出土した鍋の口縁の形が岩崎編年Ⅱ型式に該当することから、遺構の時期は室町時代前半と考える。

第９表　下瑞光寺地区（１区）竪穴建物一覧表

遺構番号	平面形	主柱穴（個）	南北（ｍ）建物の南西隅から	東西（ｍ）建物の北東隅から	床面積（㎡）	カマドの有無 場所	出土遺物	時代	備　　考
SI201	方形	4	4.50	4.68	21.06	有 北壁中央	土製支脚、須恵器杯身、土師器甕	古墳	6C 後半～７世紀前半（AMS 法）

第 10 表　下瑞光寺地区（１区）掘立柱建物一覧表

※：南東隅の柱穴から測れなかった場合

遺構番号	規模（間）	棟方向	桁行（ｍ）建物の南東隅から	梁行（ｍ）建物の南東隅から	床面積（㎡）	関連柱穴	出土遺物	時代	備　　考
SB201	２×１	N47°　E	4.80 (2.70・2.10)	2.85	13.68	SP2207、SP2258	土師器皿・杯	中世	構成柱穴６個
SB202	２×１	N45°　E	※5.00 (2.26・2.74)	※3.00	15.00	SP2211、SP2268	土師器皿・杯、瓦質土器鍋	中世	北東隅柱調査区外のため検出不能

第 11 表　下瑞光寺地区（１区）井戸一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SE201	円形	－	108	103	122	漆器椀、竹製品、土師器皿・杯、瓦質土器鍋・擂鉢	室町	素掘り井戸 16C 末（AMS 法）
SE202	楕円形	N46°　W	180	150	92	瓦質土器鉢・鍋、土師器皿・杯	室町	素掘り井戸

第 12 表　下瑞光寺地区（１区）土坑一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SK201	円形	－	75	74	13	－	－	
SK202	楕円形	N75°　W	135	128	25	土師器皿・杯、瓦質土器鍋・足鍋	室町	
SK203	長方形	N60°　E	275	104	33	土師器皿・杯、土師質土器擂鉢、瓦質土器羽釜、陶器鉢	中世	
SK204	長方形	N10°　E	150	93	48	土師器皿、瓦質土器鍋、青磁椀、銅製笊	室町	
SK205	円形	－	82	75	50	土師器皿・杯、瓦質土器擂鉢	中世	
SK206	円形	－	76	70	42	土師器皿、瓦質土器鍋・擂鉢	室町	
SK207	長方形	N44°　W	138	63	21	土師器皿・杯、陶器鉢	室町	
SK208	長方形	N43°　W	117	72	8	土師器皿、瓦質土器鍋	中世	
SK210	楕円形	N56°　W	64	54	15	土師器皿、瓦質土器鍋、陶器鉢	室町	
SK211	楕円形	N83°　W	76	70	27	土師器皿・杯、瓦質土器鍋	室町	
SK212	円形	－	231	217	18	瓦質土器擂鉢・足鍋・鍋、陶器	室町	
SK213	楕円形	N48°　W	86	64	9	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	
SK214	不整形	－	135	最大 102	37	土師器皿・杯、瓦質土器鍋、鉄製品鎹炭化材	室町	SX203 と切り合うが先後関係不明　16C 末（AMS 法）
SK215	楕円形	N37°　E	98	71	16	－	－	
SK216	不整形	－	142	最大 50	51	土師器皿、瓦質土器鍋	中世	西側調査区外に伸びる
SK217	不整形	－	最大 146	86	35	土師器皿、瓦質土器鍋、陶器	室町	東端削平により不明
SK218	楕円形	N11°　E	97	80	9	土師器皿、瓦質土器鍋、炭化材	中世	８C 末（AMS 法）
SK219	楕円形	N75°　E	149	128	34	土師器皿・杯、瓦質土器鍋	室町	
SK220	不整形	－	89	最大 81	36	土師器皿	中世	東端削平により不明
SK221	円形	－	131	129	12	土製支脚、土師器甕	古墳	
SK222	円形	－	67	57	33	土師器皿	室町	
SK223	楕円形	N22°　W	72	40	17	土師器皿	中世	
SK224	楕円形	N84°　W	116	48	34	土師器皿	中世	
SK225	円形	－	67	63	55	－	－	
SK226	楕円形	N82°　E	107	68	54	瓦質土器大甕	室町	
SK227	長方形	N60°　E	196	90	29	土師器皿・杯、瓦質土器擂鉢	室町	
SK228	長方形	N86°　E	97	56	60	土師器皿、瓦質土器鉢・鍋	室町	
SK229	楕円形	N72°　E	66	37	24	土師器甑・把手付甕	古墳	SP2237 と接する両者の土器が接合
SK230	楕円形	N69°　E	96	77	35	土師器鉢・高杯	古墳	
SK231	円形	－	80	68	36	土師器皿、瓦質土器鍋	中世	
SK232	楕円形	N22°　W	86	70	40	土師器皿・杯	室町	
SK234	長方形	N34°　W	175	130	60	土師器皿・杯、瓦質土器鍋・足鍋、陶器鉢	室町	
SK235	円形	－	63	59	15	－	－	

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SK236	円形	－	89	84	55	炭化材	－	木炭焼成坑か　６Ｃ後半（AMS 法）
SK237	楕円形	N18°　W	115	80	22	土師器甕・製塩土器、炭化材	古墳	湧水あり　７Ｃ初頭（AMS 法）
SK239	楕円形	N24°　E	125	99	40	－	－	東端調査区外へ伸びる
SK240	円形	－	110	93	36	土師器皿・杯、瓦質土器大甕・鍋	室町	湧水あり
SK241	楕円形	N84°　E	78	57	10	漆器椀、瓦質土器鍋	室町	16C 前半（AMS 法）

第 13 表　下瑞光寺地区（１区）溝一覧表

遺構番号	長さ（ｍ）	幅（cm）	標高差（cm）	出土遺物	時代	備　　考
SD201	1.26	34	9	土師器皿	中世	SD202 の南側延長上にあり、方向が一致する
SD202	1.29	15	13	土師器杯	室町	SD201 の北側延長上にあり、方向が一致する
SD203	16.92	69	50	土師器皿・杯、瓦質土器鍋・足鍋、銅銭、木製品	室町	SD207 を切る　SX204 と接する
SD204	2.58	36	6	－	－	西端 SX202 と接する
SD205	2.67	28	5	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	
SD206	2.81	38	28	土師器皿・杯、瓦質土器擂鉢	室町	
SD207	32.77	96	80	土師器皿・杯、瓦質土器羽釜	室町	西端 SD203 に切られて終息　東端調査区外へ伸びる
SD208	4.05	48	12	土師器皿	中世	
SD209	3.54	30	4	青磁椀	室町	SD210 に近く、規模・方向に共通性を認める
SD210	3.63	40	4	土師器皿、瓦質土器擂鉢	室町	SD209 に近く、規模・方向に共通性を認める
SD211	2.09	45	9	土師器皿	中世	
SD212	13.00	45	9	瓦質土器鍋・大甕	室町	東端削平により終息
SD213	1.08	28	20	－	－	
SD214	7.86	72	17	瓦質土器大甕・鍋	室町	東端調査区外へ伸びる
SD215	5.03	32	38	－	－	

第 14 表　下瑞光寺地区（１区）性格不明遺構一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SX201	不整形	－	420	310	12	土師器杯	室町	SK230 と接する
SX202	不整形	－	292	250	38	土師器皿、瓦質土器鍋・把手付鍋	室町	SD204 と接する
SX203	不整形	－	138	最大 95	10	土師器皿	室町	西端 SX219 と接する　東端削平により不明
SX204	不整形	－	426	210	16	土師器皿・杯、瓦質土器擂鉢	室町	西端 SD203 と接する
SX205	楕円形	N82°　E	208	167	25	土師器杯、瓦質土器鍋	室町	
SX207	不整形	－	145	90	48	土師器皿・杯	室町	
SX208	長方形	N6°　W	146	80	14	土師器甕、炭化材	古墳	６Ｃ中頃（AMS 法）
SX209	不整形	－	327	180	29	土師器皿、瓦質土器足鍋	室町	南端削平により不明

４　古代以前の遺物

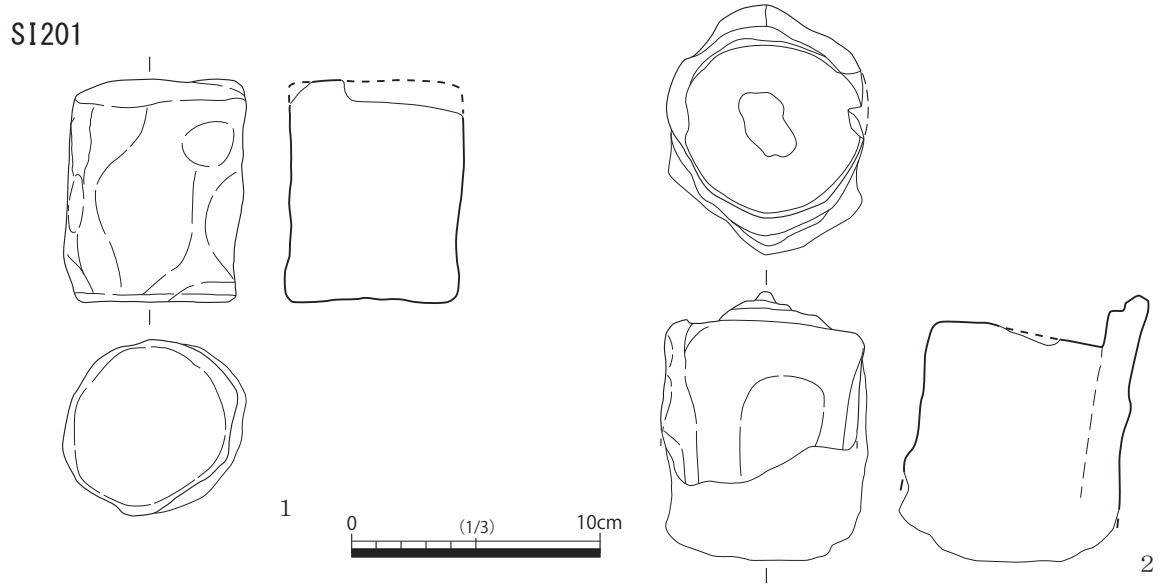
調査の結果、出土した遺物は室町時代のものが最も多く、次いで古墳時代であった。その他にも、縄文時代や弥生時代の遺物も出土した。遺物の種類は、土師器・須恵器・瓦質土器・土師質土器・輸入陶磁器・国産陶器・土製品・石器・石製品・金属製品・木製品など多種多様である。なお、各遺物の法量や調整、特徴については、遺物観察一覧表に掲載している。

（１）竪穴建物出土遺物（第 39 図　図版 19）

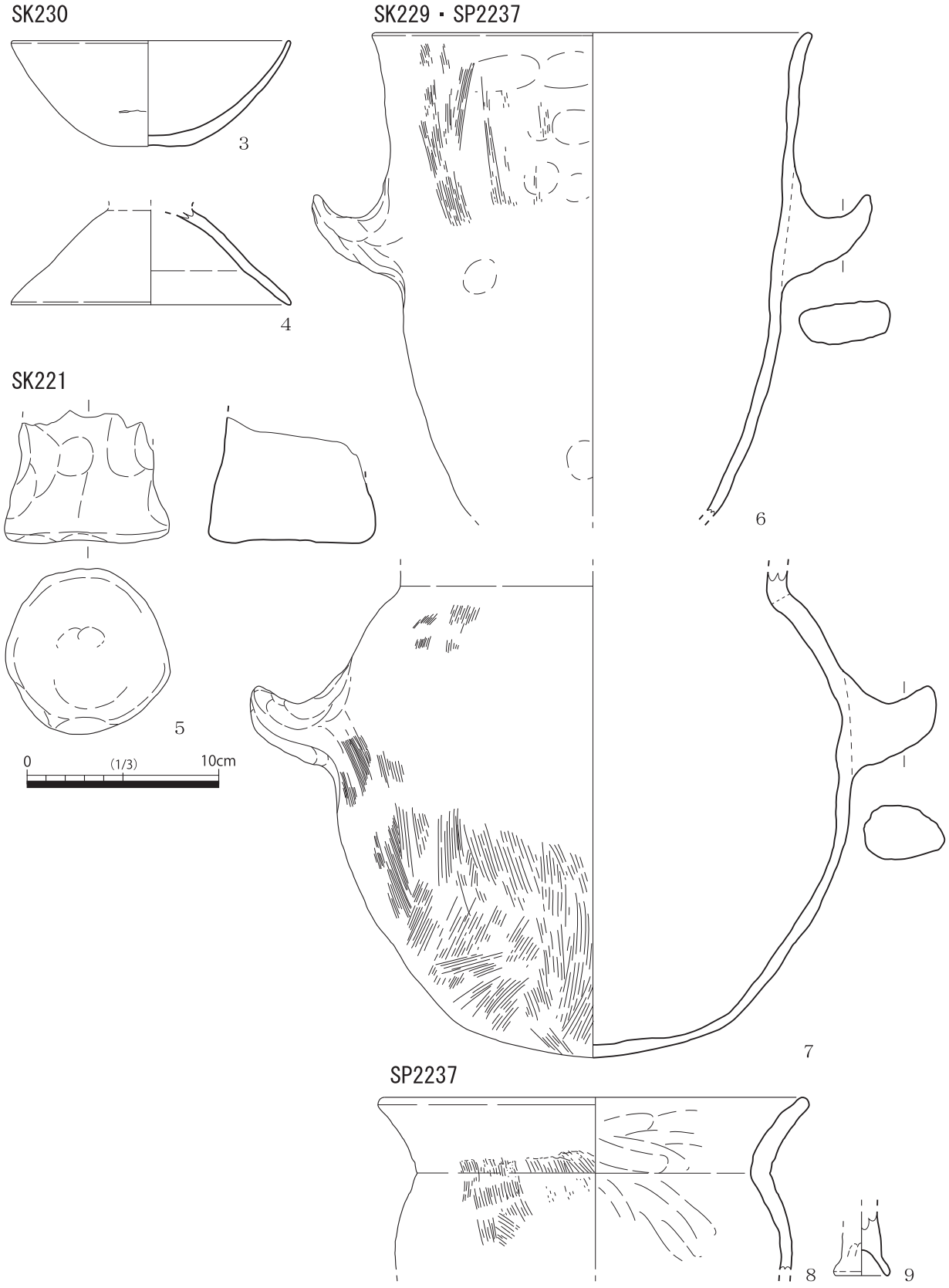
１・２は SI201 から出土した土製品である。どちらもカマド内の燃焼部から出土した支脚で、粘土を固め手捏ねで成形した簡素なものである。表面は、被熱により焼け締まっているがもろい。検出時は１が上、２が下の２段重ねの状態で出土した。カマドに設置する甕の大きさによって着脱が可能になっている。２の片側には、座りをよくするための粘土が貼り足されており、２段重ねの利用頻度が高かったことをうかがわせる。高温の熱を受けにくい２の下位ほど焼け締りが弱いため、器面の剥落が著しい。

（２）土坑・柱穴出土遺物（第 40・41 図　図版 19）

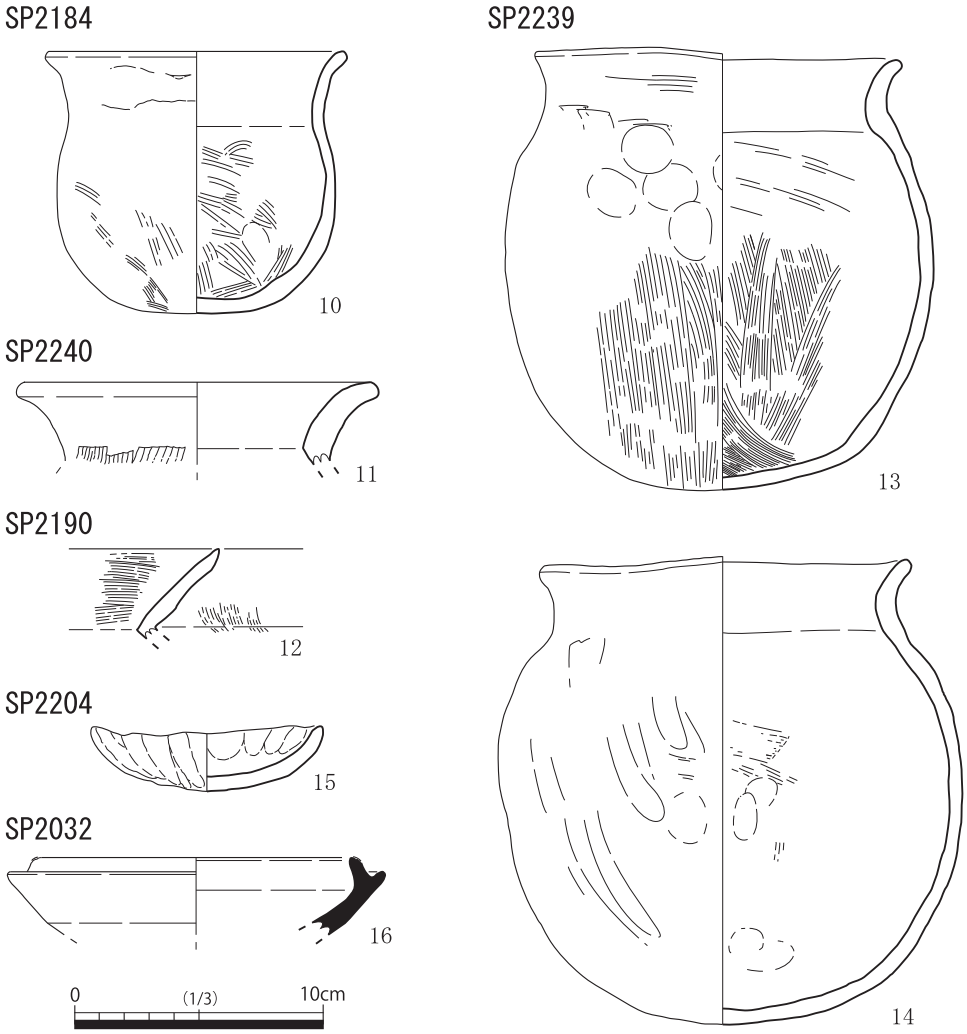
３・４は SK230 から出土した土師器である。３は鉢で、内外面を丁寧に整形しており、均整のとれた形をしている。古墳時代前期のものと考える。４は高坏の脚部片で杯部は欠失する。脚部は直線的に大きくハの字に開き、端部は尖り気味に終わる。５は SK221 から出土した土製支脚である。手捏ねによる成形で上半部は欠失する。６・７は隣接する SK229 と SP2237 から出土した土器片が接合し復元した土師器である。６は甑で外面中位よりやや上方に扁平で幅広の把手がつく。７は最大径を測る胴部にやや扁平の把手のつく甕である。口縁部は欠失する。８・９は SP2237 から出土した土師器で、８は甕で、器壁は厚く、口縁部は屈曲して開き若干外反する。９は美濃ヶ浜式製塩土器の脚部片である。10 は SP2184 から出土した平底に近い小型の甕である。胴部の張りは弱く、頸部は直立気味に上方に伸び緩やかに外反する。11 は SP2240 から出土した甕の口縁部片である。外反度が強く、器壁は厚い。12 は SP2190 から出土した甕の口縁部片で、口縁は直線的に開き尖り気味に終わる。13･14 は SP2239 から出土した丸底の甕で、大きさや器形は共通する。頸部の屈曲は弱く、



第 39 図　竪穴建物出土遺物実測図



第 40 図　土坑・柱穴出土遺物実測図



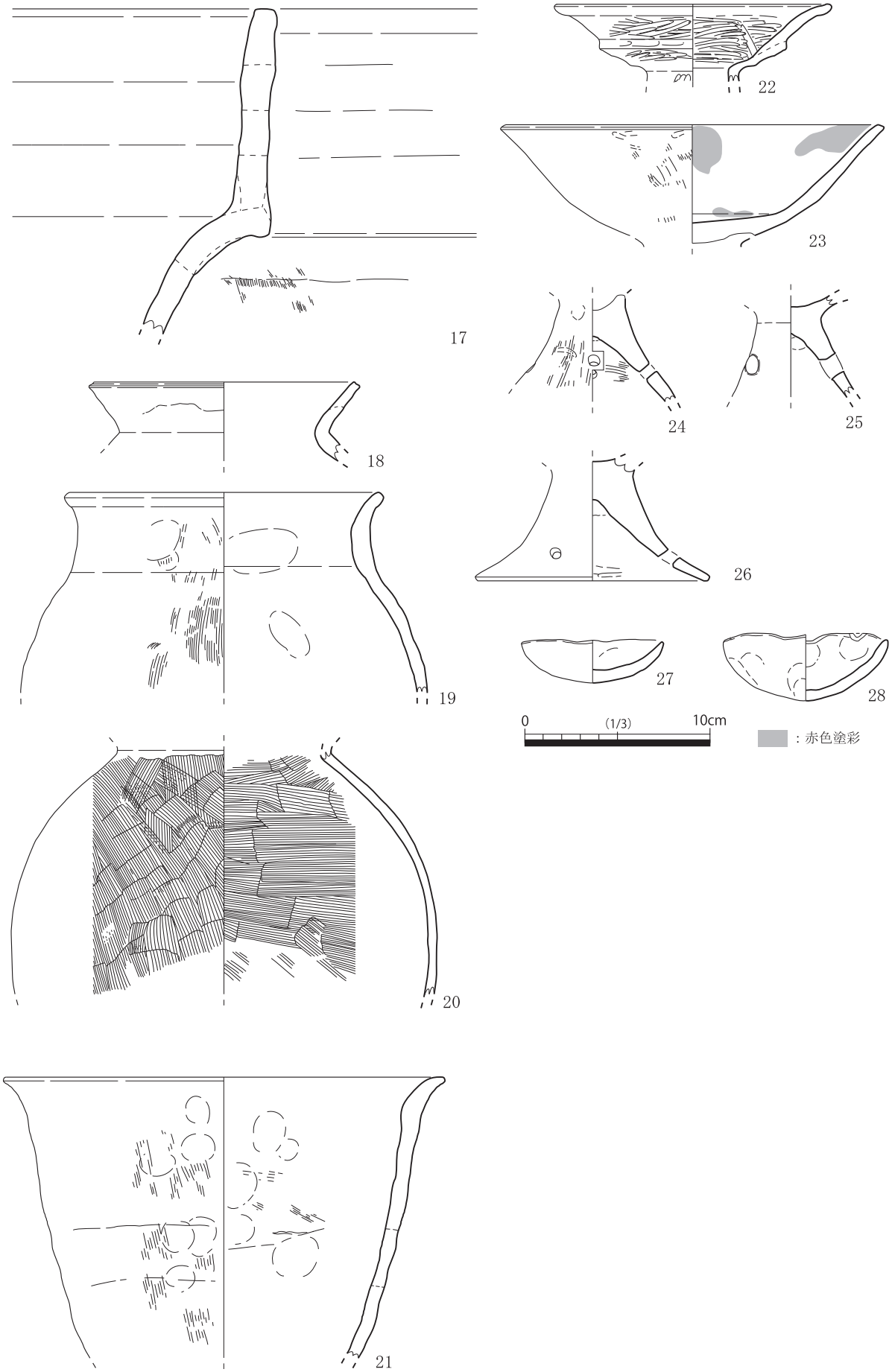
第 41 図　柱穴出土遺物実測図

上方に伸びた後短く外反する。煎熬用の製塩土器の可能性がある。15 は SP2204 から出土した手捏ねの鉢で、指頭圧痕や指ナデ痕が顕著に残る。16 は SP2032 から出土した須恵器杯身である。

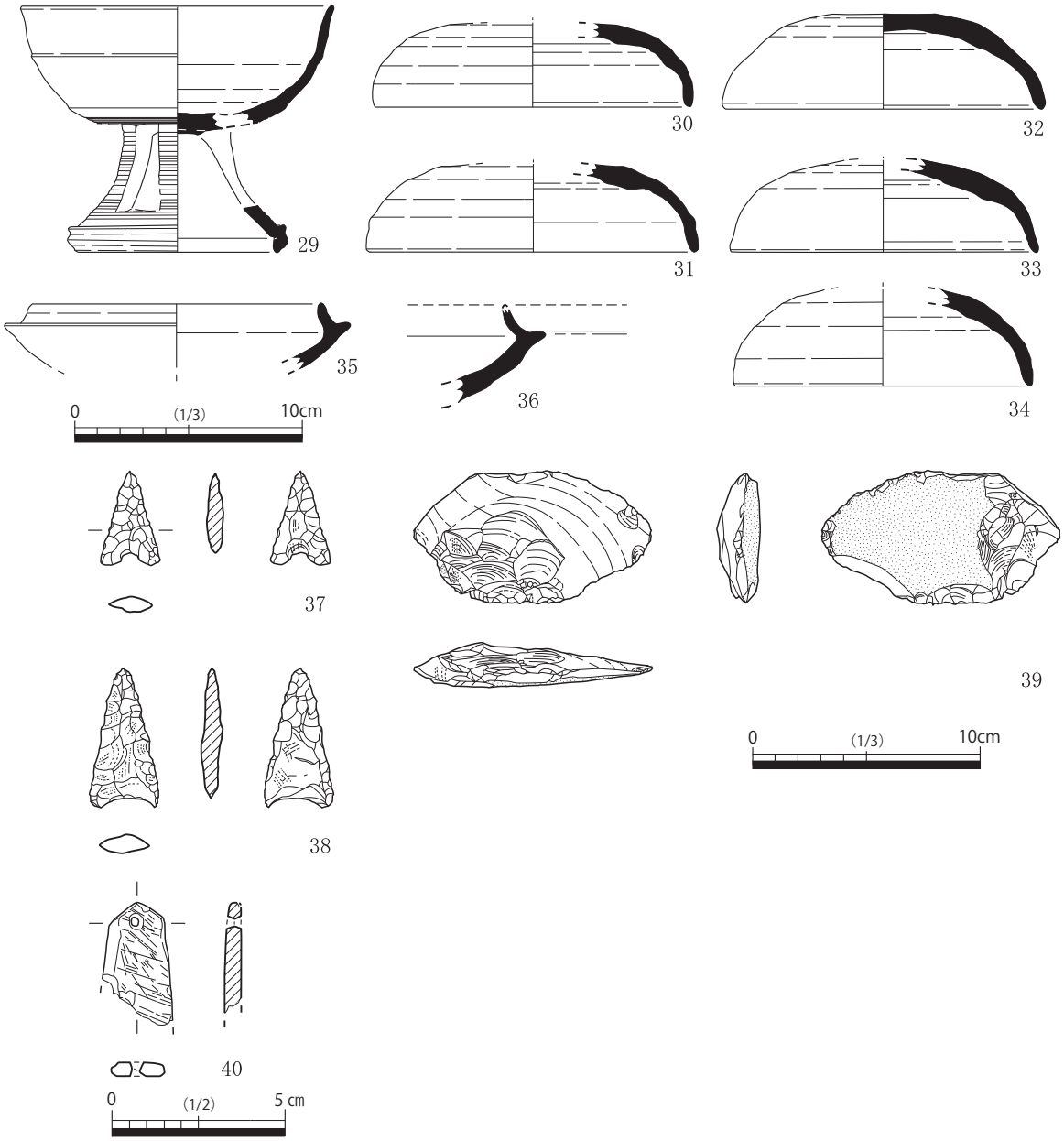
（３）遺構に伴わない遺物（第 42・43 図　図版 20）

17 ～ 36 は遺物包含層から出土した土器である。17 は弥生時代終末期の大型の壺で、複合口縁をもつ。口縁はほぼ直立する。18 ～ 28 は土師器である。18 ～ 20 は甕で、18 は頸部の屈曲後直線的に開き、口縁部外面に面をもち凹線が巡る。19 は頸部の屈曲は弱く、上方に伸びた後短く外反する。20 は扁球形の胴部片で、口縁および底部は欠失する。内外面にハケ目調整の痕が顕著に残る。21 は甑で把手は確認できなかった。口縁は内面が若干肥厚し、短く外反して開く。粘土帯の積上げ痕が残る。22 は山陰系の器台の受部で、下半分は欠失する。内外面に丁寧なミガキを施す。口縁への立ち上がりの境に強い稜をもち外反して開く。23 ～ 26 は高杯である。23 は杯部片で、接合方法は充填法である。口縁部と底部の境に明瞭な稜をもたずに直線的に開く。口縁端部外面に面をもつ。杯部内面に赤色塗彩を施す。24 ～ 26 は脚部片で、24 には４方向に、25・26 には３方向に円形の透かしがつく。26 は外面に赤色塗彩を施す。27・28 はミニチュア土器の鉢で、内外面に指頭圧痕や指ナデ痕が残る。丸底で器壁は厚く、口縁部は尖り気味に終わる。29 ～ 36 は須恵器で時期は６世後半から７世紀初頭までに収まる。29 は高杯で、脚部の３方向に方形の透かしをもつ。脚部外面はカキ

遺物包含層



第 42 図　遺構に伴わない遺物実測図（１）



第 43 図　遺構に伴わない遺物実測図（２）

目調整を施し、裾部の広がりはあまり強くない。30 ～ 34 は杯蓋で天井部外面は回転ヘラ削りを施す。35・36 は杯身である。

37 ～ 40 は石器および石製品である。37・38 は凹基式の石鏃で、石材は安山岩と玄武岩である。38 の方がひと回り大きく、整形は 37 の方が丁寧である。39 は大型品のスクレイパーで、石材は姫島産黒曜石である。40 は滑石製模造品で、上端部に穿孔がある。盾または斧を模したものと思われるが下端部欠失のため不明である。

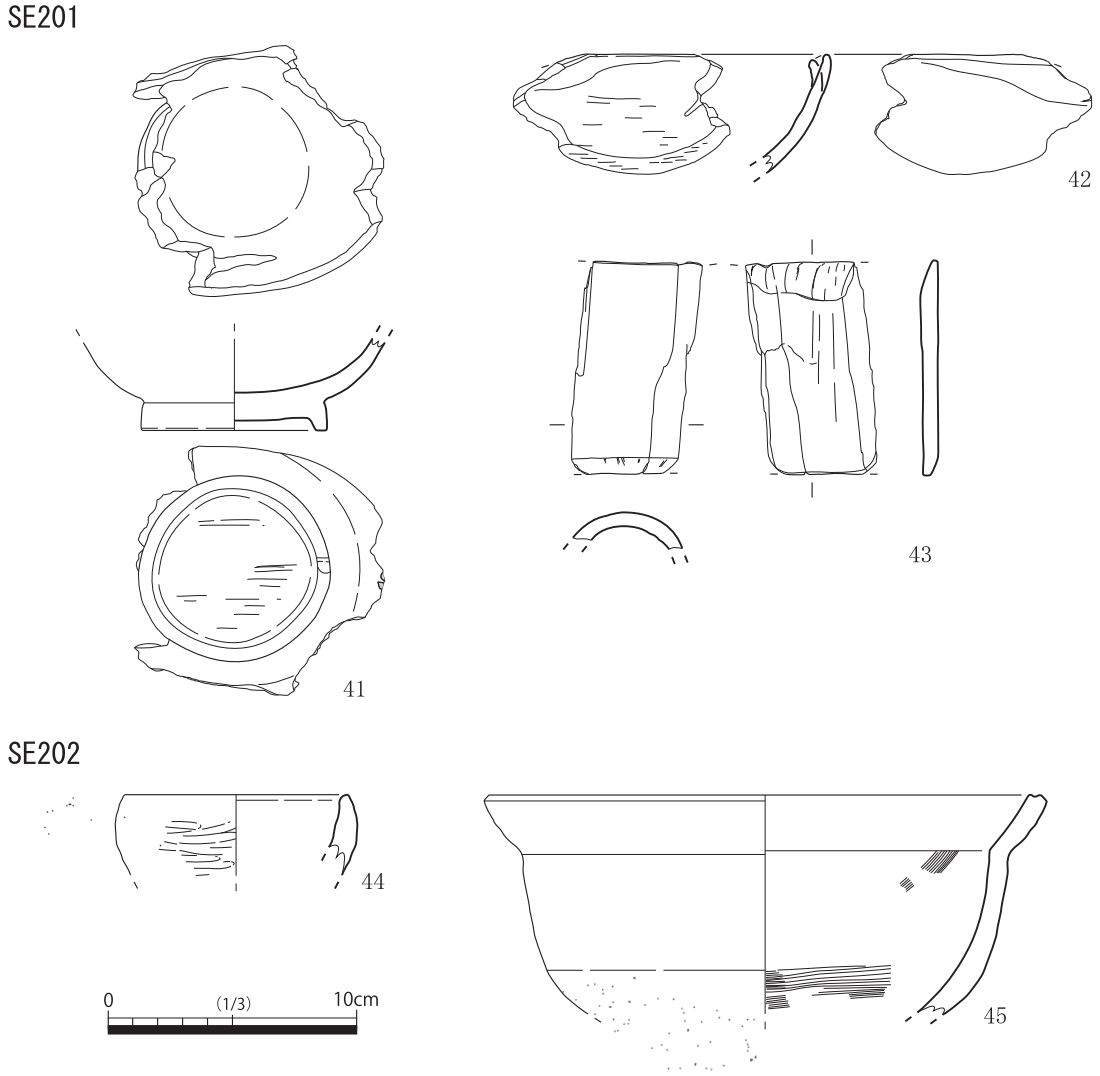
５　中世の遺物

（１）井戸出土遺物（第 44 図　図版 21）

41 ～ 45 は井戸から出土した遺物である。41・42 は漆器椀で、塗りの形態は内外総黒である。41 の底部は輪状の削り出し高台で、体部上位を欠失する。42 は口縁部片で体部下位を欠失する。両者は同一個体の可能性がある。43 は円筒状の竹製品で、端部の一方は外側からもう一方は内側から削りの加工痕がある。用途は不明だが、継手や釣瓶に関連する部材の可能性もある。44・45 は SE202 から出土した瓦質土器である。44 は小型の鉢で、外面はミガキで仕上げる。口縁部外面に菊花のスタンプを押捺する。45 は鍋で全体的に器壁は厚く、口縁端部外面に弱い段を持つ。外面には多量の煤が付着し、下位にはタタキによる整形を施す。口縁の型式が岩崎編年ⅥＡ型式古段階に該当する。

（２）土坑出土遺物（第 45 ～ 47 図　図版 21・22）

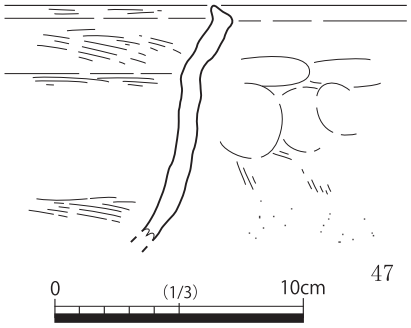
46 ～ 52 は SK202 から一括で出土した瓦質土器鍋、および足鍋である。内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後、ナデで消している。指頭圧痕が顕著に残る。47・48・51・52 は、下位にタタキによる整形を施す。46 ～ 50 は口縁の端部を屈曲させる岩崎編年Ⅳ型式に該当し、48 ～ 50 が端部外面に段をもつ。51・52 は口縁の屈曲が失われた岩崎編年ⅥＢ型式に該当する。異なる型式の鍋が一括



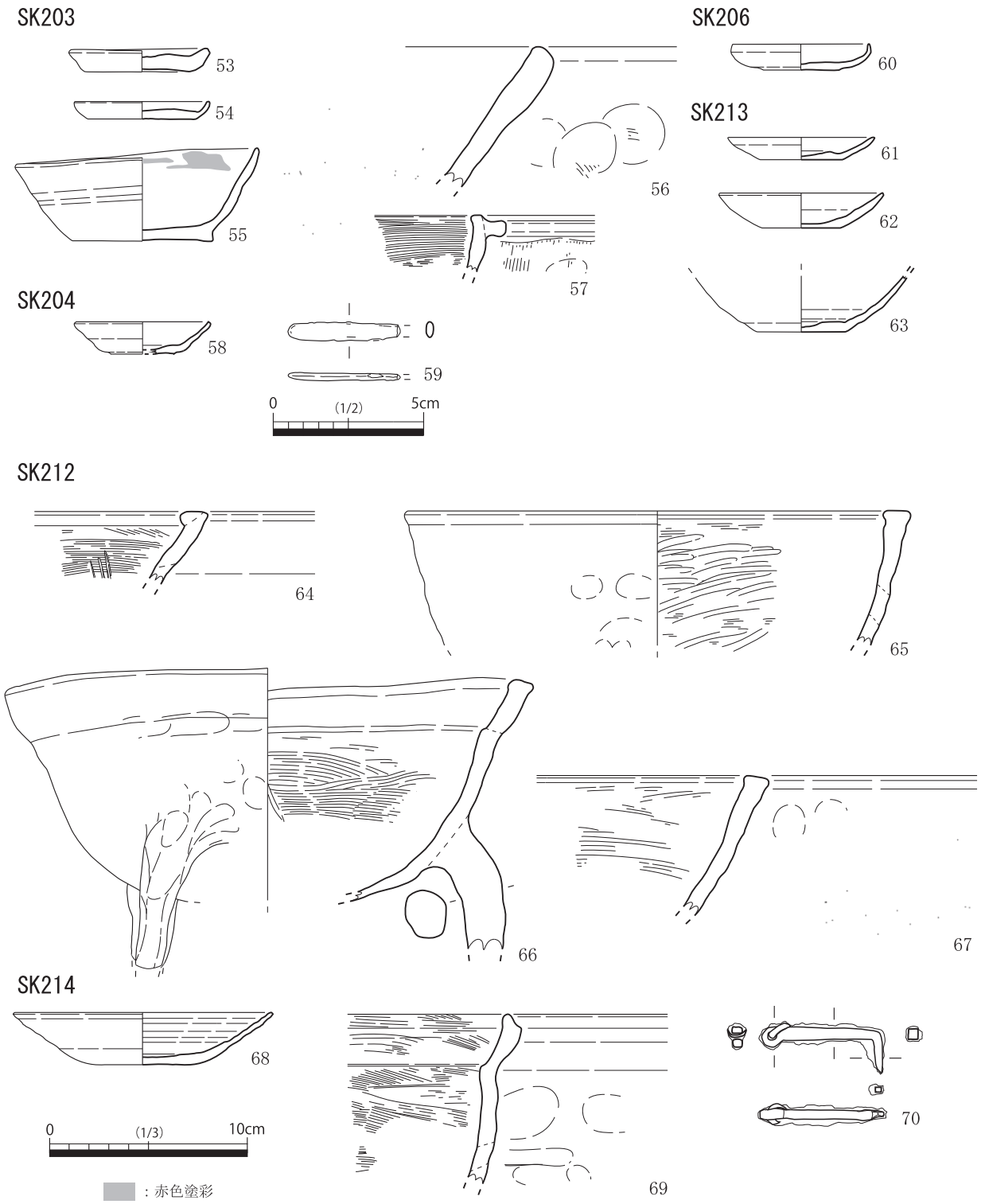
第 44 図　井戸出土遺物実測図

SK202

第 45 図　土坑出土遺物実測図（１）

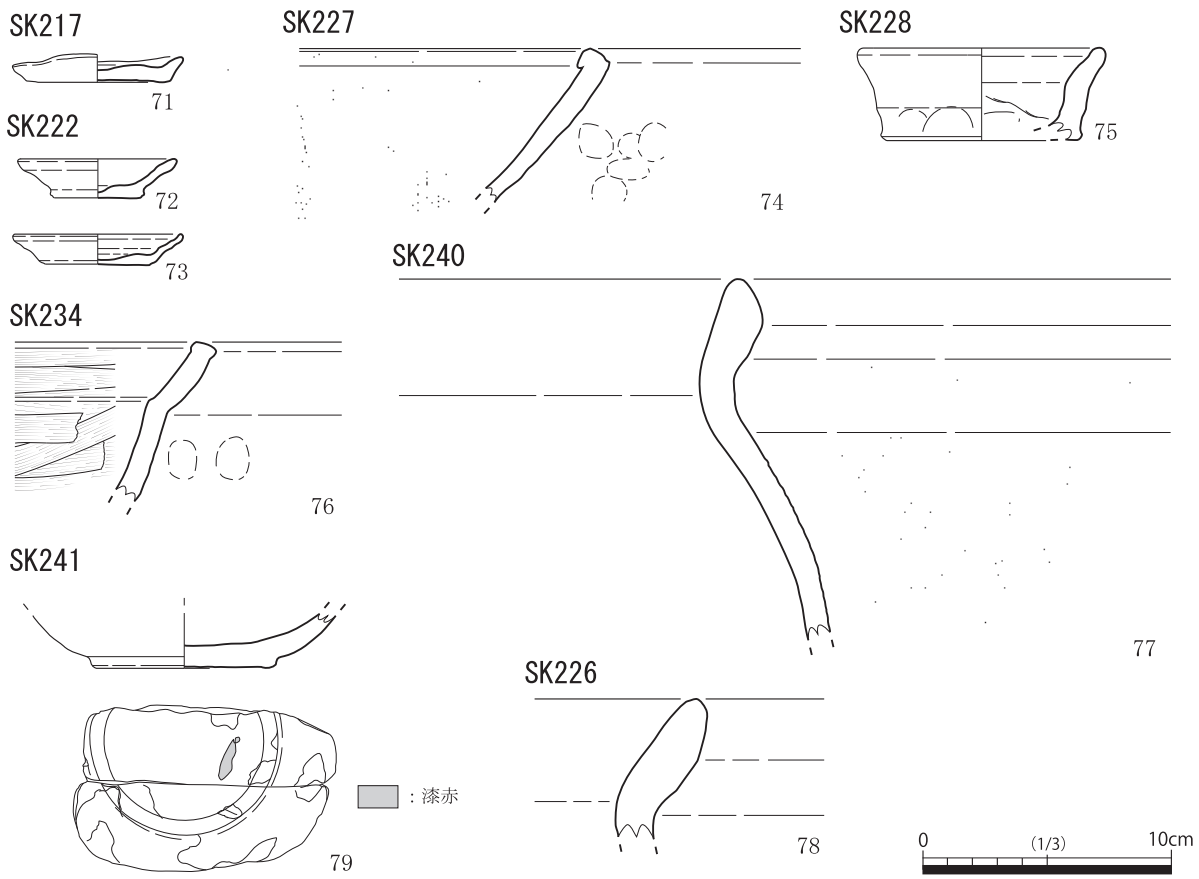


で出土していることから、遺物の時期は、互いの共存している 16 世紀前半と考える。53 ～ 57 は SK203 から出土した土器である。53・54 は土師器皿で、55 は杯である。55 の内面には赤色塗彩を施す。56 は土師質土器擂鉢で器壁は厚い。57 は瓦質土器羽釜で、外面口縁部には貼付けの鍔が巡る。58・59 は SK204 からの出土遺物で、58 は土師器皿、59 は銅製笄である。60 は SK206 から出土した土師器皿で、器壁は薄く口縁は内側に屈曲し尖り気味に終わる。61 ～ 63 は SK213 から出土した土師器皿で、61 と 63 は外面に赤色塗彩を施す。64 ～ 67 は SK212 から出土した瓦質土器である。64 は擂鉢で口縁部は内側を折り返す。オロシ目の単位は３条。65 は鉢で、内面はミガキを施す。66 は足鍋で内面ハケ目調整、外面ハケ目をナデで消している。67 は鍋で、外面下位はタタキ整形を施す。66 ～ 67 の口縁はわずかな突起をもつなど共通しており、岩崎編年Ⅵ B 型式に該当する。68 ～ 70 は SK214 から出土した遺物で、68 は土師器皿である。69 は瓦質土器鍋で、内面ハケ目調整、外面はハケ目をナデで消している。岩崎編年Ⅳ型式に該当する。70 は鉄製鋏の一種で、片方のみ屈折



第 46 図　土坑出土遺物実測図（２）

する。もう一方には直径６㎜の孔があり、遊輪の金具が付随する。用途は不明である。71 は SK217 から出土した土師器皿で、器壁は厚く歪みがあり、器高は低い。72・73 は SK222 から出土した土師器皿で、72 には外面底部に回転糸切り後の板目痕が残る。74 は SK227 から出土した瓦質土器擂鉢で口縁部は内側を折り返す。オロシ目の単位は８条である。75 は SK228 から出土した瓦質土器の小振りな鉢である。器壁は厚く、口縁部は外反して丸く終わる。外面底部に板目痕を確認する。76 は SK234 から出土した瓦質土器鍋で、内面ハケ目調整、外面ハケ目をナデで消している。口縁の形状は、岩崎編年ⅥＢ型式に該当する。77 は SK240 から出土した瓦質土器大甕で、口縁部は外面が肥厚する。



第 47 図　土坑出土遺物実測図（３）

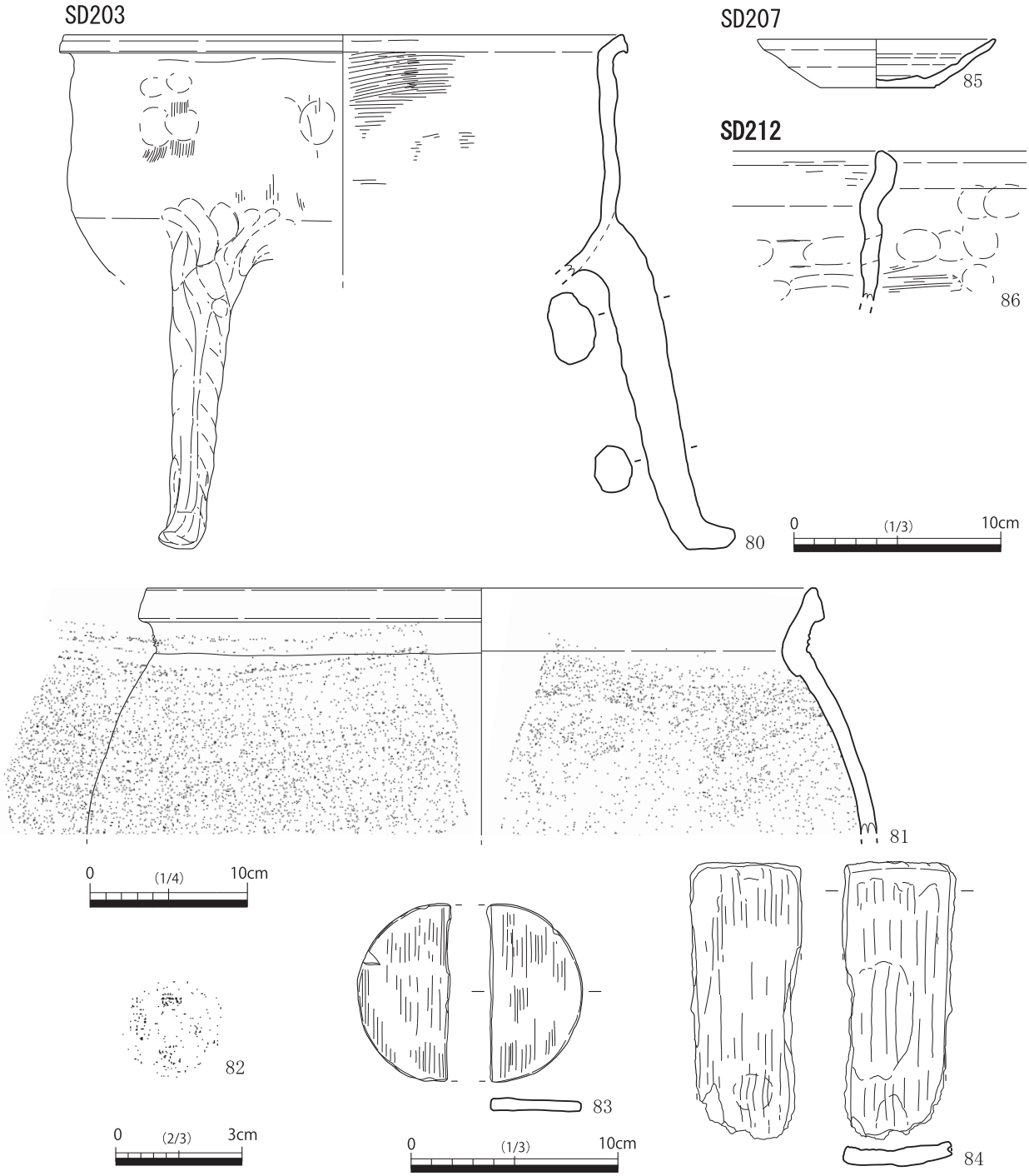
外面に格子目タタキ整形を施す。78 は SK226 から出土した瓦質土器大甕である。内外面とも器面の剥落が著しく、調整不明である。79 は SK241 から出土した漆器椀である。塗りの形態は内外総黒で、外面高台内に朱漆による銘または記号の一部を確認する。底部は輪状に高台を削り出すが、摩滅が著しい。体部上位は欠失する。

（３）溝出土遺物（第 48 図　図版 23）

80 ～ 84 は SD203 から出土した遺物である。80 は瓦質土器足鍋で付随する脚部は長く、端部は獣脚状に屈曲し外側に伸びる。内面ハケ目調整、外面ハケ目をナデで消している。口縁部は、屈折して開き、外面に面をもち短く終わる。口縁の型式は岩崎編年Ⅱ型式に該当する。81 は瓦質土器大甕で、口縁部は外面を下方に拡張する。外面頸部直下から格子目タタキ整形を施し、内面には同心円状の当て具痕が顕著に残る。胴部の張りは比較的強い。82 は宋銭「咸平元寶」である。銹が著しく表面は緑青に覆われている。83 は円形で断面は板状をした木製品で、蓋もしくは底板の一部と考える。84 は円筒形木製品の側板である。85 は SD207 から出土した土師器皿で、底部からの立ち上がる内面に段をもつ。口縁は尖り気味に終わる。外面底部に回転糸切り後の板目痕が残る。86 は SD212 から出土した瓦質土器鍋である。内外面ハケ目調整後ナデで消している。口縁は上方に拡張する岩崎編年Ⅲ型式新段階に該当する。

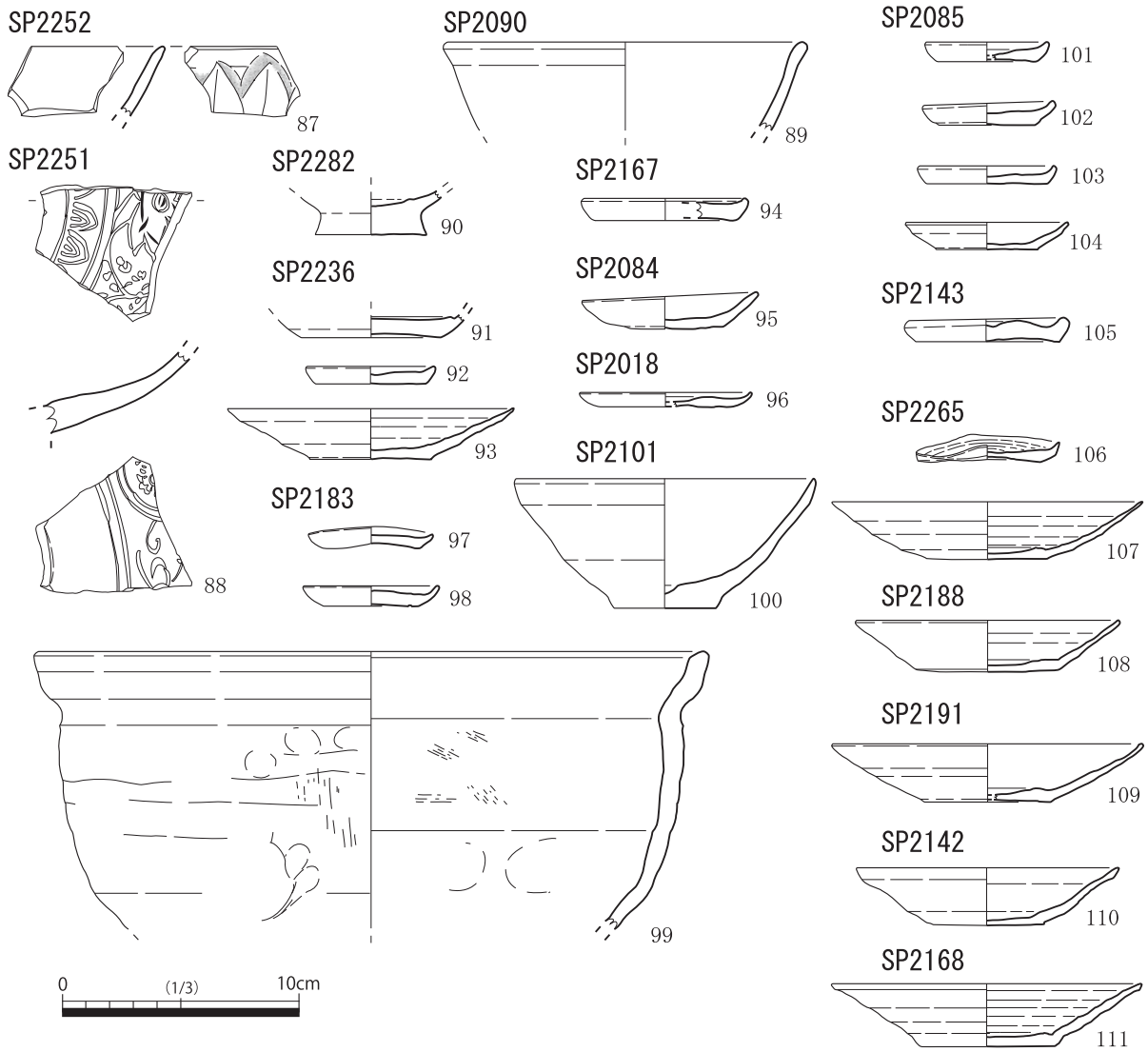
（４）柱穴出土遺物（第 49・50 図　図版 23 ～ 25）

87 は SP2252 から出土した青磁椀で、外面には鎬蓮弁文が巡る。龍泉窯産と考える。88 は高麗青磁鉢で、内外面に象嵌を施す。89 は青磁椀で、内外面に細かい貫入がみられる。90 は SP2282 から



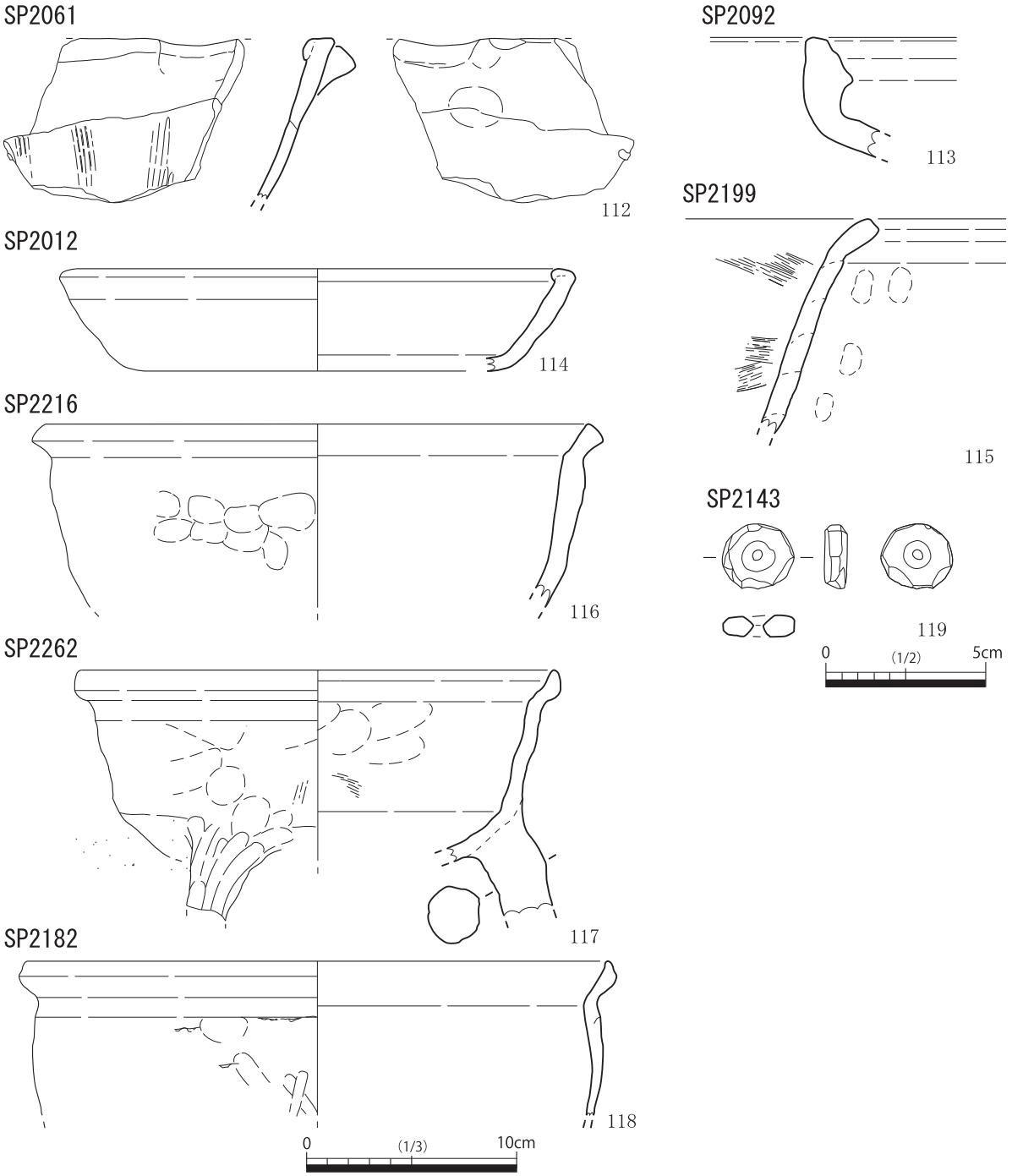
第 48 図　溝出土遺物実測図

出土した柱状高台付皿で、体部より上位は欠失する。91 ～ 93 は SP2236 から出土した遺物で、91 は白磁皿である。内外面施釉し、底部はやや上げ底。内面の底部との境に沈圏線が巡る。92 は土師器皿で、器壁は厚く、器高は低い。93 は土師器皿で、口縁は尖り気味に終わる。外面底部に回転糸切り後の板目痕が明瞭に残る。94 は SP2167 から出土した土師器皿で、器壁は厚く底部内面と口縁の高さにほとんど差がない。95 は SP2084 から出土した土師器皿で、北島編年大内Ⅲ B 式に該当する（北島 2010）。96 は SP2018 から出土した土師器皿で、口径に対して器高は低い。97 ～ 99 は SP2183 からの出土遺物で、97・98 は土師器皿、99 は瓦質土器足鍋である。口縁を外方に拡張する岩崎編年Ⅵ新型式に該当する。100 は SP2101 から出土した土師器杯で、器壁は厚く、高台付椀が消滅した時期



第 49 図　柱穴出土遺物実測図（１）

のものと考える。101 ～ 104 は SP2085 から出土した土師器皿で、102 には外面底部に板目痕が残る。105 は SP2143 から出土した厚手の土師器皿で、北島編年大内Ⅰ式と同時期のものと考える。106・107 は SP2265 から出土した土師器皿で、106 は焼き歪みが顕著である。107 は北島編年大内ⅢＡ１式に該当する。108 は SP2188、109 は SP2191、110 は SP2142 から出土した土師器皿で、外面底部に板目痕が残る。108 は北島編年大内ⅣＢ１式に、109 は大内ⅡＡ式に、110 は大内ⅣＡ１式に該当する。111 は SP2168 から出土した土師器皿で、内外面に煤が付着する。112 は SP2061 から出土した片口をもつ瓦質土器擂鉢で、口縁部内側を折り返す。オロシ目単位は５条である。113 は SP2092 から出土した瓦質土器甕で、口縁外面が肥厚する。外面は格子目タタキ整形を施す。114 は SP2012 から出土した瓦質土器焙烙で、口縁部は内面を折り返す。115 は SP2199 から出土した土師質土器鍋で、内面ハケ目調整、外面ハケ目をナデで消している。口縁外面に面をもち、型式は岩崎編年Ⅱ型式に該当する。116 は瓦質土器鍋で、内外面ハケ目をナデで丁寧に消している。口縁の拡張傾向の弱い岩崎編年Ⅲ型式古段階に該当する。117 は SP2262 から出土した瓦質土器足鍋で、内外面ハケ目をナデで消している。外面下位はタタキ整形を施す。口縁の形は岩崎編年Ⅲ型式新段階に該当する。118 は SP2182 から出土したやや大型の瓦質土器鍋である。口縁の形は岩崎編年Ⅲ型式新段階に該当する。

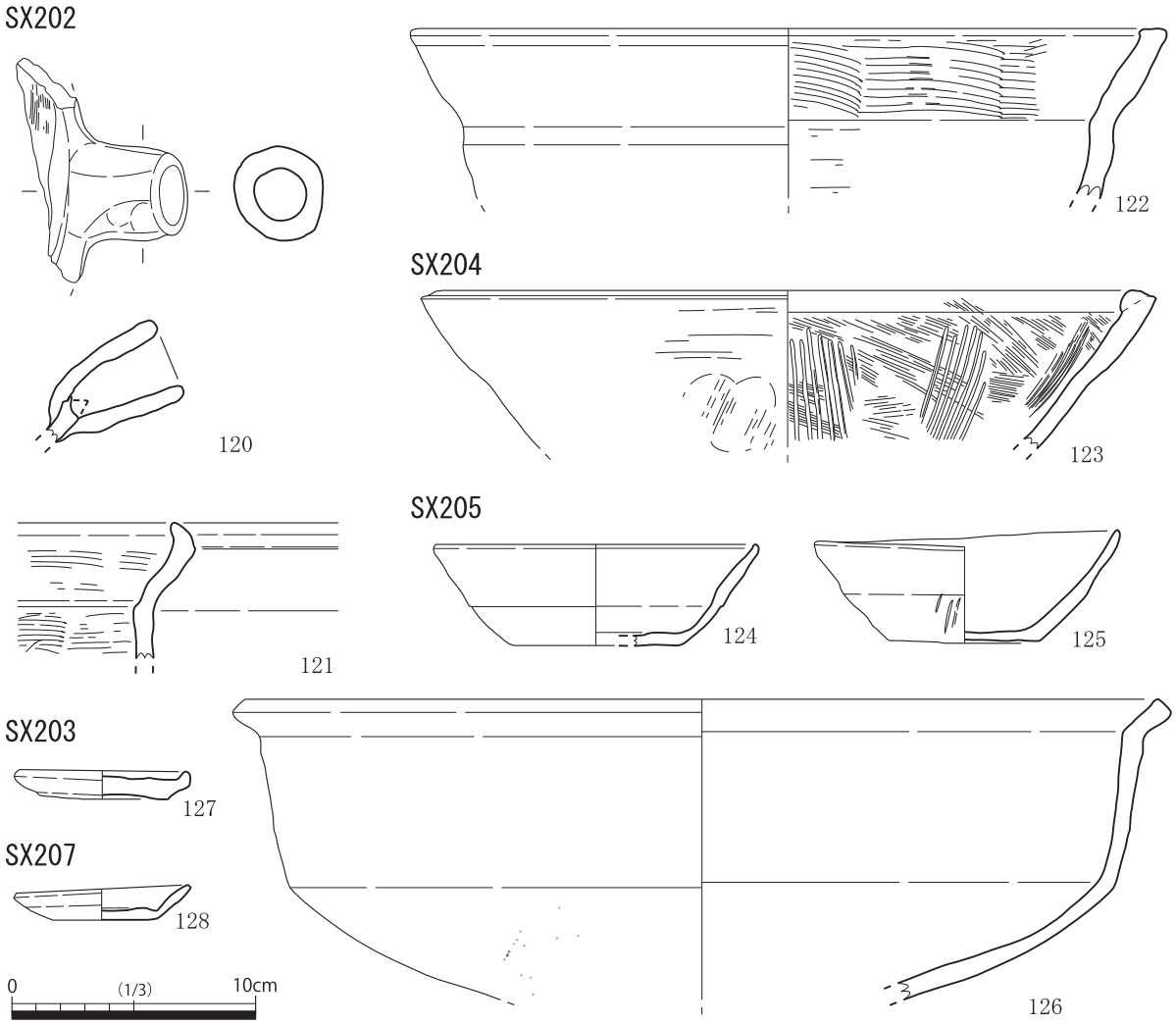


第 50 図　柱穴出土遺物実測図（２）

119 は SP2143 から出土した石製有孔円盤である。中央に両面からの穿孔があり、石材は花崗岩である。

（５）性格不明遺構出土遺物（第 51 図　図版 25）

120 ～ 122 は SX202 から出土した瓦質土器鍋である。120 は鍋の把手で、長さ 5 cm 程度と短く、断面形は円形である。口縁の型式は 121 が岩崎編年Ⅳ型式に、122 がⅥB 型式に該当する。123 は SX204 から出土した瓦質土器擂鉢で、口縁部内面を折り返す。オロシ目単位は 7 条である。124 ～ 126 は SX205 からの出土遺物で、124・125 は土師器杯である。断面は厚手で、高台付椀が消滅した時期のものと考える。126 は大型の土師質土器鍋である。胴部中位と下位の境で大きく屈曲し、それより下位にタタキ整形を施す。口縁の型式は岩崎編年Ⅱ型式に該当する。127 は SX203 から出土

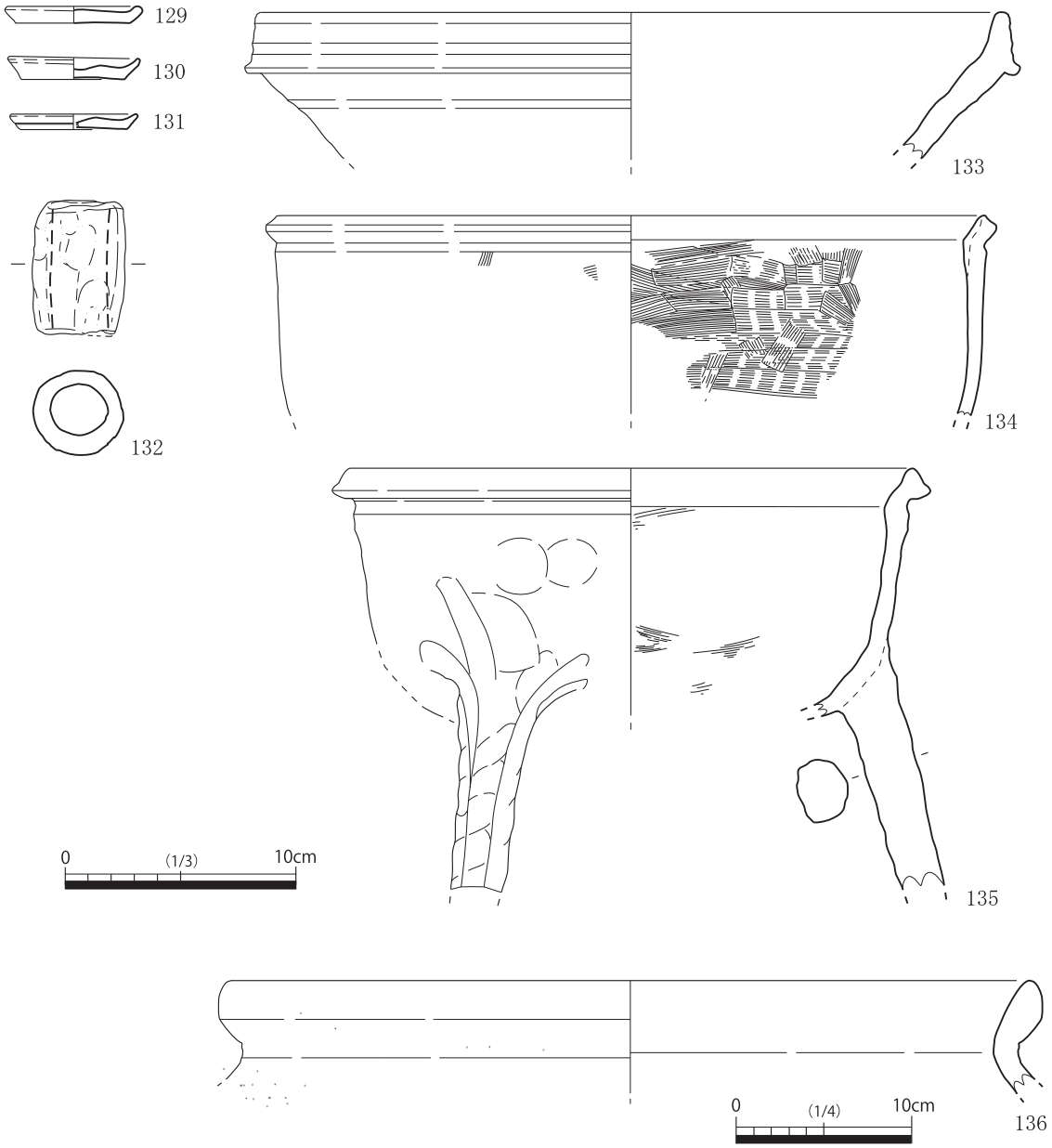


第 51 図　性格不明遺構出土遺物実測図

した厚手の土師器皿で、北島編年大内Ⅰ式と同時期のものと考える。128 は SX207 から出土した土師器皿で、外面底部に板目痕が残る。北島編年大内ⅢＡ１式に該当する。

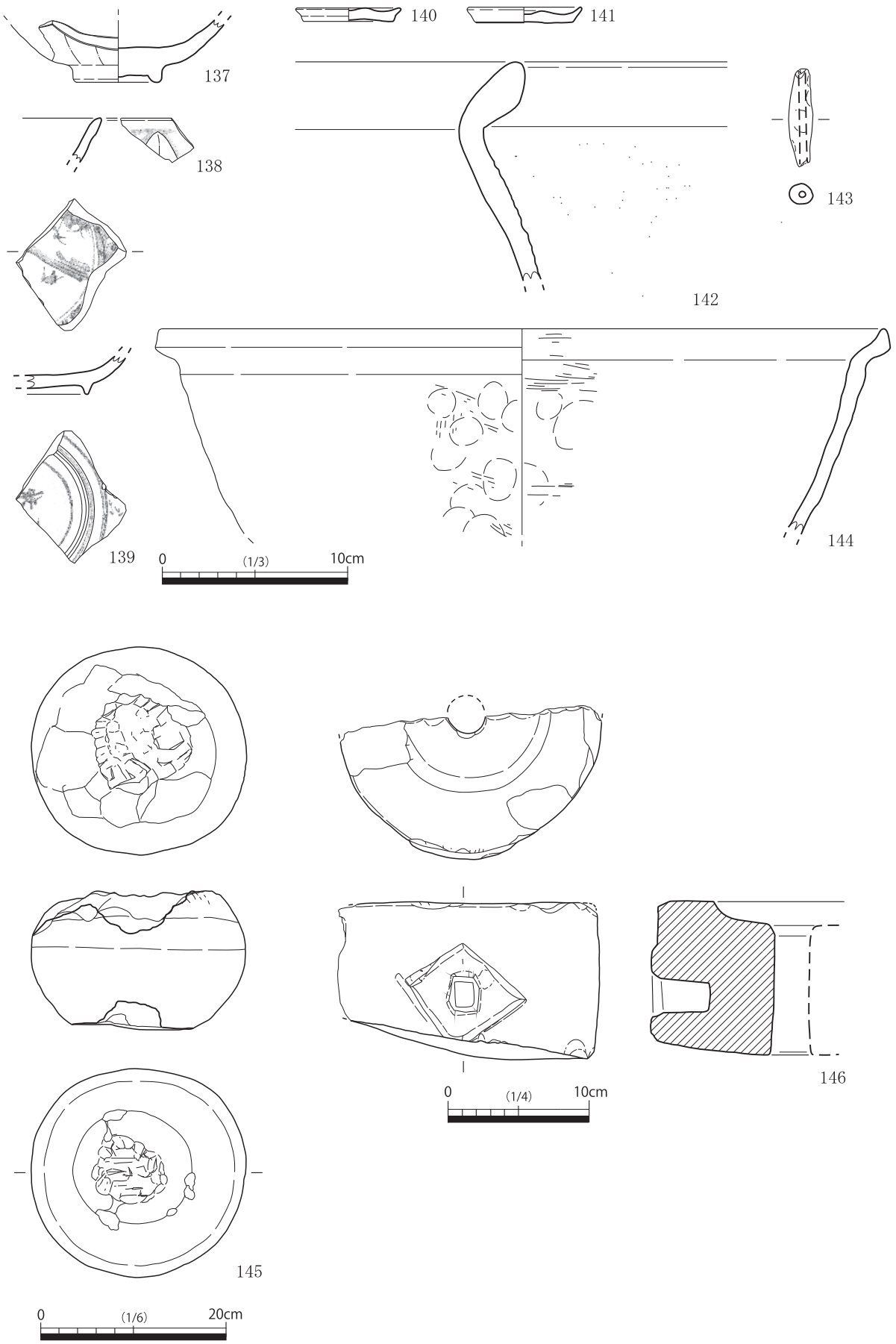
（６）遺構に伴わない遺物（第 52・53 図　図版 25・26）

129 ～ 131 は土師器皿で、断面は厚手である。129 は北島編年大内Ⅰ式と同時期のものと考える。130・131 は北島編年大内ⅣＡ２式に該当する。132 は大型の管状土錘である。外面に指頭圧痕が残る。133 は備前焼擂鉢で、口縁を上方と下方に拡張する。134 は瓦質土器鍋で、内面はハケ目調整、外面はハケ目をナデで消している。口縁の型式は岩崎編年Ⅱ型式に該当する。135 は瓦質土器足鍋で、内外面ハケ目をナデで消している。脚は胴部との接合部分より屈曲せず直線的に伸びる。脚端部は欠失する。口縁の型式は岩崎編年Ⅲ型式古段階に該当する。136 は瓦質土器大甕の口縁部片である。口縁は屈曲して開き、外面が肥厚し玉縁状を呈する。外面は格子目タタキ整形を施す。137・138 は青磁椀である。137 は底部片で、底部は削り出し高台で、高台内は無釉である。鎬は確認されるが口縁部欠失のため、蓮弁文の有無は不明である。138 は鎬蓮弁文の口縁部片である。139 は青花皿で、畳付を除く内外面に施釉し、花卉文を施す。140・141 は土師器皿である。底部の断面は厚く、口縁は尖り気味に短く終わる。142 は瓦質土器大甕で、口縁は屈曲して開き、外面が肥厚し玉縁状を呈する。



第 52 図　遺構に伴わない遺物実測図（１）

外面頸部より下は格子目タタキ整形を施す。143 は管状土錘で、外面に指頭圧痕が残る。144 は大型の瓦質土器鍋である。内外面ハケ目をナデで消している。口縁の形は岩崎編年Ⅲ型式古段階に該当する。145 は五輪塔水輪である。石材は安山岩で、上面および下面は大きく窪み、鑿による加工痕を残す。146 は茶臼の上臼で、石材は角閃石安山岩である。芯棒受断面は貫通型で、供給口と共用する。使用による摩損の偏りが著しく、下面の刻み目は確認できない。挽き木は横打ち込みタイプで、1 段の菱形台座文様を施す。



第 53 図　遺構に伴わない遺物実測図（２）

第 15 表　下瑞光寺地区（１区）出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）	胎土	焼成	色調	主な調整（内）（外）	備考
1	39	19	SI201	土製品	支脚	－	8.8	径 6.6～7.2	やや粗	やや良	外面：浅黄橙色 10YR8/4	指オサエ、ナデ	支脚２段重ねの上方 円筒型支脚
2	39	19	SI201	土製品	支脚	－	10.5	径 7.0 か	やや粗	やや良	内外面：浅黄橙色 10YR8/4	指オサエ、ナデ	支脚２段重ねの下方　重ねやすいよう粘土を貼り付けて補強する 円筒型支脚
3	40	19	SK230	土師器	鉢	(14.4)	5.4	4.0	粗	やや良	内面：にぶい橙 7.5YR7/4 外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	ミガキか ヨコナデ	内面摩滅
4	40	19	SK230	土師器	高杯	－	[4.9]	(7.4)	やや良	やや良	内外面：橙色 2.5YR6/6	ヨコナデ ヨコナデ	内外面ともに赤変
5	40	19	SK221	土製品	支脚	－	[6.9]	8.5	やや粗	やや良	外面：にぶい橙 7.5YR7/4	ナデ、指オサエ	上半部欠失　外面底部上底風
6	40	19	SK229・SP2237	土師器	甑	(22.6)	24.9	－	やや良	良	内面：橙色 5YR7/6 外面：にぶい橙 7.5YR7/4	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	胴部中位に扁平の把手が付く　口縁はやや外反気味に開く
7	40	19	SK229・SP2237	土師器	把手付甕	－	[25.1]	(13.0)	やや良	良	内面：にぶい橙 7.5YR7/3 外面：橙色 2.5YR6/6	上位ナデ、それ以外は不明 ハケ	器形の歪み大、把手は中位より上位に付く
8	40	19	SP2237	土師器	甕	(21.4)	[8.8]	－	やや良	良	内面：にぶい橙 7.5YR7/4 外面：浅黄橙色 7.5YR8/3	ナデ 口縁部ナデ、ハケ	口縁は屈曲に大きく開く　器壁はやや厚い
9	40	19	SP2237	土師器	製塩土器	－	[3.3]	(2.9)	粗	やや良	内外面：橙色 5YR6/6	ナデ ナデ	美濃ヶ浜式 上部欠失
10	41	19	SP2184	土師器	甕	(12.0)	10.4	－	粗	不良	内面：褐灰色 5YR5/1 外面：赤色 10Y5/6	ナデ、オサエ、ハケ ナデ、ハケ	被熱する
11	41	19	SP2240	土師器	甕	(14.4)	[3.3]	－	やや良	良	内外面：橙色 5YR6/6	ヨコナデ 口縁部ヨコナデ、頸部タテ方向のハケ	器壁厚い
12	41	19	SP2190	土師器	甕	－	[3.6]	－	やや良	良	内面：淡黄色 2.5Y8/2 外面：灰白色 2.5Y8/2	ハケ ハケ後ナデ	口縁端部尖り気味
13	41	19	SP2239	土師器	甕	14.3	17.4	1.3	やや良	良	内面：にぶい橙色 5YR6/4 外面：橙色 2.5YR6/8	上位ハケ後ナデ、中下位ハケ ハケ後指オサエ、ナデ	丸底　煎熬用製塩土器
14	41	19	SP2239	土師器	甕	14.5	18.6	1.2	やや良	良	内面：橙色 2.5YR6/6 外面：橙色 2.5YR6/8	ハケ後ナデ、指オサエ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	丸底　煎熬用製塩土器
15	41	19	SP2204	土師器	手捏ね鉢	9.2	2.6	－	やや良	良	内面：口縁 黄橙 10YR7/3 底部 黒色 10YR2/1 外面：にぶい黄橙 10YR7/3	口縁～体部指オサエ、底部ナデ 指ナデ	
16	41	19	SP2032	須恵器	杯身	－	[3.1]	受け部 15.0	精良	良	内外面：灰色 5Y6/1	回転ナデ 回転ナデ	
17	42	20	遺物包含層①	弥生土器	壺	－	[17.3]	－	精良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	ナデ 口縁部ナデ、頸部ハケ後ナデ	大型の複合口縁壺
18	42	20	遺物包含層①	土師器	甕	(14.4)	[4.2]	－	やや粗	やや良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/3、黄灰色 2.5Y4/1	ヨコナデ ヨコナデ	口縁部屈曲して開く
19	42	20	遺物包含層①	土師器	甕	(16.4)	[10.8]	－	精良	良	内面：にぶい黄橙 10YR7/3 外面：浅黄橙色 10YR8/4	ナデ 口縁部ハケ後ナデ、ハケ	歪み・器壁の厚さのむら有り
20	42	20	遺物包含層②	土師器	甕	－	[13.4]	－	やや良	やや良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/4 一部赤変 にぶい橙色 5YR6/4	ハケ ハケ	胴部扁球形　器壁は薄い　古墳中期後半か（5C 後半か）底部尖り底タイプか
21	42	20	遺物包含層①	土師器	甑	(23.3)	[15.0]	－	精良	良	内面：灰白色 10YR8/2 外面：にぶい黄褐 10YR5/4	ハケ後ナデ ハケ後指オサエ、ナデ	把手は確認できず
22	42	20	遺物包含層①	土師器	器台	(15.5)	[4.1]	－	精良	良	内面：浅黄橙色 7.5YR8/4 外面：にぶい橙 7.5YR7/4	ミガキ ミガキ	内外面赤色塗彩
23	42	20	遺物包含層①	土師器	高杯	(20.4)	[6.3]	－	やや粗	やや良	内面：灰白色 2.5Y8/2 一部にぶい橙色 外面：灰黄色 2.5Y7/2	ナデ、ミガキか（摩滅） ハケ後ナデ、ミガキ	杯底部充填、赤色塗彩か
24	42	20	遺物包含層①	土師器	高杯	－	[5.7]	－	やや粗	不良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	ハケ後ミガキか、指オサエ、ナデ ハケ後ミガキ	円形透かし孔４方向
25	42	20	遺物包含層①	土師器	高杯	－	[5.4]	－	やや良	良	内面：浅黄色 2.5Y7/3 外面：灰白色 2.5Y8/2	指オサエ、ナデ ナデ	円形透かし孔３方向
26	42	20	遺物包含層①	土師器	高杯	－	[6.5]	(12.5)	やや粗	やや良	内面：にぶい黄橙 10YR7/3 外面：浅黄橙色 10YR8/3	脚部指オサエ、ナデ、ミガキ 摩滅、一部ミガキ	杯部内面、脚部外面に赤色塗彩（赤色 10R6/6）
27	42	20	遺物包含層②	土師器	ミニチュア鉢	(7.6)	2.3	－	やや粗	やや良	内面：浅黄橙色 7.5YR8/3 外面：にぶい橙 7.5YR7/4	ナデ、指オサエ ナデか	口縁端部尖り気味
28	42	20	遺物包含層①	土師器	ミニチュア鉢	6.8	3.6	－	やや粗	やや良	外面：灰黄色 2.5Y7/2	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	口縁端部尖り気味
29	43	20	遺物包含層①	須恵器	高杯	(13.6)	10.7	8.6	やや良	良	内面：灰色 N5/ 外面：灰色 N4/	回転ナデ 回転ナデ、カキ目	脚部方形透かし３方向
30	43	20	遺物包含層①	須恵器	杯蓋	－	3.6	(13.6)	精良	良	内外面：灰色 N6/	回転ナデ 回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	
31	43	20	遺物包含層①	須恵器	杯蓋	－	[3.8]	(14.0)	精良	良	内外面：灰色 N5/	回転ナデ 回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内）（外）	備考
						口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）					
32	43	20	遺物包含層①	須恵器	杯蓋	(14.0)	4.1	-	精良	良	内面：灰色 N6/ 外面：青灰色 5B5/1	回転ナデ後天井部一部静止ナデ 回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
33	43	20	遺物包含層①	須恵器	杯蓋	(13.4)	[4.0]	-	やや良	やや良	内外面：灰色 N5/	回転ナデ 回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	
34	43	20	遺物包含層②	須恵器	杯蓋	(12.8)	[4.2]	-	精良	良	内外面：灰色 N5/	回転ナデ 回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	
35	43	20	遺物包含層①	須恵器	杯身	(12.8)	[2.8]	(15.0)	やや良	良	内面：灰色 N7/ 外面：灰色 N6/	回転ナデ 回転ナデ	
36	43	20	遺物包含層②	須恵器	杯身	-	[3.1]	-	やや良	やや良	内外面：灰色 N7/	回転ナデ 回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
44	44	21	SE202	瓦質土器	小型鉢	(8.8)	[3.2]	-	精良	良	内外面：褐灰色 10YR6/1	ヨコナデ ヨコナデ後ミガキ	口縁部に円形菊花のスタンプを押捺する
45	44	21	SE202	瓦質土器	鍋	(22.0)	[8.7]	-	やや良	やや良	内面：灰色 5Y6/1 外面：黒褐色 10YR3/1	口縁部ナデ、細目のハケ後ナデ、下位～底部細荒目のハケ 口縁部ナデ、ハケ後ナデ	外面に煤付着　岩崎編年（VIA型式古）16C
46	45	21	SK202	瓦質土器	鍋（足鍋）	(25.6)	[8.1]	-	精良	良	内面：暗青灰色 5PB4/1 外面：黄灰色 2.5Y4/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（IV型式）15C 後半～16C
47	45	21	SK202	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[9.4]	-	精良	良	内面：灰色 7.5Y5/1 外面：灰色 N4/	ハケ後ナデ ハケ後指オサエ、ナデ、下位タタキ	岩崎編年（IV型式）15C 後半～16C
48	45	21	SK202	瓦質土器	鍋（足鍋）	(25.2)	[9.7]	-	やや良	やや良	内面：灰色 N6/ 外面：黒褐色 10YR3/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、底部タタキ	口唇部肥厚ヨコナデ 外面に煤・炭化材付着 岩崎編年（IV型式）
49	45	21	SK202	瓦質土器	鍋（足鍋）	(26.0)	[11.0]	-	精良	良	内面：灰色 N5/ 外面：黄灰色 2.5Y4/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（IV型式）15C 後半～16C
50	45	21	SK202	瓦質土器	鍋（足鍋）	(28.0)	[7.7]	-	精良	良	内外面：灰色 N6/	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	口縁の形は岩崎編年（IV型式）15C 後半～ 16C
51	45	21	SK202	瓦質土器	足鍋	(27.3)	15.0	-	やや良	良	内外面：灰色 N4/	ハケ ハケ後指オサエ、ナデ	脚部欠失　岩崎編年（VI B 型式）16C 中頃
52	45	21	SK202	瓦質土器	鍋（足鍋）	(30.4)	[10.2]	-	精良	良	内外面：褐灰色 10YR4/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ ハケ後ナデ	器壁全体的に厚い 足有無不明 岩崎編年（VI B 型式）16C 前半
53	46	21	SK203	土師器	皿	7.1	1.1	6.1	精良	やや良	内外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有り
54	46	21	SK203	土師器	皿	(6.6)	0.9	(5.4)	やや良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
55	46	21	SK203	土師器	杯	12.2	4.7	7.1	やや良	やや良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 一部橙色 5YR7/6 外面：にぶい黄橙 10YR7/2	回転ナデ（摩滅顕著） 回転ナデ	底部回転糸切り 内面の一部に橙色顔料が残る 気泡が多い
56	46	21	SK203	土師質土器	擂鉢	-	[7.0]	-	やや良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/4	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	器壁厚い
57	46	21	SK203	瓦質土器	羽釜	-	[2.8]	-	精良	良	内外面：黒色 7.5Y2/1	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	口縁直下に貼付けの鍔が巡る
58	46	21	SK204	土師器	皿	(6.6)	1.6	-	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　器壁は薄い
60	46	21	SK206	土師器	皿	(6.8)	1.3	3.8	精良	良	内面：橙色 2.5YR7/8 外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　器壁は薄い
61	46	21	SK213	土師器	皿	(7.3)	1.1	(4.0)	精良	良	内面：橙色 2.5YR7/6 外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	小皿（内外面丹塗り）
62	46	21	SK213	土師器	皿	(8.1)	1.7	(3.8)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有り
63	46	21	SK213	土師器	皿	-	[2.8]	4.4	精良	良	内面：丹塗部 橙 2.5YR6/6 外面：丹塗部 橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有り 内外面に丹塗り
64	46	21	SK212	瓦質土器	擂鉢	-	[3.6]	-	精良	良	内面：褐灰色 5YR5/1 外面：褐灰色 5YR4/1	ハケ ハケ	オロシ目を確認（単位 3 条）
65	46	22	SK212	瓦質土器	鉢	(25.0)	[6.6]	-	精良	良	内外面：灰白色 2.5Y7/1	ハケ後ミガキ ナデ、指オサエ	口縁の形は岩崎編年（VI B 型式）16C に該当
66	46	22	SK212	瓦質土器	足鍋	26.4	[15.0]	-	やや良	良	内外面：灰色 N4/	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	端部欠失するも 3 本の足が存在 岩崎編年（VI B 型式）　16C
67	46	22	SK212	瓦質土器	鍋	-	[7.0]	-	精良	良	内外面：灰色 7.5Y6/1	ハケ ナデ、指オサエ、中下位タタキ	外面口縁から 5 cm下までタタキ痕有り 岩崎編年（VI B 型式）16C
68	46	22	SK214	土師器	皿	(12.8)	1.6	(5.8)	精良	良	内面：浅黄橙色 10YR8/4 外面：にぶい黄橙 10YR6/3	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
69	46	22	SK214	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[6.8]	-	精良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰黄褐色 10YR4/2	ハケ後ナデ ナデ、指オサエ	岩崎編年（IV型式）16C
71	47	22	SK217	土師器	皿	6.6	1.1	5.7	精良	良	内外面：橙色 5YR7/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　歪み有り
72	47	22	SK222	土師器	皿	(6.1)	1.6	-	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有す
73	47	22	SK222	土師器	皿	(7.6)	1.2	(4.2)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　器壁は薄い
74	47	22	SK227	瓦質土器	擂鉢	-	[6.1]	-	やや粗	良	内外面：灰白色 2.5Y7/1	ハケ 口縁部ヨコナデ、指オサエ	オロシ目を確認（単位 8 条）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内）（外）	備考
						口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）					
75	47	22	SK228	瓦質土器	鉢	(9.4)	3.7	(7.6)	精良	良	内外面：灰白色 2.5Y7/1	ヨコナデ ヨコナデ	外面底部板目圧痕有り
76	47	22	SK234	瓦質土器	鍋	-	[6.3]	-	精良	良	内面：灰白色 N4/ 外面：黒色 N2/	ハケ 口縁部ヨコナデ、指オサエ	外面煤付着　岩崎編年（ⅥB型式）
77	47	22	SK240	瓦質土器	大甕	-	[14.3]	-	やや良	良	内面：黒褐色 2.5Y3/1 外面：暗灰黄色 2.5Y5/2	回転ナデ 口縁～頸部ヨコナデ、胴部格子目タタキ	2次焼成のためか内面が黒褐色化し炭化材付着
78	47	22	SK226	瓦質土器	大甕	-	[5.5]	-	やや粗	不良	内外面：灰色 N4/	器面剥離不明 器面剥離不明	口縁部片
80	48	23	SD203	瓦質土器	足鍋	(26.7)	24.5	-	精良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR6/4 外面：褐灰色 10YR4/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	口縁は短く屈折して開き外面に面をもつ　岩崎編年（Ⅱ型式）14C後半
81	48	23	SD203	瓦質土器	大甕	(42.4)	[15.7]	-	精良	良	内面：明褐灰色 7.5YR7/1 外面：灰色 N6/	タタキ後ナデ 口縁部ヨコナデ、タタキ後ナデ	
85	48	23	SD207	土師器	皿	(11.2)	2.3	5.4	精良	やや良	内面：褐灰色 10YR6/1 外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有り
86	48	23	SD212	瓦質土器	鍋	-	[7.1]	-	精良	良	内外面：灰色 N5/	ハケ後ナデ消し ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅲ型式新）15C
87	49	23	SP2252	青磁	椀	-	3.0	-	精良	良	釉内外面：オリーブ灰色 10Y6/2 胎土：灰白色 2.5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	鎬蓮弁文　龍泉窯産
88	49	23	SP2251	青磁	鉢	-	[3.4]	-	精良	良	釉内面：灰色 10Y5/1 釉外面：灰色 7.5Y6/1 胎土：黄灰色 2.5Y6/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	内外面に象嵌による施文 高麗青磁
89	49	23	SP2090	青磁	椀	(15.2)	[3.7]	-	精良	やや良	内外面：灰白色 10YR7/2 胎土：灰白色 5Y8/1	不明 不明	細かい貫入あり
90	49	23	SP2282	土師器	高台付皿	-	[1.8]	(4.6)	精良	良	内外面：浅黄色 2.5Y7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
91	49	23	SP2236	白磁	皿	-	1.0	5.8	精良	良	釉内外面：灰白色 10Y8/1 胎土：灰白色 5Y8/1	回転ナデ	内面・底部回転ヘラケズリ　見込に円文（削り出し）全体に施釉
92	49	23	SP2236	土師器	皿	(5.4)	0.8	(4.6)	精良	良	内面：にぶい橙色 5YR7/4 外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
93	49	23	SP2236	土師器	皿	(11.0)	2.6	5.0	精良	良	内外面：淡黄色 2.5Y8/3	体部回転ナデ、底部ヨコナデ 体部回転ナデ	底部回転糸切り　強い板目痕有り　ロクロ回転方向右
94	49	23	SP2167	土師器	皿	(6.7)	0.9	(5.8)	精良	良	内外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
95	49	23	SP2084	土師器	皿	7.4	1.6	4.8	やや良	不良	内外面：灰白色 10YR8/2	一部回転ナデ（摩滅顕著） 不明	外面付着物で調整不明
96	49	23	SP2018	土師器	皿	7.2	0.6	5.4	精良	やや良	内外面：浅黄橙 7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
97	49	23	SP2183	土師器	皿	5.3	0.9	4.0	やや良	良	内面：にぶい褐 7.5YR5/3 外面：にぶい橙 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　歪み有り
98	49	23	SP2183	土師器	皿	(5.7)	0.9	(4.0)	やや粗	やや良	内面：にぶい橙 7.5YR7/4 外面：にぶい黄橙 10YR7/2	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
99	49	24	SP2183	瓦質土器	足鍋	(27.8)	[11.7]	-	精良	良	内面：にぶい黄橙 10YR7/4 外面：黒色 10YR2/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ、下位タタキ	岩崎編年（ⅥA型式新）16C後半　タタキ痕は摩滅顕著
100	49	24	SP2101	土師器	杯	(12.6)	5.4	4.2	精良	良	内外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	内面底部中央ヘラ状工夫による焼成前の凹み　くさり礫を含む
101	49	24	SP2085	土師器	皿	(5.2)	0.9	(4.2)	精良	良	内外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
102	49	24	SP2085	土師器	皿	5.6	1.0	4.0	やや良	良	内面：橙色 5YR7/6 外面：橙色 5YR6/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　底部板目痕有り
103	49	24	SP2085	土師器	皿	(5.8)	0.8	(5.1)	やや良	良	内外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
104	49	24	SP2085	土師器	皿	(6.8)	1.2	(4.2)	やや良	やや良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
105	49	24	SP2143	土師器	皿	6.4	1.0	6.0	精良	良	内外面：橙色 5YR7/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目痕有り
106	49	24	SP2265	土師器	皿	6.0	1.1	4.3	精良	良	内面：灰白色 10YR8/2 外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 全体が焼き歪みが激しい　ロクロ回転方向右
107	49	24	SP2265	土師器	皿	(13.0)	2.4	(5.0)	精良	良	内面：黄灰色 2.5Y5/1 外面：灰黄色 2.5Y6/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
108	49	24	SP2188	土師器	皿	(11.1)	2.2	(6.0)	やや良	不良	内面：灰白色 10YR8/1 外面：灰白色 10YR8/2	不明 回転ナデか	底部に板目圧痕有す　器面の摩滅顕著　被熱痕有り
109	49	24	SP2191	土師器	皿	(13.0)	2.5	5.2	精良	やや良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　底部に板目圧痕有り
110	49	24	SP2142	土師器	皿	11.0	2.4	4.6	精良	良	内外面：灰黄色 2.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目痕有り　ロクロ回転方向左
111	49	24	SP2168	土師器	皿	(13.0)	2.6	5.6	やや良	良	内面：にぶい黄橙 10YR6/3 外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　大内ⅢA3（北島編年）内外面に煤付着
112	50	24	SP2061	瓦質土器	擂鉢	-	[7.7]	-	やや粗	不良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 外面：にぶい黄橙 10YR7/2	指オサエ、ナデ	オロシ目を確認（単位5条）　器面の摩滅顕著
113	50	24	SP2092	瓦質土器	甕	-	[5.6]	-	やや粗	良	内外面：灰色 5YR7/1	ヨコナデ ヨコナデ、肩部タタキ	外面に格子目タタキ

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内）（外）	備考
						口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）					
114	50	24	SP2012	瓦質土器	焙烙	(22.8)	4.8	(18)	やや良	良	内外面：オリーブ黒色 7.5Y3/1	ヨコナデ ヨコナデ	口縁端部は内側に折り返し丸く終わる　歪み大
115	50	25	SP2199	土師質土器	鍋	－	[10.0]	－	やや良	やや良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、指オサエ後ナデ	断面で粘土帯接合痕を確認
116	50	25	SP2216	瓦質土器	鍋	(25.4)	[8.6]	－	やや良	良	内面：灰白色 2.5Y8/2 外面：にぶい黄褐 10YR5/3	ヨコナデ 口縁部ヨコナデ、指オサエ	一部画面に煤付着　岩崎編年（Ⅲ型式古）15C
117	50	25	SP2262	瓦質土器	足鍋	(22.2)	[11.8]	－	やや良	良	内面：灰黄色 2.5Y7/2 外面：黒色 2.5Y2/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅲ型式新）15C
118	50	25	SP2182	瓦質土器	鍋	(28.1)	[7.3]	－	粗	やや良	内外面：黄灰色 2.5Y5/1 胎土：橙色 7.5YR6/6	ヨコナデ 指オサエ、ナデ	調整が粗い　外面被熱　岩崎編年（Ⅲ型式新）
120	51	25	SX202	瓦質土器	把手付鍋	－	[4.9]	－	精良	良	内外面：灰色 N4/	ハケ ナデ、指オサエ	円形断面の短い把手付
121	51	25	SX202	瓦質土器	足鍋	－	[5.6]	－	精良	良	内外面：暗灰色 N3/	ハケ ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅳ型式）16C
122	51	25	SX202	瓦質土器	鍋	(30.4)	[6.9]	－	やや良	良	内外面：暗灰色 N5/	口縁部ハケ、ハケ後ナデ ナデ	外面一部器番剥離著しく不明　岩崎編年（VI B 型式）16C 後半
123	51	25	SX204	瓦質土器	擂鉢	(28.7)	[6.4]	－	やや良	良	内外面：暗灰色 N3/	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	オロシ目を確認（単位 7 条）　口縁部内面が肥厚する
124	51	25	SX205	土師器	杯	(13.2)	4.1	(7.1)	やや良	やや良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 橙色 2.5YR7/6 外面：浅黄橙色 7.5YR8/4 橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有り 内外面に橙色の顔料塗布か
125	51	25	SX205	土師器	杯	12.4	4.6	6.0	精良	やや良	内面：浅黄橙色 7.5YR8/6 外面：橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　器面摩滅顕著
126	51	25	SX205	土師質土器	鍋	(37.0)	[12.2]	－	やや良	やや良	内外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	ハケ後ナデ、口縁部ヨコナデ タタキ後ハケ、その後ナデ	大型の鍋　岩崎編年（Ⅱ型式）
127	51	25	SX203	土師器	皿	6.8	1.2	5.9	やや良	良	内外面：橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　器壁は厚手
128	51	25	SX207	土師器	皿	6.5	1.4	4.2	やや良	やや良	内面：浅黄色 2.5Y7/3 外面：灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕有り （大内Ⅲ A1 式）15C 中頃か
129	52	25	遺物包含層②	土師器	皿	5.6	0.8	4.9	精良	良	内外面：橙色 5YR6/8	回転ナデ 回転ナデ	小皿　底部回転糸切り　器壁は厚い
130	52	25	遺物包含層①	土師器	皿	5.7	1.0	4.0	やや良	良	内面：にぶい橙 7.5YR7/4 外面：にぶい橙 7.5YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
131	52	25	遺物包含層①	土師器	皿	5.5	0.7	(4.6)	精良	良	内外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
132	52	25	遺物包含層②	土製品	管状土錘	長さ 5.7	孔径 2.4	最大径 3.6	精良	良	外面：灰白色 10YR8/2	指オサエ、ナデ	大型の土錘
133	52	26	遺物包含層②	陶器	擂鉢	(32.0)	[6.3]	－	精良	良	内面：褐灰色 7.5YR6/1 外面：灰褐色 5YR5/2	ヨコナデ ヨコナデ	備前焼
134	52	26	遺物包含層①	瓦質土器	鍋	(30.4)	[8.6]	－	やや良	やや良	内面：黒色 2.5Y2/1 外面：黒褐色 2.5Y3/2	口縁部ナデ、ハケ 口縁部ナデ、ハケ後ナデ	岩崎編年（Ⅱ型式）
135	52	26	遺物包含層①	瓦質土器	足鍋	(24.0)	[18.0]	－	やや良	良	内外面：灰色 N4/	ハケ後ナデ ハケ後ナデ消し	岩崎編年（Ⅲ型式古）15C
136	52	26	遺物包含層①	瓦質土器	大甕	(45.4)	[6.4]	－	精良	良	内外面：暗灰色 N3/	ヨコナデ 口縁部ヨコナデ、肩部格子目タタキ	
137	53	26	遺構検出	青磁	椀	－	[3.3]	4.4	精良	良	胎土：灰白色 5Y7/1 釉：灰オリーブ色 5Y5/3	施釉 高台まで施柚、見込露胎	削り出し高台　鎬有り
138	53	26	表土除去時	青磁	椀	－	[2.4]	－	精良	良	内外面：灰オリーブ色 7.5Y6/2	施釉 施釉	外面鎬蓮弁文
139	53	26	遺構検出	青花	皿	－	[2.0]	－	精良	良	釉：※青白色 胎土：灰白色 2.5Y8/1	施釉 施釉	内面施釉（菖蒲か）　外面施釉（花弁紋か）　畳付部分無釉
140	53	26	西側遺構検出	土師器	皿	(5.4)	0.7	4.8	精良	良	内外面：橙色 2.5YR7/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
141	53	26	調査区北東端斜面	土師器	皿	6.1	0.9	5.1	やや良	良	内外面：灰色 7.5YR8/2 胎土：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
142	53	26	遺構検出	瓦質土器	大甕	－	[11.5]	－	やや良	やや良	内面：浅黄色 2.5Y7/3 外面：灰色 N/4	ヨコナデ 口縁部ヨコナデ、頸部～胴部格子目タタキ	
143	53	26	中央遺構検出	土製品	管状土錘	長さ 5.2	孔径 0.35	最大径 1.3	やや良	やや良	内面：灰色 5Y4/1 外面：灰黄色 2.5Y7/2	指オサエ	
144	53	26	北側端斜面	瓦質土器	鍋	(38.6)	[11.0]	－	精良	良	内面：黄灰色 2.5Y5/1 外面：灰白色 10YR7/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	大型の鍋 口縁部の比率が低い 岩崎編年（Ⅲ型式古）15C 前～中頃

参考文献（第Ⅲ章の執筆にあたっては以下の文献を参考にした。著者名は五十音順）
岩崎仁志 1999「足鍋再考」『陶塤』第 12 号（財）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター
北島大輔 2010「大内式の設定－中世山口における遺物編年の細分と再編－」『大内氏館跡XI』山口市教育委員会 175 ～ 258 頁

第 16 表　下瑞光寺地区（１区）出土石器・石製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			重さ (g)	石材・材料	備　考
						長さ［残存値］	幅［残存値］	厚さ［残存値］			
37	43	20	遺物包含層②	石器	石鏃	2.68	1.70	0.42	1.4	安山岩	凹基式　周辺から交互剥離により整形　整形・調整は丁寧
38	43	20	遺構検出時	石器	石鏃	4.0	2.0	0.52	3.2	玄武岩	凹基式　周辺から交互剥離により整形　裏面の整形は雑
39	43	20	遺物包含層②	石器	スクレイパー	10.30	5.75	1.90	90.8	黒曜石	姫島産　大型品で刃部は弧状
40	43	20	遺物包含層①	石製品	滑石製模造品	[3.55]	[0.95]	[0.45]	5.1	滑石	盾形または斧形を模したもの
119	50	25	SP2143	石製品	有孔円盤	2.2	2.1	0.7	3.7	花崗岩	両面と側面に研磨痕　両面穿孔
145	53	26	遺物包含層①	五輪塔	水輪石	器高 14.8	－	－	6.95	安山岩	上下両面に凹みをもつ
146	53	26	遺物包含層①	石製品	茶臼	器高 11.0	[19.0]	芯棒受径 [2.5]	2.310	角閃石安山岩	上臼上面くぼみ断面形は浅い皿形　芯棒受断面は貫通形で供給口を共用　挽き木は横打ち込み形で台座文様を施す

第 17 表　下瑞光寺地区（１区）出土金属製品観察一覧表

NO.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			重さ (g)	備　考
						長さ［残存値］	幅	厚さ		
59	46	21	SK204	銅製品	笄	[3.7]	0.6	0.25	1.8	無文
70	46		SK214	鉄製品	鋏の一種	6.0	－	－	12.6	屈折は片方のみ　他方には直径 5 ㎜の孔有り、遊輪がつく
82	48	23	ＳＤ 203	銭貨	咸平元寶	直径 2.5	方孔一辺 0.5	0.16	1.5	北宋　998 年初鋳

第 18 表　下瑞光寺地区（１区）出土木製品観察一覧表

NO.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			備　考
						長さ［残存値］	幅［残存値］	厚さ	
41	44	21	SE201	漆器	椀	－	器高 [3.7]	底部径 7.5	内外面：黒漆色 黒色 2.5Y2/1
42	44	21	SE201	漆器	椀	－	器高 [4.7]	－	内面：黒漆色 黒色 2.5Y2/1 外面：朱色漆 赤色 10R5/8　41 と同一個体の可能性有り
43	44	21	SE201	竹製品	用途不明 円筒形竹製品	8.5	[4.6]	－	内外面：灰黄褐色 10YR4/2 両端に加工痕有り
79	47	22	SK241	漆器	椀	－	器高 [2.2]	底部径 7.5	内外面：黒漆色 黒色 2.5Y2/1 外面高台内：朱色漆 赤色 10R5/8　銘または記号の一部か
83	48	23	SD203	木製品	蓋または底	8.5	－	5.5	樹種不明　灰褐色 7.5YR4/2
84	48	23	SD203	木製品	円筒形木製品の側板	[13.3]	[5.4]	－	外面：灰褐色 7.5YR4/2

Ⅴ　下瑞光寺地区（２区）の調査成果

１　調査区の概要

（１）概要（第 55 図　図版 27・28）

調査区は、南西から北東へ伸びる丘陵の先端部（標高約 11.25 m）と、その周辺部で構成される。丘陵周辺部には谷状地形が付随しており、この谷状地形を挟んで南側と北側に微高地が展開している。遺構は主にこの微高地上で検出されている。特に谷状地形より南側で密集しており、居住域としての利用頻度の高さが窺える。

遺構の内訳は、掘立柱建物４棟、柵列１列、井戸６基、墓２基、土坑 39 基、溝 15 条、柱穴約 1,460 個、性格不明遺構１基である。そのほとんどが室町時代（特に後半）の集落に関わるものであり、その他の時代では、平安時代前半の井戸を１基検出するに留まる。

遺構の構成と遺物の分布にはある程度の傾向がある。遺構が最も集中する南側では排水を兼ねた区画溝を伴い、また、柱穴集中エリアを避けるように井戸や大型土坑および墓などが分布する。そして、そこから出土する遺物は、15 世紀から 16 世紀の瓦質土器がかなりの割合を占め、井戸や土坑などに石とともにまとめて廃棄されている。

一方、谷状地形より北側と東側では区画溝は検出されず、そこから出土する遺物には破片ながらも 13 ～ 14 世紀のものを一定量確認している。また、谷状地形およびその付近では、15 世紀頃の土師器皿が一括廃棄されている状況を確認している。

出土遺物としては、瓦質土器鍋・釜・擂鉢・火鉢および石臼や包丁など、日常生活用品とみなせるものがあるほか、墓に供献された土師器杯・皿、希少品である李朝陶器の徳利などがある。また、土師器皿の多量一括廃棄から宴会やまつりがなされたこと、天目茶碗・信楽焼の茶壺および茶臼（１区出土）などから茶をたしなんでいたことが推定される。

これらの出土遺物は下津令遺跡内における既往の調査では顕著でないことから、下瑞光寺地区に有力者が居住していたことが想定できる。

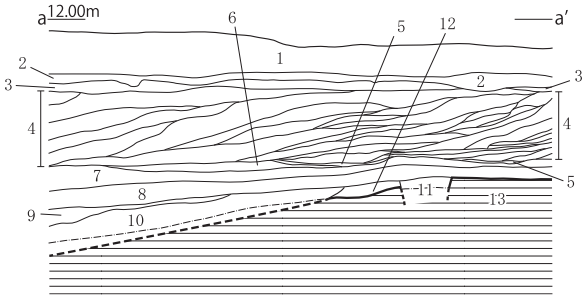
このほか、谷状地形からは古墳時代後期および奈良時代の遺物が残りの良い状態で出土しており、遅くとも古墳時代後期までに形成された谷状地形が、室町時代後期に最終埋没したことがわかる。

（２）層序（第 54 図　図版 29）

基本層序は、上から耕作土・盤土・地山であり、局所的には盤土と地山の間に遺物包含層や近現代の客土が堆積する。丘陵の南側の谷筋は客土によって人的に埋められており（壁面①）、この客土の上に堆積する盤土のあたりからは完形に近い明治期の型紙刷椀が出土している。また、1947 年撮影の空中写真（国土地理院発行）では、すでに現在とほぼ同じ風景となっていることから、近代における土地改変が現代につながる大きな画期となっていることがわかる。

なお、今回の調査では、中世末までの遺構・遺物が顕著である反面、近世の遺構は皆無で、遺物も極めて少量であることから、居住域は別の地区に移され、当地は耕作地として利用されたか、もしくはあまり利用されなかった可能性が考えられる。実際、壁面①にて、近世以降の旧耕作土とみなせる土層を確認している。

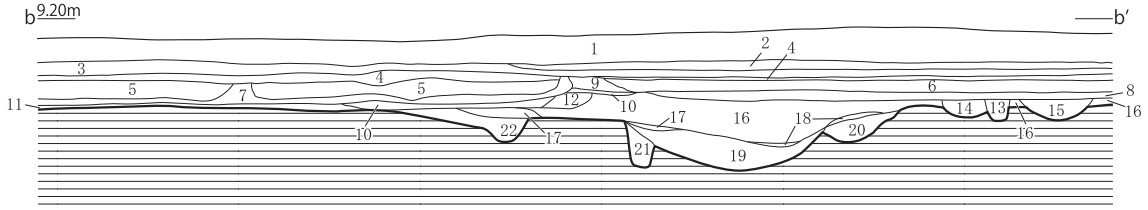
壁面①



土層凡例

1　現耕作土
2　旧耕作土
3　盤土　　重機掘削時に明治の型紙刷椀出土
4　盛土（地山土による）　締り非常に悪い　近代
5　灰色（N6/0）　粗砂　氾濫堆積か？
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）　砂質土
7　黒褐色（10YR3/2）　砂質土　近世？耕作土
8　暗灰黄色（2.5Y4/2）　粘砂質土　近世？耕作土
9　暗灰黄色（2.5Y4/2）　粘砂質土　地山ブロック多く含む　近世？耕作土
10　褐灰色（10YR4/1）　砂質土　地山ブロック含む　中世遺物包含層
11　10 にほぼ同じ　柱穴埋土
12　灰黄色（2.5Y6/2）　粘砂質土
13　にぶい褐色（7.5YR5/6）　粘質土　地山

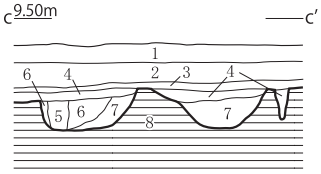
壁面②



土層凡例

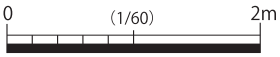
1　黒褐色（10YR3/1）　粘質土　耕作土
2　褐灰色（10YR4/1）　粘質土　耕作土
3　灰黄褐色（10YR5/2）　粘質土　耕作土
4　黄褐色（10YR5/8）　粘砂質土　盤土
5　明黄褐色（10YR7/6）　弱粘砂質土
6　黄褐色（10YR5/6）　粘砂質土
7　にぶい黄褐色（10YR5/3）　粘砂質土
8　褐色（10YR4/4）　粘質土
9　にぶい黄褐色（10YR5/4）　粘砂質土
10　褐色（10YR4/6）　粘質土
11　明褐色（7.5YR5/6）　粘質土
12　にぶい黄褐色（10YR4/3）　粘質土
13　黒褐色（2.5Y3/2）　粘質土　SP3683 埋土
14　褐灰色（10YR4/1）　粘質土　柱穴埋土
15　黒褐色（10YR3/2）　粘質土　SD306 埋土
16　灰黄褐色（10YR4/2）　粘質土
17　オリーブ褐色（2.5Y4/3）　粘質土
18　明黄褐色（10YR6/8）　粘質土
19　暗灰黄色（2.5Y4/2）　粘質土　SK345 埋土
20　黒褐色（10YR2/2）　SD305 埋土
21　暗褐色（10YR3/3）　粘質土　柱穴埋土
22　暗褐色（10YR3/4）　粘質土　SD301 埋土

壁面③



土層凡例

1　現耕作土
2　旧耕作土
3　盤土
4　褐灰色（10YR5/1）　砂質土　マンガン斑多く含む
5　黒褐色（2.5Y3/1）　砂質土　締りやや悪い
6　黄灰色（2.5Y4/1）　暗灰黄色ブロック含む
7　暗灰黄色（2.5Y5/2）　砂質土　褐色ブロック含む
8　明褐色（7.5YR5/6）　砂質土　地山（花崗岩風化層）



第 54 図　下瑞光寺地区（２区）　壁面土層断面図

地山は花崗岩風化層（バイラン土）を基本とし、遺構が検出される微高地では明褐色や橙色の砂質土である。この砂質土の下層や谷状地形付近では酸化進行の低いシルト層が堆積する。また、さらに下層では伏流水があったことが推定でき、今回検出された井戸の水源となる。

伏流水の存在をよく示すのが、井戸 SE301・303・304 の分布である。これらは丘陵裾の延長上（コンターラインの変換点）に分布しており、このあたりに伏流水が豊富だったことが推定できる。なお、SE301 が掘り込まれたあたりの地山は非常に締まりが悪い砂層であり、掘削直後に崩落する軟弱な土質であった。この土質も、伏流水が顕著であるために、地山が影響を受けて軟弱化した結果である可能性がある。

こうした土質条件は、集落を構成する掘立柱建物と井戸・大型土坑などの選地に影響を与えており、地山が軟弱な SE301 付近で柱穴が検出されない主因と推定できる。

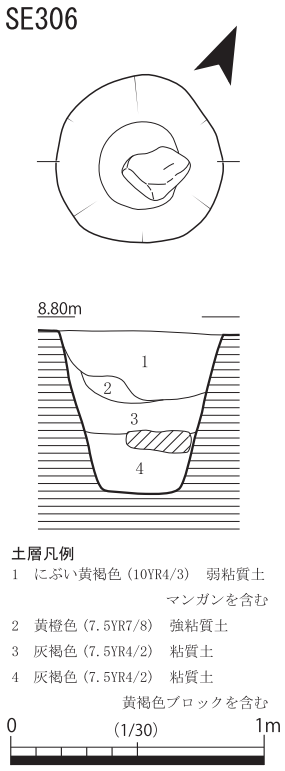
第 55 図　下瑞光寺地区（２区）　遺構配置図

２　古代以前の遺構

下瑞光寺地区（２区）で検出された遺構で、確実に古代以前に位置づけられるものは井戸１基のみである。

（１）井戸

SE306（第 56 図　図版 29）　調査区南東部に位置する平面円形の素掘り井戸である。規模は直径 38 ㎝、深さ 64 ㎝である。周囲で検出された中世の井戸よりやや浅いことから、当時の地下水位がやや高かったことが想定できる。廃棄時には人為的に埋め戻しており、その際に大型の石とともに須恵器杯（１）や土師器甕（２）を廃棄している。出土遺物から、９世紀後半以降に廃棄されたものと推定する。



第 56 図　SE306 実測図

３　中世の遺構

検出された遺構のほとんどが中世のものであり、掘立柱建物・井戸・土坑・区画溝など、いずれも集落を構成するものである。ほかに墓を２基確認している。

土坑については、大型で断面形が２段を呈するものを検出した。このタイプの大型土坑は沖ノ下２地区、下瑞光寺地区（１区）でも確認されていることから、中世後半の下津令遺跡においては普遍性が高いものといえる。これらは、井戸の付近か、もしくは、柱穴を避けるような分布をする傾向も共通しており、用途は不明ながらも建物の付近に付属的に配置されるものであったことも確認できる。

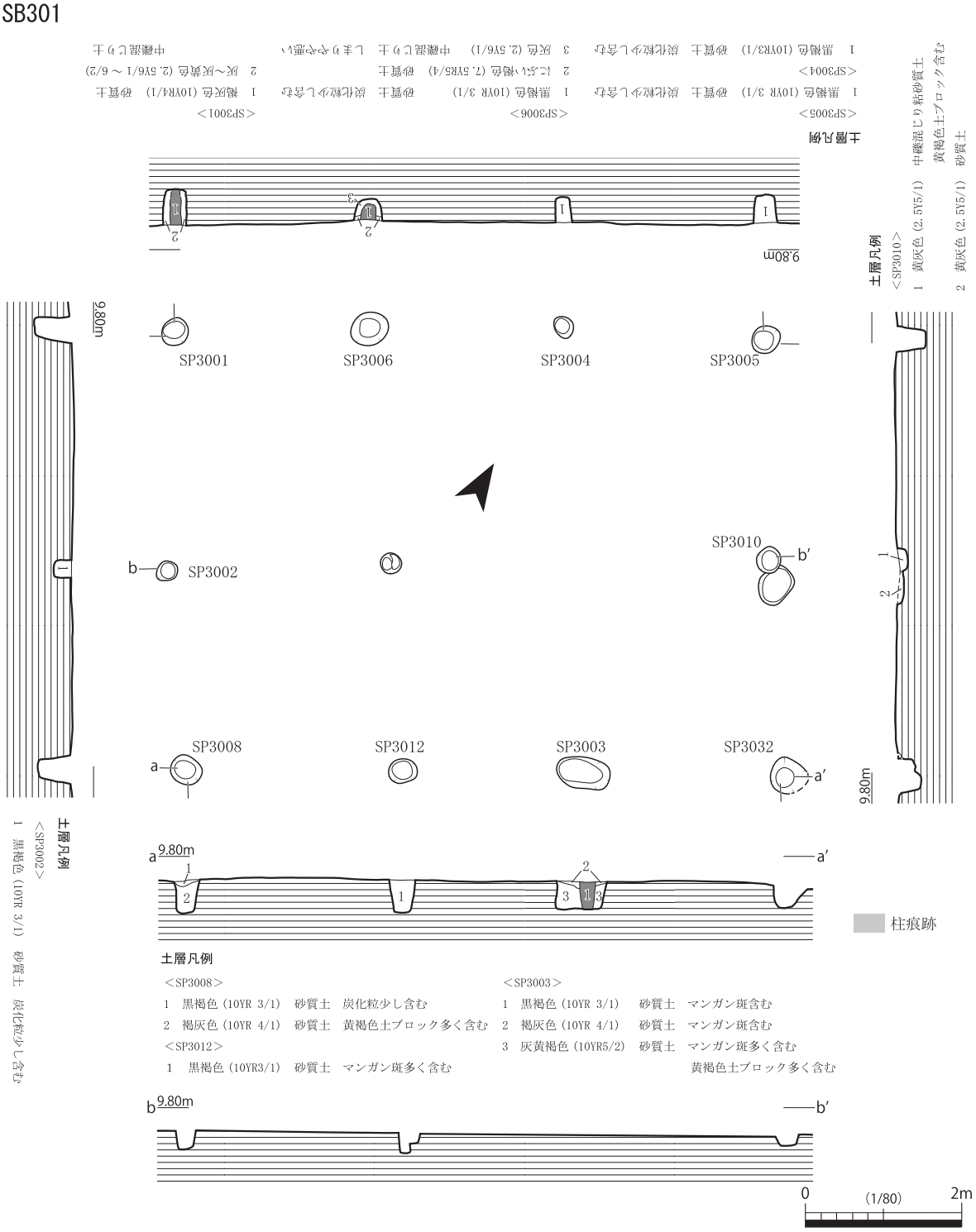
一方、谷状地形付近は居住域の立地に不適であるため遺構密度は低くなるが、そのかわり、土師器皿の廃棄土坑や、足鍋と信楽焼陶器破片を廃棄した土坑など、廃棄自体を目的に掘削されたと考えられる遺構が検出される。また、谷状地形そのものにも遺物が多く廃棄されており、この辺りがゴミ捨て場として利用されている状況がうかがえる。

以下、主要な遺構について個別に記述する。

（１）掘立柱建物・柵列

SB301（第 57 図　図版 30）　調査区北西隅に位置する建物で、桁行３間（7.68m）×梁行２間（5.60m）、床面積 43.01 ㎡を測る。棟方向は N60°　E である。建物の内側に小規模な柱穴を検出しており、束柱を伴う可能性がある。柱穴からは、土師器椀や瓦質土器羽釜などが出土している。小片ばかりであり、柱穴を埋める際に偶発的に混入したものとみなされる。このうち、SP3003 では柱を立てる際の埋土（３層）から出土しており、建物の形成時期に関わる資料である。遺物の時期は 13 世紀後半～ 15 世紀であり、建物の形成時期の上限を示す。

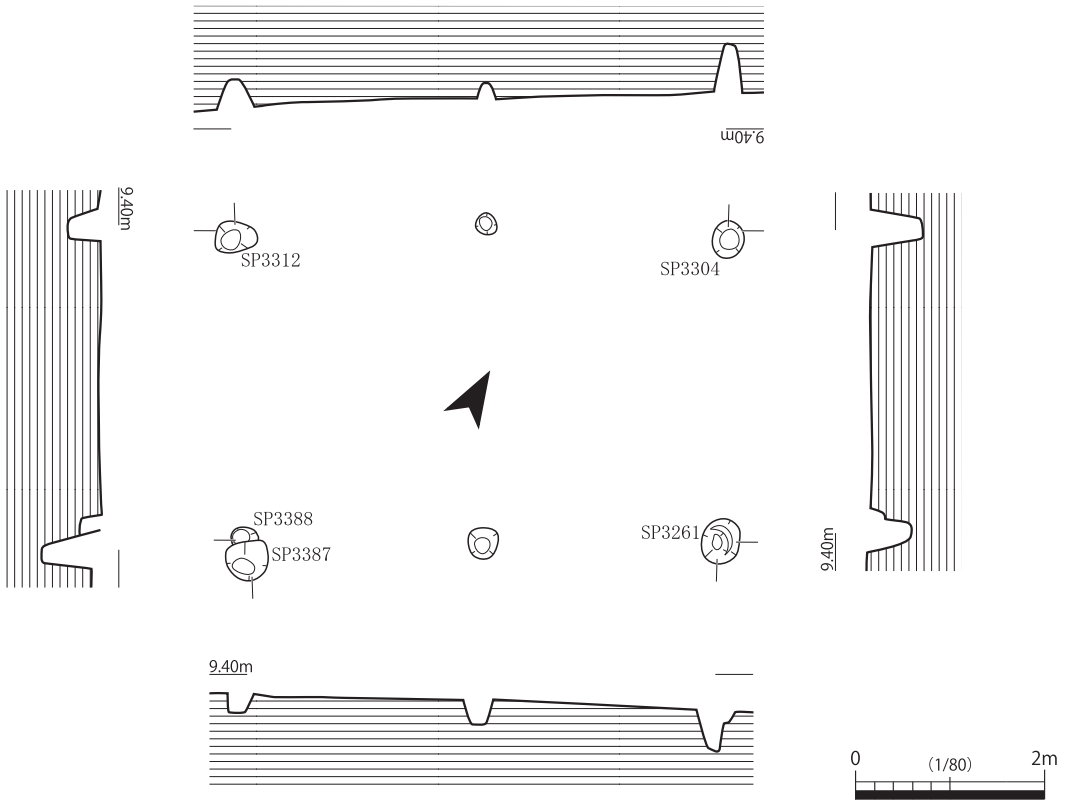
SB302（第 58 図　図版 30）　調査区南側に位置する建物で、桁行２間（5.00 m）×梁桁１間（2.50 m）、床面積 12.50 ㎡を測る。棟方向は N58°　E である。梁行１間がやや長いため、今後の再検証は必要と考えるが、SD307 に沿って配置された柱穴列であるという点は確実かと考えられる。遺物は SP3304 より土師器皿（８）と瓦質土器擂鉢片（９）が出土しており、15 世紀以降の所産である。



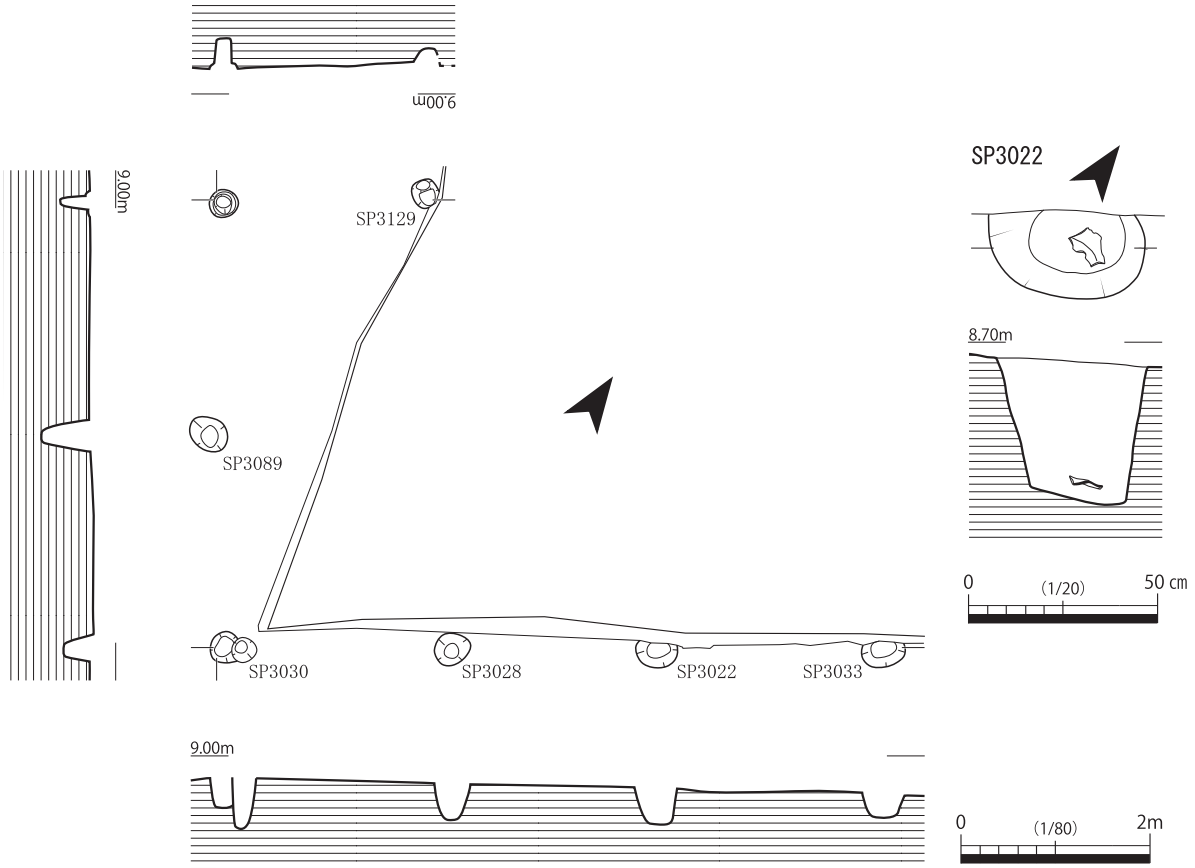
第 57 図　SB301 実測図

SB303（第 58 図　図版 30）　調査区南東側に位置する建物で、桁行３間（7.00 m）×梁桁２間（4.72 m）、床面積 33.04 ㎡と推定され、SB301 とほぼ同規模となる。棟方向は N57°Ｅである。近辺で検出した SD301・303・305・306 のいずれかと併存する可能性が高い。遺物は SP3022・3033・3129 より瓦質土器足鍋・擂鉢・湯釜の破片が出土している。このうち、SP3022 出土遺物は建物廃絶に伴うものであることが出土状況より推定できる。遺物の時期の主体は 15 世紀であり、廃絶時期の上限を示している。

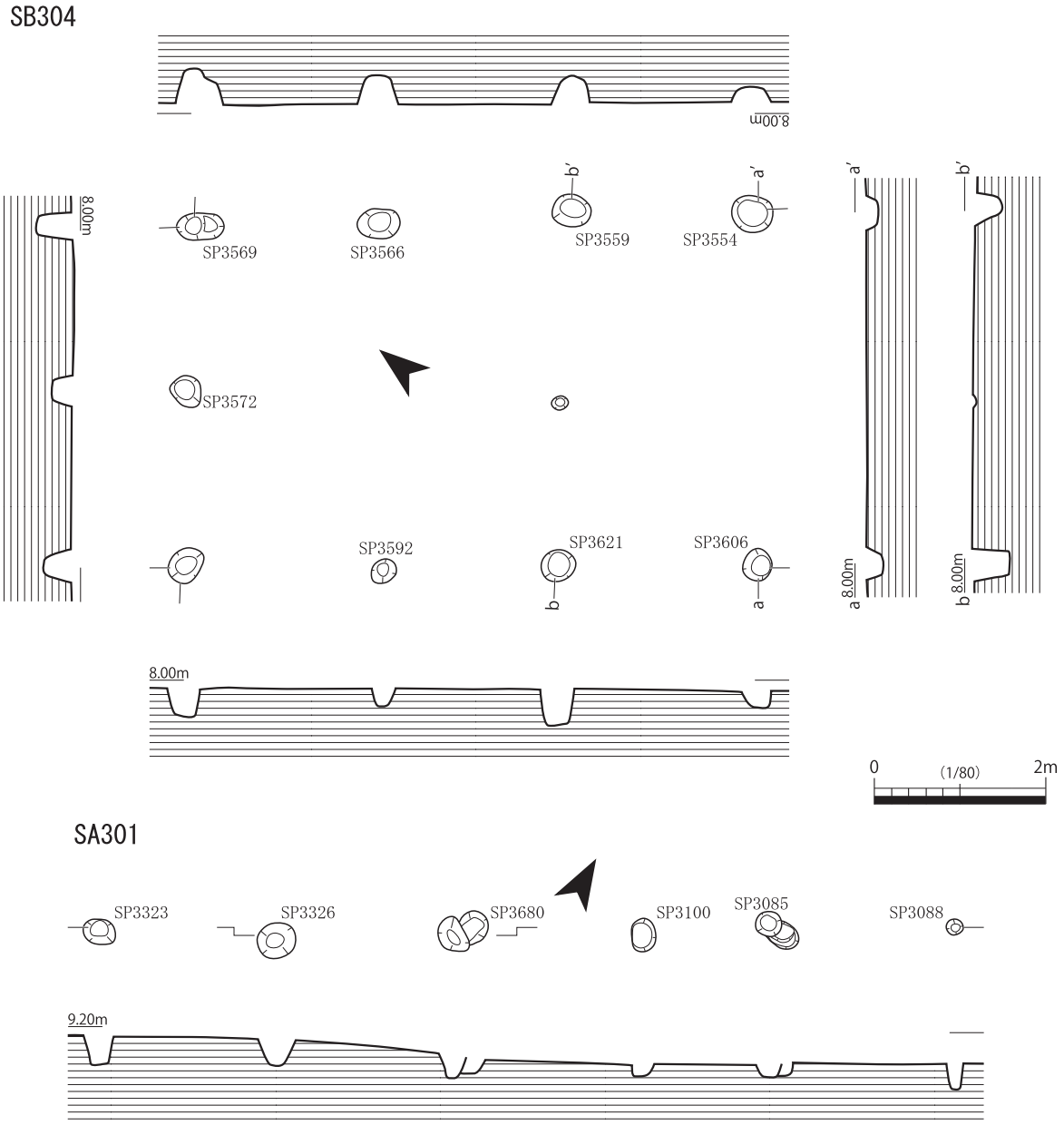
SB302



SB303



第 58 図　SB302・303 実測図



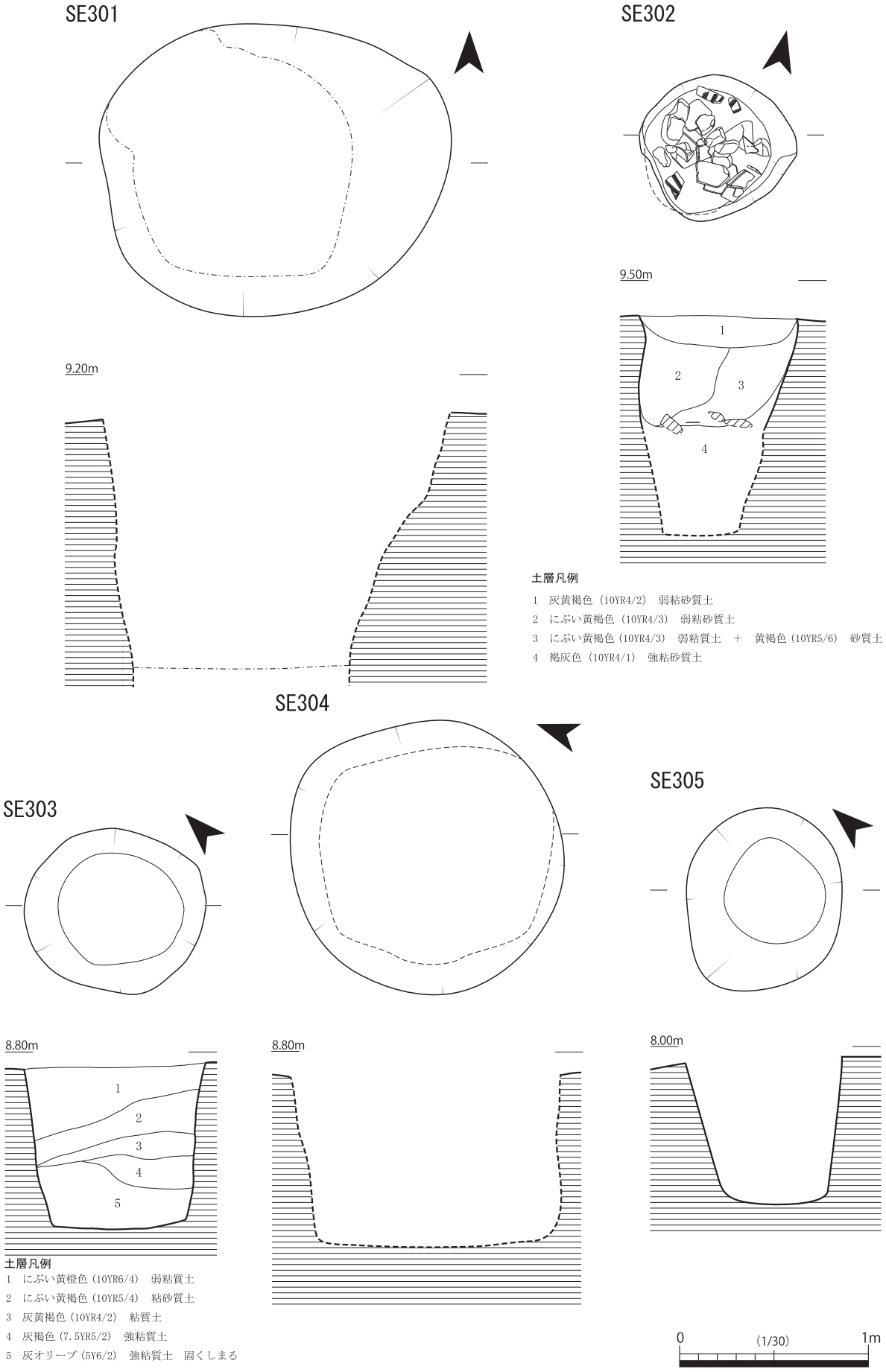
第 59 図　SB304、SA301 実測図

SB304（第 59 図　図版 30）　調査区北東側に位置する建物で、桁行３間（6.76m）×梁行２間（4.00m）、床面積 27.04 ㎡を測るが、東側の棟柱が検出されていない点で、再検証の余地がある。棟方向は N39°　W である。建物内に小規模な柱穴を検出しており、束柱を伴う可能性がある。遺物は SP3606 より土師器皿（15）が出土しており、15 世紀以降の所産である。

SA301（第 59 図　図版 30）　調査区南側に位置する柱穴列で、５間（10.00m）の規模で復元でき、棟方向は N60°　E である。SD307 や SB302 に沿って配置されており、敷地境界に付随する柵列や建物の目隠し塀などが想定できる。遺物は SP3326 より土師器皿（16・17）が出土しており、14 世紀後半～ 15 世紀の所産である。

（２）井戸

SE301（第 60 図　図版 31）　調査区中央部に位置する平面円形の土坑である。規模は長さ 190cm、幅 162cm、深さ 134cm 以上を測り、調査区内では大型の部類に含まれる。当遺構は地山が脆弱な砂層で



第 60 図　SE301・302・303・304・305 実測図

あるため、調査時の掘り込み直後から崩落する可能性が高い状況にあった。おそらく当時も同じ状況であったと考えられ、ほとんど使用されずにすぐ埋め戻された状況が推定できる。このため、他の井戸では遺物が一定量出土するのに対して、当遺構では出土遺物は皆無である。この井戸は大型土坑であるSK332と重複し、かつ、SK332より先行することを調査時に確認している。よって、この井戸の廃絶時期の下限は16世紀である。

SE302（第60図　図版31） 調査区南側に位置する平面円形の井戸である。規模は長さ82cm、幅80cm、深さ118cmを測る。埋土中位から上位にかけて遺物を多量廃棄しており、井戸においてよく認められる廃絶パターンを示す。遺物は瓦質土器足鍋（20）・擂鉢（21・22）・把手付鉢（19）・甕（23）および土師器皿（18）が出土しており、当時の器種構成を網羅する良好な一括資料といえる。出土遺物および放射性炭素年代測定（AMS法）から、この井戸の廃絶時期は14世紀後半～15世紀初頭である。

SE303（第60図） 調査区中央南東寄りに位置する平面円形の井戸である。規模は、長さ99cm、幅92cm、深さ85cmを測る。少なくとも埋土上位は人為的に埋め戻しているが、廃棄遺物はほとんどなく、瓦質土器足鍋（25）を１点図化するにとどまる。出土遺物が示す時期は14世紀後半～15世紀前半である。

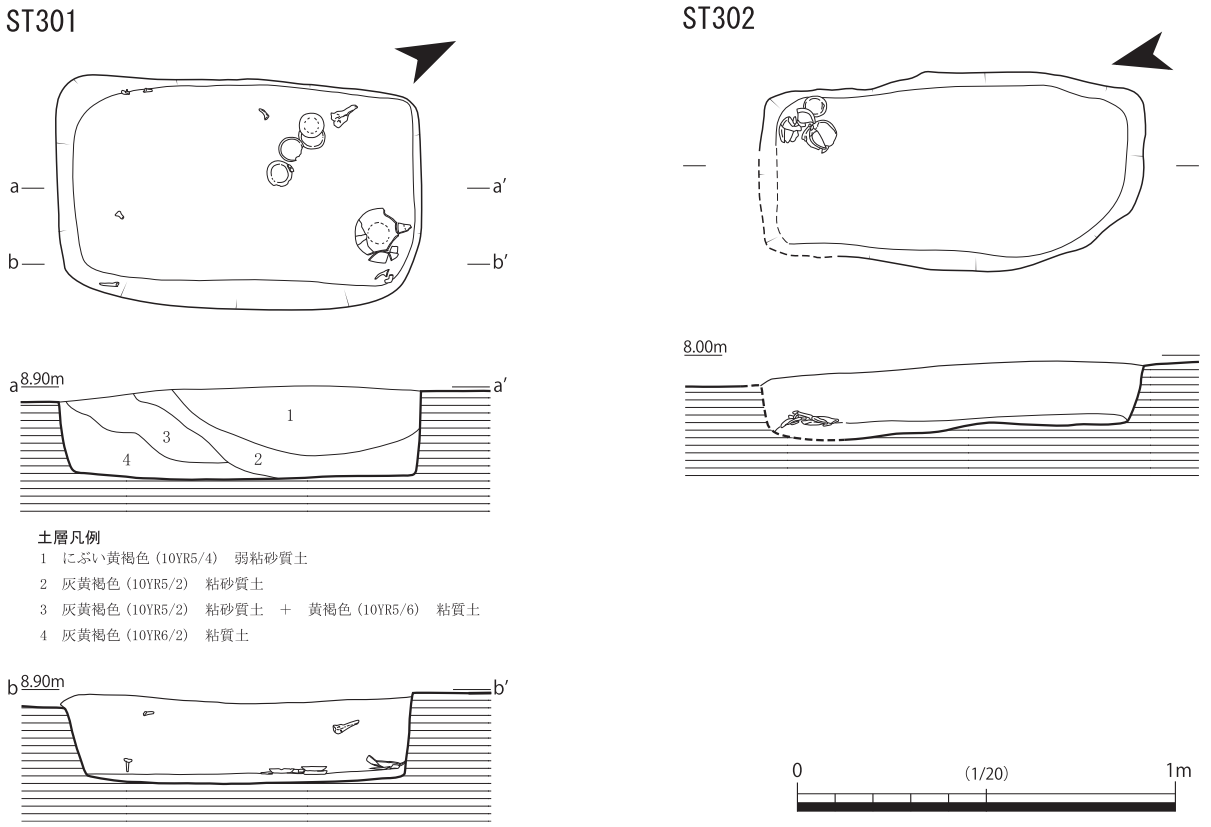
SE304（第60図　図版31） 調査区南側南東寄りに位置する平面円形の井戸である。規模は、長さ150cm、幅145cm、深さ92cmを測り、隣接するSE303より平面規模がひとまわり大きい。この井戸は廃絶時にゴミ穴として利用されたものとみられ、埋土中位から上位にかけて石とともに多量の瓦質土器（29～39）が廃棄されている。また、石については自然石のほか、石臼（40・41）が２点出土した。これらは、出土状況から一括廃棄されたものと考える。出土遺物および放射性炭素年代測定（AMS法）から、この井戸の廃絶時期は16世紀後半～末と判断する。

SE305（第60図　図版31） 調査区北東隅に位置し、平面円形の井戸である。規模は長さ100cm、幅88cm、深さ76cmを測る。廃絶時にゴミ穴として利用しており、埋土最上位にて瓦質土器や土師器皿などがまとまって出土した。出土遺物から、この井戸の廃絶時期は14世紀後半～15世紀前半である。

（３）墓

ST301（第61図　図版32） 調査区中央部に位置する土坑木棺墓である。平面隅丸長方形を呈し、規模は長さ103㎝、幅70㎝、深さ23㎝を測る。その規模から、被葬者は小児か、成人の場合は屈葬されていたことが想定できる。木棺の留め釘が原位置に近い状態で出土しており、また、掘り方も直立に近い断面形を呈する。副葬品は杯１枚、皿４枚が原位置を保って出土している。この状況からは、この副葬品が棺内に納められていたことが推定できる。また、副葬品の配置状況から、北頭位であったことが推定できる。出土遺物から、この墓の形成時期は14世紀前半である。

ST302（第61図　図版32） 調査区北東隅に位置する土坑墓である。。平面形はやや不整形な隅丸長方形を呈し、長さ102㎝、幅54㎝、深さ17cmを測る。北西隅については、柱穴SP3670によって壊されている。副葬品は、北東隅にて土師器皿が６枚、原位置を保って出土している。また、この副葬品の配置状況から、北頭位であったことが推定できる。出土遺物から、この墓の形成時期は14世紀前半である。なお、この墓を壊して形成されるSP3670からは14世紀後半～15世紀前半頃の鍋が出土しており、ST302の形成時期と矛盾しない。



第 61 図　ST301・302 実測図

（４）土坑

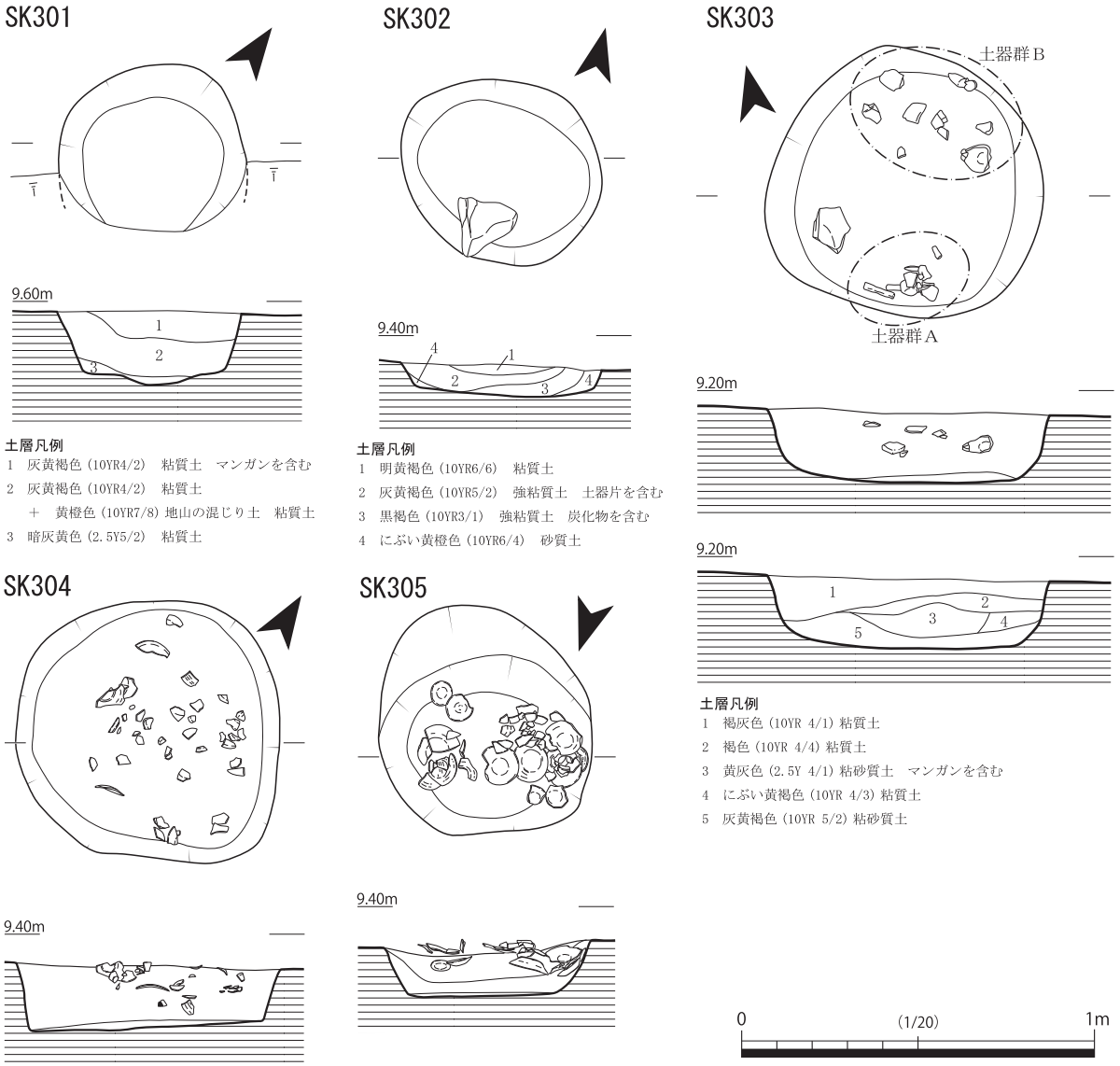
SK301（第 62 図　図版 34）　調査区北西側に位置する平面円形の土坑であり、南側は後世の地割改変時に壊されたものと判断している。規模は直径 53 ㎝、深さ 21 ㎝を測る。埋土は地山ブロックを含む人為的埋土によってほぼ充填されている。時期を示す遺物は出土していないが、埋土の特徴および周囲の状況から中世の所産と判断している。

SK302（第 62 図　図版 34）　調査区北西側に位置する平面楕円形の土坑である。規模は長さ 59 ㎝、幅 52 ㎝、深さ８㎝を測る。出土状況と土層観察からは、焼石や炭化材を廃棄し（３層）、それに蓋をするように人的に埋め戻した状況（１・２層）が推定できる。遺物は出土していないが、炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）から、13 世紀後半～ 14 世紀前半に形成されたものと推定する。

SK303（第 62 図　図版 34）　調査区北西側に位置する平面不整円形の土坑である。規模は直径 80cm、深さ 19cm を測る。土師器杯・皿を主体とした廃棄土坑とみられる。土師器皿のほかには瓦質土器足鍋の脚部が認められる。出土遺物から、14 世紀後半～ 15 世紀前半に形成されたもの推定する。

SK304（第 62 図　図版 33）　調査区西端中央に位置する平面不整円形の土坑であり、隣接する SK305 とともに、土師器皿の廃棄土坑とみられる。規模は直径 83cm、深さ 18 ㎝を測る。土師器皿のほかに炭化材が少量出土している。出土遺物および炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）から、15 世紀に形成されたものと推定する。

SK305（第 62 図　図版 33）　調査区西端中央に位置する平面不整円形の土坑であり、土師器皿を多量一括廃棄している。規模は長さ 70cm、幅 60cm、深さ 12 ㎝を測る。ほかに炭化材が少量出土している。出土遺物および炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）から､15 世紀に形成されたものである。

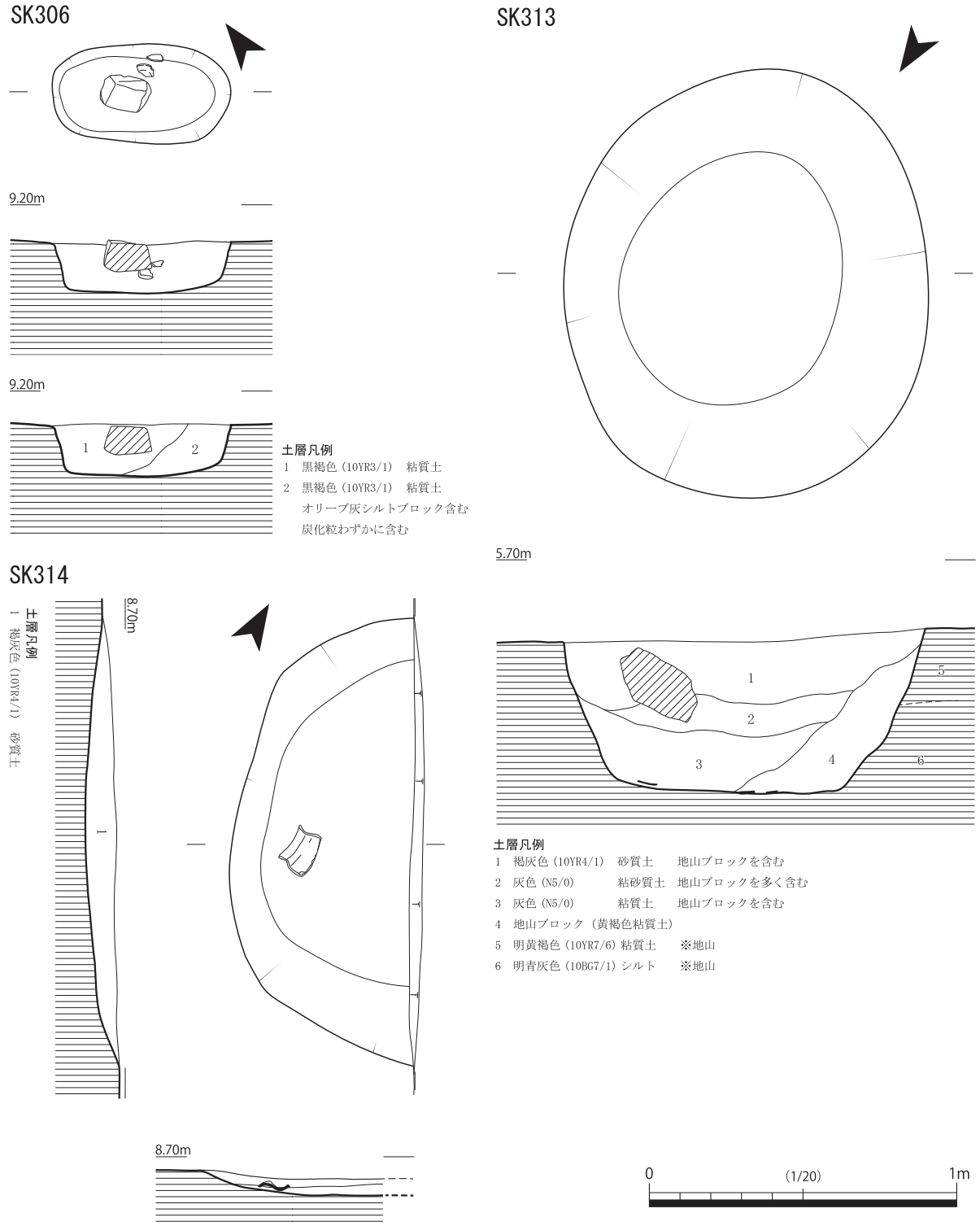


第 62 図　SK301・302・303・304・305 実測図

SK306（第 63 図　図版 34）　調査区北西側南寄りに位置する平面長楕円形の土坑である。規模は長さ 57 ㎝、幅 33 ㎝、深さ 15 ㎝を測る。埋土は明らかに人為的埋戻しによるものであり、石と共に土師器皿（92）が少量出土している。出土遺物から、この土坑の廃絶時期の上限は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

SK313（第 63 図　図版 34）　調査区南端に位置する平面楕円形の土坑である。規模は長さ 140 ㎝、幅 122 ㎝、深さ 50 ㎝を測る。隣接する SK320 とともに、柱穴の分布を避けるように配置されており、用途は不明ながらも建物付近に付随的に配置されていたものと考える。埋土は明らかに人為的埋戻しによるものであり、大型の石を廃棄している。また、底面直上で土師器皿が数点出土している。完形品ではないため土坑機能時に伴うものとは言い難いが、廃絶直前の時期を示す資料といえる。出土遺物が示す時期は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

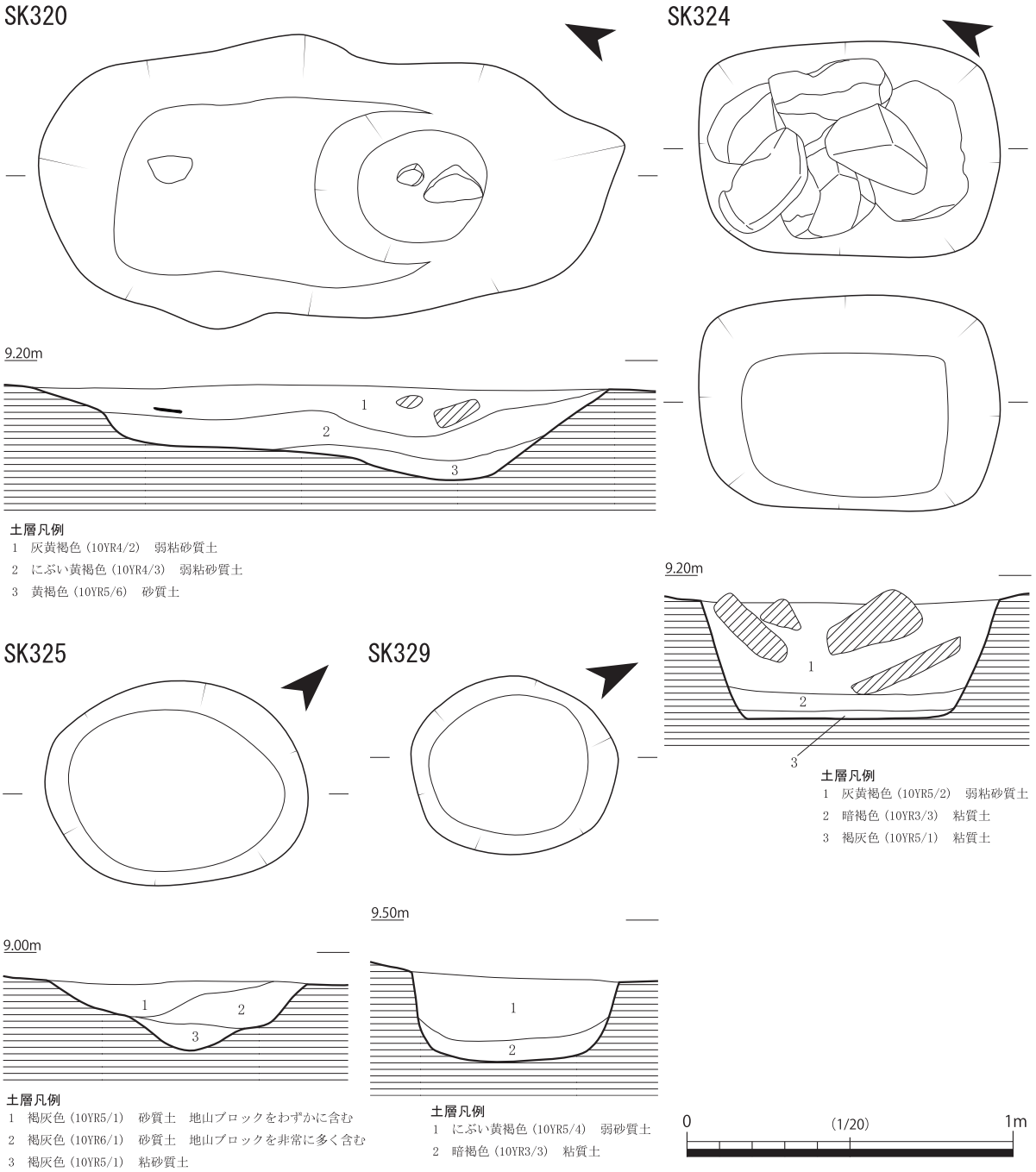
SK314（第 63 図　図版 34）　調査区南東側に位置する平面不整円形の土坑である。規模は長さ 145 ㎝、深さ 10 ㎝であり、幅は調査区外へ伸びるため不明である。埋土は遺物包含層と類似しているため、



第 63 図　SK306・313・314 実測図

人的な埋土かどうかの判断はつかない。底面直上より瓦質土器火鉢片（96）が出土しており、出土遺物から、16 世紀後半以降の埋没である。

SK320（第 64 図　図版 35）　調査区南端に位置する平面長楕円形の２段土坑である。規模は長さ 179 ㎝、幅 86 ㎝、深さ 27 ㎝を測る。隣接する SK313 とともに、柱穴の分布を避けるように配置されており、用途は不明ながらも建物付近に付随的に配置されていたものと考える。土層からは、あ

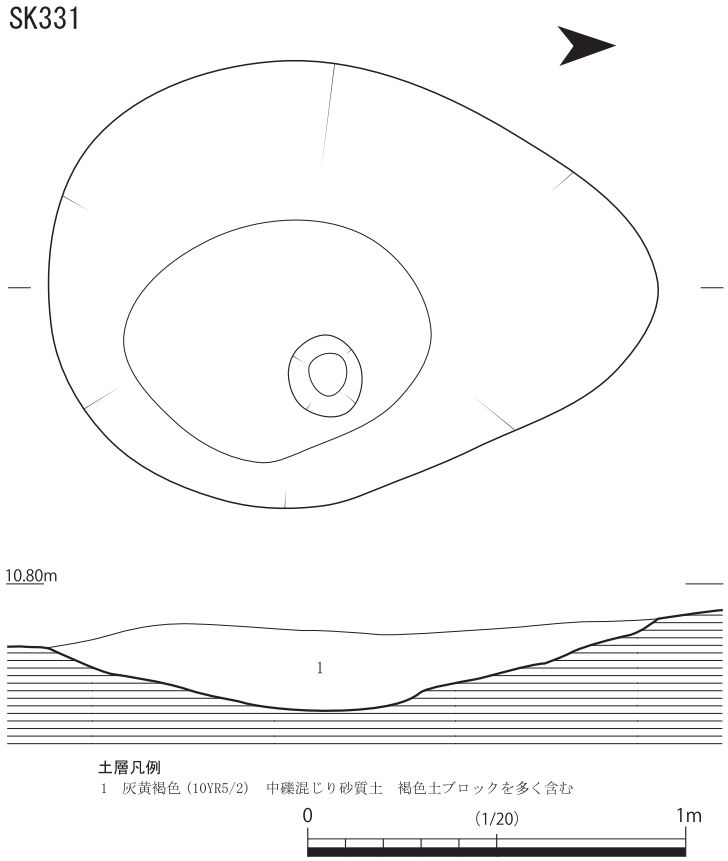


第 64 図　SK320・324・325・329 実測図

る程度人為的に埋め戻した後（２層）、石や瓦質土器などを廃棄した状況が読みとれる。出土遺物から、廃絶時期の上限は 15 世紀中頃である。

SK324（第 64 図　図版 35）　調査区中央南寄りに位置する平面隅丸長方形の土坑である。規模は、長さ 97cm、幅 75 cm、深さ 35 cmを測る。土坑内に大型の自然石をまとめて廃棄している状況で検出された。土師器片・瓦質土器片が出土しており、中世の所産である。

SK325（第 64 図　図版 35）　調査区中央に位置する平面楕円形の土坑である。規模は、長さ 80 cm、幅 64 cm、深さ 21 cmを測る。土層および検出状況から、２つの土坑が重複している可能性も考えられるが、断定するに至っていない。埋土は人為的な埋戻しによるものであり、遺物は瓦質土器足鍋



第 65 図　SK331 実測図

片（102）が出土している。出土遺物から、この土坑の廃絶時期の上限は 15 世紀後半～ 16 世紀である。

SK329（第 64 図　図版 35）　調査区中央南西寄りに位置する平面楕円形の土坑である。規模は、長さ 63 ㎝、幅 55 ㎝、深さ 25 ㎝を測る。土師器皿（105）が出土ており、廃絶時期の上限は16 世紀前半である。

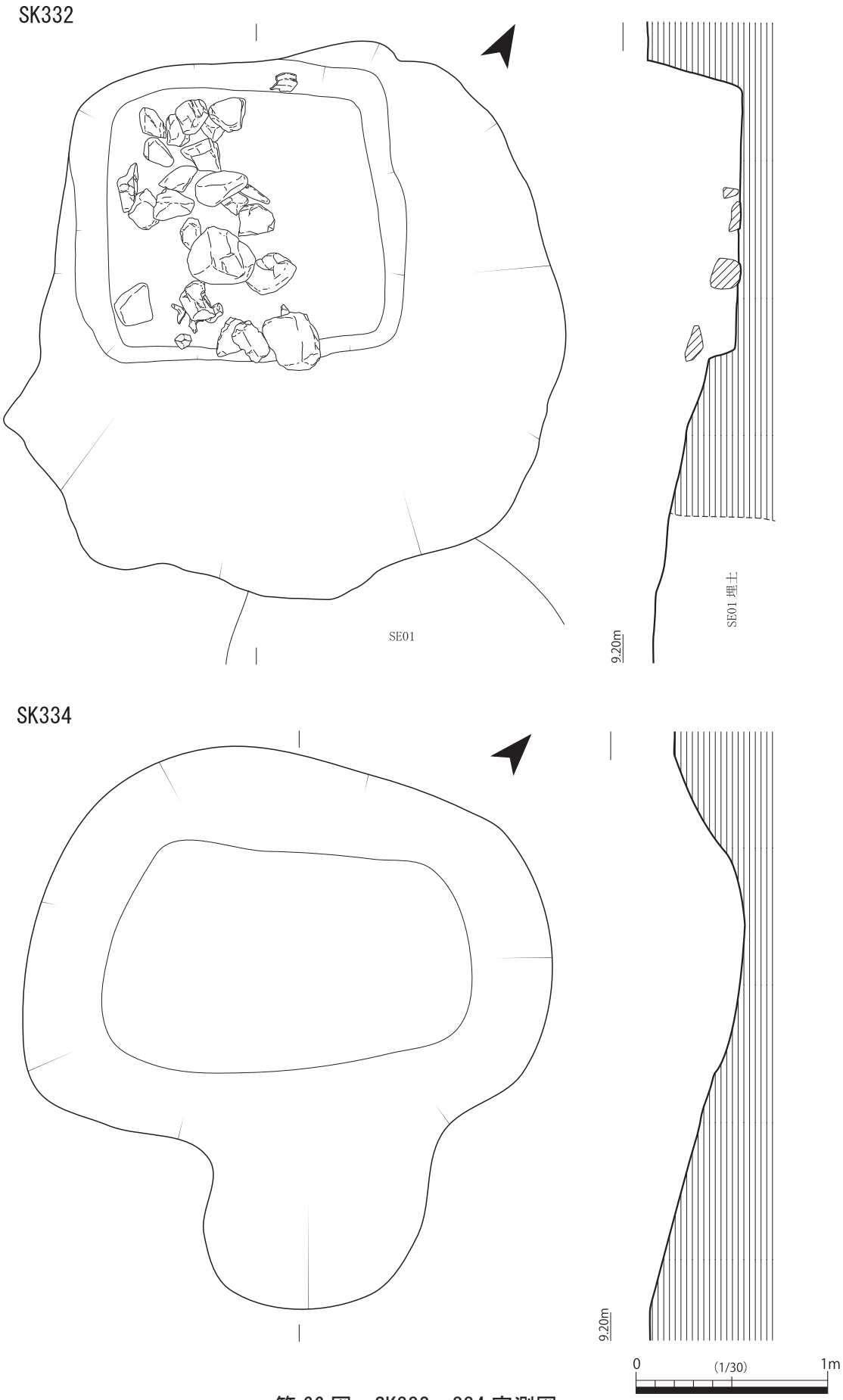
SK331（第 65 図　図版 35）　調査区南西側に位置する、平面楕円形の土坑である。規模は、長さ 162 ㎝、幅 119 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。内部にて小穴を検出しているが、先後関係は不明である。埋土は地山ブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻している。土師器片・瓦質土器片が出土しており、中世のの所産である。

SK332（第 66 図　図版 36）　調査区中央に位置する平面不整円形の大型２段土坑であり、SE301 を一部壊して形成される。規模は直径 315 ㎝、深さ 49 ㎝を測る。隣接する SK334 とともに、柱穴の分布を避けるように配置されており、用途は不明ながらも、建物付近に付随的に配置されていたものと推定する。SK334 とは重複関係は認められず、対をなすように配置されている。このことから、同時併存していたか、もしくは、連続的に造り替えられた状況が推定できる。

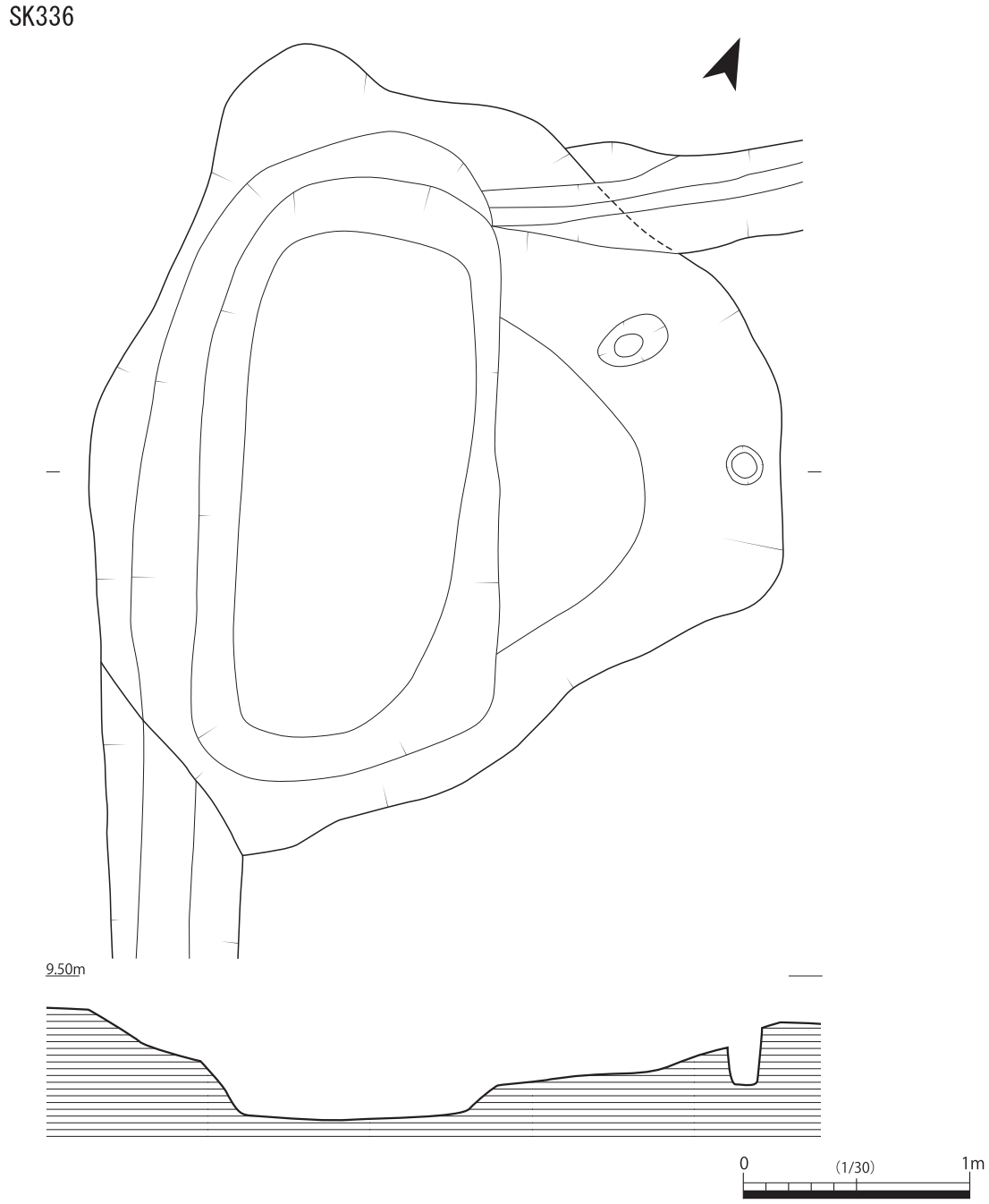
下段部はほぼ正方形の土坑状になっており、そこに、大型の自然石とともに瓦質土器足鍋（107 ～ 111）・鉢（112）・擂鉢（113）・火鉢（114・115）や土師質土器鉢（106）などの破片が廃棄されている。出土遺物から、この土坑の廃絶時期の上限は 16 世紀である。

SK334（第 66 図　図版 36）　調査区中央に位置する平面不整形の大型２段土坑である。規模は長さ 300 ㎝、幅 282 ㎝、深さ 40 ㎝を測る。隣接する SK332 とともに、柱穴の分布を避けるように配置されており、用途は不明ながらも、建物付近に付随的に配置されていたものと推定する。SK332 とは重複関係は認められず、対をなすように配置されている。このことから、同時併存していたか、もしくは、連続的に造り替えられた状況が推定できる。また、この土坑は溝 SD312 を壊して形成されていることを確認している。

SK332 と同様、下段部に大型の自然石とともに瓦質土器足鍋（117 ～ 120）・火鉢（124・125）などの破片などが廃棄されている。出土遺物から、この土坑の廃絶時期の上限は 16 世紀であり、SK332 とほぼ同時期のものと判断できる。



第 66 図　SK332・334 実測図



第 67 図　SK336 実測図（１）

SK336（第 67・68 図　図版 37）　調査区南側西寄りに位置する平面不整形の大型２段土坑である。規模は、長さ 360 ㎝、幅 310 ㎝、深さ 46 ㎝を測る。柱穴の密集区の縁辺で、かつ、背後に丘陵が迫る位置に配置されていることから、用途は不明ながらも、建物の敷地内奥部に配置されていることが推定できる。なお、この土坑内にて、柱穴を検出しており、また、溝 SD307・311 と重複しているが、先後関係は明確ではない。

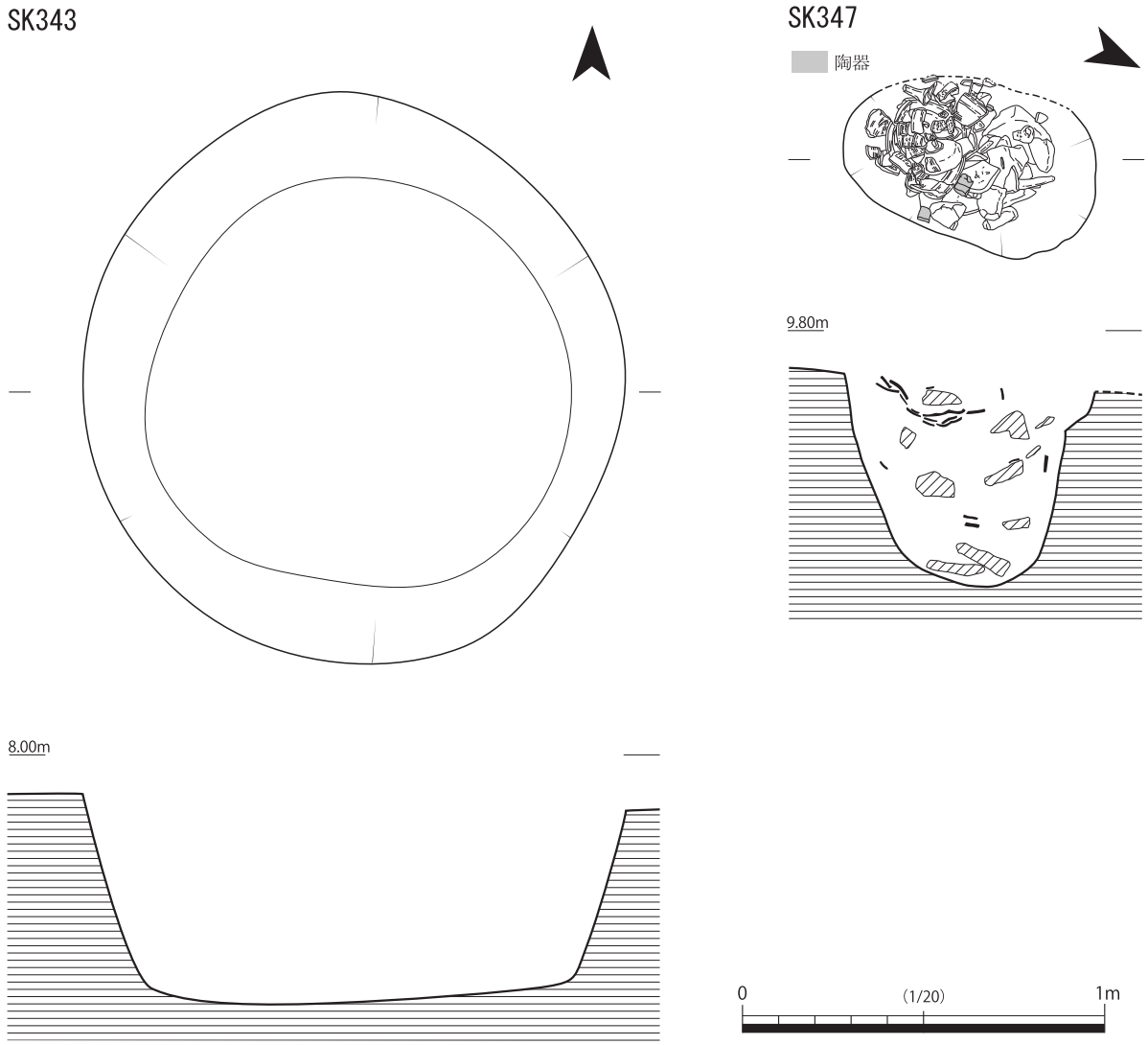
この土坑内には、何らかの石組に使用されていたとみられる大量の自然石とともに、瓦質土器や陶器などが廃棄されている。こうした状況は SK332・334 と同様であるが、自然石の量が圧倒的に多い。憶測の範疇であるが、背後に丘陵が迫っていることとの関連が想起できる。

第 68 図　SK336 実測図（２）

出土遺物では、瓦質土器片が主体を占める点で SK332・334 と同様であるが、朝鮮陶器瓶（徳利）のほぼ完形品（132）が出土したことは特筆される。このほか、炭化材が少量出土している。出土遺物および炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）から、この土坑の廃絶時期の上限は 16 世紀である。

SK343（第 69 図　図版 36）　調査区北東側に位置する平面円形の大型土坑である。規模は、直径 158 ㎝、深さ 59 ㎝を測る。井戸である可能性もあるが、浅めの断面形を呈しているため、断定するには至っていない。埋土中には土師器皿・瓦質土器羽釜・鍋などのほか、炭化材が出土している。出土遺物および放射性炭素年代測定（AMS 法）から、埋没時期の上限は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

SK347（第 69 図　図版 36）　調査区西端中央に位置する平面楕円形の土坑であり、西側の一部は調査区外へ伸びる。規模は長さ 71 ㎝、幅 45 ㎝以上、深さ 56 ㎝を測る。土坑内には自然石とともに、ほぼ完形の瓦質土器足鍋が４点と、信楽焼陶器壺片（159･160）などが極めて密に詰め込まれている。この状況から、廃棄自体を目的に掘削されたゴミ穴と推定している。廃棄の手順としては、大型でかさばる石を先に投棄し、ある程度埋まった段階で瓦質土器足鍋の鍋部を重ねて中型・小型の石とともに廃棄している。出土遺物から、この土坑の形成時期は 15 世紀後半～ 16 世紀である。



第 69 図　SK343・347 実測図

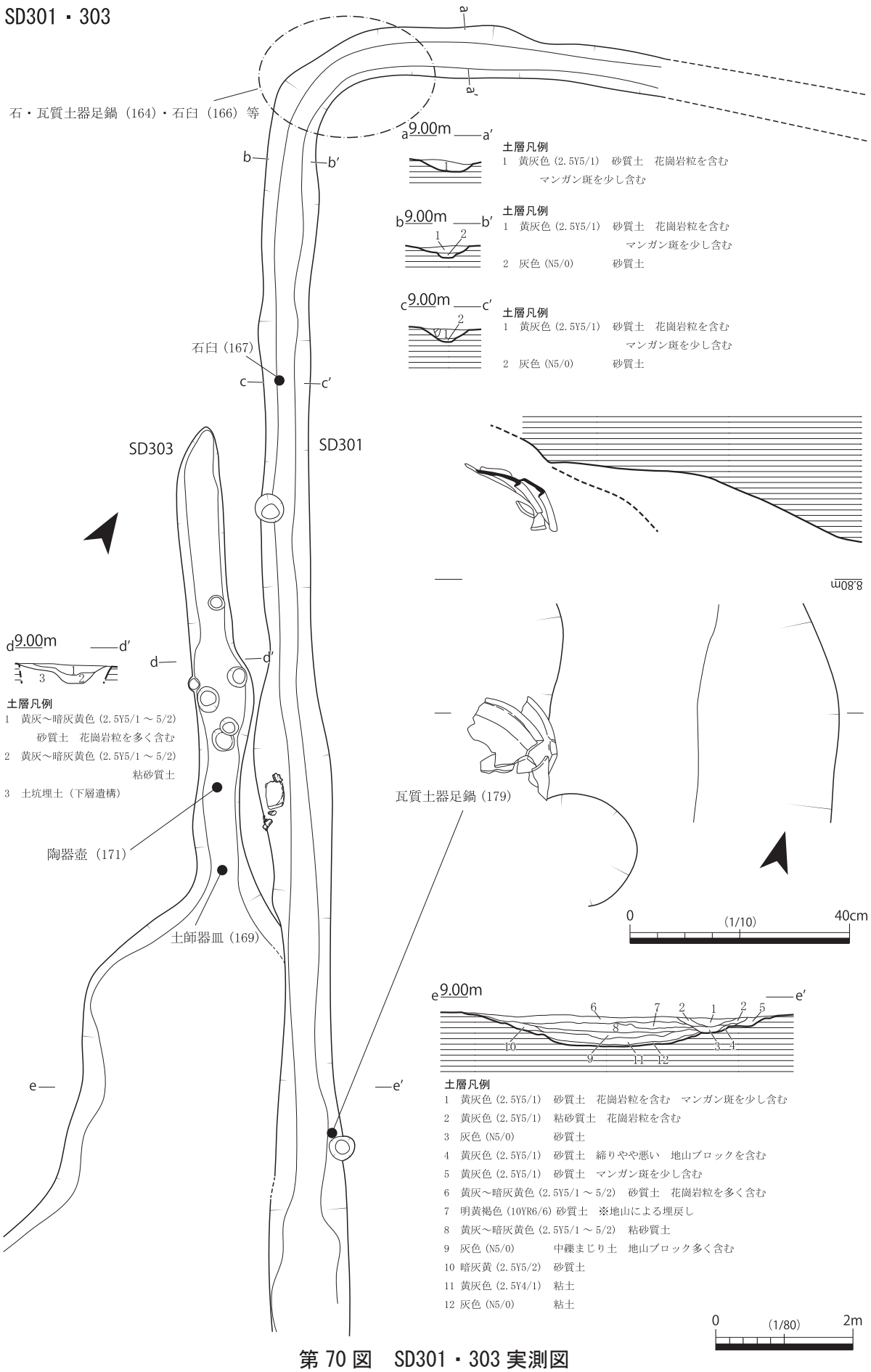
（５）溝

SD301（第 70 図　図版 38）　調査区南東側に位置し、Ｌ字に屈曲する区画溝であり、Ｌ字部分を頂点に東側と南側へそれぞれ緩やかに下る。確認長は 34.20 m、幅 108 ㎝、標高差 20 ㎝である。SD303 と重複しており､SD303 より後出することを確認している。両者の役割は類似していたものとみられ、SD303 から SD301 へ付け替えがなされた可能性も想定できる。

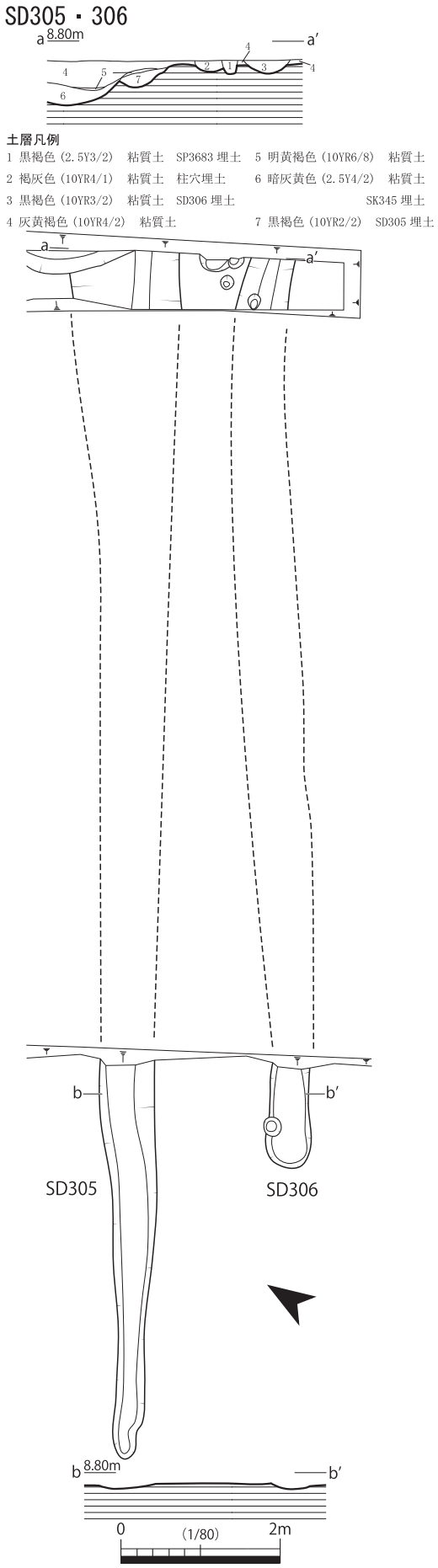
Ｌ字に屈曲する部分と、南側のやや膨らむ部分では石や瓦質土器などがややまとまって出土している。そのほとんどは廃棄によるものと考えるが、南側の膨らむ部分では大型の角石が平坦面を水平に保って出土しており、当初から意図的に設置されていた可能性がある。

出土遺物には土師器皿、瓦質土器足鍋（164・179)、石臼（166・167）などがある。これらの出土遺物から、この溝の埋没時期の上限は 16 世紀後半～末である。

SD303（第 70 図　図版 38）　調査区南東側に位置する溝であり、南側の低地部分に向けて流れ込む。確認長 13.32 m、最大幅 326 ㎝であり、標高差 26 ㎝である。SD301 と重複しており、SD301 に壊されていることを確認している。なお、両者を区画溝と推定する場合、SD303 は SD305 と同時併存し



第 70 図　SD301・303 実測図



第 71 図　SD305・306 実測図

てＬ字の区画をなしていたことが推定される。

SD303 に確実に伴う遺物としては、土師器皿（169・170）、陶器壺の破片（171）があり、他に SD301 と重複する部分で瓦質土器などが多量に出土している。出土遺物および SD301 より先行することから、この溝は 16 世紀前半を大きく降らない時期に埋没したものと考える。

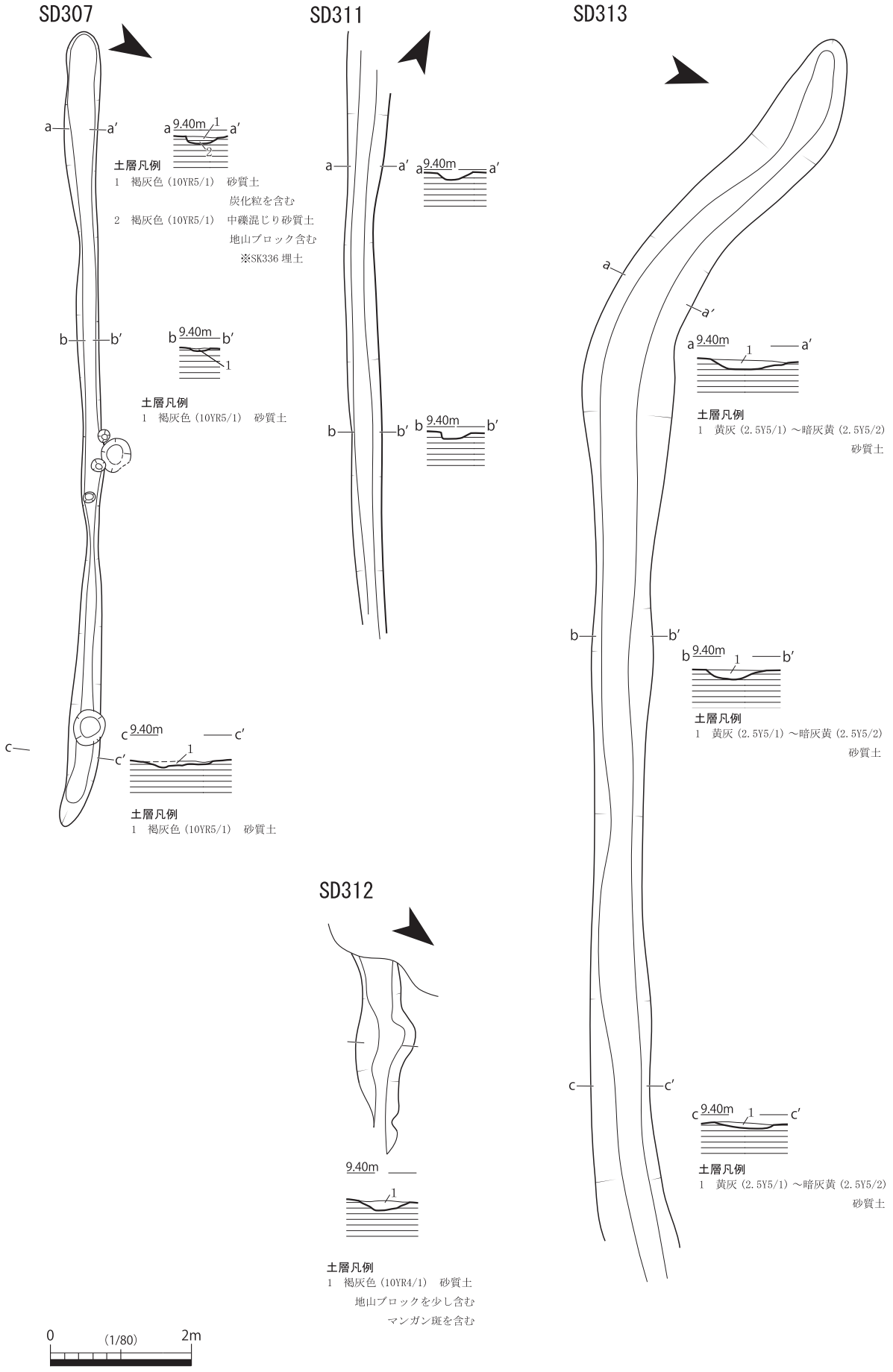
SD305（第 71 図　図版 39）　調査区南東側に位置する区画溝であり、東に向けて緩やかに下る。確認長 15.2 m、幅 128 cm、標高差 32 cmである。その配置から、SD301 と同時併存してＬ字状の区画をなしていた可能性があると考える。また、SD306 とほぼ並行しており、どちらかに付け替えがなされた可能性が高いと考えるが、先後関係は把握できていない。

土師器片・瓦質土器足鍋片が出土しており、中世後半以降の埋没と判断できる。

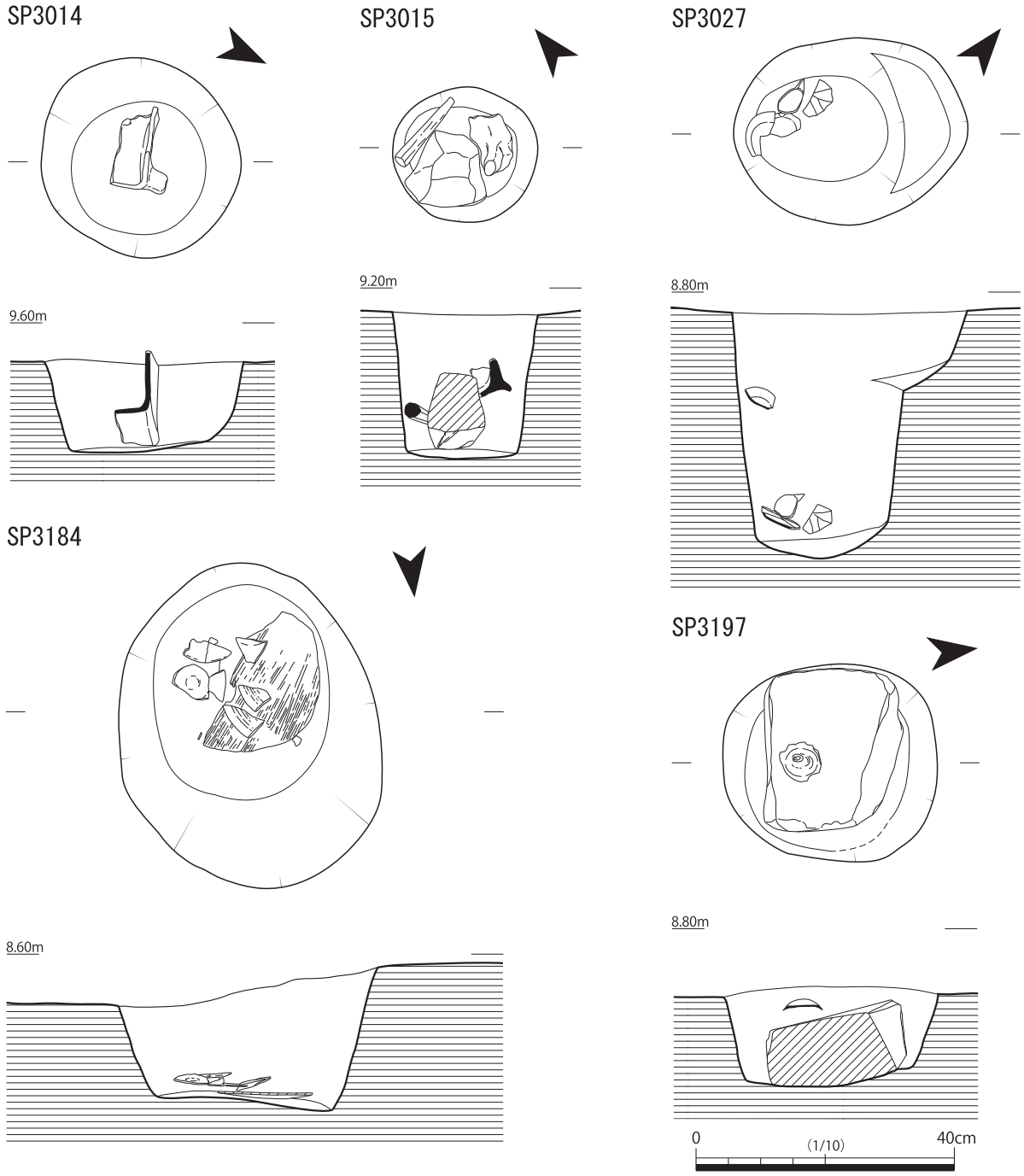
SD306（第 71 図　図版 39）　調査区南東側に位置する区画溝であり、東側に向けて緩やかに下る。確認長は 11.44 m、幅 62cm、標高差 16cm である。SD307 の延長線上に位置していることから、両者は同時併存し、敷地等の境界を示していたことが推定できる。また、SD305 とほぼ並行しており、どちらかに付け替えがなされた可能性が高いと考えるが、先後関係は把握できていない。

時期を限定できる出土遺物は出土していないが、中世後半以降の埋没と判断できる。

SD307（第 72 図　図版 39）　調査区南側に位置する区画溝であり、東側に向けて緩やかに下る。確認長は 11.28 m、幅 44 cm、標高差 8 cmである。その配置から、SD311 と同時併存し、Ｌ字状の区画をなしていた可能性が高いと考える。また、SD306 の延長線上に位置していることから、両者は同時併存し、敷地等の境界を示していたことが推定できる。なお、SK336 と重複しており、調査時には不明瞭ながらも SD307 が後出すると認識したが、明確には断定できない。出土遺物から、中世後半以降の埋没である。



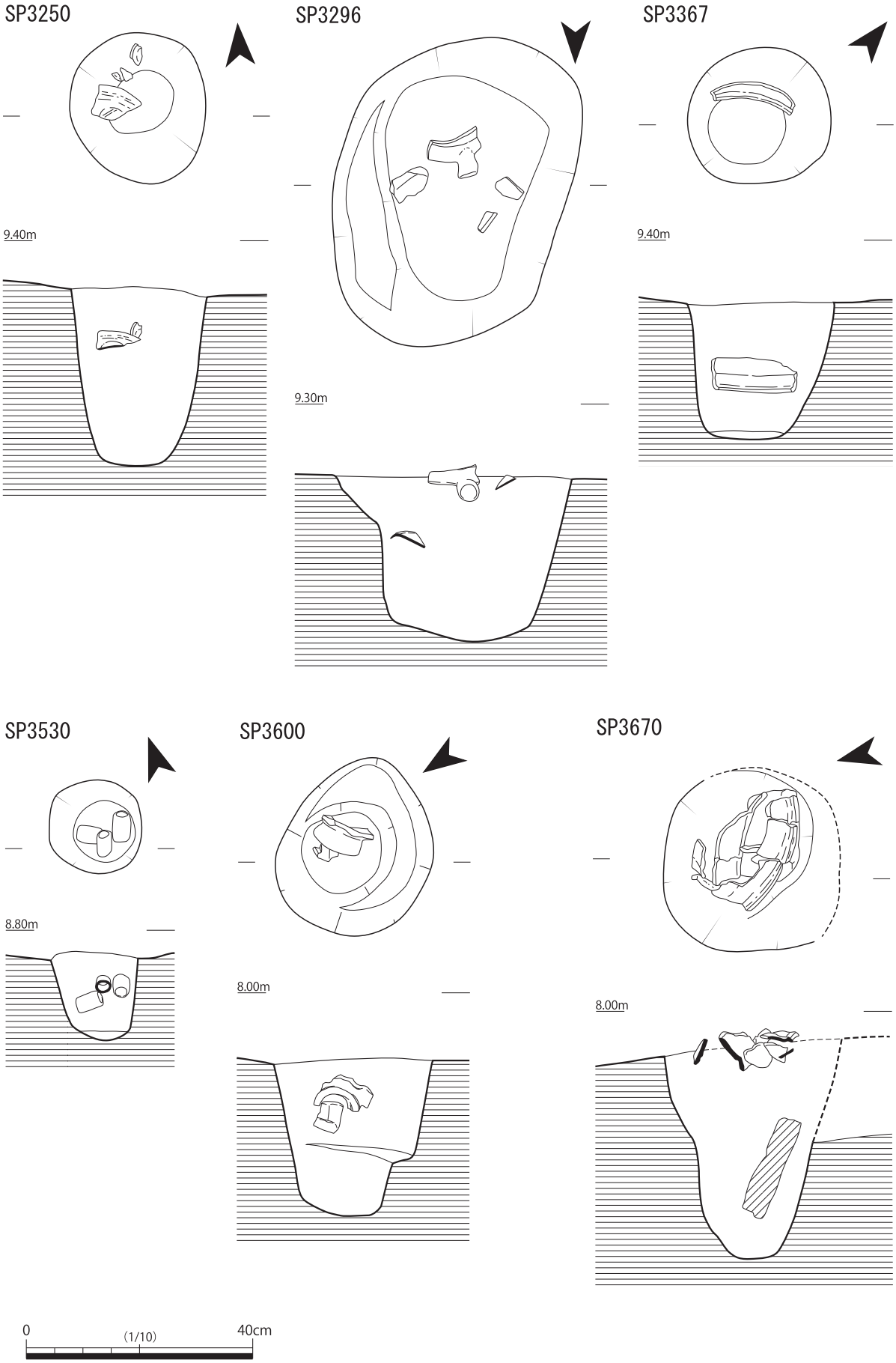
第 72 図　SD307・311・312・313 実測図



第 73 図　SP3014・3015・3027・3184・3197 実測図

SD311（第 72 図）　調査区南側に位置する区画溝であり、南側に向けて緩やかに下る。確認長 8.00 m、幅 60 cm、標高差 16 cmである。その配置から、SD307 と同時併存し、L 字状の区画をなしていた可能性が高いと考える。また、SK336 と重複しているが、先後関係は把握できていない。出土遺物から、中世後半以降の埋没である。

SD312（第 72 図　図版 39）　調査区中央に位置する溝であり、東側に向けて緩やかに下る。確認長 2.68 m、幅 84 cm、標高差 7 cmである。この溝は、SK334 に壊されていることが確認できている。したがって、この溝の埋没時期の下限は 16 世紀に求められる。



第 74 図　SP3250・3296・3367・3530・3600・3670 実測図

SD313（第 72 図　図版 39） 調査区中央西寄りに位置する溝であり、東側に向けて下る。確認長は 17.84 m、幅 130 ㎝、標高差 14 ㎝である。丘陵および微高地と低地の境において、地形に沿わして形成されており、北西からの雨水等が南側の居住域に侵入することを防ぐための排水溝ではないかと考える。出土遺物から、15 世紀以降の埋没であろう。

（６）柱穴

SP3014（第 73 図　図版 39） 調査区北西側に位置し、直径 31 ㎝、深さ 14㎝ を測る。出土状況から、柱抜き取り後に瓦質土器火鉢（212）を廃棄したものと考える。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 16 世紀である。

SP3015（第 73 図　図版 39） 調査区北西側に位置し、直径 22 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。出土状況から、柱抜き取り後に石と瓦質土器足鍋の脚部を廃棄したものと考える。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

SP3027（第 73 図　図版 39） 調査区南東側に位置し、直径 30 ㎝、深さ 38㎝ を測る。出土状況から、柱抜き取り後に土師器杯・皿を廃棄したものと考える。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

SP3184（第 73 図　図版 40） 調査区中央南東寄りに位置し、長さ 51 ㎝、幅 40 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。底面付近にて、曲げ物の蓋もしくは底板が置かれており、そのほぼ直上にて土師器皿片が捨て置かれていた。柱穴としているが廃棄土坑の可能性もある。出土遺物の示す時期は 15 世紀末である。

SP3197（第 73 図　図版 40） 調査区中央南東寄りに位置し、直径 34 ㎝、深さ 15 ㎝を測る。平坦面を水平近くに据えた石が置かれており、柱を受ける根石であった可能性がある。この直上付近からは、土師器杯（244）が出土している。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 14 世紀と推定する。

SP3250（第 74 図　図版 40） 調査区南側西よりに位置し、直径 27 ㎝、深さ 31 ㎝を測る。出土状況から、柱抜き取り後に土師器皿（249）を廃棄したものと推定できる。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 15 世紀中頃である。

SP3296（第 74 図　図版 40） 調査区南側に位置し、長さ 57 ㎝、幅 41 ㎝、深さ 29 ㎝を測る。出土状況から、柱抜き取り後に瓦質土器などの破片を廃棄したものと考える。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 16 世紀である。

SP3367（第 74 図　図版 41） 調査区南側やや北寄りに位置し、直径 25 ㎝、深さ 24 ㎝を測る。瓦質土器鍋（266）が出土しているが、出土状況からは、柱を立てる際と抜き取り後の廃棄の両方の可能性が考えられ、判断がつかない。出土遺物の示す時期は 16 世紀後半である。

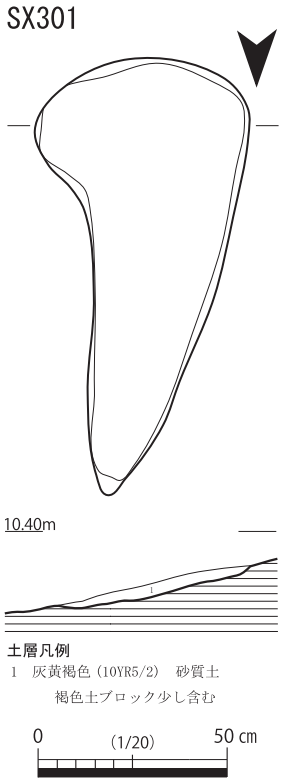
SP3530（第 74 図　図版 41） 調査区北東側に位置し、直径 17 ㎝、深さ 15 ㎝を測る。ここからは、土錘４点が意図的に入れられている状況で出土している。出土状況をおさえられたのは３点であり、残りの１点は掘削中に出土している。柱穴としているが、土錘を入れること自体を目的に掘削された可能性もある。中世の所産である。

SP3600（第 74 図　図版 41） 調査区北東側に位置し、長さ 32 ㎝、幅 28 ㎝、深さ 28 ㎝を測る。出土状況から、柱抜き取り後に土師器托（300）を廃棄したものと考える。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 13 世紀後半である。

SP3670（第 74 図　図版 41）　調査区北東側に位置し、復元直径 34 ㎝、深さ 37 ㎝を測る。この柱穴は、墓 ST301 を壊して形成されている。出土状況から、柱抜き取り後に大きめの平石を投棄し、その後に瓦質土器鍋（309）を廃棄したものと考える。出土遺物から、この柱穴の廃絶時期の上限は 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。

（７）性格不明遺構

SX301（第 75 図）　調査区南西側に位置する平面不整形の浅い土坑である。規模は、長さ 116 ㎝、幅 56 ㎝、深さ 4 ㎝を測る。埋土は遺物包含層に類似しており、人為的に形成されたどうかの判断がつかない。土師器片・瓦質土器片などが出土しており、中世以降の埋没である。



第 75 図　SX301 実測図

第 19 表　下瑞光寺地区（２区）掘立柱建物・柵列一覧表　※：南東隅の柱穴から測れなかった場合

遺構番号	規模（間）	棟方向	桁行（ｍ）建物の南東隅から	梁行（ｍ）建物の南東隅から	床面積（㎡）	関連柱穴	出土遺物	時代	備　考
SB301	3 × 2	N60°　E	7.68 (2.80・2.20・2.68)	5.60 (304・256)	43.01	SP3001、SP3002、SP3003、SP3004、SP3005、SP3006、SP3008、SP3010、SP3012、SP3032	土師器椀、瓦質土器鍋（足鍋）・鉢、羽釜	鎌倉～室町	構成柱穴 11 個
SB302	2 × 1	N58°　E	5.00 (2.50・2.50)	2.50	12.50	SP3261、SP3304、SP3312、SP3387、SP3388	土師器皿、瓦質土器擂鉢	室町	構成柱穴 7 個
SB303	3 × 2	N57°　E	※7.00 (2.40・2.20・2.40)	※4.72 (2.50・2.22)	33.04	SP3022、SP3028、SP3033、SP3089、SP3129	瓦質土器鍋（足鍋）・擂鉢・湯釜	室町	構成柱穴 7 個以上
SB304	3 × 2	N39°　W	6.76 (2.36・2.04・2.36)	4.00 (1.76・2.04)	27.04	SP3554、SP3559、SP3566、SP3569、SP3572、SP3592、SP3606、SP3621	土師器皿、土師質土器鍋	室町	構成柱穴 10 個
SA301	－	N60°　E	10.00 (2.08・2.02・2.20・1.50・2.20)	－	－	SP3085、SP3088、SP3100、SP3323、SP3326、SP3680	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	構成柱穴 6 個

第 20 表　下瑞光寺地区（２区）井戸一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SE301	円形	－	190	162	最大134	―	室町	
SE302	円形	－	82	80	最大118	土師器皿、瓦質土器足鍋・擂鉢・把手付鉢・甕、鉄刀子	室町	
SE303	円形	－	99	92	85	瓦質土器足鍋	室町	
SE304	円形	－	150	145	最大92	瓦質土器鍋・足鍋・把手付鍋・擂鉢・火鉢・湯釜、石臼、鉱滓	戦国	
SE305	円形	－	100	88	76	土師器皿、瓦質土器鍋・足鍋・擂鉢	室町	
SE306	円形	－	38	38	64	土師器甕、須恵器杯、焼土塊	平安	

第 21 表　下瑞光寺地区（２区）墓一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
ST301	隅丸長方形	N58°　E	103	70	23	土師器杯・皿、瓦質土器、鉄釘	鎌倉～室町	
ST302	隅丸長方形	N22°　E	102	54	17	土師器皿	鎌倉～室町	

第 22 表　下瑞光寺地区（２区）土坑一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SK301	円形	－	53	48	21	土師器皿、炭化材	室町	擂鉢状
SK302	楕円形	－	59	52	8	土師器皿、炭化材	鎌倉～室町	皿状
SK303	円形	－	80	79	19	土師器杯・皿、瓦質土器足鍋・擂鉢、須恵器	室町	擂鉢状
SK304	円形	－	83	76	18	土師器皿、炭化材	室町	擂鉢状
SK305	不整円形	N37°　W	70	60	12	土師器皿、炭化材	室町	皿状
SK306	楕円形	N40°　W	57	33	15	土師器皿、土師質土器鍋	室町	擂鉢状
SK307	楕円形	N43°　E	110	60	23	土師器高台付皿	鎌倉～室町	
SK310	楕円形	N82°　W	111	76	16	土師器皿、瓦質土器	室町	
SK312	楕円形	N31°　W	115	68	8	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	
SK313	楕円形	N15°　W	140	122	50	土師器皿、瓦質土器鍋・足鍋	室町	擂鉢状
SK314	不整円形	N30°　W	145	最大 59	10	土師器皿、瓦質土器足鍋・火鉢	戦国	皿状　北東側調査区外のため不明
SK319	円形	－	58	57	23	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	
SK320	楕円形	N25°　W	179	86	27	土師器皿、瓦質土器鍋・擂鉢	室町	大型２段土坑
SK322	楕円形	N83°　W	163	96	16	―	―	
SK323	楕円形	N44°　E	85	60	12	―	―	
SK324	隅丸長方形	N9°　E	97	75	35	土師器皿、瓦質土器鍋・擂鉢	室町	擂鉢状
SK325	楕円形	N64°　E	80	64	21	土師器、瓦質土器足鍋	室町後期～戦国	擂鉢状
SK327	円形	－	72	68	15	土師器、瓦質土器鍋	室町	
SK328	不整形	－	187	95	64	土師器、瓦質土器鍋	室町	
SK329	楕円形	－	63	55	25	土師器皿	室町	擂鉢状
SK330	楕円形	N19°　W	77	62	9	土師器皿、瓦質土器	室町	
SK331	楕円形	N8°　W	162	119	20	土師器皿、瓦質土器	室町	皿状
SK332	不整円形	－	315	300	49	瓦質土器足鍋・擂鉢・火鉢・湯釜・土師質土器鉢	室町後期～戦国	大型２段土坑
SK333	楕円形	N88°　W	99	74	14	―	―	
SK334	不整形	－	300	282	40	瓦質土器鍋・足鍋・擂鉢・鉢・火鉢・甕、青磁椀	室町後期～戦国	大型２段土坑
SK335	楕円形	N59°　E	63	43	15	土師器皿、瓦質土器足鍋	―	
SK336	不整形	－	360	310	46	土師器皿、陶器瓶（徳利）、瓦質土器足鍋・把手付鍋、陶器甕（備前焼）・壺か（常滑焼）、	室町後期～戦国	大型２段土坑
SK337	円形	－	89	80	24	土師器	室町	
SK338	円形	－	151	157	17	土師器、瓦質土器足鍋	室町	
SK341	楕円形	N40°　E	138	96	17	―	―	
SK342	楕円形	N50°　W	123	84	10	土師器皿、瓦質土器	室町	
SK343	円形	－	158	150	59	土師器皿、瓦質土器足鍋・羽釜・火鉢	室町	擂鉢状
SK344	円形	－	159	150	57	土師器皿、瓦質土器擂鉢・甕	室町	
SK345	－	N36°　W	146	最大 28	38	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	北東側一部調査区外
SK346	－	N56°　E	141	最大 58	18	土師器椀・皿、瓦質土器鍋・鉢	室町	北西と東南側一部調査区外
SK347	楕円形	N4°　W	71	最大 45	56	土師器皿、陶器壺（信楽焼）・甕（備前焼）、瓦質土器足鍋	室町	擂鉢状　西側一部調査区外

第 23 表　下瑞光寺地区（２区）溝一覧表

遺構番号	長さ（ｍ）	幅（cm）	標高差（cm）	出土遺物	時代	備　　考
SD301	推定 34.20	108	20	土師器皿・椀・香炉、青磁椀、白磁皿、青花椀、瓦質土器足鍋・把手付鍋・擂鉢・火鉢・湯釜・甕、陶器大甕、砥石、石臼、タタキ石、鉄釘、銅銭	室町～戦国	出土遺物は SD303 との重複部分を含む
SD303	13.32	最大 326	26	土師器皿、瓦質土器足鍋、陶器壺	室町～戦国	
SD304	5.02	60	28	—	—	
SD305	推定 15.20	128	32	土師器皿、瓦質土器足鍋	室町	
SD306	推定 11.44	62	16	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	
SD307	11.28	44	8	土師器皿、瓦質土器鍋・足鍋・擂鉢	室町	
SD308	2.88	40	14	土師器皿、瓦質土器足鍋	室町	
SD309	1.51	34	6	—	—	
SD310	1.02	24	13	土師器皿、瓦質土器鍋	室町	
SD311	8.00	60	16	土師器皿、青磁椀、瓦質土器足鍋・擂鉢・甕、陶器大甕（備前）	室町	
SD312	2.68	84	7	土師器皿、瓦質土器鍋	室町～戦国	
SD313	17.84	130	14	土師器、瓦質土器鍋・鉢・擂鉢	室町	
SD314	2.80	32	11	瓦質土器足鍋	室町	
SD315	4.77	80	23	土師器皿、瓦質土器鍋・擂鉢・湯釜	室町	

第 24 表　下瑞光寺地区（２区）性格不明遺構一覧表

遺構番号	平面形	主軸方位	規模（cm）			出土遺物	時代	備　　考
			長さ	幅	深さ			
SX301	不整形	N11°　E	116	56	4	土師器皿、瓦質土器、須恵器	中世	皿状

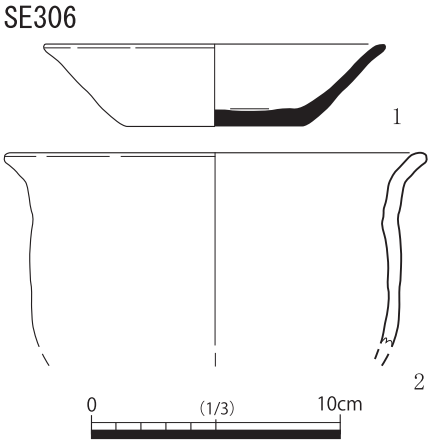
４　古代以前の遺物

古代以前の遺物としてここで報告できるものは、井戸 SE306 より出土した２点に限られる。

このほか、谷状地形にて古墳時代後期および奈良時代の遺物が出土している。

（１）井戸出土遺物（第 76 図　図版 43）

１・２は SE306 より出土した遺物である。１は須恵器杯であり、口縁部付近が少し強めに外反し、底部は糸切りである。還元焼成されているものの、土師器に近い軟質のものである。２は球胴形の小型甕であり、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。胴部内面はケズリ調整を行っている可能性が高いが、器表面の劣化が著しく判然としない。これらは、９世紀後半～ 10 世紀前半の所産であり、SE301 の廃絶時期の上限を示している。



第 76 図　井戸出土遺物実測図

５　中世以降の遺物

下瑞光寺地区（２区）で出土したほとんどは中世の遺物である。おおまかに、13 ～ 16 世紀のものがあるが、とりわけ 15 ～ 16 世紀の瓦質土器および土師器皿が量的主体を占める。両者は共伴することがあまりなく、瓦質土器は井戸や土坑などに石とともに廃棄されることが多く、土師器杯・皿はそれのみでまとめて廃棄される傾向がある。また、土師器皿は 15 世紀中頃をピークに、時期が下るにつれて出土量が減少し、逆に瓦質土器は 15 世紀以降増加傾向にある。このことは、山口県内における中世後半の集落遺跡と類似する傾向を示している。

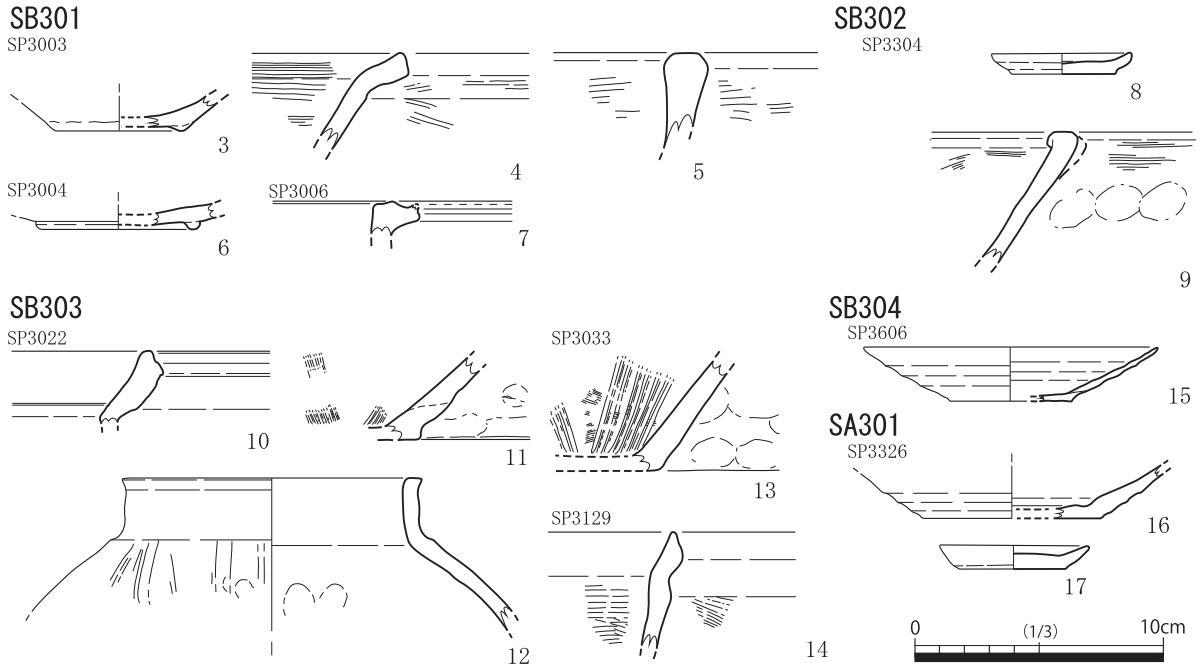
希少品としては、SK336 で出土した朝鮮陶器瓶（徳利）のほぼ完形品、SK347 で出土した信楽焼陶器壺の破片などがあげられる。これらは、経済力のある個人の所有品である可能性が高いと考える。また、信楽焼陶器壺は茶壺として使用されていた可能性が高く、下瑞光寺地区（１区）で出土した茶臼と合わせて、茶をたしなんでいたことが推定できる。そのほか、谷状地形において、土師器皿などがまとめて廃棄されており、包丁なども出土している。

以下、個別に記述する。

（１）掘立柱建物・柵列出土遺物（第 77 図　図版 43）

３～７は SB301 の構成柱穴 SP3003・3004・3006 より出土した遺物である。３・６は土師器椀であり、かなり形骸化した輪高台を貼り付けている。13 世紀後半～ 14 世紀前半の所産と考える。４は瓦質土器鍋であり、内面はハケをナデ消している。15 世紀の所産である。５は瓦質土器鉢。７は瓦質土器羽釜であり、３・６と同時期のものと考える。これらのうち、構成柱穴 SP3003 より出土した遺物は建物の形成時期の上限、SP3004・3006 より出土した遺物は廃絶時期の上限を示していることが出土状況からうかがえるが、時期幅が大きいため、今後の再検討を必要とする。

８・９は SB302 の構成柱穴 SP3304 より出土した遺物である。８は橙色の土師器皿の完形品であり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。９は瓦質土器擂鉢であり、内面はハケをナデ消す意図が認められる。15 世紀前半以降の所産である。



第 77 図　掘立柱建物・柵列出土遺物実測図

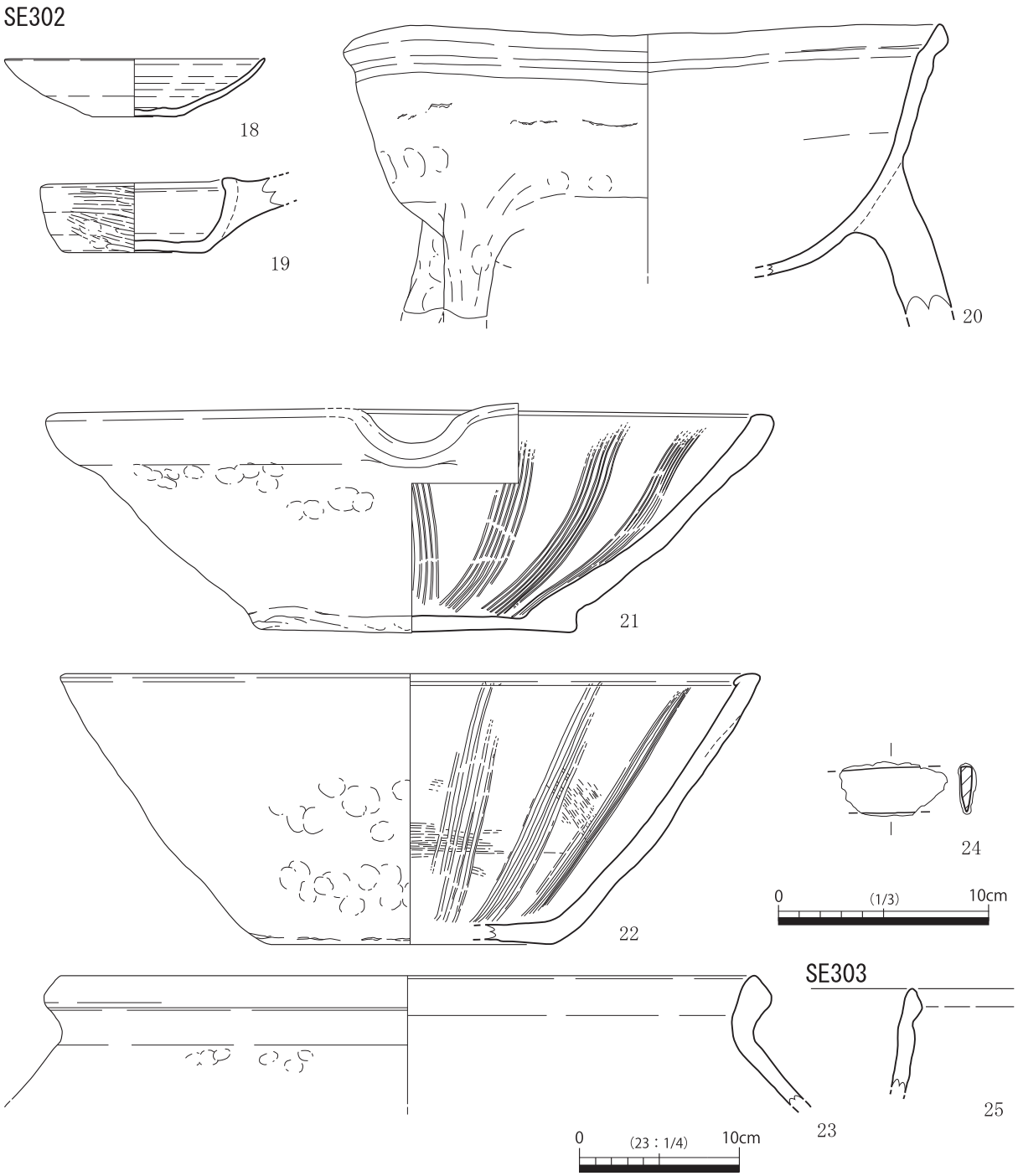
10 ～ 14 は SB303 の構成柱穴 SP3022・3033・3129 より出土した遺物である。10・14 は瓦質土器鍋もしくは足鍋である。岩崎編年Ⅲ型式古段階から新段階（岩崎 1999、以下同じ）にかけてのものであり、15 世紀の所産である。11・13 は瓦質土器擂鉢であり、どちらも 7 条以上のオロシ目が施されている。15 世紀以降の所産である。12 は瓦質土器湯釜である。外面はナデを施しているが、ハケは消し切れていない。これらのうち、SP3022 より出土した遺物は SB303 の廃絶時期の上限を示している。

15 は SB304 の構成柱穴 SP3606 より出土した土師器皿である。北島編年大内ⅢＡ２式もしくはⅢＡ３式（北島 2010、以下同じ）に相当し、15 世紀後半を前後する時期の所産である。

16・17 は SA301 の構成柱穴 SP3326 より出土した遺物である。16 は土師器皿であり、底部内面に強い回転ナデによるへこみが残る。大内ⅢＡ１式もしくはⅢＡ２式に推定でき、15 世紀中頃前後の所産である。17 は橙色の土師器皿であり、14 世紀後半～ 15 世紀の所産である。

（２）井戸出土遺物（第 78 ～ 84 図　図版 43 ～ 46）

18 ～ 24 は SE302 より出土した遺物である。18 は白色の土師器皿であり、内湾しながら外に開く。北島編年大内ⅡＢ式に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。19 は瓦質土器で把手付鉢である。外面はヘラミガキ、内面は粗いナデを施し、底部に板目圧痕が残存する。20 は瓦質土器足鍋である。全体的に丁寧な調整を施しており、底部はタタキ痕をナデ消している。岩崎編年Ⅲ型式古段階の中でも古い要素を備えており、14 世紀後半～ 15 世紀初頭の所産である。なお、当資料は外面に付着した煤を放射性炭素年代測定（AMS 法）しており、その結果、示された時期は 14 世紀後半である。21・22 は瓦質土器擂鉢である。21 は口縁部が拡張されない単純なタイプで、かつ、深めの片口をもつ。内面はハケを完全にナデ消している。また、断面も土師質に近い特徴をもっており、総じて古い様相を備えている。14 世紀後半以降の所産である。22 は口縁部を内側にやや拡張している点で、21 より新しい要素が認められるが、やはり、内面はハケを丁寧にナデ消しており、焼成も

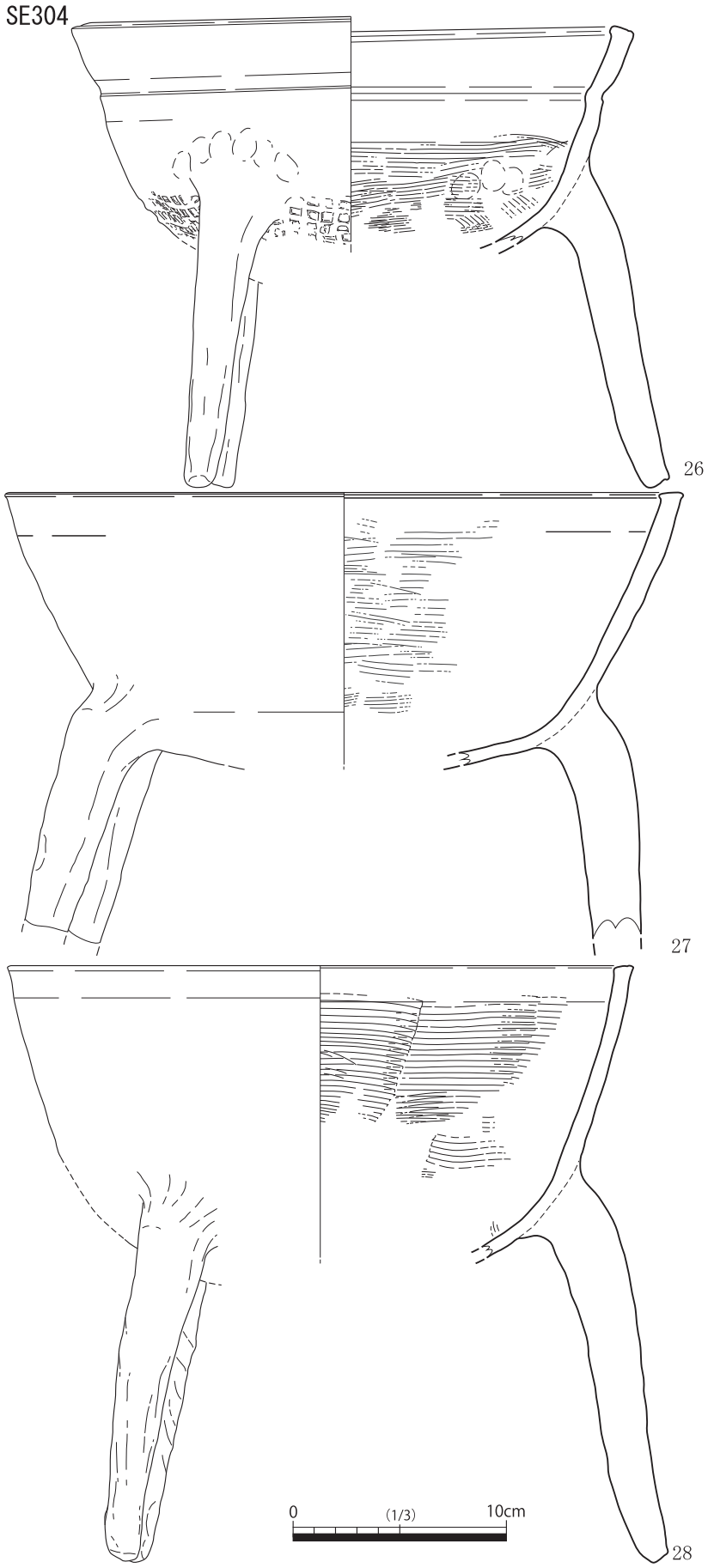


第 78 図　井戸出土遺物実測図（１）

土師質に近いものである。23 は瓦質土器甕であり、頸部からの立ち上がりが短く、断面形が厚めの三角形に近いものであり、岩淵遺跡 SK-89（15 世紀初頭前後）に類例が認められる。24 は刀子状の鉄製品である。総じて 14 世紀後半～ 15 世紀初頭のものであり、SE302 の廃絶時期を示している。

25 は SE303 より出土した瓦質土器鍋もしくは足鍋である。岩崎編年Ⅲ型式古段階に相当し、15 世紀前半前後の所産である。

26 ～ 41 は SE304 より出土した遺物である。石臼２点を除き、すべて瓦質土器で占められる。26 ～ 34 は瓦質土器足鍋もしくは鍋であり、口縁部の形状から 27・28 と 26・29 ～ 34 に大別できる。

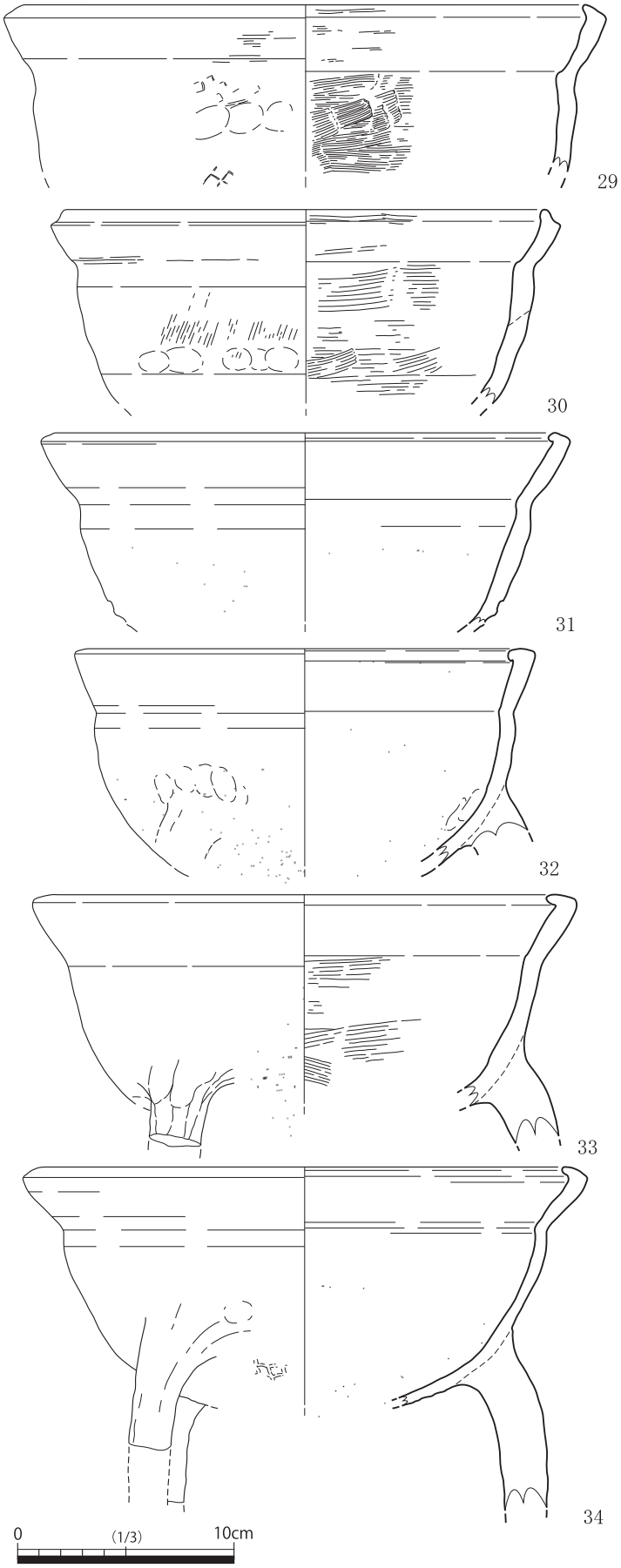


第 79 図　井戸出土遺物実測図（２）

そのほとんどが煤が明瞭に付着する使い込まれたものであり、また、いずれも、底部の残存率が低い点で共通する。多くは、底が抜けたことで使用できなくなり、廃棄された状況が推定できる。

26 は底部以外がほぼ完存するものである。底部は二次被熱が顕著で、焼成破裂痕も認められる。焼成はやや軟質である。岩崎編年ⅥＢ型式であり、16 世紀の所産である。27・28 は口縁部と頸部の区別が不明瞭なタイプである。27 は 26 と類似するやや軟質の焼成で、28 は灰白色を呈する硬質である。両者はともに内面のハケ目を明瞭に残し、外面は丁寧にナデを施している。このタイプの類例としては、今宿東遺跡Ⅱ区Ｐ -52（16 世紀末頃）があげられるが、脚部のない鍋である点で区別される。16 世紀後半～末の所産と推定する。なお、27 は外面に付着した煤に放射性炭素年代測定（AMS 法）をしており、16 世紀後半～ 17 世紀初頭を示している。29・30 は岩崎編年Ⅳ型式のものであり、15 世紀末～ 16

SE304



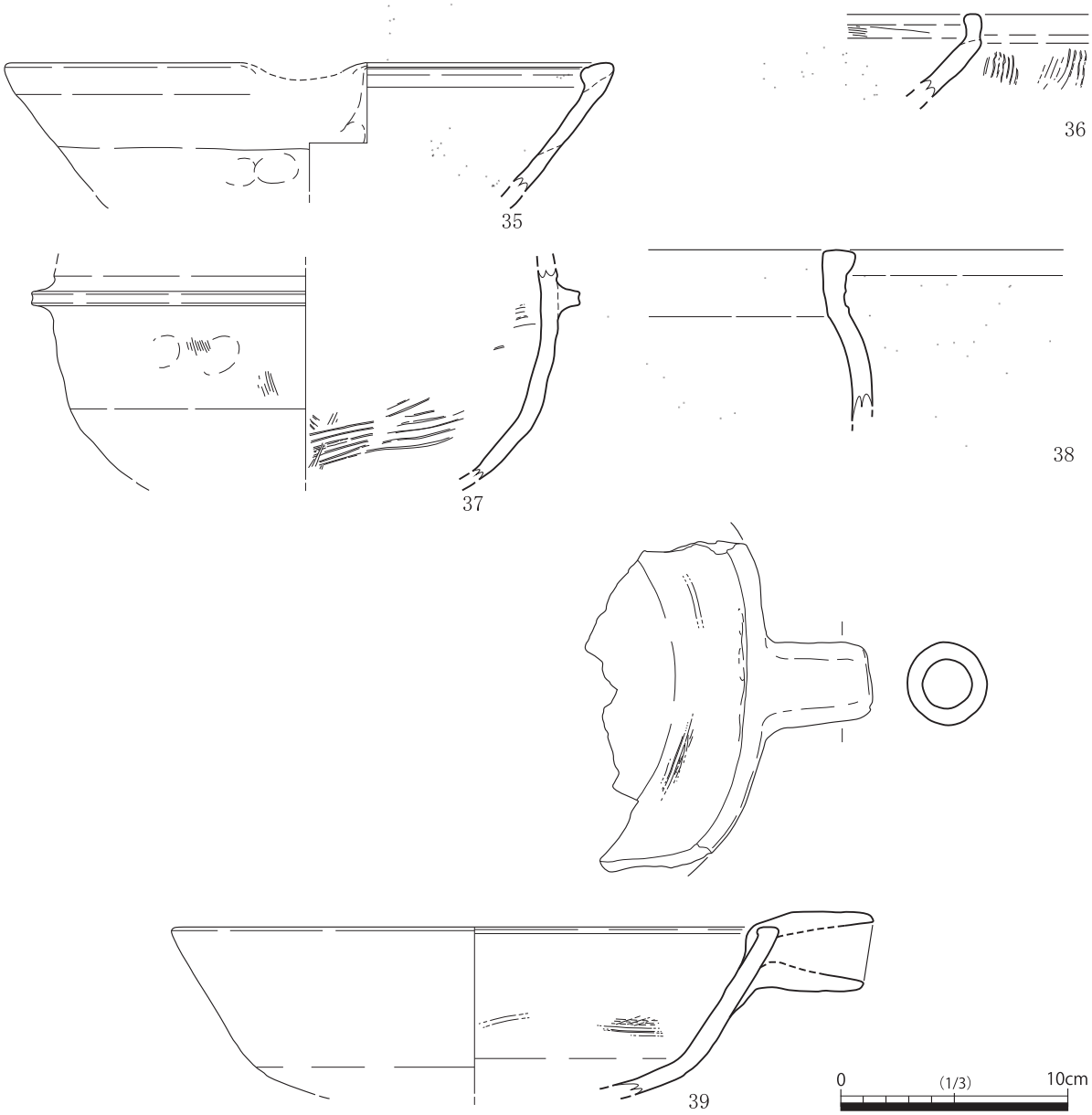
第 80 図　井戸出土遺物実測図（３）

世紀の所産である。どちらも残存率のやや低い破片であり、偶発的な混入の可能性がある。31 ～ 33 は岩崎編年ＶＢ型式のものである。調整は 29・30 と大差ないが、口縁部比率が 29・30 より高く、また、残存率は比較的高いもので占められる。27・28 と同様、今宿東遺跡に類例が求められ、16 世紀後半～末の所産である。34 は岩崎編年ＶＡ型式に相当し、口縁部比率および口縁部の開き方は 31 に類似する。16 世紀後半以降の所産である。以上の足鍋・鍋は、やや古い属性を備える破片（29・30）と、新しい属性を備え、残存率が比較的高い一群（26 ～ 28、31 ～ 34）に大別でき、後者が井戸の廃絶時期に関わる資料群と判断できる。

35・36 は瓦質土器擂鉢の破片である。35 は灰色を呈する硬質のものであり、オロシ目は６条単位でやや密に施している。口縁部の肥厚はかなり形骸化しており、上面には１条の沈線が巡る。36 は断面灰白色でやや硬質のものである。口縁部は折り曲げている。両者ともに今宿東遺跡に類例が求められ、16 世紀後半～末の所産である。

37 は瓦質土器湯釜であり、断面灰白色を呈するやや硬質のものである。鍔部は胴部のほぼ中位にあり、底部は丸底のものと推定できる。外面は鍔部まで煤が付着し、内面もそれに対応して上下で色調がやや異なる。16 世紀後半以降に

SE304

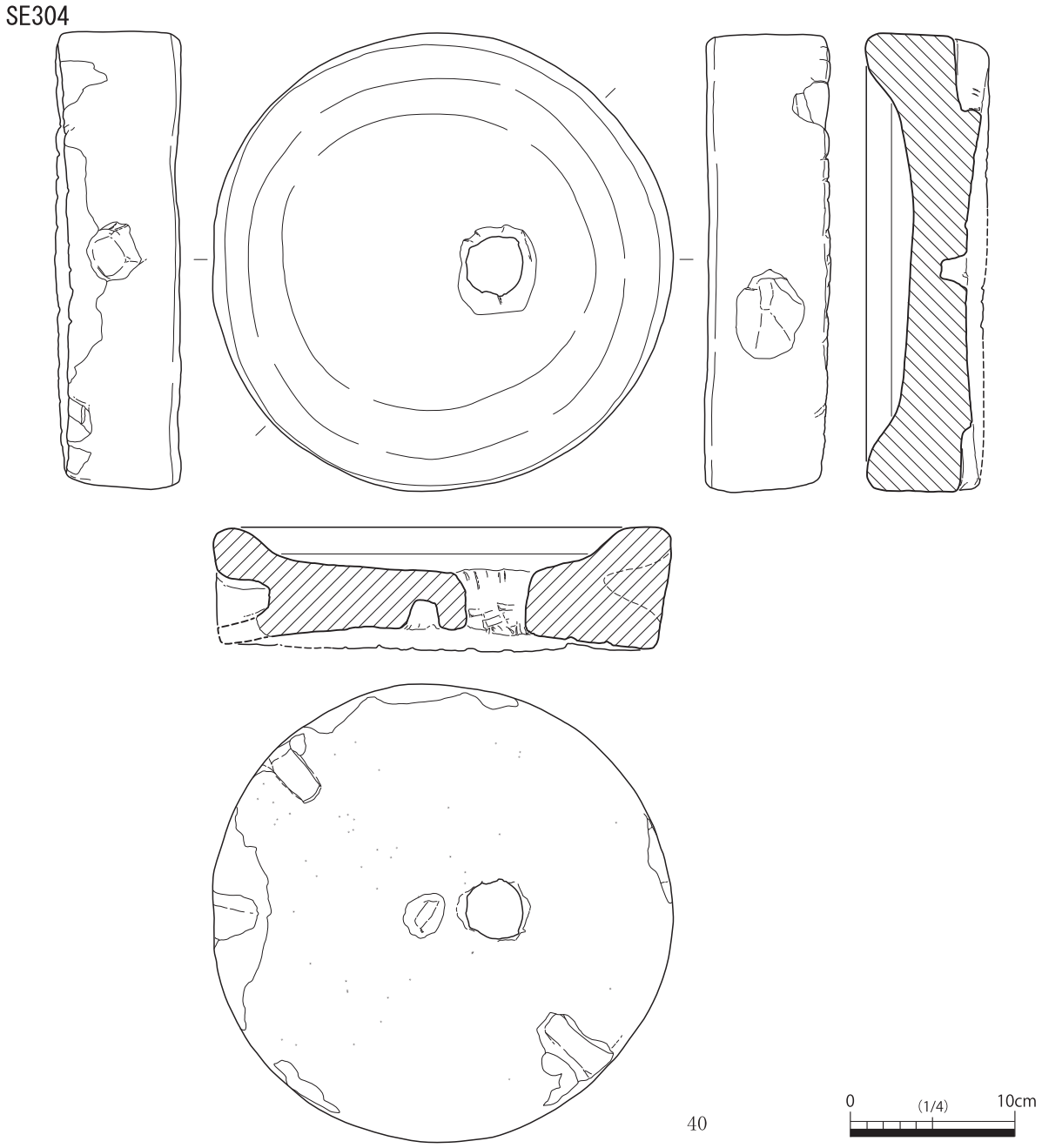


第 81 図　井戸出土遺物実測図（４）

よく見られるタイプである。

38 は瓦質土器火鉢である。頸部に上下２段の縦線状の印文を巡らす。外面は後世の付着物がこびり付いており、調整は確認できないが、本来、ミガキ調整を施していたものと考える。口縁部から頸部にかけての特徴は下右田遺跡４次Ⅲ区W－５で出土したものと類似しており、16 世紀後半以降の所産と推定する。

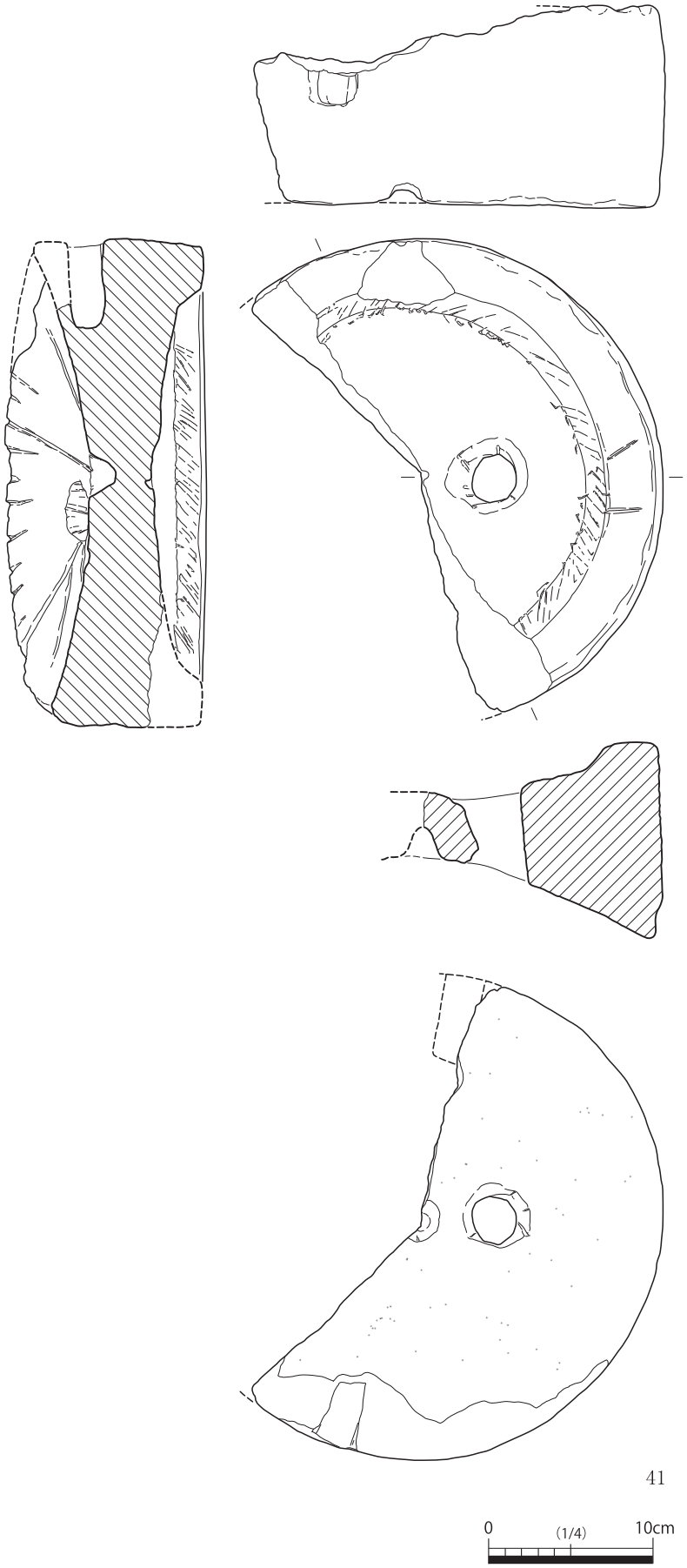
39 は把手付鍋であり、26 ～ 34 の足鍋・鍋に比べて器高が低い点で区別しているが、口縁部と頸部の区別がない点で 27・28 と同タイプであり、また、焼成や色調なども 27 と類似するものである。16 世紀後半～末の所産と推測する。



第 82 図　井戸出土遺物実測図（５）

40・41 は石臼で、ともに上臼である。両者ともに淡桃紫色を呈するが、四熊ヶ岳（周南市）で産出される角閃石安山岩製である。40 は完形品で、上面くぼみの断面は浅い皿形、芯棒受けの断面は台形で、供給口は平面円形である。上面自体はかなり整った円形をしており、また、丁寧に加工痕を消して平滑に仕上げている。側面には平面方形基調の挽き木穴を２対施しているが、そのうちの１対は下面にまで及ぶ。使用によるすり減りで厚みを失って挽き木穴が使えなくなり、あらためて、別に１対を付け加えたものと判断できる。この新旧２対の挽き木穴は、古い方が形の整った丁寧な穿孔で、かつ、平面配置もほぼ対称である。一方、新しい方はかなり粗い仕上げの穿孔で、また、平面配置は非対称であり、同一人物による作業とは考えにくい。おそらく、石工によって生産された製品を購入し、使用によるすり減りをへて、消費者側が二次加工を加えたのではないかと考える。

SE304



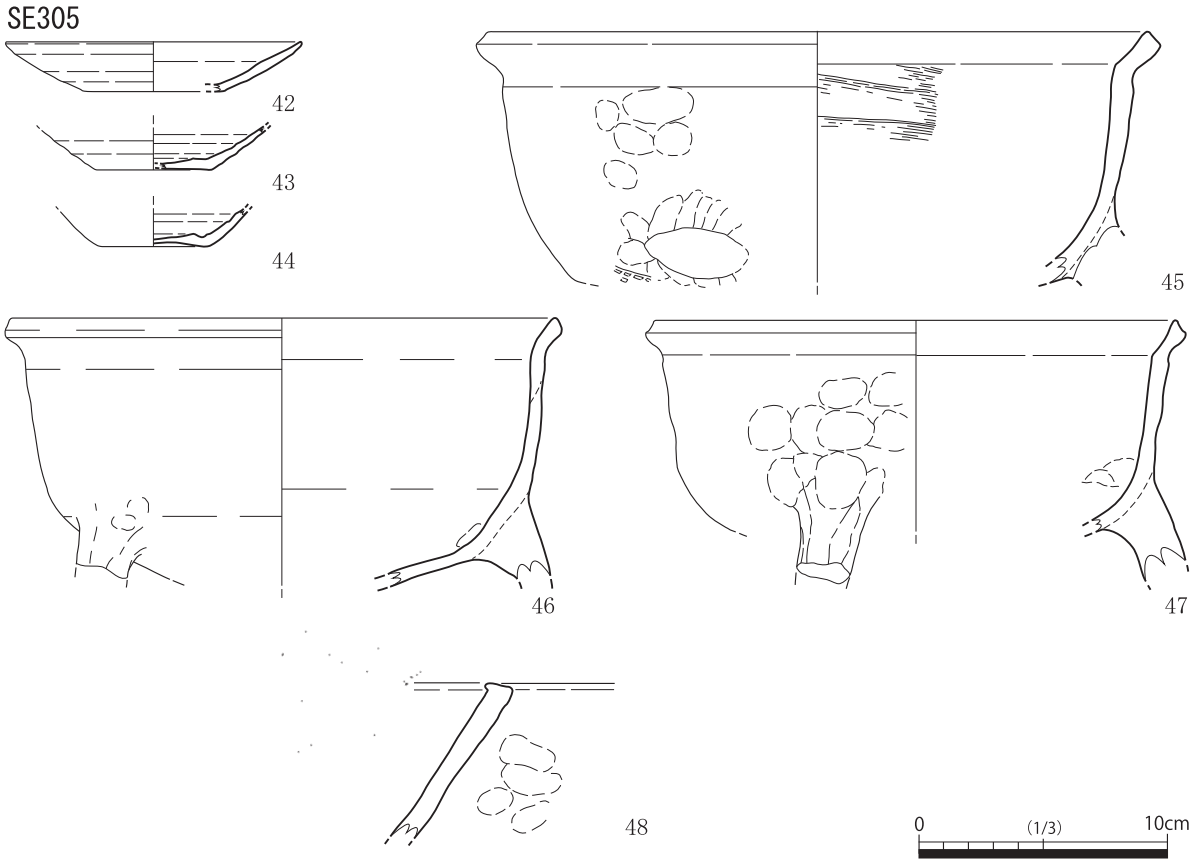
第 83 図　井戸出土遺物実測図（６）

下面は主溝によって７分画されているが、そのうちの１分画は他の６分画より小さく不均等である。各分画内には４～６本の副溝が施されている。使用による擦痕が顕著であり、すり減りのたびに付け加えられていたものと推定できる。

41 も整った規格品という印象を受けるが、40 より上面の仕上げは粗く、加工痕が一部で確認できる。上面の断面形は逆台形に近い皿形である。40 と異なり挽き木穴は１対のみで、かつ、下面に到達する前に廃棄されており、その分、厚みも残る。40 と比べてあまり使い込まれていないものと判断できる。下面は主溝の配置から６分画に復元できる。副溝は４～５本程度施していると推定できるが、そのほとんどは使用によって摩滅してしまっている。

なお、41 は全体の３分の１ほど欠損しているが、割れ口が中心にある芯棒受けから放射線状に直線的になっている。この状況から、偶発的に割れたのではなく、廃棄に至るまでに意図的に打ち欠いた可能性が高いと考える。

以上の SE304 出土遺物が



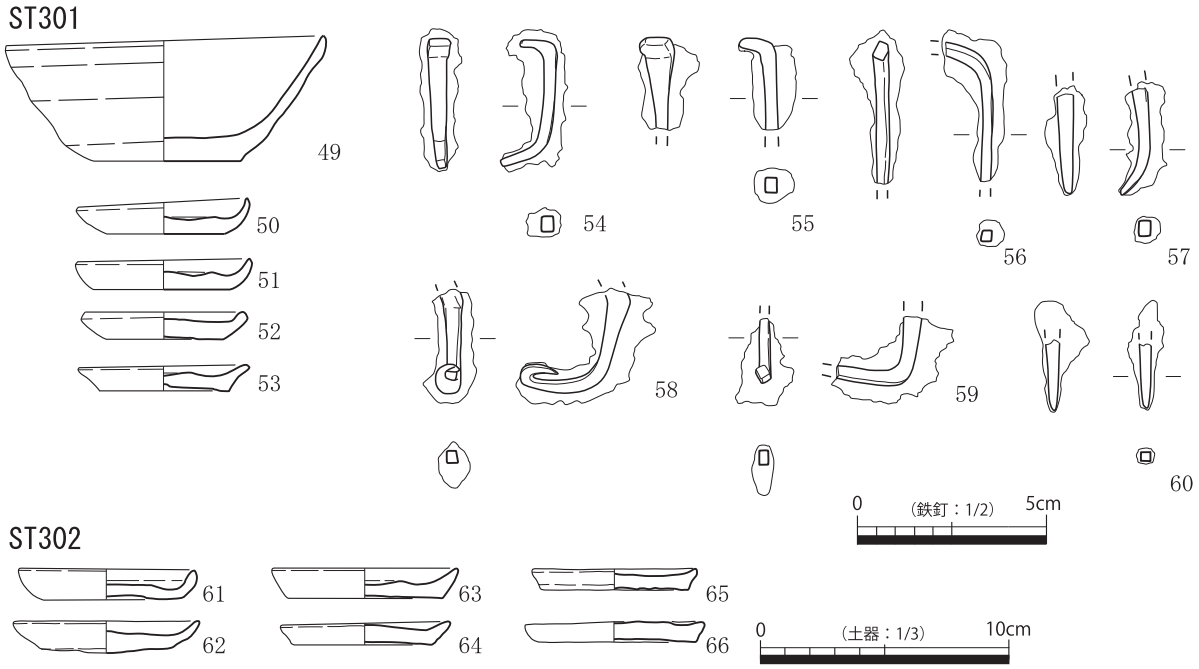
第 84 図　井戸出土遺物実測図（７）

示す時期の主体は 16 世紀後半～末であり、この井戸の廃絶時期を示している。また、一部 16 世紀前半に遡りうる土器もあるものの、比較的一括性が高い資料とみなすことができる。

42 ～ 48 は SE305 より出土した遺物である。42 ～ 44 は白色の土師器皿片であり、いずれも内面にてロクロ目が少し見え始めているものの、基本的には回転ナデ調整を施している。破片であるため、法量の復元に不安定さが残るが、おおむね北島編年の大内ⅡＢ式からⅢＡ１式のものではないかと推定する。45 ～ 47 は瓦質土器足鍋である。45・46 は断面が土師質に近く、47 は断面灰褐色を呈するやや硬質である。いずれも口縁部比率が低いタイプである。46 が岩崎編年Ⅱ型式、45・47 がⅢ型式古段階に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀初頭のものと推定する。48 は瓦質土器擂鉢であり、固く焼き締まった焼成である。口縁部は内側にやや拡張している。内面はナデ調整を施しているが、ハケ目を完全には消し切れていない。15 世紀前半の所産である。以上の出土遺物は、総じて 14 世紀後半～ 15 世紀前半におさまるものであり、SE305 の廃絶時期を示している。

（３）墓出土遺物（第 85 図　図版 46）

49 ～ 60 は ST301 より出土した遺物である。49 が土師器杯、50 ～ 53 が土師器皿であり、このうち、49 ～ 52 は白色系で、53 は橙色系である。また、49 ～ 52 は底部から体部にかけて内湾しながら開くのに対し、53 は底部と体部の境が明確に屈曲する点でも区別できる。一方で、胎土は 53 がやや砂粒の混入量が少ないものの基本的に同じであり、焼成もほぼ同じである。いずれも回転ナデを施しているが、50・51 の内面調整は粗く、未調整に近い。これらは北島編年の大内０Ａ式であり、14



第 85 図　墓出土遺物実測図

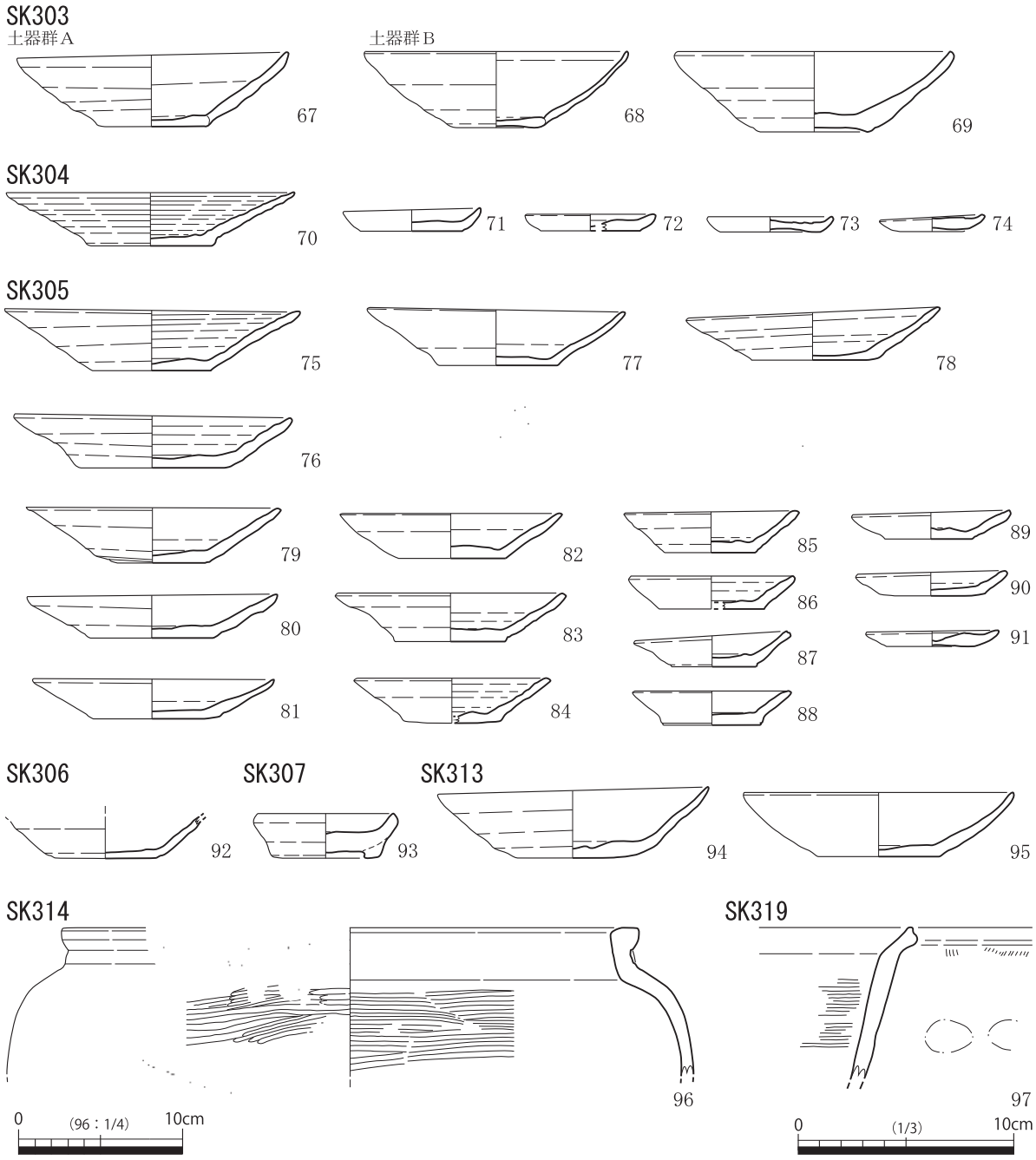
世紀前半の所産である。54 ～ 60 は木棺を固定していた鉄釘である。そのほとんどがやや不自然に屈曲していることから、棺材にある程度打ち込んだ後、叩き曲げて固定したのではないかと考える。出土遺物から、この墓の形成時期は 14 世紀前半である。

61 ～ 66 は ST302 より出土した土師器皿であり、このうち、61 は白色系で、残る 62 ～ 66 は橙色系である。また、61 は底部から体部にかけて内湾しながら開くのに対し、62 ～ 66 は底部と体部の境が明確に屈曲する点でも区別できる。一方で、いずれも砂粒をあまり含まない点で共通し、かつ、ST301 出土例とは区別される。口径は ST301 よりやや大きいが、極限まで扁平化したものを含んでいる。ST301 とほぼ同時期の 14 世紀前半の所産と推定しておく。なお、ST302 は柱穴によって一部壊されており、墓への副葬品の組成としては一部欠けている可能性が高い。

（４）土坑出土遺物（第 86 ～ 93 図　図版 47 ～ 50）

67 ～ 69 は SK303 より出土した遺物である。出土状況の平面分布から、土器群ＡとＢに分けており、土器群Ａからは土師器皿（67）が、Ｂからは土師器皿（68）と杯（69）が出土している。このうち、67・68 は白色を呈する薄手のつくりで、69 は赤褐色に近い橙色で、底部付近が厚いつくりとなっている。いずれも、北島編年の大内ⅡＡ式もしくはⅡＢ式の範疇におさまるものであり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。これらの遺物は、廃棄土坑 SK303 の形成時期を示している。

70 ～ 74 は SK304 より出土した土師器皿である。70 は白色で内外面ともにロクロ目顕著。北島編年大内ⅢＡ１式もしくはⅢＡ２式であり、15 世紀後半を前後する時期の所産である。71 ～ 74 は小皿で、このうち、71 は白色で法量が 72 ～ 74 よりやや大きく、72 ～ 74 は橙色で法量が極限近くまで縮小化している。大内ⅢＡ１式とⅢＡ２式の間に位置づけることが可能であり、15 世紀後半の所産である。一方、共伴して出土した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）では、15 世紀前半の時期を示しており、今後の検証を要する。



第 86 図　土坑出土遺物実測図（１）

75 ～ 91 は SK305 より出土した土師器皿の一括廃棄資料である。そのほとんどは白色系であり、橙色系は図示したものの中では 91 のみである。白色系のものより、橙色系のものの方が法量（特に器高）が縮小化している点は先述の SK304 と同様である。75 は最も法量が大きく、ロクロ目も顕著である。北島編年大内ⅢＡ２式もしくはⅢＡ３式の範疇におさまるものである。76 ～ 79 は 75 と口径は近いが器高が低めのものであり、大内ⅢＡ３式に相当する。このうち、77・78 は底部外面に板目圧痕が明瞭に残存しており、これと対応して底部と体部の境が明瞭に稜をなす。80 ～ 83 は皿形化がより進行したものであり、大内ⅢＡ３式もしくは大内ⅢＢ式におさまるものである。このうち、80・81 は底径が大きく、それと対応してか底部外面に板目圧痕が残存する。82・83 は底径が小さく、

板目圧痕は不明瞭である。84 ～ 90 は上記のものより口径がひとまわり小さい一群である。このうち、84・85 は器高が高めであり、大内ⅢＢ式に相当する。86 ～ 89 は大内ⅢＡ３式、90 は大内ⅢＡ２式もしくはⅢＡ３式と考える。91 は砂粒をほとんど含まず、精緻な印象を受ける。大内ⅢＡ３式である。以上の遺物は、総じて大内ⅢＡ３式からⅢＢ式にかけての一群と評価することが可能であり、15 世紀後半～末の所産と判断できる。ただし、共伴して出土した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）では、15 世紀前半の時期を示しており、今後の検証を必要とする。

92 は SK306 より出土した土師器皿で、白色で薄手のものである。北島編年の大内ⅡＡ式もしくはⅢＡ式に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。

93 は SK307 より出土した土師器台付皿であり、赤褐色に近い橙色を呈する。高台は輪状のものであり、貼付後の仕上げが粗い印象を受ける。13 世紀～ 14 世紀前半の所産と推測する。

94・95 は SK313 より出土した土師器皿である。ともに白色で薄手のものであり、法量も類似的である。一方で、底部には相違点があり、95 は底部外面に板目圧痕が明確で、底部と体部の境は明確な稜をなしている。これらは北島編年の大内ⅡＡ式に相当する。14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産であり、SK313 の廃棄直前の時期に関わる資料と判断している。

96 は SK314 より出土した瓦質土器火鉢である。頸部に縦線状の印文を巡らし、その直下には巴文を配列している。下右田遺跡第４次Ⅲ区Ｗ－５に類例があり、16 世紀後半以降の所産と考える。

97 は SK319 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋である。土師質に近い焼成で、体部も薄手で直線的であるなど、古い要素を備える。口縁部は岩崎編年のⅡ型式とⅢ型式古段階の中間的なものであり、14 世紀後半～ 15 世紀初頭の所産と考える。

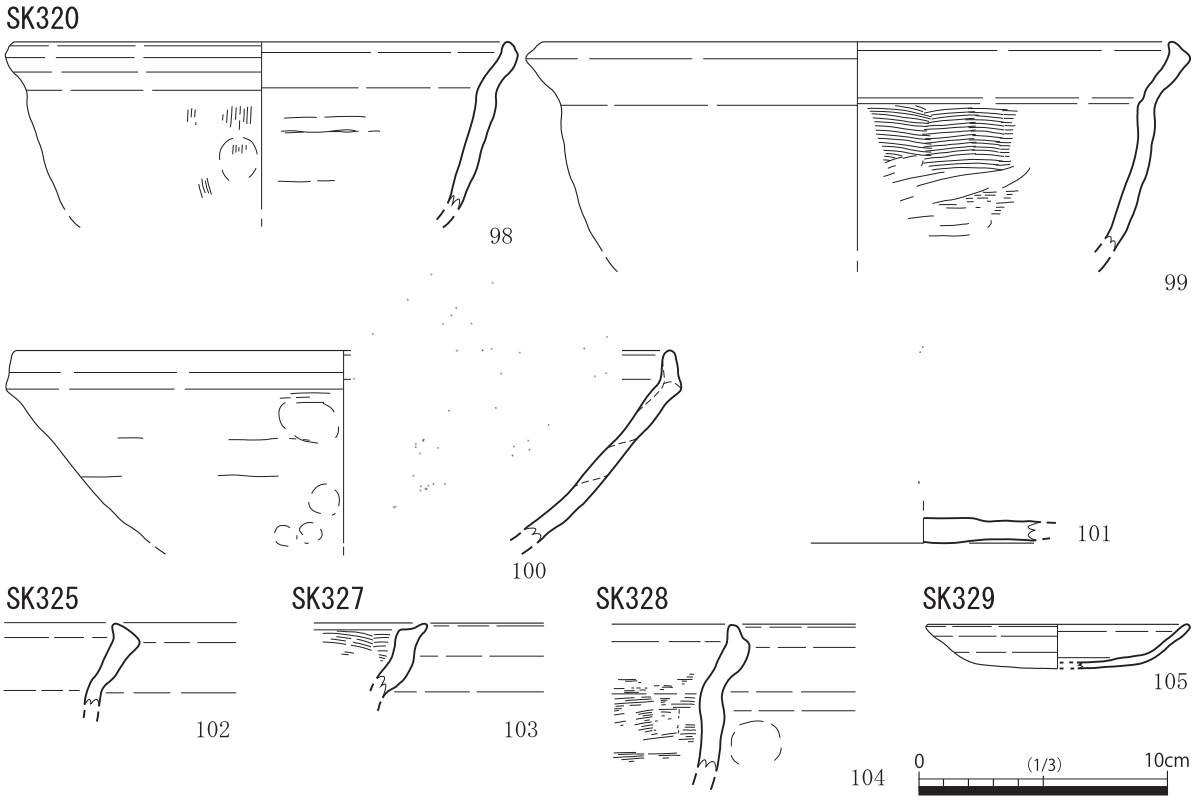
98 ～ 101 は SK320 より出土した瓦質土器片である。98 は岩崎編年Ⅲ型式新段階、99 はⅣ型式に相当するが、ともにやや薄手のつくりであり、古い要素が残存する。15 世紀後半の所産と考える。100・101 は擂鉢である。100 の内面には 6 条単位のオロシ目を施し、ハケ目をナデ消そうとしている。薄手のつくりで、口縁部は上方へ拡張している。岩淵遺跡 SK-34 に類例があり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。101 は底部内面に４条単位のオロシ目を放射状に密に巡らす。オロシ目の条数から、15 世紀前半以降の所産ではないかと考える。以上の出土遺物が示す時期の主体は 15 世紀であり、土坑の廃絶時期の上限を示している。

102 は SK325 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋の口縁部破片である。岩崎編年Ⅳ型式に相当し、15 世紀後半～ 16 世紀の所産である。この土坑の廃絶時期の上限を示している。

103 は SK327 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片で、口縁部の形態的特徴が通有のものとは異なるものである。厳密な時期比定は困難であり、中世後半の所産としておく。

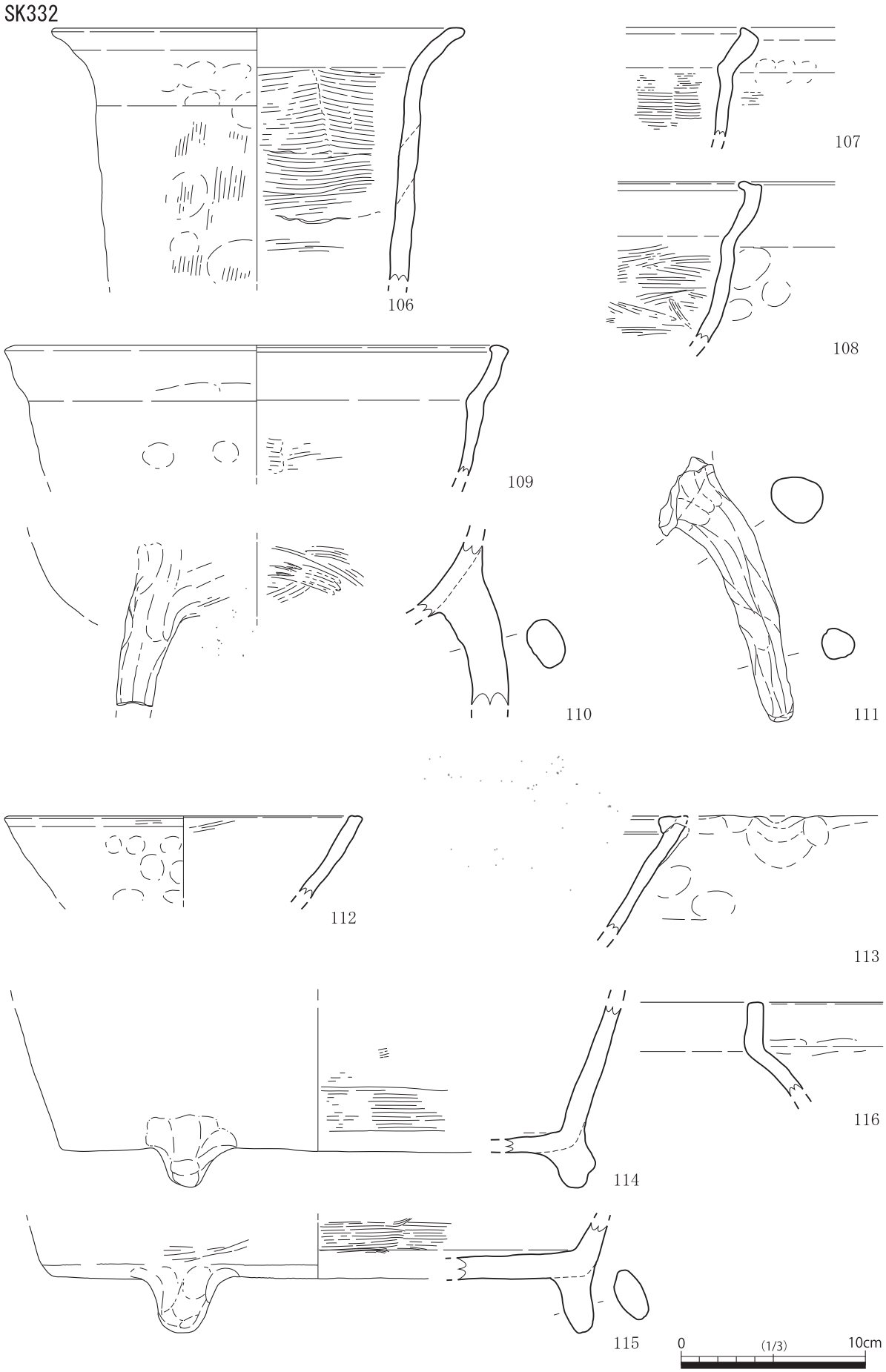
104 は SK328 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋の破片である。内外面ともに摩滅しており、土坑廃絶時に偶発的に混入したものと推定する。口縁部の形状は岩崎編年Ⅲ型式新段階に相当し、15 世紀後半以降の所産である。

105 は SK329 より出土した白色の土師器皿である。器表面に後世の付着物がこびりついて調整の観察がやや困難ではあるが、器壁が均質的に薄く、比較的丁寧なつくりの印象を受ける。北島編年大内Ⅳ式の範疇におさまるものであり、16 世紀前半頃の所産と考える。

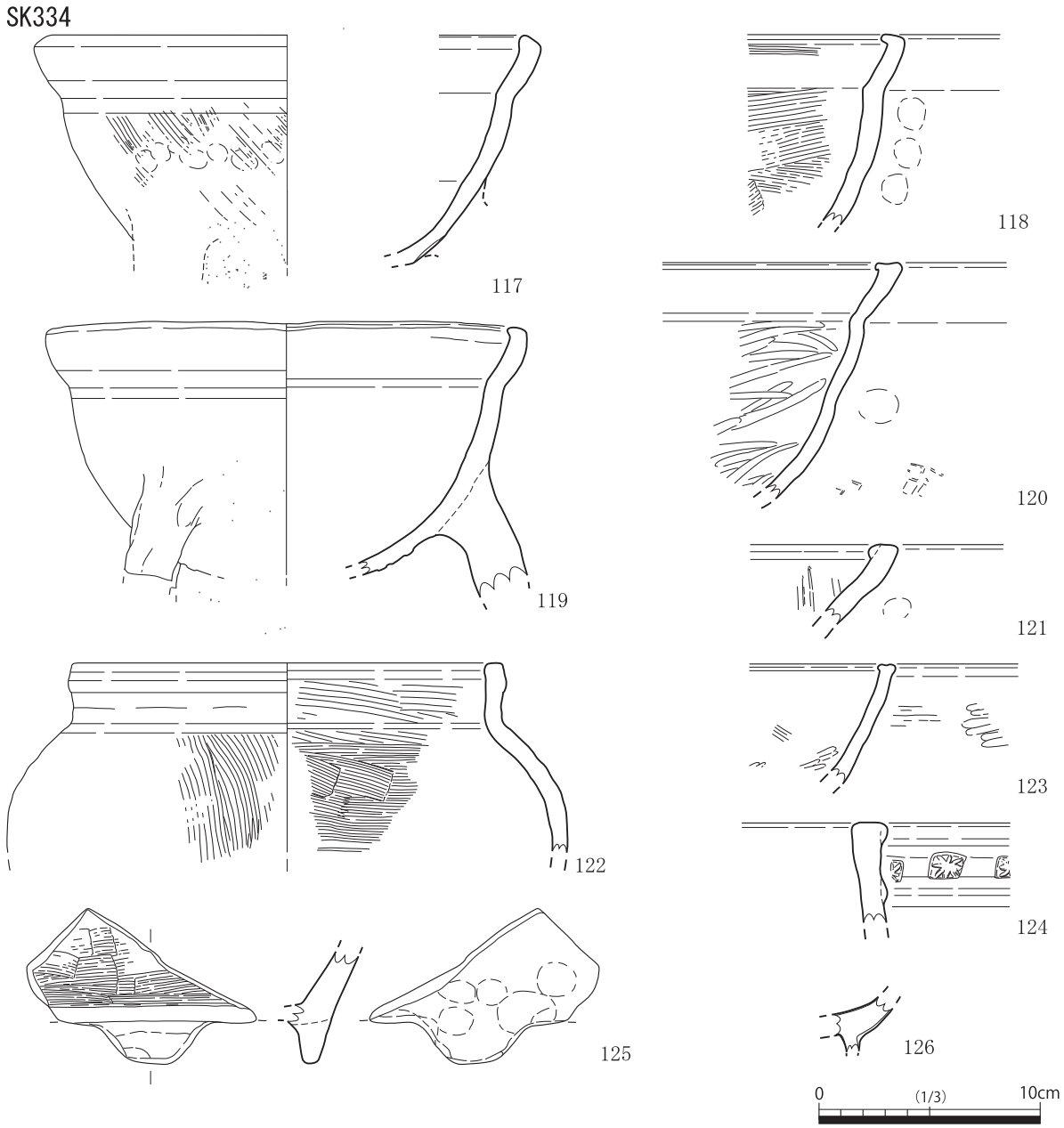


第 87 図　土坑出土遺物実測図（２）

106 ～ 116 は SK332 より出土した遺物である。106 は土師質土器鉢としているが、内面ではわずかに炭素の吸着が認められ、瓦質の可能性も残る。胎土・焼成は後述する 114・115 と類似する。内外面ともにハケによって調整をしているが、粘土帯の接合痕が明瞭に残存しており、粗雑な仕上げである。また、この接合痕の状況から、おおむね３㎝程度の粘土帯を積み上げて成形しているものと判断できる。類例のみあたらない資料であり、個別の時期比定は困難である。107 ～ 109 は瓦質土器足鍋もしくは鍋の口縁から体部にかけての破片である。107 は断面灰白色の硬質、108 は須恵質に近い硬質、109 は断面黄灰色のやや軟質である。口縁部は 107 が岩崎編年Ⅳ型式であるが、口縁部比率がやや低く、古い要素を備える。108 はⅣ型式もしくはＶＡ型式、109 はⅣ型式もしくはⅥＢ型式に相当し、ややばらつきがある。110・111 は瓦質土器足鍋の脚部であり、このうち、110 には格子目タタキ痕が明瞭に残存する。112 は瓦質土器の鉢としているが、類例のないタイプであり、足鍋の口縁部の可能性もある。焼成は 108 に近い硬質のものである。113 は瓦質土器擂鉢である。断面灰白色のやや軟質で、７条単位のオロシ目を施す。口縁部は断面三角形の粘土帯を貼り付けて肥厚させている。片口は形骸化しており、内面はハケ目が残る。15 世紀後半～ 16 世紀前半の所産と考える。114・115 は瓦質土器火鉢である。ともに土師質に近いものであり、また、混和材として大粒の砂粒を多量に含んでいるのが特徴的である。114 は胴部と脚部で色調がやや異なる。116 は瓦質土器湯釜の破片であるが、二次被熱が顕著で薄い赤色に変色している。以上の遺物が示す時期の主体は 16 世紀であり、この土坑の廃絶時期の上限を示しているものと判断する。また、106 や 112 など、通有の器種とは異なるものを含んでいることは、後述する SK336 と同様、この土坑の性格と何らかの関わりを連想するものである。

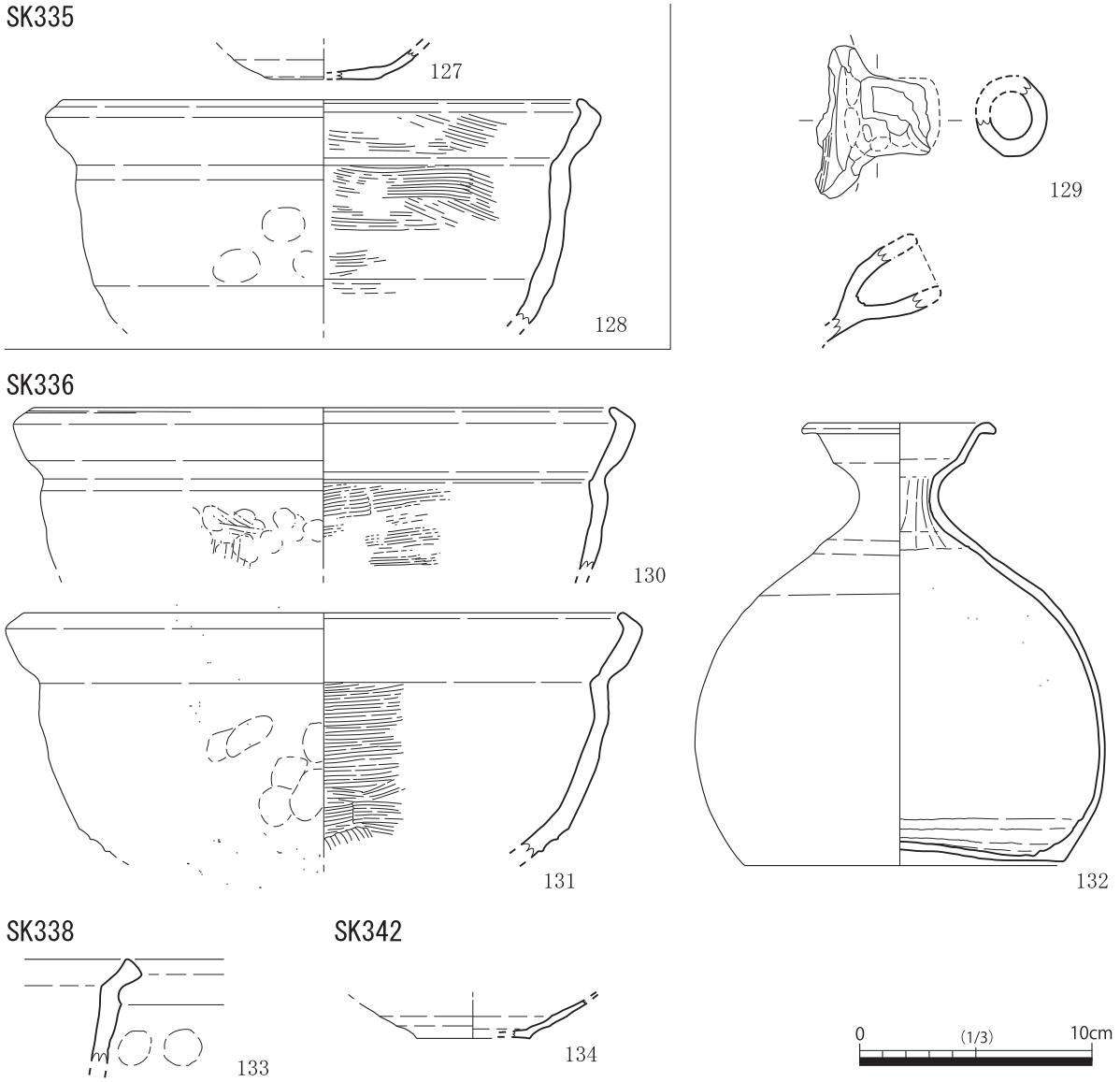


第 88 図　土坑出土遺物実測図（３）



第 89 図　土坑出土遺物実測図（４）

117 ～ 126 は SK334 より出土した遺物である。117 ～ 120 は瓦質土器足鍋もしくは鍋である。このうち、117・119 は残存率が高く、意識的に廃棄された可能性が高い。いずれも断面灰白色のやや硬質のものであり、外面は煤の付着が顕著である。117 ～ 119 は岩崎編年のⅥB 型式であり、16 世紀前半～中頃の所産である。120 は内面にミガキ調整が施されている点で通有のものとは異なる資料である。121 は瓦質土器擂鉢の小片である。断面の形状から 15 世紀代の所産であり、偶発的な混入品と考える。122 は瓦質土器甕であり、焼成は須恵質に近い硬質である。器表面の観察から、胴部から口縁部まで一度ハケ調整を施し、その後、細い粘土紐をはりつけることで口縁部外面を下方拡張し、その後に横ナデを施している手順が復元できる。16 世紀の所産と推測する。123 は瓦質土器鉢としている。焼成は須恵質に近い硬質で、SK332 で出土した 112 と同タイプのものである。124・125 は瓦質土器火鉢である。124 は二次被熱のためか、橙色に変色している。外面を２条の突帯で区

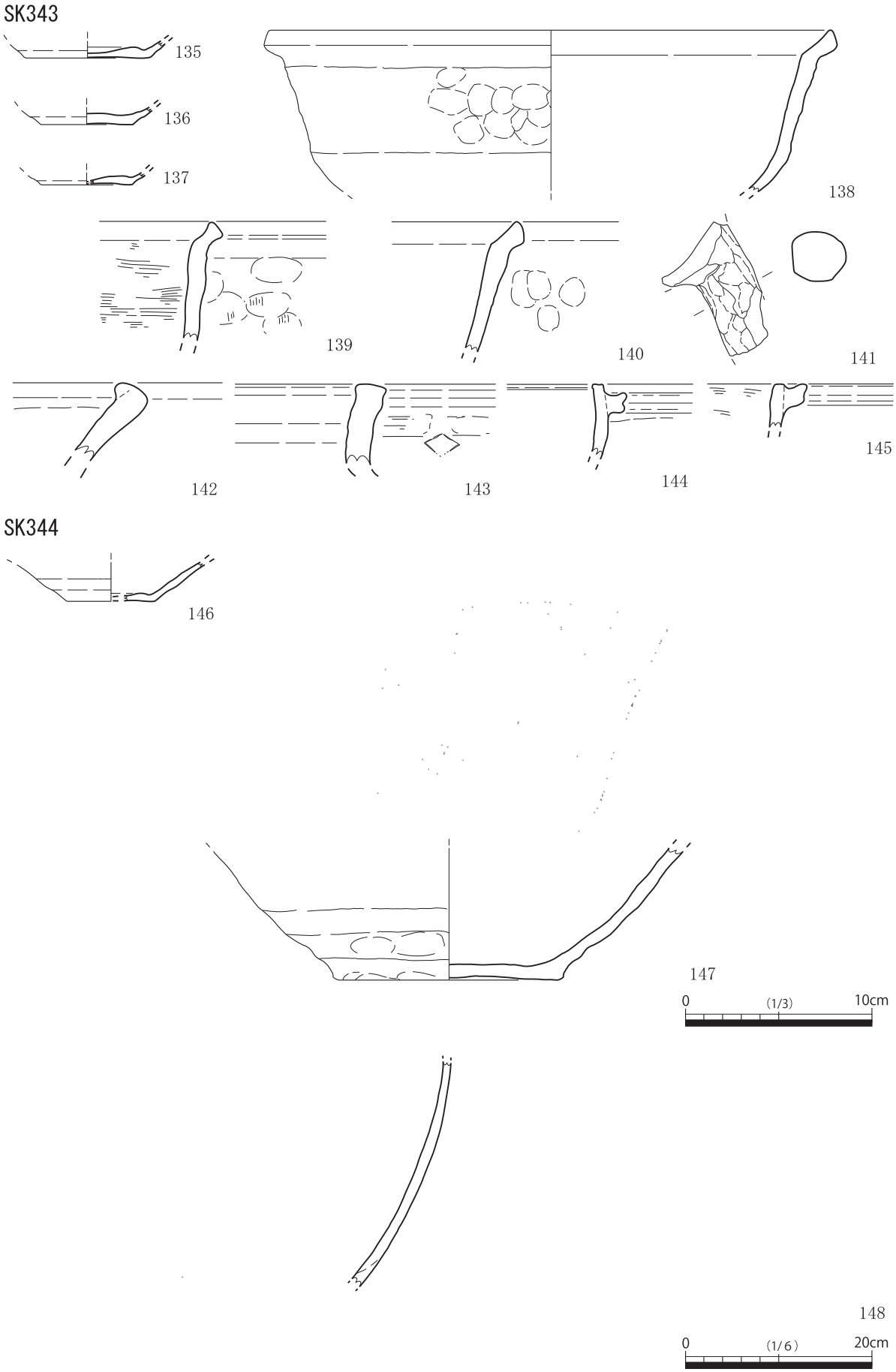


第 90 図　土坑出土遺物実測図（５）

画し、中に印花文を巡らす。125 の脚部は SK332 で出土した 114・115 と比較して扁平で短脚である。126 は青磁椀であり、外面の蓮弁は細線化している。高台内側および底部外面にまで施釉されている。15 世紀後半～ 16 世紀の所産と推測する。以上の出土遺物のうち、残存率の高い 117・119 が SK334 の廃絶時期を示していると判断できる。したがって、16 世紀前半～中頃の廃絶と推定する。なお、出土遺物の組成は、隣接する SK332 と類似的であり、両土坑はその機能を同じくし、希少例を含むという遺物組成は土坑の性格をある程度反映しているのではないかと考える。

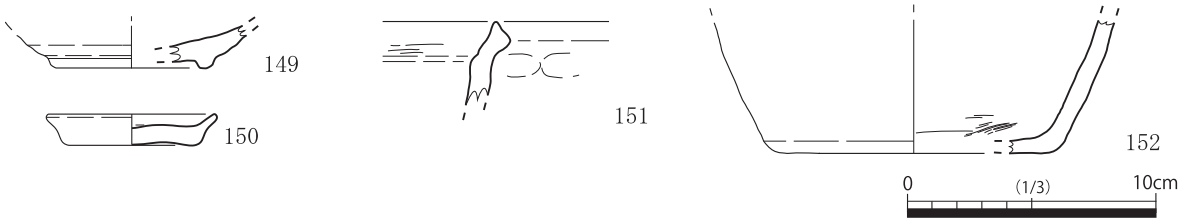
127・128 は SK335 より出土した遺物である。127 は白色の土師器皿であり、15 世紀前半を前後する時期のもの考える。128 は瓦質土器足鍋もしくは鍋であり、断面暗灰黄色のやや軟質である。口縁部の形状は岩崎編年Ⅳ型式であり、15 世紀後半～ 16 世紀の所産である。

129 ～ 132 は SK336 より出土した遺物である。129 ～ 131 は瓦質土器足鍋もしくは鍋であり、いずれも断面灰白色の硬質である。129 は断面円形の短い把手部がつくものである。口縁部の形状は岩崎編年Ⅳ型式である。130・131 は同一個体の可能性が高く、Ⅳ型式に相当する。15 世紀後半～ 16



第 91 図　土坑出土遺物実測図（６）

SK346



第 92 図　土坑出土遺物実測図（７）

世紀の所産である。132 は朝鮮陶器瓶（徳利）のほぼ完形品である。深緑色の藁灰釉を基調に、鉄分を多く含んだ自然釉が垂れかかる。底部と胴部の接合痕と、胴部と頸部の接合痕が明瞭に残存し、かつ、同心円文当具痕は胴部のみに残ることから、底部、胴部、頸部という単位で、それぞれ個別に成形したうえで接合したものと推定できる。15 世紀後半～ 16 世紀の所産と推測する。以上の遺物から、土坑 SK336 の廃絶時期は 15 世紀後半～ 16 世紀と判断する。なお、共伴した炭化材を放射性炭素年代測定（AMS 法）した結果は、16 世紀後半～ 17 世紀初頭の時期を示している。

133 は SK338 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。他の出土例と比べて頸部に横ナデが強く入り、頸部と胴部の境が明確な稜線をなしていることが特徴的である。岩崎編年のⅢ型式古段階であり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。

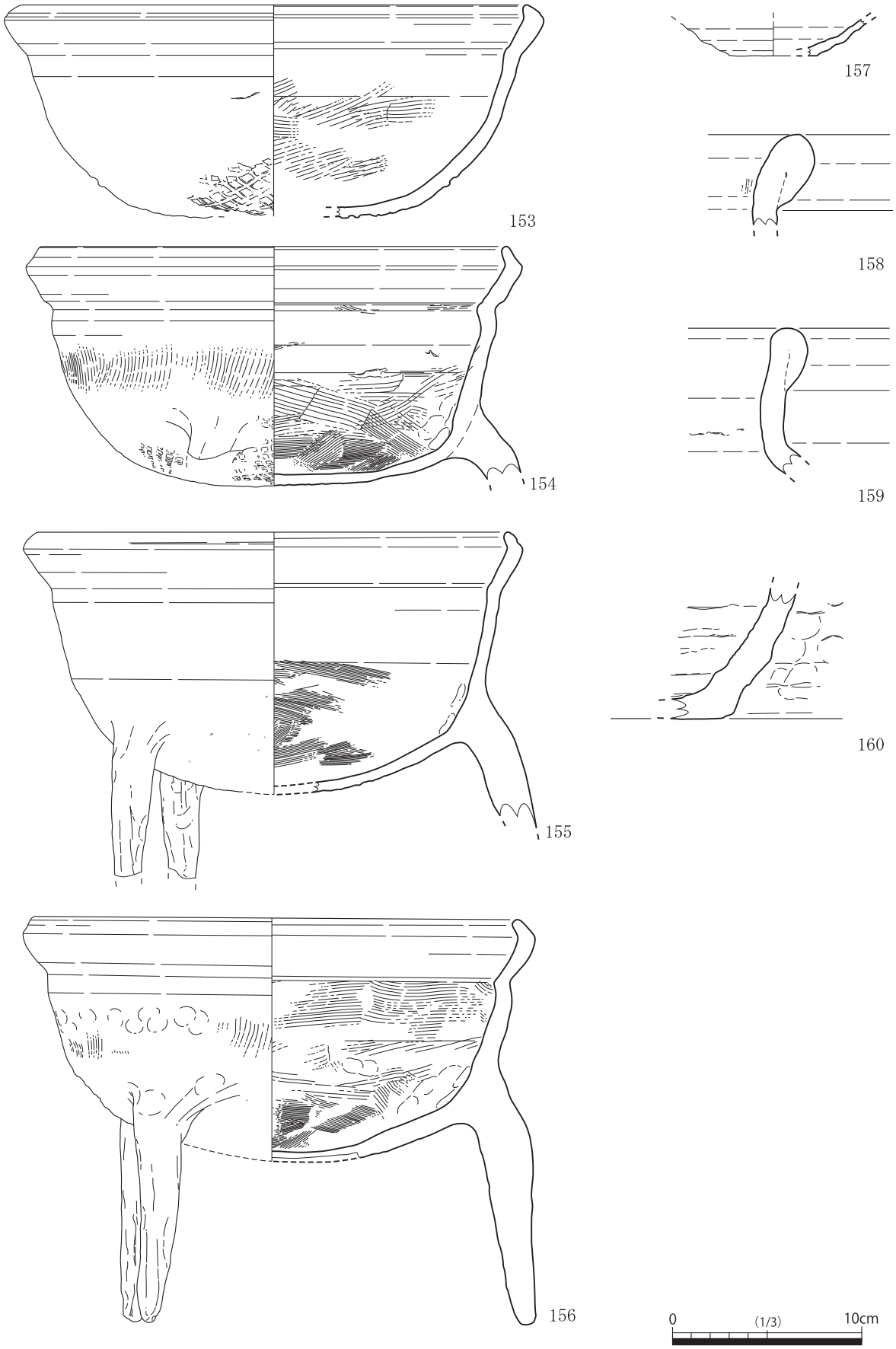
134 は SK342 より出土した白色系の土師器皿である。15 世紀の所産と推測する。

135 ～ 145 は SK343 より出土した遺物である。135 ～ 137 は土師器皿片であり、このうち、135・137 は白色系で底部中央が薄く、136 は橙色系で底部中央が厚いつくりである。14 世紀後半～ 15 世紀の所産と推測する。138 ～ 141 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。いずれも内外面のハケ目をナデ消す意図がみられ、かつ、口縁部比率の低いものである。このうち、138・140 が岩崎編年Ⅲ型式古段階、139 がⅡ型式もしくはⅢ型式古段階であり、14 世紀後半～ 15 世紀初頭の所産である。142 は瓦質土器の擂鉢もしくは鉢片である。全面的に摩滅しており、土坑の廃絶に際して偶発的に混入した可能性がある。15 世紀前半の所産である。143 は瓦質土器火鉢である。頸部外面には菱形の印文を施す。144･145 は羽釜の破片であり、このうち、144 は須恵質に近い瓦質、145 は土師質である。13 世紀後半～ 14 世紀前半のものとみられ、偶発的な混入品であろう。以上の出土遺物のうち、瓦質土器足鍋が土坑の廃絶時期の上限を示すものであり、その時期は 14 世紀後半～ 15 世紀初頭である。

146 ～ 148 は SK344 より出土した遺物である。146 は白色系の土師器皿であり、内外面に丁寧に回転ナデを施す。北島編年大内ⅡＢ式に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。147 は瓦質土器擂鉢であり、５条単位のオロシ目を施し、内面のハケ目は残存している。15 世紀前半前後の所産と推測する。148 は瓦質土器甕片で、外面の格子目タタキ痕を木目の細かいハケで消そうとしている。15 世紀の所産と推測する。以上の出土遺物は土坑の廃絶時期の上限を示しているものと考える。

149 ～ 152 は SK346 より出土した遺物である。いずれも摩滅が進行しており、偶発的な混入と判断している。149 は土師器椀であり、13 世紀後半～ 14 世紀前半の所産である。150 は白色の土師器皿で 14 世紀の所産と推測する。151 は瓦質土器足鍋片で、岩崎編年Ⅲ型式古段階であり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。152 は瓦質土器火鉢で、15 世紀以降の所産と推測する。

SK347



第 93 図　土坑出土遺物実測図（８）

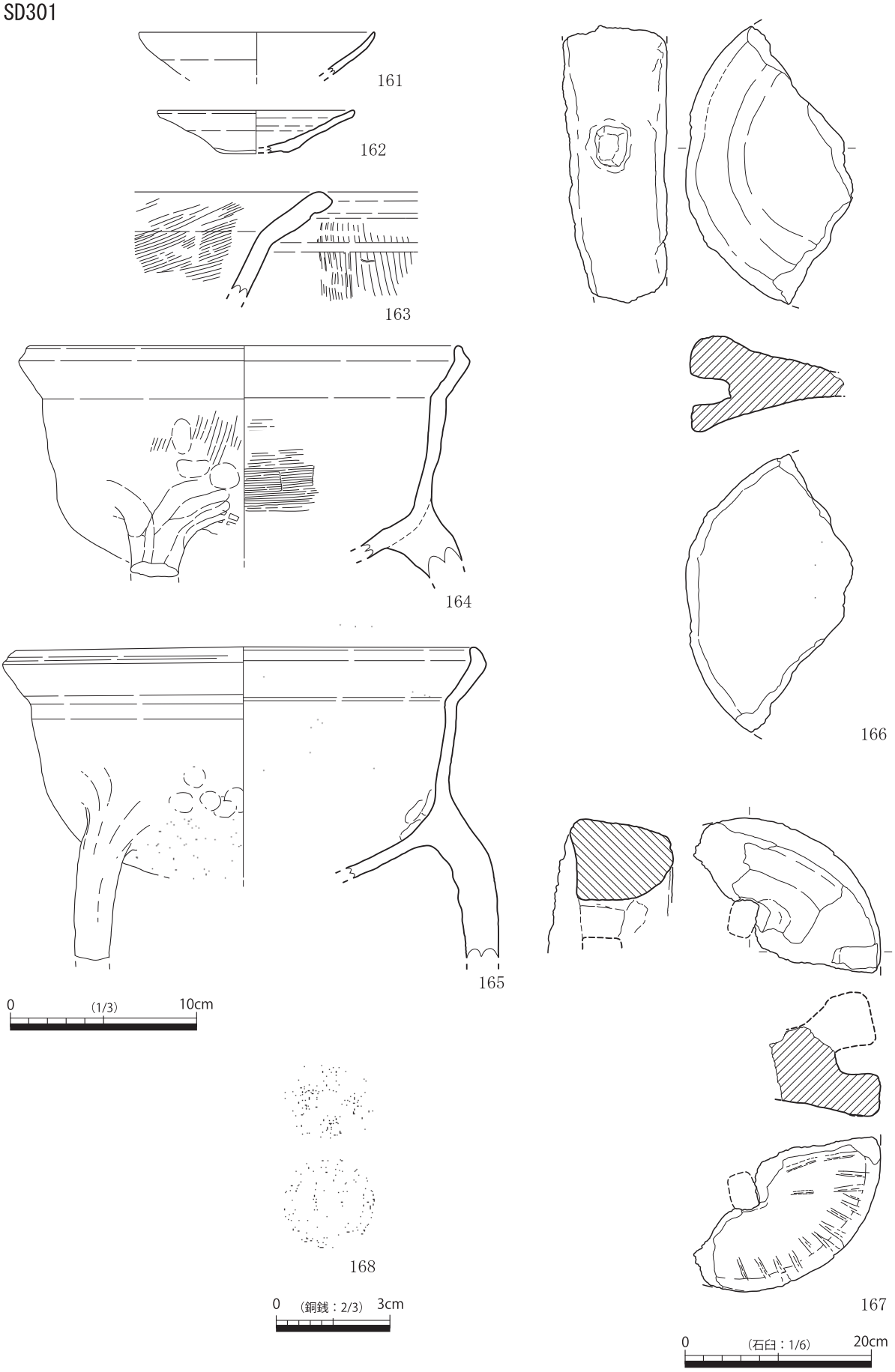
153 ～ 160 は SK347 から出土した遺物である。153 ～ 156 は瓦質土器足鍋もしくは鍋である。いずれも残存率が高く、意図的に廃棄された一括資料である。また、底部もほぼ完存する状況で出土しており、底が抜けた状態で多量廃棄された SE304 出土例とは廃棄のされ方は区別できる。いずれも断面白色のやや硬質のものである。153 は内面の摩滅は進行しつつあるものの、外面は煤の付着がほとんどなく、また、煮沸による器表面の劣化もほとんど確認できない。154 ～ 156 は外面に煤が付着し、底部内面には焦げたような変色の痕が残る。また、底部外面は煮沸による器表面の劣化がやや進行している。このうち、154 は脚部が３本とも欠損しているが、そのうちの２本の破面は摩滅・変色しており、鍋として使用された可能性がある。また、156 は底部外面が焼成破裂により器壁が薄くなっているが、その破裂面全体が変色していることから、焼成破裂後も使用し続けたことが確認できる。以上のことから、基本的には使用していたものを廃棄したものと判断できる。ただし、底部もよく残っており、まだ使用可能な状態で廃棄した可能性がある。いずれも岩崎編年Ⅳ型式であり、15 世紀後半～ 16 世紀の所産である。157 は白色の土師器皿片である。摩滅がやや進行しており、153 ～ 156 より古い時期のものでもあることから、偶発的な混入品と考える。158 ～ 160 は陶器壺片である。158 は備前焼で、15 世紀の所産である。159・160 は信楽焼であり、同一個体の可能性が高い。茶壺として使用されたことが想定できる。以上の出土遺物のうち、153 ～ 156 がこの土坑の形成時期を示すものであり、その時期は 15 世紀後半～ 16 世紀である。

（５）溝出土遺物（第 94 ～ 98 図　図版 50 ～ 52）

161 ～ 167 は SD301 より出土した遺物である。161・162 は白色の土師器皿である。161 は緻密な胎土をもち、調整も丁寧に仕上げており、他の出土例より胎土が精良な印象を受け、後述する SD303 出土の 169 と類似する。163 は瓦質土器鍋、164・165 は瓦質土器足鍋である。164・165 は岩崎編年Ⅳ型式であり、15 世紀後半～ 16 世紀の所産である。166・167 は石臼である。ともに上臼で、166 が角閃石安山岩製、167 が花崗岩製である。166 は上面の断面形が浅い皿形で挽き木穴は平面方形である。下面では使用によるすり減りで溝が失われてしまっており、同心円状の擦痕が確認されるのみである。167 は上面の残存状況が悪いが、浅い皿形の断面をなしているものと推定する。供給口は平面方形に復元でき、挽き木穴も平面方形である。下面には縁辺部に溝がかろうじて残存するものの、分画数等の復元は困難である。166 同様、同心円状の擦痕が巡る。168 は咸平元寶であり、初鋳年は 998 年である。これらの遺物のうち、出土状況などから 164・165 が溝の埋没時期の上限を示しているものと判断しており、その時期は 15 世紀後半～ 16 世紀である。

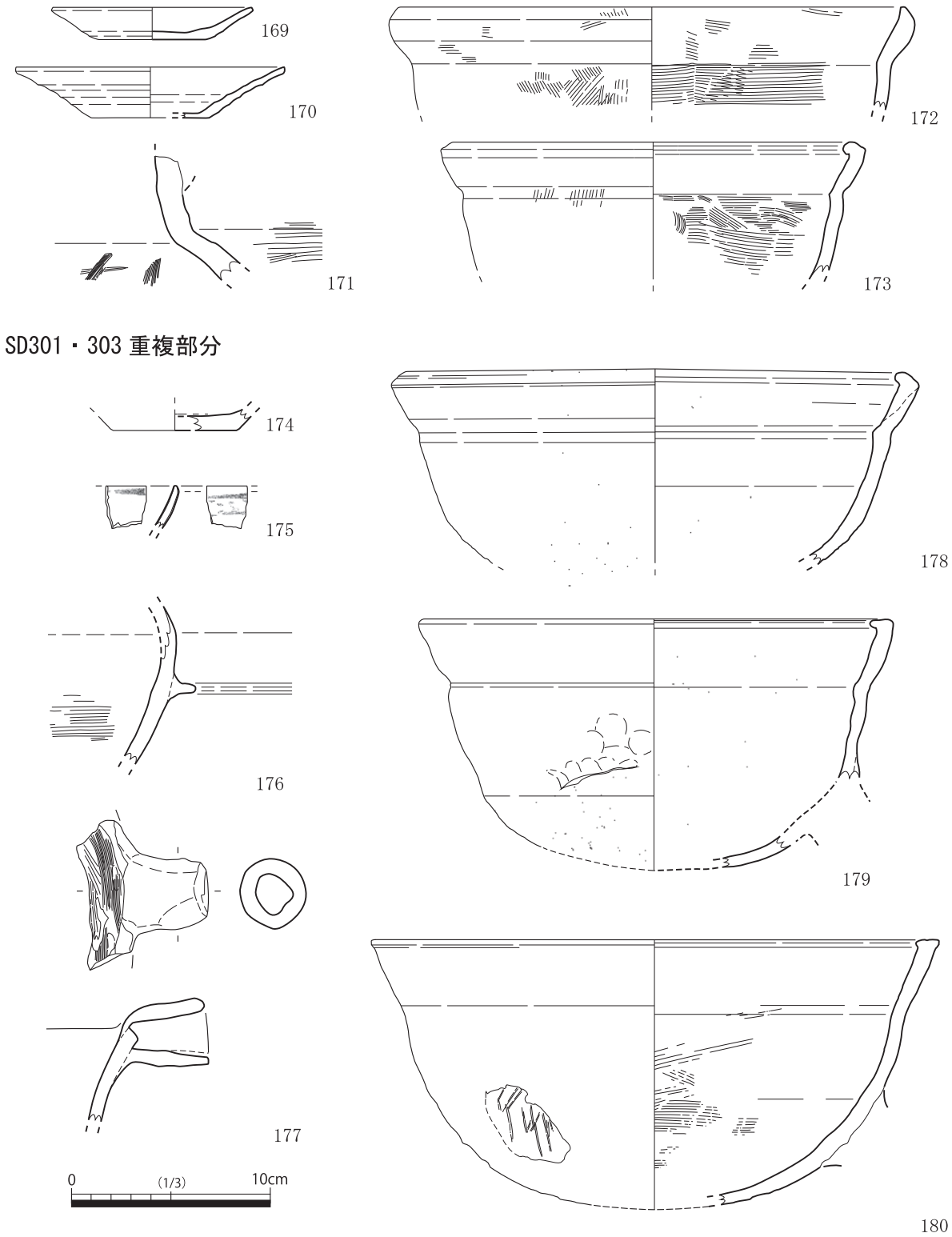
169 ～ 173 は SD303 より出土した遺物である。169・170 は白色の皿である。両者ともに胎土に砂粒をほとんど含まず、外面にロクロ目が少し確認できるものの、基本的に丁寧に回転ナデ調整を施している。特に、169 は底部内面にまで調整が及ぶ。北島編年の大内ⅣＡ１式もしくはⅣＡ２式に相当し、16 世紀初頭～前半の所産である。171 は備前焼陶器壺片である。口縁部は外側への折り曲げの部分で剝離している。15 世紀以降の所産である。172・173 は瓦質土器足鍋もしくは鍋であり、ともに断面灰白色の硬質である。172 は岩崎編年Ⅲ型式新段階に相当し、15 世紀後半～ 16 世紀前半の所産である。173 はⅣ型式であり、16 世紀の所産である。以上の遺物から、SD303 の埋没時期の上限は 16 世紀である。

SD301



第 94 図　溝出土遺物実測図（１）

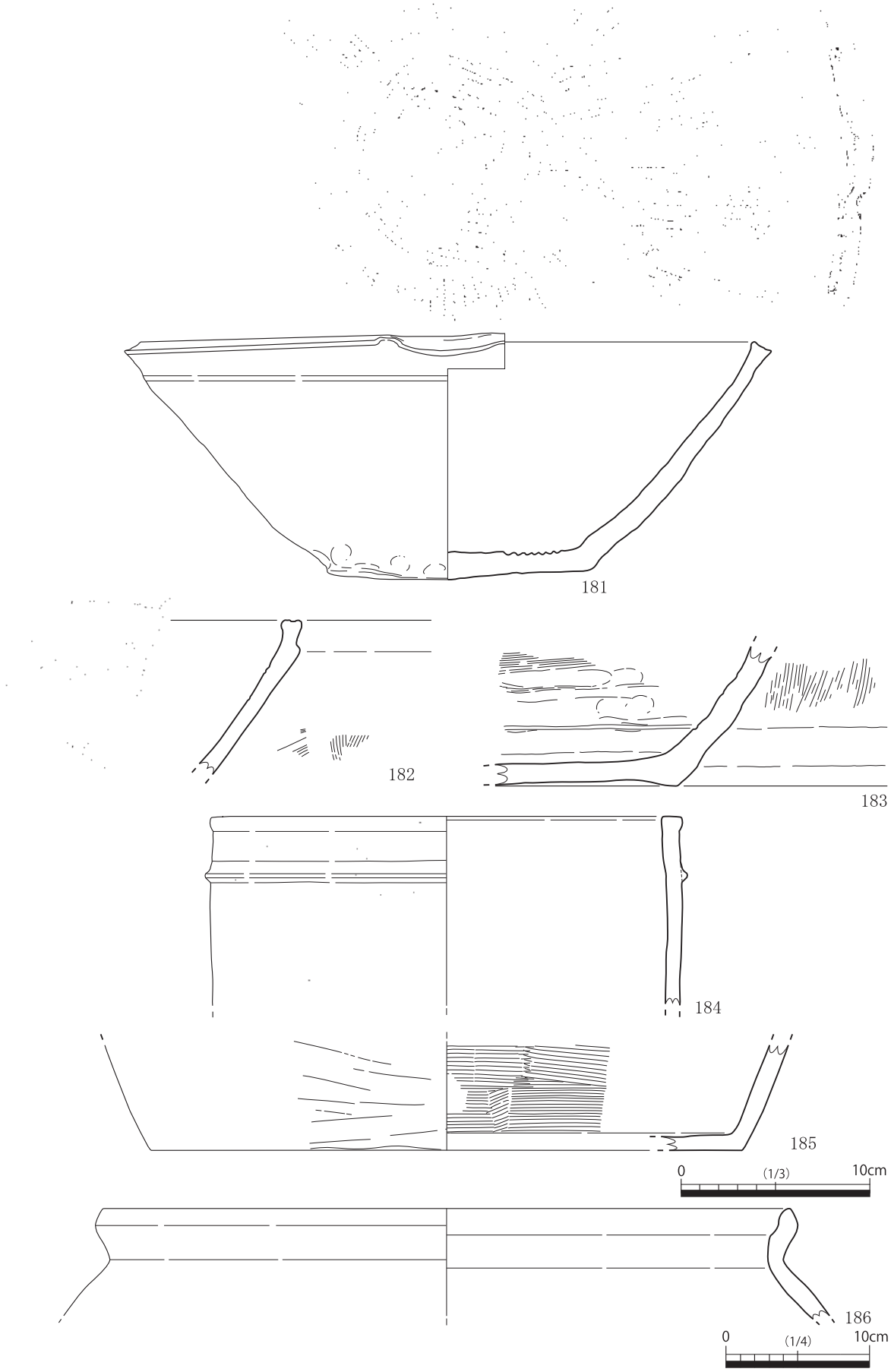
SD303



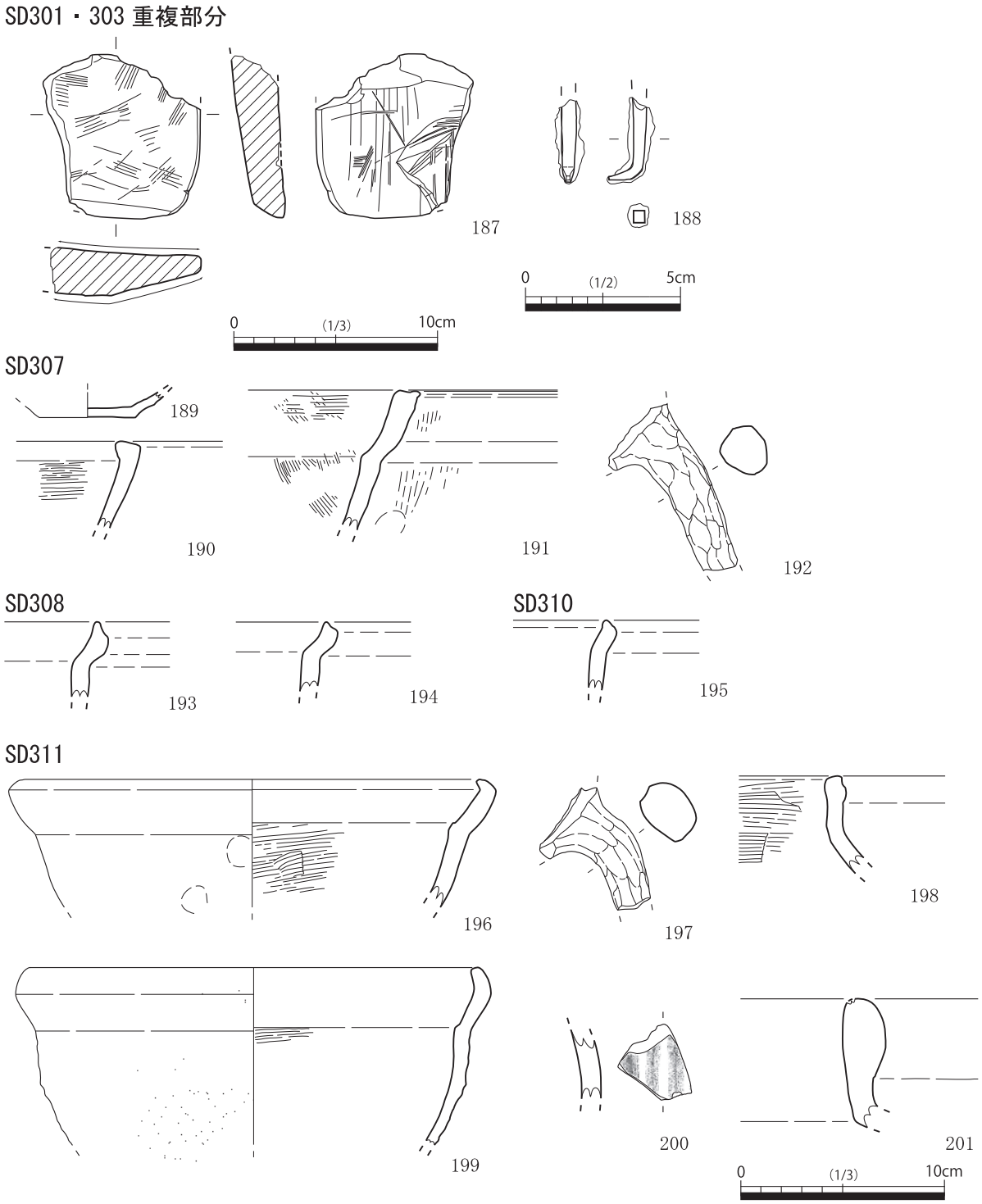
第 95 図　溝出土遺物実測図（２）

174 ～ 188 は SD301 と SD303 が重複する部分より出土した遺物であり、どちらに所属するかを判断するのが困難であるため、ここでまとめて報告する。174 は土師器杯もしくは皿片である。橙色系と考えられるが、二次被熱によって薄い赤色に変色している。14 世紀～ 15 世紀前半の所産と推定する。175 は青花椀片で、景徳鎮産と推測する。15 世紀～ 16 世紀の所産である。176 は瓦質土器湯釜

SD301・303 重複部分



第 96 図　溝出土遺物実測図（３）



第 97 図　溝出土遺物実測図（４）

片であり、断面黄灰色をし、土師質に近い軟質である。15 世紀～ 16 世紀の所産である。177 ～ 180 は瓦質土器足鍋もしくは鍋である。177 以外は残存率の高い資料である。177 は断面灰白色のやや硬質で、断面円形で短めの把手部が付く。頸部と胴部の境がほとんど区別されなくなっているタイプのもので、16 世紀後半～末の所産と考える。178 も断面灰白色のやや硬質である。岩崎編年Ⅳ型式であり、15 世紀後半～ 16 世紀の所産である。179 は断面灰色で須恵質に近い硬質である。ひずみが大きく、上面からみた形は楕円形をなしている。岩崎編年のⅥB 型式であり、16 世紀の所産である。

180 は断面黄灰色のやや硬質である。脚部は接合面で剝離しており、剝離剥面には接合を強固にするための刻み目痕が残る。なお、外面には煤の付着が顕著であるのに対して、剝離面には全く付着していないことから、脚部の剥離は廃棄時かそれ以降のことと推察できる。岩崎編年ⅥA型式の範疇で理解でき、かつ、頸部と胴部の境が不明瞭になりつつあることから、16 世紀後半～末の所産と推定する。181・182 は瓦質土器擂鉢である。181 は断面灰白色の硬質であり、内面には７条単位のオロシ目を施す。口縁部の横ナデが強く、意図的に外面に段を作った可能性がある。片口は極めて浅く、本来の機能を果たしていたかどうか疑問である。16 世紀の所産と推測する。182 は断面灰色で須恵質に近い硬質のものである。口縁部は上方に折り曲げ、外面は強い横ナデによって段を形成している。８条単位のオロシ目を上下２段に施していることから、16 世紀後半の所産である。183 は陶器甕もしくは壺片であり、備前焼かと考える。15 世紀以降の所産と推測する。184 は瓦質土器火鉢であると判断しているが、二次被熱の為か、明るい橙色を呈している。外面はヘラミガキ調整で、内面はナデ調整によってハケ目を完全に消している。外面には突帯で画された上下に菱形と円形の印花文を巡らす。16 世紀後半以降の所産と推測する。185 は瓦質土器火鉢の底部であり、断面に黒化層をもつやや軟質のものである。外面はヘラミガキ調整を施している。15 世紀～ 16 世紀の所産である。186 は瓦質土器甕である。断面に黒化層が形成されるやや軟質で、器表面は摩滅の進行が顕著である。15 世紀以降の所産である。187 は凝灰岩製砥石である。主要使用面と側面は研磨が顕著で平滑であるが、裏面での研磨は顕著でなく、線条痕が目立つ。188 は鉄釘である。

189 ～ 192 は SD307 より出土した遺物である。189 は白色の土師器皿片であり、摩滅がやや進行している。14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産と推測する。190 ～ 192 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。190 が岩崎編年ⅥB 型式で 16 世紀、191 がⅥA 型式で 16 世紀後半の所産であり、溝の埋没時期の上限を示している。

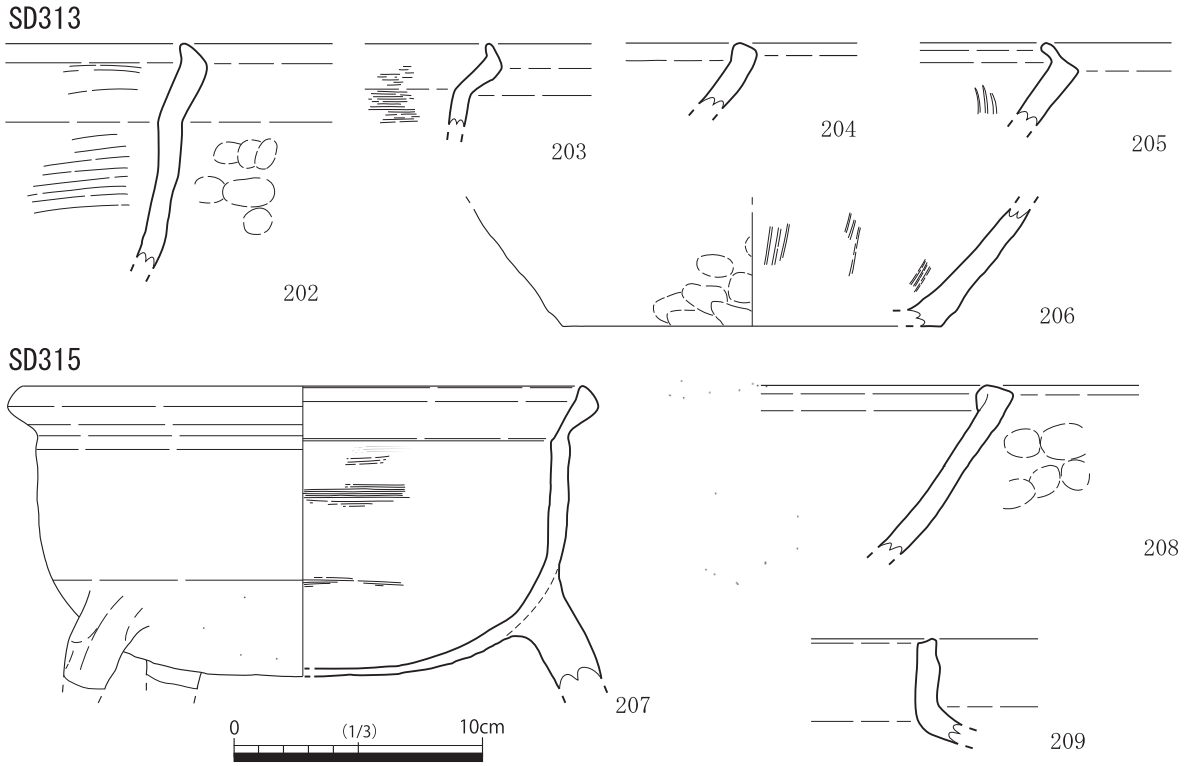
193・194 は SD308 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。岩崎編年Ⅲ型式古段階に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。溝の埋没時期の上限を示している。

195 は SD310 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片であり、岩崎編年Ⅱ型式もしくはⅢ型式古段階に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀初頭の所産と推定する。溝の埋没時期の上限を示している。

196 ～ 201 は SD311 より出土した遺物である。196・197・199 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。岩崎編年Ⅳ型式に相当し、15 世紀後半～ 16 世紀の所産である。198 は瓦質土器壺もしくは甕片である。200 は青磁壺の破片であり、酒海壺の可能性がある。201 は備前焼陶器甕もしくは壺片であり、15 世紀以降の所産である。これらは、溝の埋没時期の上限を示している。

202 ～ 206 は SD313 より出土した遺物で、全て瓦質土器で占められる。202・203 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。岩崎編年Ⅲ型式新段階からⅣ型式にかけてのものであり、15 世紀後半～ 16 世紀前半の所産である。204 は瓦質土器鉢としているが、足鍋もしくは鍋の可能性が残る。摩滅が顕著である。15 世紀の所産と推測する。205・206 は瓦質土器擂鉢片であり、ともに摩滅が進行している。205 は口縁部を折り曲げており、16 世紀後半以降の所産である。

207 ～ 209 は SD315 より出土した遺物で、すべて瓦質土器で占められる。207 は瓦質土器足鍋であり、残存率の高い資料である。断面黄灰色のやや硬質で、内外面ともにナデ調整を施すが、ハケ



第 98 図　溝出土遺物実測図（５）

目と格子目タタキ痕は残存する。岩崎編年Ⅲ型式新段階からⅣ型式にかけてのものであり、15 世紀～ 16 世紀前半の所産である。208 は瓦質土器擂鉢の破片であり、11 本以上を単位とする細かいオロシ目を施す。口縁部は折り曲げて内側に肥厚させている。15 世紀～ 16 世紀前半の所産と推測する。209 は瓦質土器湯釜の破片である。15 ～ 16 世紀の所産である。

（６）柱穴出土遺物（第 99 ～ 103 図　図版 52 ～ 54）

210 は SP3011 より出土した瓦質土器擂鉢の破片であり、摩滅が顕著である。15 世紀以降の所産と推測する。

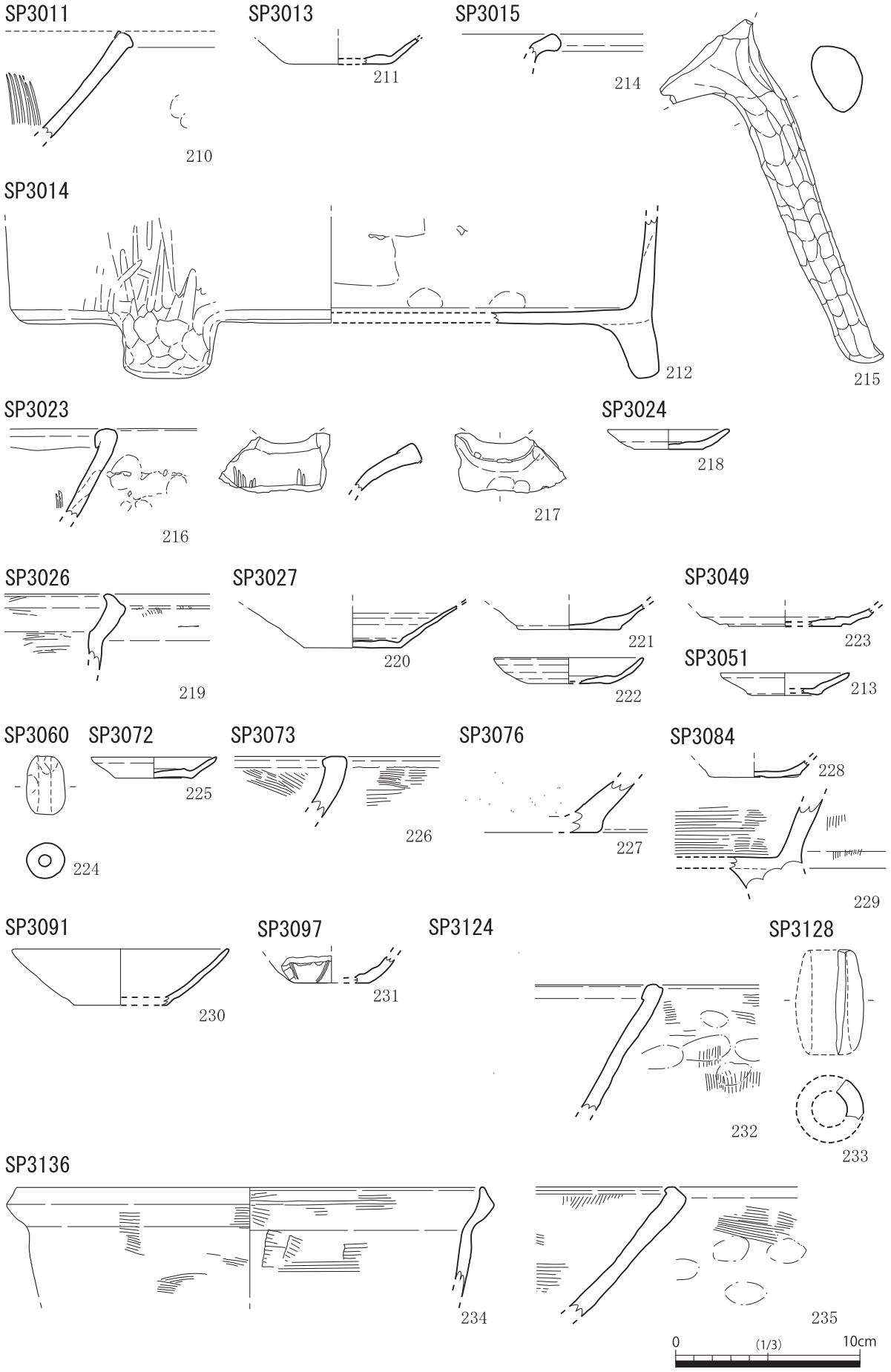
211 は SP3013 より出土した白色の土師器皿であり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産と推測する。

212 は SP3014 より出土した瓦質土器火鉢としているが、断面を含めて黒褐色が主体であり、胴部外面は橙色もしくは赤褐色を呈する。外面は横方向のミガキ調整を基本とするが、脚部付近に関しては縦方向である。底部外面には板目圧痕が明瞭に残る。16 世紀以降の所産であり、柱穴の廃絶時期の上限を示している。

214・215 は SP3015 より出土した遺物である。214 は瓦質土器足鍋もしくは鍋としているが、口縁部の形状は通有のものとは異なる。断面は土師質に近い軟質である。215 は瓦質土器足鍋である。底部のタタキ痕はナデ消され、脚部の端部は屈曲している。

216・217 は SP3023 より出土した瓦質土器擂鉢片である。216 は二次被熱により全面的に変色している。216・217 ともに口縁部を内側に折り曲げて肥厚させている。15 世紀以降の所産と推測する。

218 は SP3024 より出土した白色の土師器皿である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。15 世紀～ 16 世紀前半の所産である。



第 99 図　柱穴出土遺物実測図（１）

219 は SP3026 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。岩崎編年Ⅳ型式に相当するが口縁部比率は低い印象を受ける。15 世紀後半～ 16 世紀前半の所産と推測する。

220 ～ 222 は SP3027 より出土した土師器皿で、220･221 は白色系、222 は橙色系である。いずれも、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。北島編年大内ⅡＡ式を前後する段階のものであり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。柱穴の廃絶時期の上限を示している。

223 は SP3049 より出土した白色の土師器皿である。14 世紀後半～ 15 世紀の所産と推測する。

213 は SP3051 より出土した土師器皿である。14 世紀後半～ 15 世紀の所産と推測する。

224 は SP3060 より出土した小型の管状土錘である。

225 は SP3072 より出土した白色の土師器皿である。14 世紀後半～ 15 世紀の所産と推測する。

226 は SP3073 より出土した瓦質土器擂鉢の破片である。15 世紀以降の所産である。

227 は SP3076 より出土した瓦質土器擂鉢の破片である。二次被熱により全面的に変色している。15 世紀以降の所産と推測する。

228・229 は SP3084 より出土した遺物である。228 は白色の土師器皿である。14 世紀後半～ 15 世紀の所産と推測する。229 は瓦質土器火鉢の破片である。後世の付着物がこびり付いて外面の観察は困難である。15 世紀以降の所産と推測する。

230 は SP3091 より出土した白色系の土師器皿である。14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。

231 は青白磁の合子である。内面は釉薬を輪状に掻き取る。13 世紀～ 14 世紀の所産と推測する。

232 は SP3124 より出土した瓦質土器擂鉢の破片である。５条単位のオロシ目を施し、内面のハケ目はナデ消されている。14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産と推測する。

233 は SP3128 より出土した瓦質の管状土錘である。15 世紀以降の所産と推測する。

234・235 は SP3136 より出土した瓦質土器の破片である。ともにやや薄手のつくりで、また、摩滅がやや進行している。234 は足鍋もしくは鍋であり、岩崎編年のⅢ型式新段階に相当する。15 世紀後半～ 16 世紀前半の所産と推測する。235 は擂鉢であり、内面の劣化が著しくオロシ目が確認できない。口縁部をわずかに肥厚させていることから、15 世紀前半頃の所産と推定する。これらの遺物は、柱穴の廃絶時期の上限を示す。

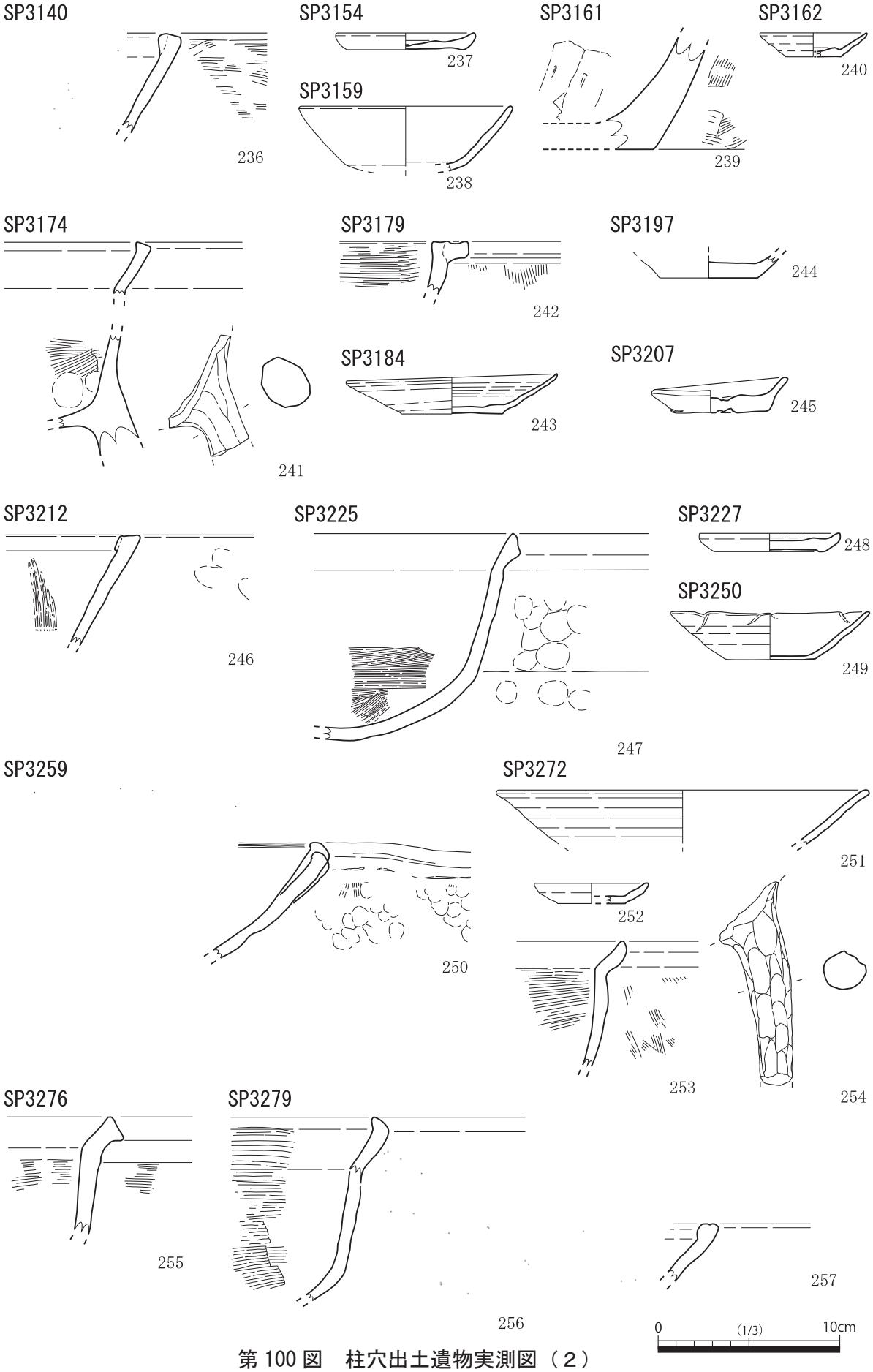
236 は SP3140 より出土した瓦質土器擂鉢片であり、９条単位のオロシ目を施す。摩滅と後世の付着物によって不明瞭だが、ハケ目は残存する。口縁部は粘土紐を貼り付けることで内側に肥厚させている。15 世紀前半以降の所産である。

237 は SP3154 より出土した橙色系の土師器皿である。北島編年大内０式に相当し、14 世紀の所産である。

238 は SP3159 より出土した白色系の土師器皿もしくは杯である。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整を施す。14 世紀後半以降の所産と推測する。

239 は SP3161 より出土した陶器甕片であり、常滑焼の可能性がある。内面は板ナデ調整である。15 世紀以降の所産と推測する。

240 は SP3162 より出土した白色の土師器皿である。北島編年大内ⅢＡ３式に相当し、15 世紀後半前後の所産である。



第 100 図　柱穴出土遺物実測図（２）

241 は SP3174 より出土した瓦質土器足鍋片である。岩崎編年Ⅲ型式新段階に相当し、15 世紀後半以降の所産である。

242 は SP3179 より出土した瓦質土器羽釜の破片であり、摩滅がやや進行している。13 世紀後半～14 世紀前半の所産と推測する。

243 は SP3184 より出土した白色の土師器皿である。回転ナデ調整を施しているが、ロクロ目はやや残る。北島編年の大内ⅢＢ式に相当し、15 世紀後半～末の所産である。柱穴の廃絶時期の上限を示している。

244 は SP3197 より出土した橙色の土師器杯片である。14 世紀の所産と推測する。

245 は SP3207 より出土した橙色の土師器皿である。14 世紀の所産と推測する。

246 は SP3212 より出土した瓦質土器擂鉢片であり、摩滅が顕著である。5 条以上を単位とするオロシ目を施す。15 世紀以降の所産と推測する。

247 は SP3225 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋で、須恵質に近い硬質のものである。内外面ともにナデ調整を施し、ハケ目や格子目タタキ痕は、部分的に残存するにとどまる。岩崎編年のⅢ型式古段階であり、15 世紀前半を前後する時期の所産である。柱穴の廃絶時期の上限を示している。

248 は SP3227 より出土した橙色の土師器皿である。14 世紀の所産と推測する。

249 は SP3250 より出土した白色の土師器皿である。口縁部が輪花状に歪んでいるが、意図的かどうかの判断がつかない。回転ナデ調整を施すが、外面にはロクロ目がやや残る。北島編年の大内ⅢＡ１式に相当し、15 世紀中頃を前後する時期のものと推定する。柱穴の廃絶時期を示している。

250 は SP3259 より出土した瓦質土器擂鉢で、須恵質に近い硬質のものである。５条単位のオロシ目を施し、内面にナデ調整を施しているが、ハケ目は消し切れていない。口縁部はわずかに内側に肥厚しており、15 世紀前半頃の所産である。

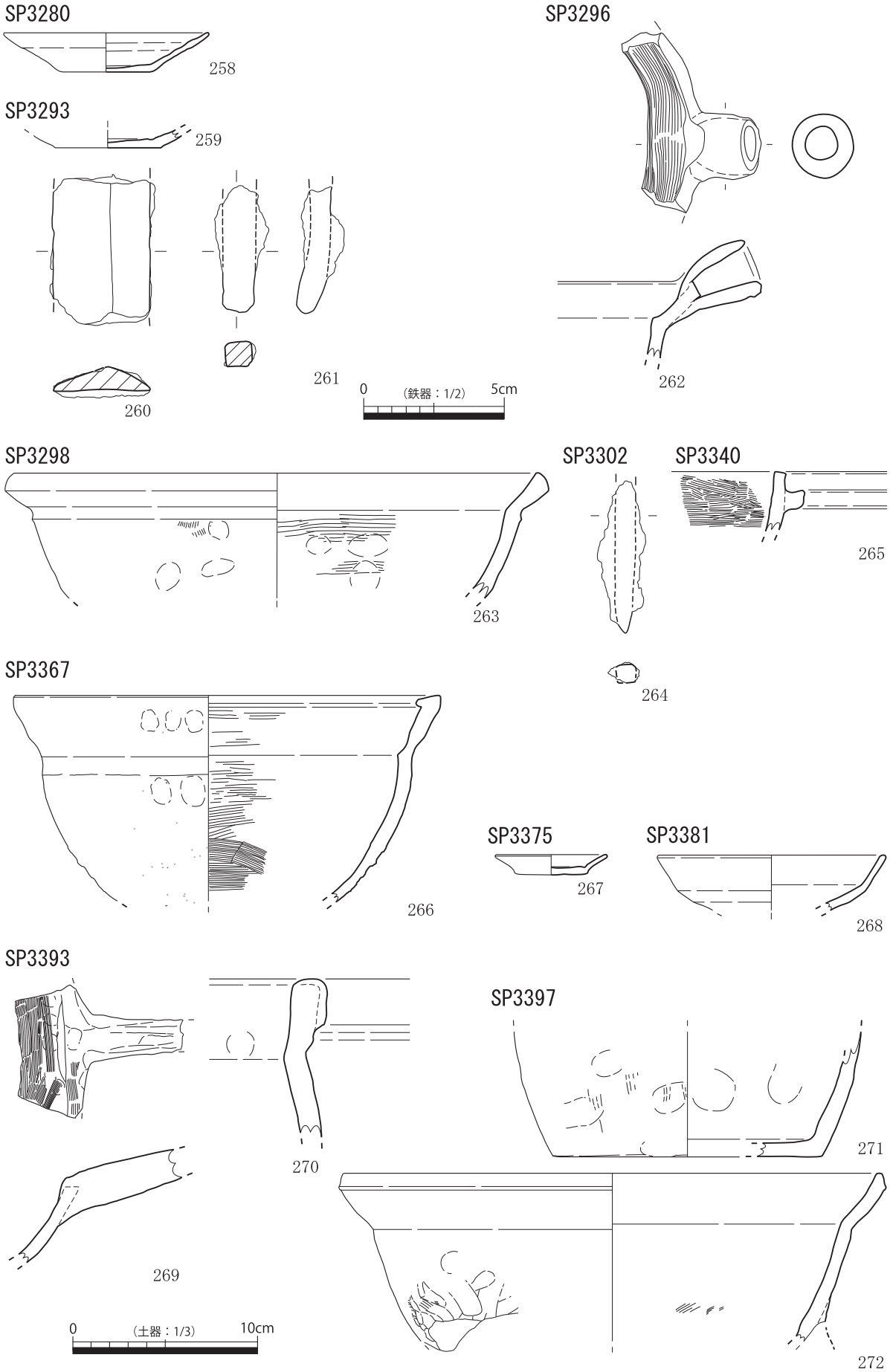
251 ～ 254 は SP3272 より出土した遺物である。251・252 は白色系の土師器皿で、北島編年の大内ⅢＡ式前後の段階に相当し、15 世紀中頃前後の所産と推定する。253・254 は瓦質土器足鍋もしくは鍋の破片であり、253 は須恵質に近い硬質、254 は土師質に近い軟質である。253 は内外面ともにナデ調整を施しており、ハケ目はかすかに確認できるにとどまる。岩崎編年Ⅲ型式新段階であり、15 世紀後半前後の所産である。

255 は SP3276 より出土した瓦質土器鍋片である。いわゆる防長型ではなく、大型の鍋であると推定する。14 世紀～ 15 世紀初頭の所産と推測する。

256 ～ 257 は SP3279 より出土した瓦質土器片である。256 は足鍋もしくは鍋であり、岩崎編年のⅣ型式に相当する。15 世紀後半～ 16 世紀の所産である。257 は擂鉢であり、７条以上を単位としたオロシ目を施す。15 世紀以降の所産と推測する。

258 は SP3280 より出土した白色の土師器皿である。内面にロクロ目がやや残存している。大内ⅢＡ３式に相当し、15 世紀後半前後の所産である。

259 ～ 261 は SP3293 より出土した遺物である。259 は白色の土師器皿もしくは杯であり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産と推定する。260・261 は同一個体の可能性のある鉄製品であり、260 は鎬をもつ剣形である。ただし、剣だとすると中世の遺物としては疑問が残る。



第 101 図　柱穴出土遺物実測図（３）

262 は SP3296 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋の破片である。岩崎編年のⅥB型式に相当し、16 世紀の所産である。柱穴の廃絶時期の上限を示している。

263 は SP3298 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片であり、内面および破面の摩滅が進行している。岩崎編年のⅢ型式新段階に相当し、15 世紀後半以降の所産である。

264 は SP3302 より出土した鉄釘である。

265 は SP3340 より出土した土師質土器羽釜片である。13 世紀～ 14 世紀前半の所産と推測する。

266 は SP3367 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋である。岩崎編年ＶＡもしくはＶＢ型式であり、16 世紀後半以降の所産である。

267 は SP3375 より出土した白色の土師器皿である。北島編年のⅢＡ３式に相当し、15 後半前後の所産である。

268 は SP3381 より出土した陶器皿である。二次被熱を受けて変色している。底部外面は回転ヘラケズリによって釉薬を掻き取る。内面には体部と底部の境に沈線が一条巡る。

269･270 は SP3393 より出土した瓦質土器片で､369 は焙烙､270 は甕である。270 は二次被熱の為か、全面的に橙色を呈している。外面は格子目タタキ痕が明瞭に残る。269・270 ともに 16 世紀以降の所産と推測する。

271・272 は SP3397 より出土した瓦質土器であり、ともに内面の摩滅が進行している。271 は壺の底部と推定している。15 世紀～ 16 世紀前半の所産と推測する。272 は足鍋であり、外面はハケ目をナデ消している。岩崎編年Ⅲ型式古段階もしくは新段階に相当し、15 世紀の所産である。

273・274 は SP3427 より出土した遺物である。273 は大型の土師器杯で、外面はほぼ未調整のためロクロ目が顕著に残る。14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産と推定する。274 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片で、かなり薄手のものである。岩崎編年のⅠ型式もしくはⅡ型式に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀初頭の所産である。

275 は SP3444 より出土した瓦質土器甕片である。15 世紀後半以降の所産と推測する。

276･277 は SP3452 より出土した遺物である。276 は橙色の皿、277 は土師質土器鍋の破片であり、ともに 14 世紀後半以降の所産と推定する。

278 は SP3455 より出土した土師質土器鍋片である。14 世紀～ 15 世紀前半の所産と推測する。

279 は SP3471 より出土した橙色の土師器皿である。14 世紀前半～中頃の所産と推測する。

280 は SP3473 より出土した橙色の土師器皿である。13 世紀後半～ 14 世紀前半の所産と推測する。

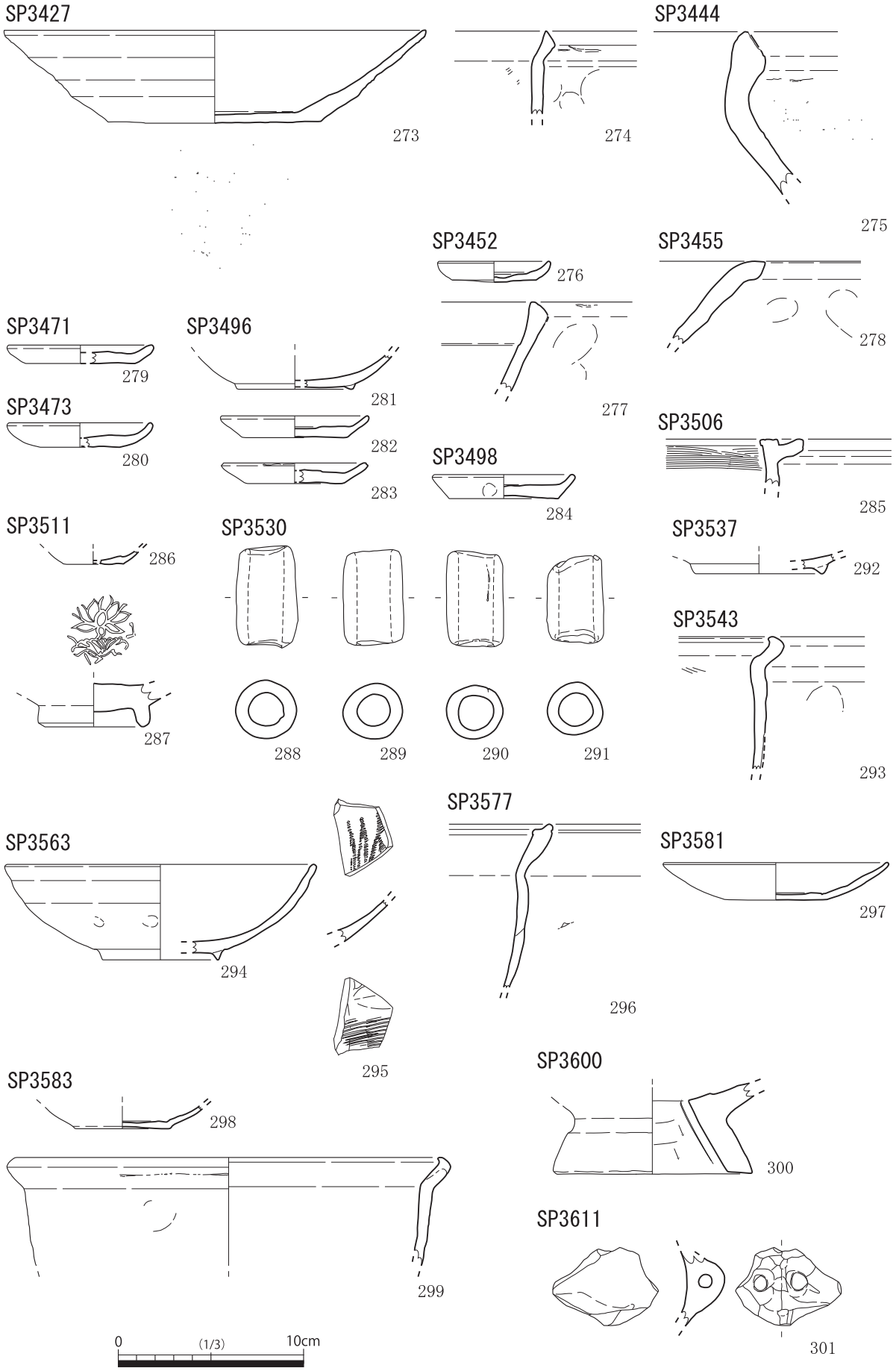
281 ～ 283 は SP3496 より出土した土師器である。281 は白色の椀であり、摩滅が進行している。極めて短い高台を貼り付けている。282・283 は橙色系の皿である。14 世紀前半の所産と推定する。

284 は SP3498 より出土した橙色の土師器皿である。14 世紀前半の所産と推測する。

285 は SP3506 より出土した瓦質土器羽釜片である。13 世紀後半～ 14 世紀前半の所産と推測する。

286･287 は SP3511 より出土した遺物である。286 は土師器皿であり､15 世紀以降の所産と推測する。287 は青磁椀である。見込みに印花文を施し、釉薬は高台内面に及ぶ。14 世紀後半～ 15 世紀の所産である。

288 ～ 291 は SP3530 より出土した管状土錘である。いずれも完形であり、一括廃棄資料である。



第 102 図　柱穴出土遺物実測図（４）

292 は SP3537 より出土した土師器椀である。13 世紀後半～ 14 世紀前半の所産と推測する。

293 は SP3543 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。15 世紀の所産と推測する。

294・295 は SP3563 より出土した遺物である。294 は白色の土師器椀であり、高台はシャープな断面三角形をなす。14 世紀前半の所産と推測する。295 は同安窯青磁椀片である。大宰府編年Ⅰ類（太宰府市教育委員会 2000、以下同じ）であり、12 世紀後半の所産である。

296 は SP3577 より出土した瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。口縁部の形状にやや違和感があるが、岩崎編年Ⅴ型式の範疇で理解できるかと考える。16 世紀以降の所産と推測する。

297 は SP3581 より出土した白色系の土師器皿である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、ロクロ目は確認できない。北島編年大内Ⅴ式に相当し、16 世紀後半～末の所産である。

298・299 は SP3583 より出土した遺物である。298 は白色の土師器皿であり、内外面ともに回転ナデ調整を施し、ロクロ目は確認できない。297 に類似した印象を持つが、297 よりはやや立ち上がる。15 世紀以降の所産と推定する。299 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片であり、破面の摩滅がやや進行する。岩崎編年Ⅲ型式古段階に相当し、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。

300 は SP3600 より出土した橙色の土師器托である。高台内面は板ナデによる粗い調整を施す。底部内面が残っていないが、明確な破面が認められず、かつ、器表面と剝離面の識別も困難である。当初から底部がなかった可能性を考慮しなければならない。13 世紀後半以降の所産と推測する。

301 は SP3611 より出土した瓦質土器湯釜の吊手部である。15 ～ 16 世紀の所産である。

302・303 は SP3631 より出土した遺物である。302 は白色の土師器皿であり、14 世紀後半～ 15 世紀の所産と推測する。303 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片である。岩崎編年のⅡ型式からⅢ型式古段階にかけてのものであり、14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産である。

304 は SP3632 より出土した瓦質土器羽釜片である。断面灰白色の硬質である。13 世紀以降の所産であり、柱穴の廃絶時期の上限を示している。

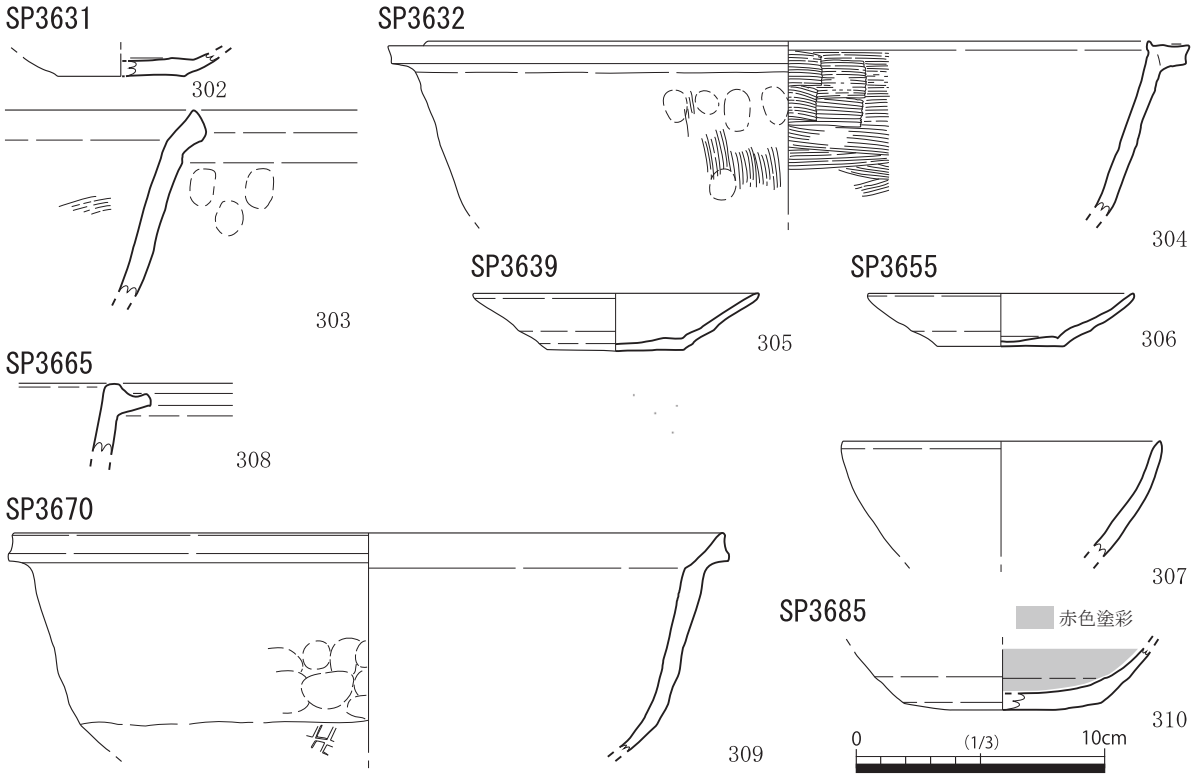
305 は SP3639 より出土した白色の土師器皿である。回転ナデ調整を施し、ロクロ目はほとんど確認できない。北島編年の大内ⅣＡ１式に相当し、16 世紀初頭を前後する時期の所産である。

306・307 は SP3655 より出土した遺物である。306 は白色の土師器皿で、305 と同様、回転ナデ調整によってロクロ目は確認できない。北島編年大内ⅣＡ１式に相当し、16 世紀初頭を前後する時期の所産である。307 は陶器椀で、いわゆる天目茶碗である。断面灰色の須恵質に近い硬質で、胎土に白色細粒を含む。内外面に厚めの黒釉を施す。15 ～ 16 世紀の所産と推測する。

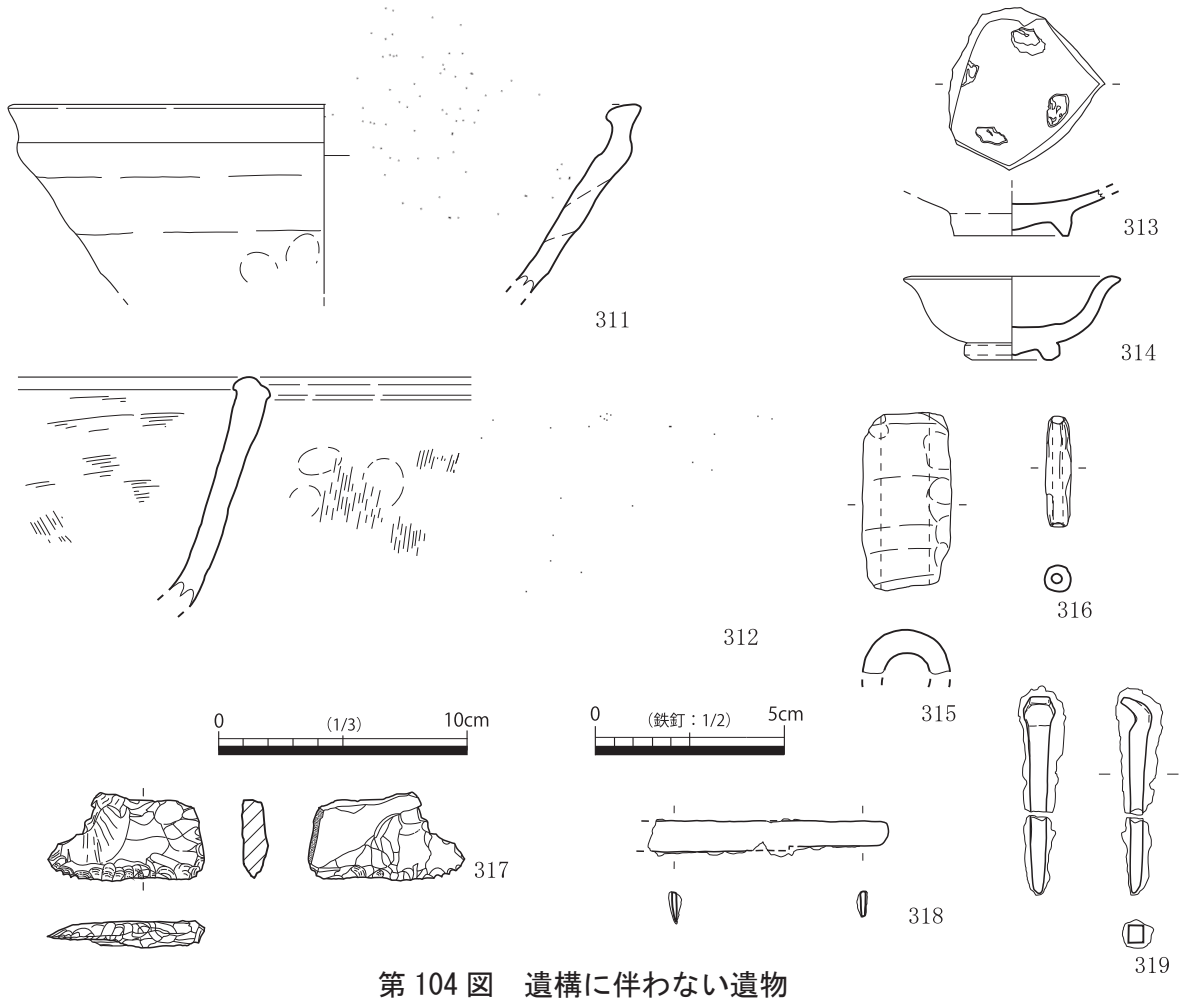
308 は SP3665 より出土した瓦質土器羽釜片である。13 世紀後半～ 14 世紀前半の所産と推測する。

309 は SP3670 より出土した瓦質土器鍋であるが、全体的に土師質に近い軟質を呈する。口縁部を下方に拡張しており、いわゆる防長型足鍋とは特徴が異なるが、岩崎編年のⅡ型式からⅢ型式の範疇で理解できる。14 世紀後半～ 15 世紀前半の所産であり、柱穴の廃絶時期を示している。なお、この柱穴は、14 世紀前半～中頃の墓 ST302 を壊して形成されていることから、形成時期の上限は 14 世紀中頃と推定でき、309 が示す時期と矛盾しない。

310 は SP2685 より出土した白色の土師器杯である。内面は底部も含めて丁寧なナデ調整によって平滑に仕上げている。体部内面は赤色塗彩が認められる。13 世紀～ 14 世紀前半の所産と推測する。



第 103 図　柱穴出土遺物実測図（５）



第 104 図　遺構に伴わない遺物

（７）遺構に伴わない遺物（第 104 図　図版 55）

311 は瓦質土器擂鉢片で、断面灰白色の硬質のものである。重ね焼きのためか、外面で瓦質の色調をなすのは口縁部付近のみであり、体部中位は断面の色調に近い灰白色である。９条単位のオロシ目を密に巡らす。口縁部の形状から、16 世紀後半～末の所産である。

312 は瓦質土器鍋もしくは足鍋片である。外面に印花文を巡らしており、後述する 347 と同タイプと判断できる。断面は黒化層をもつ軟質である。15 世紀～ 16 世紀の所産と推測する。

313 は陶器皿である。全体的に二次被熱により発色が悪くなっている。底部外面にまで釉薬が及んでいる。近世以降の所産と推測する。

314 は陶器椀である。光沢感のある透明釉を施し、体部外面から底部にかけては露胎する。近世～近代の所産と推測する。

315･316 は管状土錘である。ともに瓦質焼成の硬質であり、15 世紀～ 16 世紀の所産と判断できる。

317 は安山岩製石匙である。全体的に風化がやや進行しており、縄文時代の所産と推定する。

318 は刀子、319 は鉄釘である。

このほか、鉄滓の小片が少量出土している（図版 55 － 372）

６　谷状地形

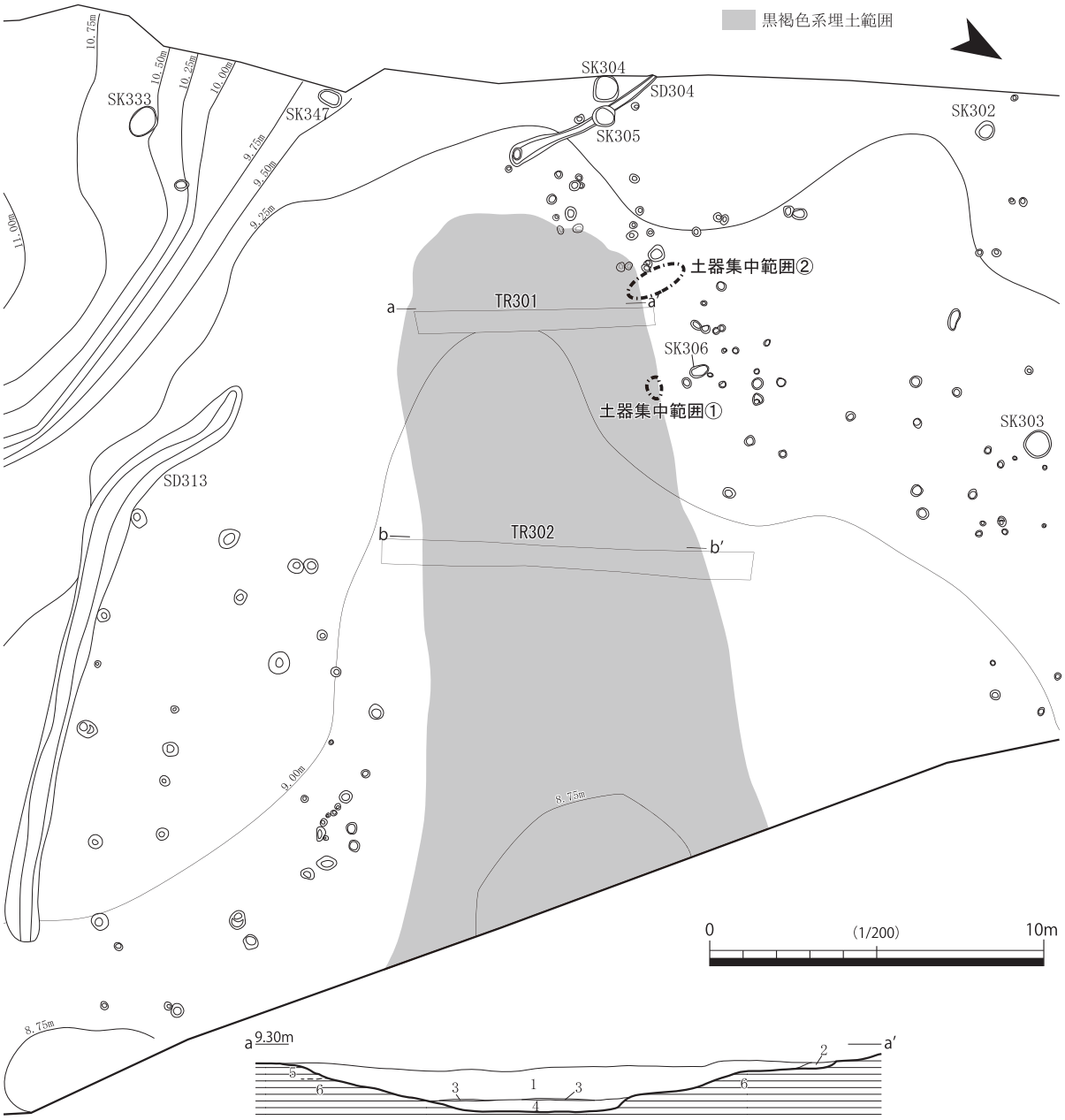
（１）谷状地形（第 105 図　図版 42）

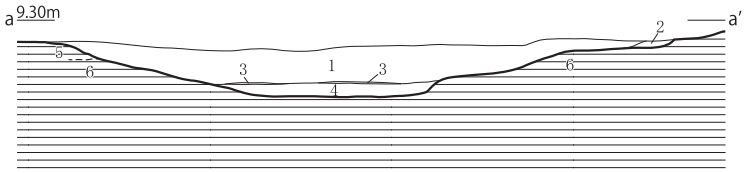
調査区中央北西寄りで検出された谷状地形である。谷状地形内には黒褐色系の埋土が堆積しており、その確認範囲は、最大幅 12.1 m、長さ 20. 4 m、深さ 80 ㎝を測る。埋土は上層と下層に大別でき、両者の間には鉄分が沈着して薄い層をなす。埋土内には上下層ともに残存率の高い遺物が多く出土していることから、上流からの流れ込みではなく、近辺から廃棄されたものと判断できる。

下層からは古墳時代後期～終末期を主体とする遺物と奈良時代の遺物が出土し、上層からは室町時代を主体とする遺物が出土しており、出土遺物からも上下層は区別することができる。また、遺物の示す時期からは、この谷状地形が古墳時代後期までには形成され、室町時代後期頃に最終埋没したものと推定でき、比較的長い期間存続していたものと判断できる。このことは、長い期間、居住域に適しない地形であったことをも意味する。実際、谷状地形周辺の遺構分布の密度は相対的に希薄である。一方、遺物の一括廃棄の目立つエリアでもあり、特に、土師器皿の多量一括廃棄は、この周辺に限って顕著な現象である。

ここで出土した土器のうち、検出面上でまとまった出土を確認できたものを、土器集中範囲①・②としている。これらと、土師器皿がまとまって出土した SK304・305 は本質的には同じ廃棄の跡と考える。また、谷状地形の北西側に瓦質土器足鍋が一括廃棄された土坑 SK347 があるが、これは廃棄すること自体を目的に掘削されたゴミ穴と判断している。このことは、調査区南側の居住域にて瓦質土器が井戸や大型土坑・溝などをゴミ穴として転用的に廃棄している状況とは対照的であり、やはり、谷状地形周辺でみられる特徴的な現象といえる。

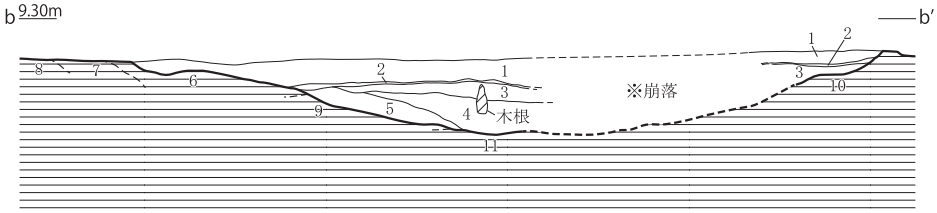
以上の状況から、少なくとも室町時代後期には、谷状地形周辺はゴミ捨て場として土地利用されていたものと推定している。





土層凡例

1　黒褐色（10YR3/1）　中礫混じり粘質土　※中世遺物多く含む（特に北側）
2　灰黄褐色（10YR5/2）　粘質土
3　鉄分沈着層
4　灰色（N4/0）　粘質土　※古墳時代主体の遺物多く含む
5　灰色（5Y6/1）　中礫混じりシルト　ややグライ化
6　灰白色（5Y8/2）　粘性シルト



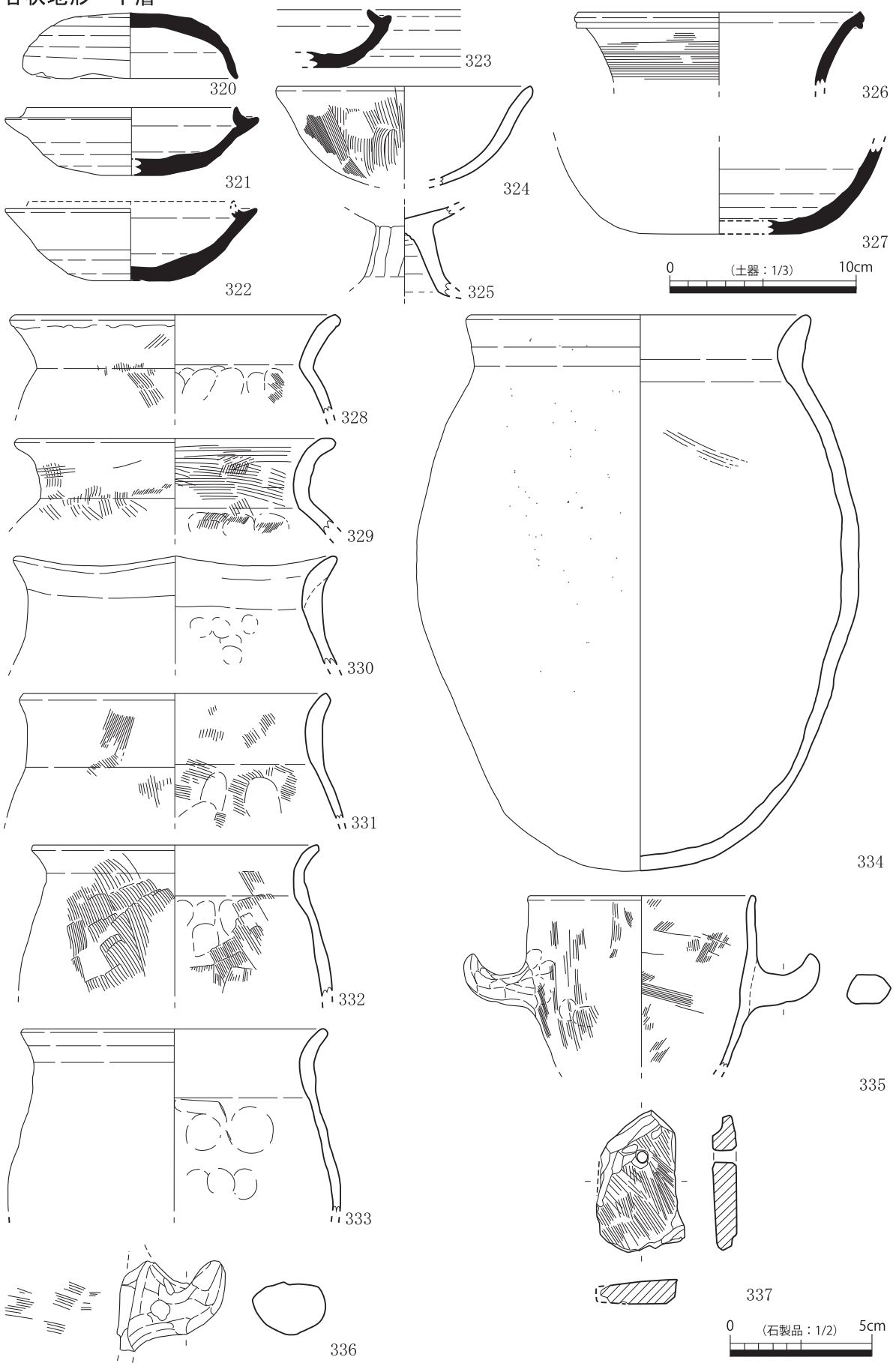
土層凡例

1　黒褐色（10YR3/1）　中礫混じり粘質土　※中世遺物多く含む（特に北側）
2　鉄分沈着層
3　灰色（N4/0）　粘質土　※古墳時代主体の遺物多く含む
4　黒色（N2/0）　粘土
5　オリーブ灰色（5GY5/1）　中礫混じり粘土
6　黄色（5Y7/6）　中礫混じり粘性シルト　締り良い
7　暗灰黄色（2.5Y4/2）　粘質土　マンガン強く沈着
8　明黄褐色（10YR6/6）　中礫混じり土
9　暗オリーブ灰色（2.5GY7/1）　粘性シルト　※グライ化
10　灰黄色（2.5Y7/2）　中礫～粗砂　湧水あり、締り非常に悪い
11　灰白色（7.5Y7/1）　粗砂

0　(1/80)　2m

第 105 図　谷状地形実測図

谷状地形　下層



第 106 図　谷状地形内出土遺物実測図（１）

（２）谷状地形内出土遺物（第 106 ～ 109 図　図版 55 ～ 58）

320 ～ 339 は下層から出土した遺物である。

320 は須恵器杯蓋である。器表面･断面ともに灰色で、黒色粒が目立つ。焼け歪みが大きく、一部、口縁部が内側に折れ曲がっている。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面には静止ナデを施しており、やや丁寧な調整という印象を受ける。田辺編年 TK209 型式（田辺 1966、以下同じ）であり、6 世紀末以降の所産である。

321 ～ 323 は須恵器杯身である。321 は器表面・断面ともに灰色で、黒色粒が少し含まれる。底部はヘラ切り後未調整である。322 は青灰色を呈し、断面が層状に赤褐色をなす焼き締まったものである。胎土に大粒の長石を含むのが特徴的である。底部外面は回転ヘラケズリを施す。323 は還元焼成が達成されず、断面は灰色であるものの器表面はにぶい橙色である。これらの杯身は、田辺編年 TK209 ～ 217 型式であり、６世紀末～７世紀前半の所産である。

324 は土師器鉢であり、共伴遺物から６世紀後半～７世紀前半のものと判断しているが、５世紀以前に遡る可能性もある。

325 は土師器高杯であり、橙色に近い赤褐色を呈する。脚部外面を面取りしていることから、７世紀後半～８世紀の所産と推測する。

326 は須恵器壺である。頸部にカキ目を巡らすことから、６世紀後半～７世紀前半の所産と考えているが、焼成がやや不良の軟質であり、８世紀に下る可能性もある。

327 は須恵器壺である。器表面・断面ともに青灰色を呈し、胎土に大粒の長石を含むのが特徴的である。胴部は内外面ともに回転ナデを施し、底部外面は回転ヘラケズリを施す。６世紀後半～７世紀前半の所産と推測する。

328 ～ 334 は土師器甕である。頸部の屈曲が強い 328 は６世紀前半以前に遡る可能性があるものの、総じて６世紀後半以降の所産と推定できる。ただし、薄手で頸部が緩やかに屈曲する 332・333 は古代にまで下る可能性もある。いずれも内面におけるケズリの痕跡は認められず、仮にケズリを施していたとしても、その後に、ハケもしくはナデ調整を施したものと推定できる。このうち、完形に復元できる 334 は、明橙色を基調とし、口縁部から頸部にかけて厚手である。外面に木目の粗いハケ調整を施す。内面は摩滅しているものの、ハケ目をナデ消しているのではないかと考える。335 は土師器甑の小型品であり、かなり薄手のつくりである。内面はハケ目をナデ消している。336 は土師器甕もしくは甑の把手部である。335・336 ともに６世紀～７世紀の所産と推測する。

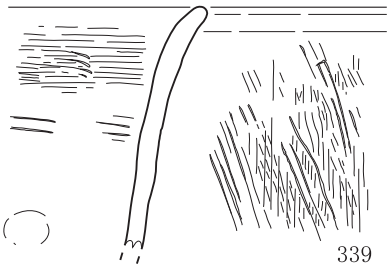
337 は盾形の滑石製模造品である。側面は研磨されておらず、粗雑な仕上げである。５世紀～６世紀の所産と推測する。

338 は須恵器杯蓋である。器表面は青灰色で、断面は赤褐色をなす焼き締まった焼成である。胎土にはやや大粒の長石・石英が目立つ。外面にのみ降灰による光沢が認められることから、正置で焼成されたと判断できる。宝珠摘みは扁平化しているが、笠形に深い器形であることから、８世紀前半～中頃の所産と推定する。

339 は土師器甑である。６～７世紀のものと考えられるが、338 と同じ TR302 より出土しており、８世紀以降に下る可能性も残る。

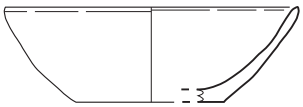
谷状地形　下層

338

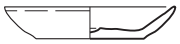


339

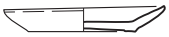
谷状地形　上層



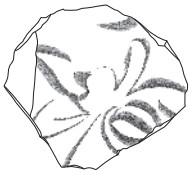
340

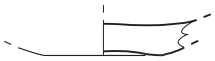


341

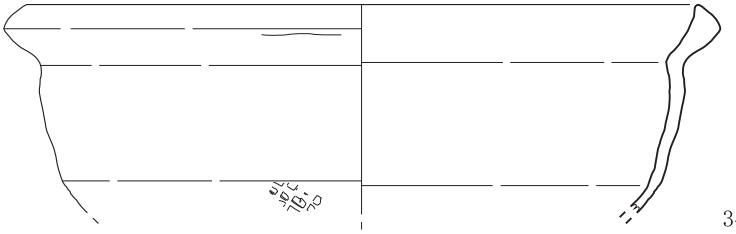


342

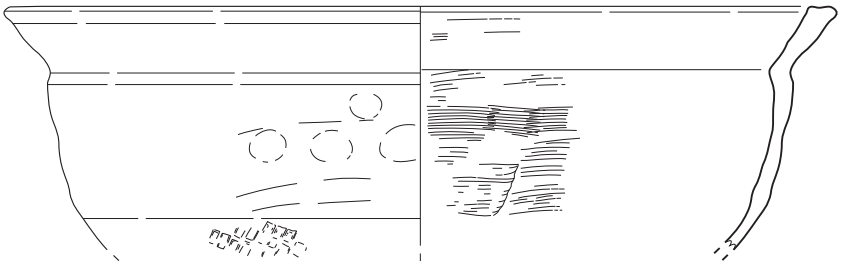




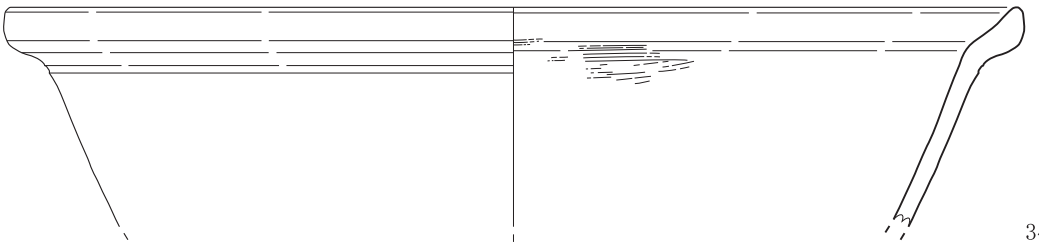
343



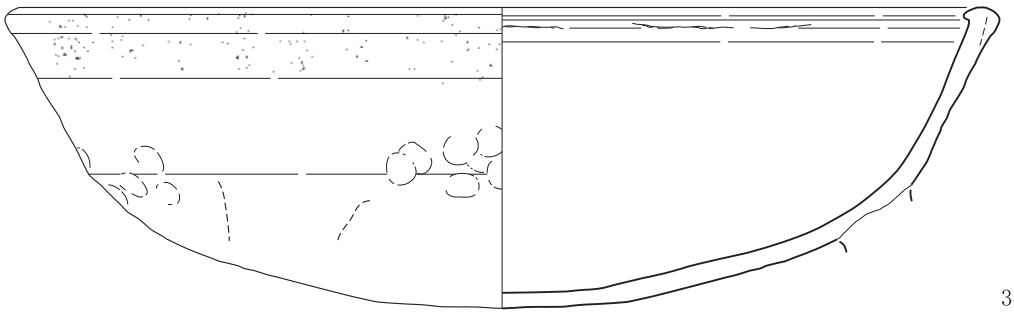
344



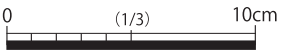
345



346

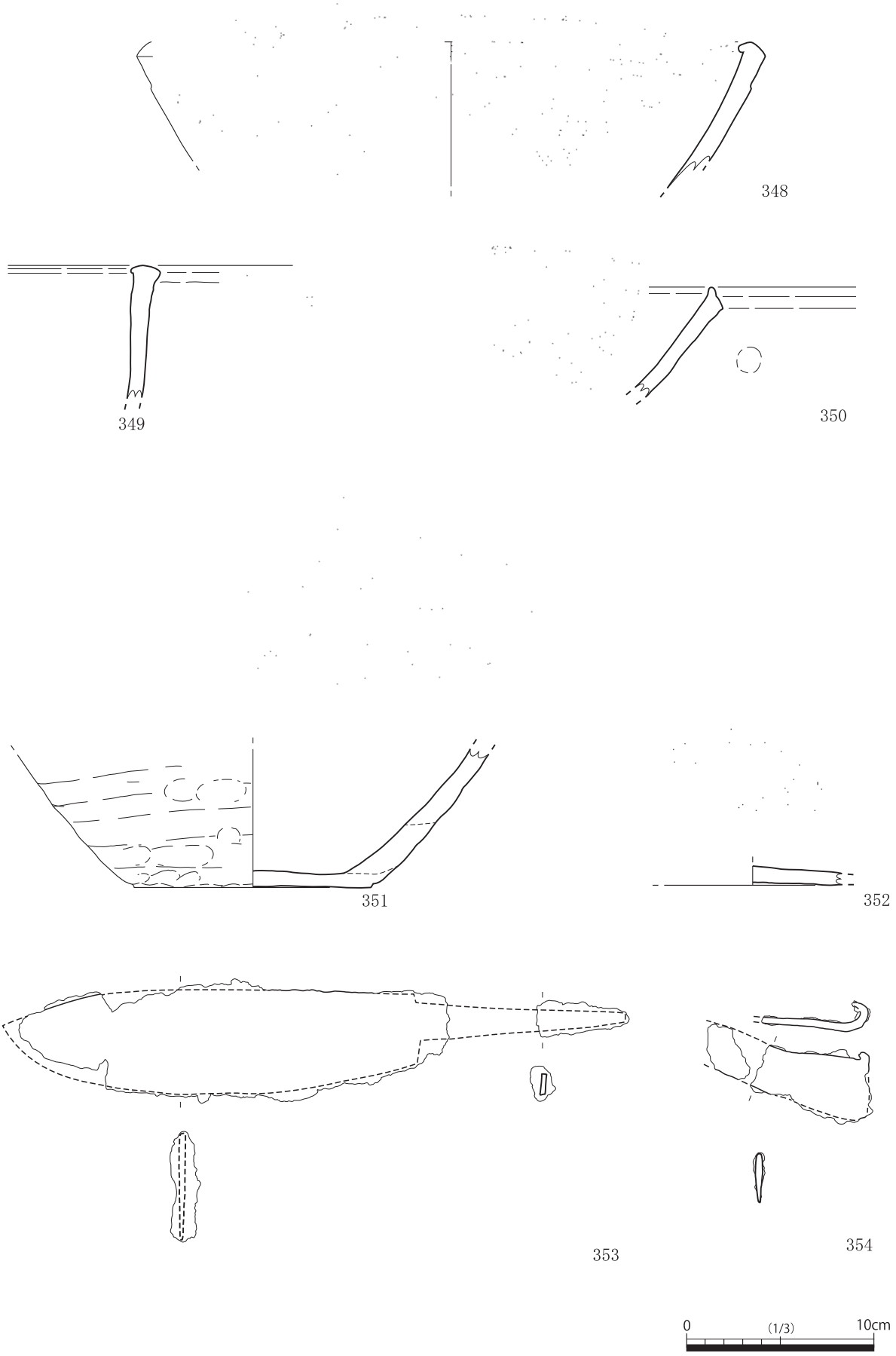


347



第 107 図　谷状地形内出土遺物実測図（２）

谷状地形　上層



第 108 図　谷状地形内出土遺物実測図（３）

340 ～ 354 は上層より出土した遺物である。

340 は橙色の土師器杯である。外面は摩滅し、内面には後世の付着物がこびり付くが、内外面ともに回転ナデ調整であることは確認できる。14 世紀の所産である。

341・342 は白色の土師器皿である。14 世紀後半～ 15 世紀の所産と推測する。

343 は龍泉窯系青磁皿であり、見込みに片切彫りで蓮華文を施す。大宰府編年Ⅰ－１ｂ類であり、12 世紀後半頃の所産である。

344 ～ 348 は瓦質土器足鍋もしくは鍋である。344 は断面に黒化層をもつやや軟質である。外面に焼成破裂痕が顕著であり、口縁部まで及ぶ。胴部は内外面ともにナデ調整である。岩崎編年Ⅲ型式古段階から新段階にかけてのものであり、15 世紀の所産である。345 は断面灰白色のやや硬質のものである。岩崎編年ⅥＡ型式新段階の典型例であり、16 世紀後半～末の所産である。346 は大型品で、断面に黒化層をもつやや軟質である。内外面ともにナデ調整を施すが、内面のハケ目は消し切れていない。岩崎編年Ⅲ型式古段階から新段階にかけてのものであり、15 世紀の所産である。347 は外面に印花文を巡らす点で、通有のものとは異なる。剝離してしまっているが、脚部が付くのは確実である。また、外面に格子目タタキ痕も残ることから、鍋としてのつくりをなす。一方で、底部内外面に明確な二次被熱痕を認めるものの、煤の付着が確認できない点で、火鉢のような利用法が推定できる。15 世紀～ 16 世紀のの所産と考える。348 は同様に鍋タイプに印花文が付くが、347 と異なり、外面には明確に煤が付着する。やや土師質に近い焼成であることから、15 世紀の所産ではないかと考える。

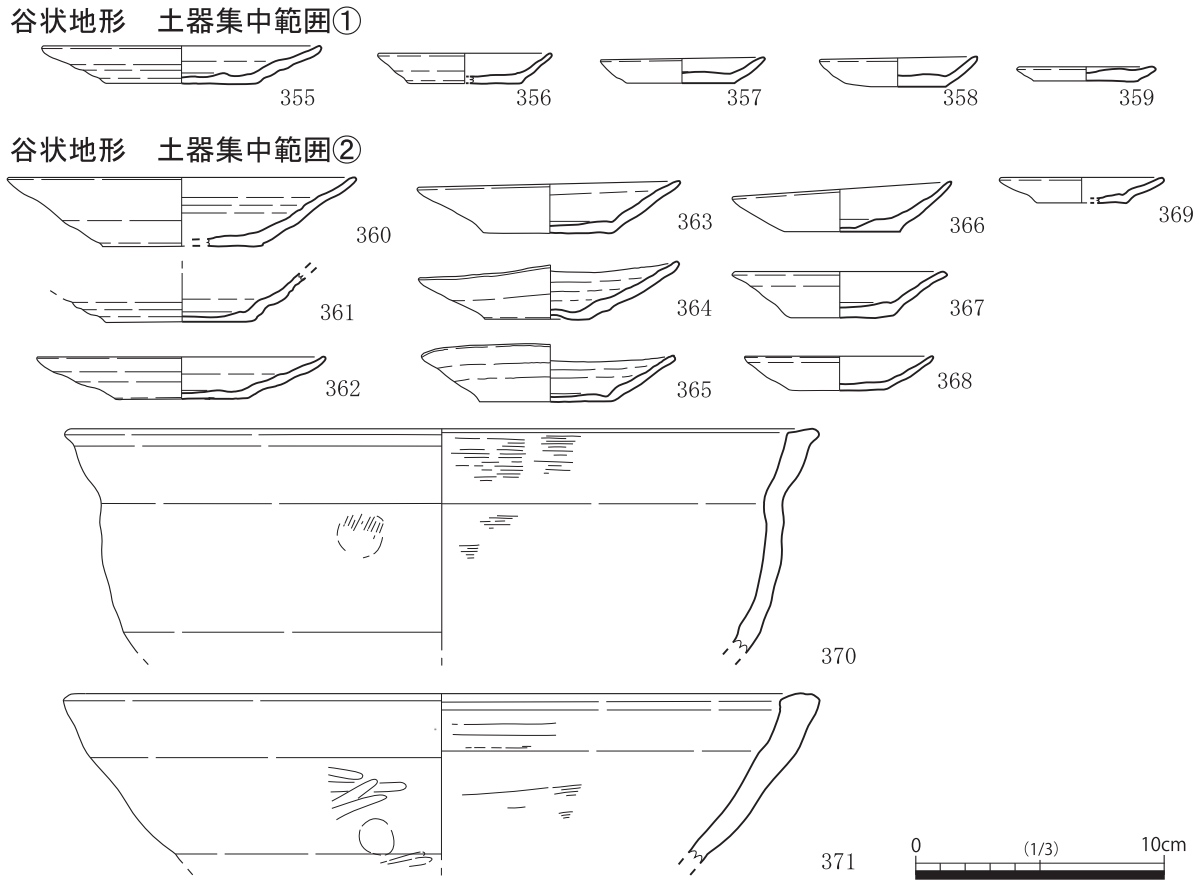
349 は瓦質土器火鉢片で、断面橙色の軟質である。内面にはヘラミガキを密に施す。外面もヘラミガキの可能性が高いと考えるが、明確には観察できない。外面には印花文を巡らす。15 世紀～ 16 世紀の所産である。

350 ～ 352 は瓦質土器擂鉢である。350 は６条以上を単位とするオロシ目を施し、ナデ調整によって内面のハケ目を消す。図示していないが片口部が少し残存している。口縁部を上方にやや拡張しており、15 世紀前半を前後する時期の所産である。351 は５条単位のオロシ目を施し、ナデ調整を施すが、ハケ目はやや残る。外面に指オサエと粗いナデによる凹凸が顕著である。15 世紀前半を前後する時期の所産と推測する。352 は底部内面に５条単位のオロシ目を放射状に密に施している。15 世紀以降の所産と推測する。

353 は鉄製品の包丁である。背部の切っ先側は直線でないためやや不自然であるが、接合が不安定であるため不確かな復元である。

354 は鉄鎌であるが、基部の折り曲げが通有のものとは反対である点に違和感が残る。

355 ～ 359 は土器集中範囲①より出土した土師器皿であり、355 ～ 358 は白色系、359 は橙色系である。355 は外面にロクロ目が明瞭に残る。356 ～ 358 は法量が類似し、いずれも回転ナデ調整でロクロ目は確認できない。359 は器高が極限まで低くなっている。また、回転ナデ調整の及ぶ範囲が狭く、底部は未調整のため凹凸が顕著である。いずれも北島編年大内ⅣＢ２式に相当し、16 世紀中頃もしくはその前後の所産である。なお、これらは谷状地形の検出面上で出土していることから、谷状地形の最終埋没時期に近い年代を示しているものと推定できる。なお、近くで出土した炭化材を放射



第 109 図　谷状地形内出土遺物実測図（４）

性炭素年代測定（AMS 法）した結果、15 世紀前半頃の時期を示した。時期的な開きが大きいため、炭化材は偶発的な混入であったと考える。

360 ～ 371 は土器集中範囲②より出土した遺物である。360 ～ 368 は白色系の土師器皿である。器高の高い 360・361 はロクロ目がやや目立つが、法量が小さいものほど目立たない傾向がある。このうち、366・368・369 は底部中央が特に薄くなっている点で特徴的であり、また、365 は他より焼きしまったやや硬質である点で区別される。これらは、北島編年大内ⅢＢ式に相当し、15 世紀後半を前後する時期の所産である。370 は瓦質土器足鍋もしくは鍋である。岩崎編年ⅥＡ型式新段階の典型例であり、16 世紀後半の所産である。371 は瓦質土器足鍋もしくは鍋片であり、外面に印花文を巡らす。谷状地形の上層より出土した 347 などと同タイプであり、15 世紀～ 16 世紀の所産である。

なお、この近辺で出土した炭化材を AMS 年代測定した結果、15 世紀前半頃の時期を示しており、土器集中範囲①と同様、時期的に開く結果となった。また、そもそも、土師器皿と瓦質土器鍋の時期も明確に異なっていることから、これらの一括性は乏しいと判断できる。このことは、谷状地形周辺がゴミ捨て場として土地利用されたという解釈とむしろ合致するものであり、少なくとも 15 世紀～ 16 世紀には継続的に遺物が廃棄されていった状況が推定できる。

第 25 表　下瑞光寺地区（２区）出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
1	76	43	SE306	須恵器	杯	(13.4)	3.25	(7.0)	やや良	やや良	内外面：灰白色 5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り
2	76	43	SE306	土師器	甕	(16.4)	[7.7]	-	やや粗	良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 外面：橙色 5YR7/6	口縁部ナデ、剥離激しく不明 口縁部ナデ、不明	
3	77	43	SB301 (SP3003)	土師器	椀	-	[1.4]	(5.0)	精良	良	内面：灰白色 10YR8/2 外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後貼付高台 外面赤色塗彩か
4	77	43	SB301 (SP3003)	瓦質土器	鍋	-	[3.8]	-	やや良	やや良	内面：灰白色 2.5Y7/1 外面：灰白色 10YR7/1	口縁部ナデ、ハケ後ナデ 口縁部ナデ、ハケ後ナデ	
5	77	43	SB301 (SP3003)	瓦質土器	鉢	-	[3.8]	-	やや良	やや良	内外面：灰色 5Y5/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	
6	77		SB301 (SP3004)	土師器	椀	-	[1.0]	(6.2)	やや粗	やや良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/4 外面：浅黄橙色 10YR8/3	不明 ナデ	
7	77		SB301 (SP3006)	瓦質土器	羽釜	-	[1.4]	-	精良	良	内外面：暗灰色 N3/ 胎土：灰白色 2.5Y8/1	ヨコナデ ヨコナデ	
8	77	43	SB302 (SP3304)	土師器	皿	5.5	0.9	4.1	精良	良	内外面：橙色 5YR6/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
9	77	43	SB302 (SP3304)	瓦質土器	擂鉢	-	[5.2]	-	やや良	やや良	内面：灰色 5Y5/1 外面：灰色 5Y4/1	口縁部ナデ、ハケ後ナデ 口縁部ナデ、指オサエ、ハケ後ナデ	内面にオロシ目有す（単位５条）
10	77		SB303 (SP3022)	瓦質土器	鍋 （足鍋）	-	[2.9]	-	やや粗	やや良	内面：灰白色 2.5Y8/1 外面：灰白色 5Y7/1 胎土：灰白色 10YR8/2	ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅲ型式）15C
11	77		SB303 (SP3022)	瓦質土器	擂鉢	-	[3.3]	-	やや粗	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 N5/ 胎土：灰白色 5Y8/1	剥離 ナデ、指オサエ	内面にオロシ目（単位７条以上）
12	77	43	SB303 (SP3022)	瓦質土器	湯釜	(11.9)	[6.1]	-	やや良	良	内外面：暗灰色 N3/ 胎土：灰白色 5Y8/1	ヨコナデ、指オサエ ヨコナデ、タテナデ	
13	77		SB303 (SP3033)	瓦質土器	擂鉢	-	[4.4]	-	やや良	良	内面：暗灰色 N3/ 外面：灰色 N4/ 胎土：灰白色 5Y8/1	細かいハケ 指オサエ、ナデ	内面にオロシ目（単位７条か）底部外面に板目圧痕
14	77		SB303 (SP3129)	瓦質土器	鍋 （足鍋）	-	[4.6]	-	やや良	良	内外面：灰色 N6/	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	岩崎編年（Ⅲ型式）15C
15	77		SB304 (SP3606)	土師器	皿	(11.8)	2.1	(4.8)	精良	良	内面：浅黄橙色 7.5YR8/4 外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	北島編年（大内ⅢＡ式）15C
16	77		SA301 (SP3326)	土師器	皿	-	[2.1]	(7.0)	精良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/2 外面：灰黄褐色 10YR5/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ式）15C
17	77	43	SA301 (SP3326)	土師器	皿	6.0	0.6	4.3	精良	良	内外面：橙色 5YR6/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 14 ～ 15C
18	78	43	SE302	土師器	皿	(12.1)	2.8	3.9	精良	良	内面：灰黄褐色 10YR6/2 断面：浅橙色 5YR8/4 外面：浅橙色 5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅡＢ式） 14C 後～ 15C 前
19	78	43	SE302	瓦質土器	把手付鉢	9.1	3.5	6.8	精良	良	内面：灰色 N6/ 断面：灰白色 N8/ 外面：灰色 N5/	ヨコナデ、指オサエ ヨコナデ、指オサエ後ミガキ	
20	78	43	SE302	瓦質土器	足鍋	口縁部 27.8	[13.7]	-	やや良	良	内面：灰色 N4/ 断面：灰白色 2.5Y8/1 外面：黒褐色 10YR3/2	ハケ後ナデ、ヨコナデ ハケ後ナデ、ヨコナデ、指オサエ、タタキ後ナデ	外面に煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式古だが調整丁寧）14C 後～ 15C 初 ※ AMS 法では 14C 後
21	78	43	SE302	瓦質土器	擂鉢	33.4	10.8	15.2	やや粗	やや良	内外面：暗灰色 N3/ 断面：にぶい黄橙色 10YR7/2 ※黒化層有り	ナデ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ	内面にオロシ目（単位７条） 底部外面に板目圧痕 ～ 15C 前
22	78	43	SE302	瓦質土器	擂鉢	(32.4)	12.7	13.6	やや良	やや良	内面：にぶい黄橙色 10YR6/4 断面：にぶい黄橙色 10YR6/4 外面：暗灰色 N3/	ハケ後ナデ、ヨコナデ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ	内面にオロシ目（単位５条） 底部外面に板目圧痕 14C 後～ 15C 前
23	78	43	SE302	瓦質土器	甕	(43.3)	[8.1]	-	やや良	良	内面：暗灰色 N3/ 断面：灰白色 N8/ 外面：暗灰色 N3/	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、指オサエ、格子目タタキ	
25	78		SE303	瓦質土器	鍋 （足鍋）	-	[4.9]	-	やや良	良	内外面：灰色 N5/	ヨコナデ ヨコナデ	外面に煤付着岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
26	79	44	SE304	瓦質土器	足鍋	26.1	27.5	-	やや良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/2 断面：灰白色 10YR8/2 外面：灰黄褐色 10YR6/2	ハケ、ハケ後ヨコナデ ハケ後ナデ、指オサエ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（ⅥＢ型式）16C
27	79	44	SE304	瓦質土器	足鍋	(31.3)	[20.6]	-	やや良	良	内面：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/3 外面：灰黄褐色 10YR4/2	ハケ、ヨコナデ ハケ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 16C 後～末 ※ AMS 法では 16C 後～ 17C 初
28	79	44	SE304	瓦質土器	足鍋	(28.6)	27.6	-	やや良	良	内面：灰白色 2.5Y7/1 断面：灰白色 2.5Y7/1 外面：褐灰色 10YR4/1	ハケ、ヨコナデ、指オサエ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 16C 後～末

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
29	80		SE304	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(25.4)	[7.6]	-	精良	良	内外面：灰色 5Y4/1	ハケ タタキ後ナデ消し、下位タタキ	岩崎編年（Ⅳ型式）16C
30	80		SE304	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(21.8)	[8.9]	-	精良	良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 N5/	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅳ型式）16C
31	80	44	SE304	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(22.7)	[8.7]	-	やや良	良	内面：黒褐色 10YR3/1 断面：灰白色 2.5Y8/1 外面：黒褐色 10YR3/1	ハケ、ハケ後ヨコナデ ハケ後ヨコナデ、ナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ｖ Ｂ型式） 16C 後～末
32	80	44	SE304	瓦質土器	足鍋	(21.0)	[9.9]	-	やや良	良	内面：灰色 4/ 断面：灰白色 2.5Y8/1 外面：黄灰色 2.5Y4/1	ハケ、指オサエ ハケ後横ナデ、指オサエ後ナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ｖ Ｂ型式） 16C 後～末
33	80		SE304	瓦質土器	足鍋	(23.0)	[11.4]	-	精良	やや良	内面：灰色 7.5Y5/1 外面：黄灰色 2.5Y4/1	口縁部ヨコ方向のハケ後ナデ、胴部～底部ヨコ斜め方向のハケ 口縁部ヨコナデ、底部格子目タタキ	岩崎編年（Ｖ Ｂ型式） 16C 後～末
34	80	44	SE304	瓦質土器	足鍋	(23.7)	[15.8]	-	やや良	良	内面：暗灰色 N3/ 断面：灰白色 2.5Y8/1 外面：黒褐色 10YR3/1	ハケ、ヨコナデ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（ＶＡ型式） 16C 後～
35	81	45	SE304	瓦質土器	擂鉢	(25.7)	[5.6]	-	精良	良	内面：灰白色 10YR8/1 外面：褐灰色 10YR6/1	ハケ ハケ、指オサエ	片口部分で破損 内面にオロシ目（単位６条） 16C 後～末
36	81		SE304	瓦質土器	擂鉢	-	[3.6]	-	やや良	良	内外面：灰色 N4/	ハケ ハケ後ヨコナデ	16C 後～末
37	81	45	SE304	瓦質土器	湯釜	-	[9.2]	鍔径 (23.8)	精良	良	内面：灰黄色 2.5Y7/2 外面：暗灰色 N3/	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	16C 後～
38	81		SE304	瓦質土器	火鉢	-	[7.4]	-	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：黒褐色 10YR3/1	ヨコ方向のハケ ナデ	頸部に印文 16C 後～
39	81	45	SE304	瓦質土器	把手付鍋	(26.4)	[7.25]	-	やや良	良	内面：灰色 N4/ 断面：灰白色 5Y7/1 外面：暗灰色 N3/	ハケ後ヨコナデ、指オサエ ハケ後ヨコナデ、ナデ	外面煤付着 16C 後～末
42	84		SE305	土師器	皿	(11.8)	2.0	5.6	精良	良	内外面：淡黄色 2.5Y8/3	回転ナデ 回転ナデ	北島編年（大内ⅡＢ～ⅢＡ１式）14C 後～ 15C 前
43	84	46	SE305	土師器	皿	-	[1.7]	(4.6)	やや良	やや良	内面：灰白色 2.5Y8/2 外面：暗灰黄色 2.5Y5/2	不明瞭 不明瞭	
44	84	46	SE305	土師器	皿	-	[1.5]	(4.2)	やや良	良	内外面：灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
45	84	46	SE305	瓦質土器	足鍋	(26.2)	[10.0]	-	やや良	やや良	内面：灰色 7.5Y5/1 外面：灰色 7.5Y4/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、指オサエ、底部格子目タタキ	岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
46	84	46	SE305	土師質土器	足鍋	(21.6)	[10.7]	-	やや良	良	内面：灰黄褐色 10YR6/2 断面：にぶい黄橙色 10YR7/4 外面：暗灰色 2.5Y5/2	ナデ、指オサエ、ヨコナデ ナデ、指オサエ、ヨコナデ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅱ型式） 14C 後～ 15C 初
47	84	46	SE305	瓦質土器	足鍋	(20.6)	[10.5]	-	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 7.5Y5/1	ヨコナデ 口縁部ヨコナデ、胴部～脚部指オサエ	岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
48	84		SE305	瓦質土器	擂鉢	-	[6.1]	-	やや良	やや良	内面：灰白色 2.5Y8/1 外面：黄灰色 2.5Y6/1	口縁部ヨコナデ、体部ヨコ方向のハケ後オロシ目 口縁部ヨコナデ、体部指オサエ	内面にオロシ目 ～ 15C 前
49	85	46	ST301	土師器	杯	12.6	5.0	5.8	精良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内０Ａ式） 14C 前
50	85	46	ST301	土師器	皿	6.7	1.5	4.7	精良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内０Ａ式） 14C 前
51	85	46	ST301	土師器	皿	6.8	1.2	5.4	やや良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内０Ａ式） 14C 前
52	85	46	ST301	土師器	皿	6.3	1.1	4.6	精良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内０Ａ式） 14C 前
53	85	46	ST301	土師器	皿	6.7	1.1	6.2	精良	良	内外面：橙色 5YR7/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内０Ａ式） 14C 前
61	85	46	ST302	土師器	皿	7.0	1.3	5.5	精良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/3 外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 14C 前
62	85	46	ST302	土師器	皿	7.4	1.3	5.2	精良	良	内外面：橙色 5YR7/6	ナデ ナデ	底部回転糸切り 14C 前
63	85	46	ST302	土師器	皿	(7.4)	1.2	(6.2)	やや良	やや良	内外面：橙色 5YR7/6	ナデ ナデ	14C 前
64	85	46	ST302	土師器	皿	6.7	0.9	5.6	やや良	やや良	内外面：橙色 7.5YR6/6	ヨコナデ ヨコナデ	14C 前
65	85	46	ST302	土師器	皿	(6.5)	0.8	(5.8)	やや良	良	内外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 14C 前
66	85	46	ST302	土師器	皿	7.1	0.8	6.3	やや良	やや良	内外面：橙色 7.5YR7/6	ナデ ナデ	14C 前

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
67	86	47	SK303	土師器	皿	12.5	3.4	4.8	精良	良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅡＢ式） 14C 後～ 15C 前
68	86	47	SK303	土師器	皿	(12.0)	3.5	4.5	精良	良	内外面：浅黄橙色 7.5YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後静止ナデ 北島編年（大内ⅡＢ式） 14C 後～ 15C 前
69	86	47	SK303	土師器	杯	(12.4)	3.7	4.8	精良	やや良	内面：にぶい黄褐色 10YR5/3 外面：橙色 5YR7/8	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅡＢ式） 14C 後～ 15C 前
70	86	47	SK304	土師器	皿	(13.2)	2.4	(5.6)	精良	良	内外面：灰黄色 2.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後ナデ 北島編年（大内ⅢＡ１～２式）　～ 15C 後
71	86	47	SK304	土師器	皿	6.2	1.2	4.7	精良	良	内外面：灰白色 10YR7/1	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ１～２式）　～ 15C 後
72	86	47	SK304	土師器	皿	(5.8)	0.8	(4.6)	精良	良	内外面：橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ１～２式）　～ 15C 後
73	86	47	SK304	土師器	皿	(5.7)	0.7	(4.6)	精良	良	内面：橙色 7.5YR7/6 外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ１～２式）　～ 15C 後
74	86	47	SK304	土師器	皿	2.7	0.8	3.5	精良	良	内外面：橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ１～２式）　～ 15C 後
75	86	47	SK305	土師器	皿	13.5	2.9	5.4	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ２～３式）　～ 15C 後
76	86	47	SK305	土師器	皿	12.6	2.5	6.6	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
77	86	47	SK305	土師器	皿	11.6	2.7	5.5	精良	良	内外面：灰黄色 2.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
78	86	47	SK305	土師器	皿	11.4	2.4	5.8	精良	良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ、底面中央部静止ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
79	86	47	SK305	土師器	皿	11.5	2.6	5.0	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
80	86	47	SK305	土師器	皿	11.4	2.0	5.6	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 内面一部に丹塗残る 北島編年（大内ⅢＡ３～ⅢＢ式）　～ 15C 後
81	86	47	SK305	土師器	皿	11.1	1.9	5.8	精良	良	内面：灰白色 2.5Y8/2 外面：灰黄色 2.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ３～ⅢＢ式）　～ 15C 後
82	86	47	SK305	土師器	皿	(9.8)	2.1	4.9	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ３～ⅢＢ式）　～ 15C 後
83	86	47	SK305	土師器	皿	(10.3)	2.2	5.0	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ３～ⅢＢ式）　～ 15C 後
84	86	47	SK305	土師器	皿	(8.7)	2.1	(4.5)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＢ式）　～ 15C 後
85	86	47	SK305	土師器	皿	7.8	1.9	4.1	精良	良	内外面：灰白色 10YR7/1	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　底部外面板目圧痕　北島編年（大内ⅢＢ式）　～ 15C 後
86	86	47	SK305	土師器	皿	(7.4)	1.5	(4.8)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
87	86	47	SK305	土師器	皿	4.0	1.7	1.9	精良	良	内面：浅黄橙色 7.5YR8/3 外面：浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
88	86	47	SK305	土師器	皿	(7.0)	1.6	4.4	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
89	86	47	SK305	土師器	皿	7.2	1.3	3.9	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
90	86	47	SK305	土師器	皿	6.8	1.2	4.8	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　底部板目圧痕　北島編年（大内ⅢＡ２～３式）　～ 15C 後
91	86	47	SK305	土師器	皿	6.0	0.8	4.0	精良	良	内外面：橙色 7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　底部外面板目圧痕　北島編年（大内ⅢＡ３式）　～ 15C 後

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）					
92	86		SK306	土師器	皿	－	［1.9］	(4.6)	精良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/3 外面：浅黄橙色　10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅡＡ～ⅢＡ３式）　14C 後～ 15C 前
93	86	48	SK307	土師器	高台付皿	(6.2)	2.0	(4.8)	精良	やや良	内外面：橙色 5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後貼付高台 13C ～ 14C 前
94	86	48	SK313	土師器	皿	12.4	3.25	5.5	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/1	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅡＡ式） 14C 後～ 15C 前
95	86	48	SK313	土師器	皿	(12.3)	2.9	(5.6)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り後板目圧痕有す
96	86	48	SK314	瓦質土器	火鉢	(35.0)	［9.1］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y5/1 外面：オリーブ黒色 5Y3/1	口縁部ヨコナデ、ヨコ方向のハケ 口縁部ヨコナデ、ミガキ	外面頸部断面三角形状の押印紋又は刺突　外面肩部巴文スタンプ　16C 後～
97	86	48	SK319	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［6.9］	－	やや良	やや良	内面：にぶい橙色 7.5YR7/3 外面：黒色 10YR1.7/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ、指オサエ	煤多量に付着 岩崎編年（Ⅱ～Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 初
98	87		SK320	瓦質土器	鍋（足鍋）	(19.5)	［6.7］	－	精良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：暗灰色 N3/	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	外面煤多量に付着 岩崎編年（Ⅲ型式新）～ 16C
99	87		SK320	瓦質土器	鍋（足鍋）	(24.9)	［8.3］	－	やや良	良	内外面：黒褐色 2.5Y3/1	上位ハケ、中位以下ハケ後ナデ 不明	外面煤多量に付着 岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C
100	87	48	SK320	瓦質土器	擂鉢	(26.0)	［7.7］	－	やや良	やや良	内外面：灰色 N5/	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	内面にオロシ目（単位６条） 14C 後～ 15C 前
101	87		SK320	瓦質土器	擂鉢	－	［1.0］	－	精良	やや良	内面：灰白色 10YR8/1 外面：灰白色 10YR8/2	ナデ ナデ	内面にオロシ目（単位３条） ～ 15C 前
102	87		SK325	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［3.3］	－	やや良	やや良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C
103	87		SK327	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［2.9］	－	やや良	やや良	内面：暗灰色 N3/ 外面：灰色 N4/	ハケ ヨコナデ	
104	87		SK328	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［5.8］	－	やや良	良	内外面：灰黄色 2.5Y7/2	ハケ ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅲ型式新）15C ～
105	87		SK329	土師器	皿	(10.2)	1.8	(6.2)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内Ⅳ式） ～ 16C 前
106	88	48	SK332	土師質土器	鉢	(21.8)	［13.6］	－	やや良	やや良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	
107	88	48	SK332	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［5.7］	－	精良	良	内外面：灰色 N6/	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅳ型式）16C
108	88		SK332	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［8.6］	－	精良	良	内外面：青灰色 5PB5/1	ハケ ナデ、指オサエ	岩崎編年（ⅣもしくはＶＡ型式）16C 後
109	88		SK332	瓦質土器	鍋（足鍋）	(25.4)	［7.0］	－	精良	良	内面：灰色 N5/ 外面：灰白色 2.5Y8/1	ハケ後ナデ ナデ、指オサエ	岩崎編年（ⅣもしくはⅥＢ型式）16C 中～後半
110	88		SK332	瓦質土器	足鍋	－	［8.8］	－	やや良	良	内面：灰白色 10YR8/1 外面：黄灰色 7.5Y6/1	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ、下位タタキ	
111	88	48	SK332	瓦質土器	足鍋脚部	－	［14.2］	－	精良	良	外面：灰色 N4/	ナデ、指オサエ	
112	88		SK332	瓦質土器	鉢	(18.8)	［4.6］	－	精良	良	内外面：灰色 5Y6/1	ハケ後ヨコナデ ハケ後ヨコナデ、指オサエ	
113	88	48	SK332	瓦質土器	擂鉢	－	［6.3］	－	やや良	やや良	内面：にぶい黄褐色 10YR5/3 外面：黄灰色 2.5Y5/1	ハケ後ナデ ナデ、指オサエ	内面にオロシ目（単位７条） 15C 後～ 16C 前
114	88	48	SK332	土師質土器	火鉢	－	［9.8］	(27.5)	やや粗	やや良	内外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	ハケ、器面の剥離激しい ナデ、指オサエ	
115	88	48	SK332	瓦質土器	火鉢	－	［5.9］	(28.8)	やや粗	良	内面：にぶい橙色 7.5YR7/4 外面：灰褐色 7.5YR6/2	ハケ ハケ後ナデ	
116	88	48	SK332	瓦質土器	湯釜	－	［4.6］	－	やや良	良	内外面：浅黄橙色 7.5YR8/4	ナデ ナデ	
117	89	48	SK334	瓦質土器	足鍋	(21.2)	［10.3］	－	やや良	良	内面：灰色 N4/ 断面：灰白色 2.5Y8/1 外面：黒褐色 10YR3/1	ハケ、ハケ後ヨコナデ 指オサエ、ハケ、ハケ後ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（ⅥＢ型式）16C
118	89	48	SK334	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［8.5］	－	精良	やや良	内面：灰色 N5/ 外面：黒色 N2/	口縁部ハケ後ナデ、ハケ 指オサエ	外面多量に煤付着 岩崎編年（ⅥＢ型式）　16C
119	89	48	SK334	瓦質土器	足鍋	(21.4)	［12.4］	－	やや良	やや良	内外面：灰色 N4/ 断面：灰白色 2.5Y8/1	ハケ、ハケ後ヨコナデ ハケ後ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ	岩崎編年（ⅥＢ型式）　16C
120	89		SK334	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［10.5］	－	やや良	良	内面：灰色 N5/ 外面：黒色 N2/	ナデ後ミガキ ナデ、指オサエ、下位タタキ	外面多量に煤付着 岩崎編年（ＶＢ型式） 16C 末
121	89		SK334	瓦質土器	擂鉢	－	［3.5］	－	やや良	良	内面：灰色 N5/ 外面：灰色 N4/	ナデ ナデ、指オサエ	15C
122	89	48	SK334	瓦質土器	甕	(19.0)	［8.4］	－	精良	良	内外面：灰色 N6/	ハケ 口縁部ヨコナデ、ハケ	口縁部外面は粘土帯で肥厚し玉縁状を呈する
123	89		SK334	瓦質土器	鉢	－	［5.3］	－	精良	良	内外面：灰色 N4/	ハケ後ヨコナデ、一部ミガキ ハケ後ヨコナデ、一部ミガキ	
124	89	48	SK334	瓦質土器	火鉢	－	［4.4］	－	やや良	良	内外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	ヨコナデ ヨコナデ	口縁外面を丸めて肥厚する 口縁下に断面台形の肥厚帯を巡らせその間に印花文

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
125	89	48	SK334	瓦質土器	火鉢	－	［6.9］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y5/1 外面：灰色 5Y4/1	ヨコ方向のハケ 指オサエ後ナデ	
126	89		SK334	青磁	椀	－	［2.7］	－	精良	良	胎土：灰白色 2.5Y8/1 釉：オリーブ灰色 10Y6/2	回転ナデ 回転ナデ	ケズリ出し高台 15C ～ 16C
127	90		SK335	土師器	皿	－	［1.3］	（5.0）	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　外面に板目圧痕
128	90		SK335	瓦質土器	鍋 （足鍋）	（21.6）	［9.5］	－	精良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケ後ナデ ナデ、指オサエ、下位タタキ	岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C
129	90		SK336	瓦質土器	把手付鍋 （足鍋）	－	［4.9］	－	やや良	良	内外面：灰色 N4/	把手部指オサエ、ハケ後ナデ 把手部指オサエ、ケズリか	岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C
130	90	49	SK336	瓦質土器	鍋 （足鍋）	（24.1）	［6.8］	－	やや良	良	内外面：暗灰色 N3/ 断面：灰白色 N8/	ハケ、ハケ後ヨコナデ 指オサエ、ナデ、ハケ後ナデ	岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C
131	90	49	SK336	瓦質土器	鍋 （足鍋）	（25.4）	［10.4］	－	精良	良	内面：灰色 N5/ 外面：黄灰色 2.5Y5/1	口縁部ヨコナデ、ヨコ方向のハケ 口縁部ヨコナデ、指オサエ、底部格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C
132	90	49	SK336	陶器	瓶 （徳利）	（7.6）	18.8	13.6	精良	良	内面：灰色 7.5Y6/1 外面：オリーブ黒色 7.5Y3/2	ナデ、自然釉 タタキ後ナデ、自然釉	朝鮮陶器　肩部に絞り痕有す　内面に同心円あて具痕 15 ～ 16C
133	90		SK338	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［4.4］	－	やや良	良	内面：灰色 N6/ 外面：褐灰色 10YR5/1	ヨコナデ 口縁～頸部ヨコナデ、指オサエ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
134	90		SK342	土師器	皿	－	［1.6］	（4.8）	やや粗	やや良	内面：黄灰色 2.5Y6/1 外面：暗灰黄色 2.5Y4/2	回転ナデ 回転ナデ	
135	91		SK343	土師器	皿	－	［0.9］	（6.5）	精良	良	内外面：灰白色 7.5YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
136	91		SK343	土師器	皿	－	［0.9］	（4.9）	精良	良	内面：橙色 5YR7/8 外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
137	91		SK343	土師器	皿	－	［0.7］	（4.8）	精良	良	内外面：にぶい橙色 7.5YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
138	91	49	SK343	瓦質土器	鍋 （足鍋）	（29.6）	［8.5］	－	やや良	良	内面：灰白色 7.5Y8/2 外面：褐灰色 10YR5/1	ハケ後ヨコナデ 口縁～頸部ヨコナデ、指オサエ、ハケ後ナデ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
139	91		SK343	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［6.3］	－	やや良	良	内外面：オリーブ黒色 5Y3/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅱ～Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 初
140	91		SK343	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［6.9］	－	やや良	やや良	内面：灰色 N6/ 外面：暗灰色 N3	ヨコナデ 口縁～頸部ヨコナデ、指オサエ後ナデ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
141	91		SK343	瓦質土器	足鍋 脚部	－	［7.1］	脚径 2.8	やや良	やや良	外面：灰白色 2.5Y8/1	指オサエ	
142	91		SK343	瓦質土器	鉢	－	［4.1］	－	やや粗	良	内面：灰色 10Y5/1 外面：灰白色 2.5Y7/1	不明 不明	～ 15C 前
143	91		SK343	瓦質土器	火鉢	－	［4.3］	－	やや良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR6/3 外面：浅黄橙色 10YR8/4	ヨコナデ ハケ後ヨコナデ	
144	91		SK343	瓦質土器	羽釜	－	［4.0］	－	精良	良	内外面：黄灰色 2.5Y6/1	丁寧なナデ ナデ	還元焼成良好で須恵質 13C 後～ 14C 前
145	91		SK343	土師質土器	羽釜	－	［2.2］	－	やや良	やや良	内外面：にぶい橙色 10YR7/4	ハケ後ナデ ナデ	13C 後～ 14C 前
146	91		SK344	土師器	皿	－	［2.1］	（4.5）	精良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅡＢ式） 14C 後～ 15C 前
147	91	49	SK344	瓦質土器	擂鉢	－	［7.0］	（11.8）	精良	良	内外面：灰白色 2.5Y8/1	ハケ後ナデ ナデ、指オサエ	内面にオロシ目（単位５条） 底部外面に板目圧痕 ～ 15C 前
148	91		SK344	瓦質土器	甕	－	［23.8］	－	やや粗	良	内面：灰色 N4/ 断面：暗灰色 N8/ 外面：暗灰色 N3/ ※黒化層あり	同心円当具痕、ハケ 格子目タタキ後ハケ	
149	92		SK346	土師器	椀	－	［1.7］	（6.0）	やや良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後貼付高台 13C 後～ 14C 前
150	92		SK346	土師器	皿	（6.6）	1.3	（5.0）	やや良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 14C
151	92		SK346	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［3.3］	－	やや良	良	内面：灰白色 10YR8/2 外面：オリーブ黒色 7.5Y3/1	ハケ後ナデ ナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
152	92		SK346	瓦質土器	火鉢	－	［5.3］	（10.8）	やや良	やや良	内外面：暗灰色 N3/	ハケ後ナデ ナデ、指オサエ	
153	93	49	SK347	瓦質土器	鍋 （足鍋）	（26.4）	［11.1］	－	やや良	やや良	内外面：暗灰色 N3/ 断面：灰白色 2.5Y8/1	ハケ、ヨコナデ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C
154	93	50	SK347	瓦質土器	足鍋	25.0 歪あり	［12.2］	－	やや良	良	内面：灰色 N4/ 断面：灰白色 5Y8/1 外面：褐灰色 10YR5/1	ハケ、ハケ後ヨコナデ、指オサエ ハケ、ハケ後ヨコナデ、ナデ、格子目タタキ	外面煤付着　底部内面変色 岩崎編年（Ⅳ型式）～ 16C

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
155	93	50	SK347	瓦質土器	足鍋	24.5	18.1	－	やや良	良	内面：灰色 N5/ 断面：灰白色 2.5Y8/1 外面：暗灰色 N3/	ハケ、指オサエ、ヨコナデ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅳ型式）～16C
156	93	50	SK347	瓦質土器	足鍋	24.6	21.2	－	精良	やや良	内外面：灰色 N4/ 断面：灰白色 N8/1	ハケ、指オサエ、ヨコナデ 指オサエ、ハケ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着　岩崎編年（Ⅳ型式）～16C
157	93		SK347	土師器	皿	－	［2.1］	（4.6）	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
158	93	49	SK347	陶器	壺	－	［5.3］	－	やや粗	やや良	内面：褐色 7.5YR4/3 外面：黒褐色 7.5YR3/2	ハケ後ヨコナデ ヨコナデ	備前焼 15C～
159	93	49	SK347	陶器	壺	－	［7.6］	－	やや良	良	内面：にぶい橙色 2.5YR6/4 断面：灰白色 10YR7/1 外面：にぶい赤褐色 2.5YR5/4	ヨコナデ ヨコナデ	信楽焼 15C～
160	93	49	SK347	陶器	壺	－	［6.8］	－	やや良	やや良	内面：灰黄色 2.5Y7/2 外面：灰黄色 2.5Y6/2	ナデ ナデ、指オサエ	信楽焼 15C～
161	94		SD301	土師器	皿	（12.4）	［2.3］	－	精良	良	内外面：灰白色 2.5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ	内外面丹塗りか（一部 淡橙色 5YR8/4）
162	94	50	SD301	土師器	皿	（10.4）	2.3	（4.6）	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕（歪有り）　外面に炭化物付着
163	94	50	SD301	土師器	鍋	－	［5.6］	－	やや良	やや良	内面：褐灰色 10YR6/1 外面：灰白色 10YR7/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	口縁下と屈曲部にヘラ状工具による押圧（ナデ）か
164	94	50	SD301	瓦質土器	足鍋	（22.6）	［12.3］	－	やや良	良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 N5/	ハケ後ナデ 口縁～胴部上半ハケ後ナデ、胴部下半指オサエ後ナデ、底部タタキ	岩崎編年（Ⅳ型式）～16C
165	94	50	SD301	瓦質土器	足鍋	24.3	16.5	－	やや良	良	内面：灰色 N4/ 断面：灰白色 10YR8/1 外面：褐灰色 10YR4/1 ※黒化層あり	ハケ、ヨコナデ、指オサエ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅳ型式）～16C
169	95	50	SD303	土師器	皿	10.0	1.6	5.2	精良	良	内面：灰白色 2.5Y8/2 外面：にぶい黄橙色 10YR7/2	回転ナデ、見込部分回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕　内面に煤付着　外面に炭化物付着　北島編年（大内ⅣＡ～Ｂ式）～16C 前
170	95		SD303	土師器	皿	（13.3）	2.5	（5.8）	精良	良	内外面：灰白色 10YR7/1	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅣＡ～Ｂ式）～16C 前
171	95		SD303	陶器	壺	－	［6.1］	－	精良	良	内面：褐灰色 7.5YR4/1 外面：黒褐色 5YR3/1	ヨコナデ ハケ後ヨコナデか	備前焼 15C～
172	95		SD303	瓦質土器	鍋 （足鍋）	（25.2）	［5.1］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y5/1 外面：黄灰色 2.5Y4/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ	岩崎編年（Ⅲ型式新） 15C～
173	95	50	SD303	瓦質土器	鍋 （足鍋）	（10.0）	［6.8］	－	やや良	良	内面：灰色 N4/ 外面：黒色 N2/	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅳ型式）～16C
174	95		SD301・303	土師器	杯 （皿）	－	［1.0］	（6.2）	精良	やや良	内外面：にぶい橙色 5YR7/4	回転ナデ（摩滅） 回転ナデ（摩滅）	底部回転糸切りか（摩滅）
175	95	51	SD301・303	磁器 （青花）	椀	－	［2.1］	－	精良	良	胎土：灰白色 2.5Y8/1 釉：灰オリーブ 7.5Y6/2	ナデ、施釉 ナデ、施釉	景徳鎮か 15C～16C
176	95	51	SD301・303	瓦質土器	湯釜	－	［7.8］	－	やや良	やや良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/4 外面：黒褐色 10YR3/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデか	外面煤多量に付着
177	95	51	SD301・303	瓦質土器	把手付鍋 （足鍋）	－	［6.1］	－	やや良	やや良	内外面：暗灰色 N3/	ハケ ハケ後ナデか	16C 後～末
178	95	51	SD301・303	瓦質土器	鍋 （足鍋）	24.8	［9.8］	－	やや良	良	内面：暗灰色 N3/ 断面：灰白色 2.5Y8/1 外面：黒褐色 10YR3/1	指オサエ、ハケ、ヨコナデ 指オサエ、ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅳ型式）～16C
179	95	51	SD301・303	瓦質土器	足鍋	（23.2）	［12.3］	－	精良	良	内外面：灰色 N4/	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ、下位タタキ	歪み大 岩崎編年（VIB 型式）16C
180	95	51	SD301・303	瓦質土器	足鍋	（28.1）	［13.2］	－	やや良	良	内面：黒褐色 2.5Y3/1 断面：灰白色 10YR8/2 外面：暗灰色 N3/	ハケ後ヨコナデ ハケ後ナデ、格子目タタキ	剝離面に刻み目　外面煤付着　岩崎編年（VIＡ型式） 16C 後～末
181	96	51	SD301・303	瓦質土器	擂鉢	（32.0）	12.9	13.7	やや良	良	内外面：暗灰色 N3/0 断面：灰白色 N8/0 黒化層有り	ハケ、ヨコナデ ナデか（摩滅）、ヨコナデ	内面にオロシ目（単位７条） 16C
182	96	51	SD301・303	瓦質土器	擂鉢	－	［8.0］	－	やや良	良	内面：暗灰色 N3/ 外面：灰色 N4/	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	内面オロシ目　口唇部に沈線状の凹み 16C 後～
183	96	51	SD301・303	陶器	甕 （壺）	－	［7.3］	－	やや良	やや良	内外面：赤灰色 7.5R5/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ	備前焼 15C
184	96	51	SD301・303	瓦質土器	火鉢	（24.4）	［9.9］	－	精良	良	内面：灰白色 2.5Y8/2 外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	ハケ後ナデ ナデ	外面印花文 16C
185	96	51	SD301・303	瓦質土器	火鉢	－	［5.5］	（30.8）	やや良	やや良	内面：黄灰色 2.5Y6/1 外面：黄灰色 2.5Y5/1	ハケ、底ハケ後ナデ ハケ後ナデ	底部外面に板目圧痕

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
186	96	51	SD301・303	瓦質土器	甕	(48.0)	[7.7]	-	やや良	やや良	内外面：灰白色 5Y8/1	器面摩滅により調整不明瞭 器面摩滅により調整不明瞭	
189	97		SD307 東側	土師器	皿	-	[1.2]	4.6	精良	良	内面：浅黄色 2.5Y7/3 外面：灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ	板目圧痕が一部残る
190	97		SD307	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[4.2]	-	やや良	良	内外面：暗灰色 N3/	ハケ後ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（ⅥB型式） 16C
191	97		SD307 東側	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[6.8]	-	やや良	やや良	内面：灰褐色 7.5YR5/2 外面：にぶい褐色 7.5YR5/3	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（ⅥA型式新） 16C 後
192	97		SD307 東側	瓦質土器	足鍋脚部	-	[8.1]	-	やや良	良	外面：灰色 7.5Y5/1	指オサエ 指オサエ	
193	97	52	SD308	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[3.6]	-	やや良	良	内面：浅黄色 2.5Y7/4 外面：灰色 7.5Y5/1	ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
194	97		SD308	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[3.4]	-	やや良	良	内面：灰色 5Y6/1 外面：灰色 5Y5/1	ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
195	97		SD310	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[3.4]	-	やや良	良	内面：灰白色 2.5Y7/1 外面：灰色 5Y6/1	ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅱ～Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 初
196	97		SD311	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[6.2]	-	やや良	良	内面：灰色 5Y6/1 外面：暗灰色 N3/	口縁部ヨコナデ、胴部上半ヨコ方向のハケ 口縁～頸部ヨコナデ、胴部上半指オサエ後ナデ	岩崎編年（Ⅳ型式） ～ 16C
197	97		SD311	瓦質土器	足鍋脚部	-	[5.9]	-	やや良	良	外面：灰白色 5Y7/1	指オサエ	
198	97	52	SD311	瓦質土器か	壺（甕）	-		-	やや良	良	内面：灰色 5Y6/1 外面：灰色 5Y5/1	ハケ ヨコナデ	
199	97	52	SD311	瓦質土器	鍋（足鍋）	(21.8)	[13.6]	-	やや良	やや良	内面：暗灰色 N3/ 外面：褐灰色 10YR4/1	ヨコ方向のハケ 口縁部ヨコナデ、胴部下半格子目タタキ	岩崎編年（Ⅳ型式） ～ 16C
200	97	52	SD311	青磁	壺	-	[3.2]	-	精良	良	生地：灰白色 N8/ 釉 内外面：緑灰色 10GY6/1		酒海壺か
201	97	52	SD311	陶器	甕（壺）	-	[6.2]	-	やや粗	良	内外面：にぶい赤褐色 2.5YR4/3	ヨコナデ ヨコナデ	備前焼 15C ～
202	98	52	SD313	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[8.9]	-	やや良	やや良	内面：灰色 5Y5/1 外面：暗灰黄色 2.5Y4/2	口縁部ヨコナデ、指オサエ 口縁部ハケ後ヨコナデ、粗いハケ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式新～Ⅳ型式） 15C 後～ 16C 前
203	98		SD313	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[3.3]	-	やや良	良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 N5/	ハケ後ヨコナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅳ型式） ～ 16C
204	98		SD313	瓦質土器	鉢	-	[2.6]	-	やや良	やや良	内面：暗灰黄色 2.5Y5/2 外面：黄灰色 5/1	ナデ ナデ	鍋口縁部の可能性あり
205	98		SD313	瓦質土器	擂鉢	-	[3.3]	-	やや良	やや良	内面：浅黄色 2.5Y7/3 外面：灰色 7.5Y4/1	ナデ ナデ	内面にオロシ目 16C 後～
206	98		SD313	瓦質土器	擂鉢	-	[4.7]	(15.0)	やや良	やや良	内面：黄灰色 2.5Y4/1 外面：灰色 5Y4/1	摩耗により調整不明瞭 指オサエ	内面にオロシ目
207	98	52	SD315	瓦質土器	足鍋	(22.3)	[12.1]	-	やや良	良	内面：灰色 N4/ 断面：灰白色 10YR8/1 外面：褐灰色 10YR4/1	ハケ、ヨコナデ、ナデ 指オサエ、ハケ後ナデ、格子目タタキ	岩崎編年（Ⅲ型式新～Ⅳ型式） 15C ～ 16C
208	98		SD315	瓦質土器	擂鉢	-	[6.7]	-	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：暗灰色 N3/	ナデ 指オサエ後ナデ	内面にオロシ目有す（単位 10 条）
209	98		SD315	瓦質土器	湯釜か	-	[4.2]	-	やや良	良	内面：灰白色 5Y8/1 外面：灰色 N4/	ヨコナデ ヨコナデ	
210	99		SP3011	瓦質土器	擂鉢	-	[5.7]	-	やや粗	不良	内面：灰色 N6/ 外面：黄灰色 2.5Y4/1 胎土：灰白色 5Y8/1	ヨコナデ ヨコナデ、指オサエ	内面にオロシ目（単位 6 条）
211	99		SP3013	土師器	皿	-	[1.4]	-	やや良	やや良	内外面：灰白色 2.5Y8/2	不明 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕か
212	99	52	SP3014	瓦質土器	火鉢	-	[7.7]	(34.3)	やや粗	良	内面：褐灰色 10YR5/1 外面：橙色 5YR6/6 黒色 5Y2/1	ナデ、指オサエ ミガキ、指オサエ、ナデ、ハケ	
213	99		SP3051	土師器	皿	(6.9)	1.2	(4.0)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕
214	99		SP3015	瓦質土器	鍋（足鍋）	(25.6)	[1.5]	-	やや粗	やや良	内外面：黒色 5Y2/1 胎土：灰白色 2.5Y8/2	ヨコナデ ヨコナデ	熱を受けた痕跡有り 14C 後～ 15C 前
215	99	52	SP3015	瓦質土器	足鍋脚部	-	[18.3]	脚部径 3.7	やや良	やや良	外面：にぶい黄橙色 10YR6/3	指オサエ	
216	99		SP3023	瓦質土器	擂鉢	-	[4.8]	-	やや粗	やや良	内面：灰白色 10YR8/2 外面：淡橙色 5YR8/3	ヨコナデ 工具ナデ、指オサエ、ナデ	内面にオロシ目（単位 2 条以上）
217	99		SP3023	瓦質土器	擂鉢	-	[3.1]	-	やや良	やや良	内面：灰白色 5Y8/1 外面：灰黄色 2.5Y7/2	ナデ ナデ、指オサエ	
218	99	52	SP3024	土師器	皿	(6.5)	1.1	(3.6)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/1	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
219	99		SP3026	瓦質土器	鍋（足鍋）	-	[3.1]	-	やや良	やや良	内面：灰白色 N7/ 外面：灰白色 5Y7/1 胎土：灰白色 5Y8/1	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅳ型式） ～ 16C

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
220	99		SP3027	土師器	皿	－	［2.3］	5.2	精良	やや良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/2 外面：灰黄褐色 10YR6/2	回転ナデ、ナデ 回転ナデか	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅡＡ式） 14C 後～ 15C 前
221	99		SP3027	土師器	皿	－	［1.4］	(5.4)	やや良	やや良	内面：浅黄橙色 10YR8/4 外面：橙色 10YR7/6	回転ナデ ナデ	底部回転糸切り 北島編年（大内ⅡＡ式） 14C 後～ 15C 前
222	99	52	SP3027	土師器	皿	(8.0)	1.4	(4.4)	精良	やや良	内外面：灰白色 2.5Y8/2 塗彩：橙色 2.5Y7/6	回転ナデか（摩滅） 回転ナデ	底部回転糸切り　外面橙色に塗彩　北島編年（大内ⅡＡ式）　14C 後～ 15C 前
223	99		SP3049	土師器	皿	－	［0.9］	(6.0)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切りか（摩滅不明瞭）
224	99	52	SP3060	土製品	管状土錘	径 2.05	3.15	孔径 (0.7)	やや粗	やや良	外面：にぶい黄色 2.5Y6/3	指オサエ、ナデ	
225	99		SP3072	土師器	皿	(6.7)	1.1	(4.0)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
226	99		SP3073	瓦質土器	擂鉢	－	［3.3］	－	やや良	やや良	内外面：黄灰色 2.5Y5/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	
227	99		SP3076	瓦質土器	擂鉢	－	［2.6］	－	やや良	やや良	内面：灰白色 2.5Y8/2 外面：浅黄橙色 7.5YR8/4	ハケ後ナデか ハケ後ナデか	内面にオロシ目有す
228	99		SP3084	土師器	皿	－	［0.9］	(5.0)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕有す
229	99		SP3084	瓦質土器	火鉢	－	［4.8］	(25.0)	やや良	やや良	内面：褐灰色 10YR6/1 外面：灰褐色 7.5YR5/2	ハケ（見込みハケ後ナデ） ハケ後ナデ	脚部欠損　外面煤付着 内外面一部二次焼成により赤変
230	99		SP3091	土師器	皿	(11.6)	3.0	(5.0)	精良	良	内面：灰白色 7.5YR8/1 外面：浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　口縁内外面丹塗りか(橙色 2.5YR7/6)
231	99	52	SP3097	青白磁	合子か小鉢	－	［1.4］	(4.0)	精良	良	釉：明オリーブ灰色 2.5GY7/1 胎土：灰白色 2.5Y8/1	回転ナデ、施釉 回転ナデ、施釉	内面蛇の目釉剥ぎ　底面露胎　外面に蓮華文
232	99	52	SP3124	瓦質土器	擂鉢	－	［6.7］	－	やや良	やや良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/2 外面：灰白色 2.5Y7/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	内面にオロシ目（単位５条）
233	99		SP3128	土製品	管状土錘	径 (3.6)	5.6	孔径 (1.9)	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：灰白色 N8/ 胎土：灰白色 2.5Y8/1	ナデか	瓦質　15C ～ 16C
234	99		SP3136	瓦質土器	鍋（足鍋）	(25.0)	［5.8］	－	やや良	良	内面：灰色 N5/ 外面：黒色 2.5Y2/1	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	岩崎編年（Ⅲ型式新） 15C ～
235	99		SP3136	瓦質土器	擂鉢	－	［6.9］	－	やや良	やや良	内面：灰白色 N8/ 外面：灰色 N5/	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	オロシ目確認できず
236	100		SP3140	瓦質土器	擂鉢	－	［5.7］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y4/1 外面：暗灰色 N3/	口縁部ナデ、ハケ後ナデ、 口縁部ナデ、ハケ後ナデ	内面にオロシ目（単位９条）
237	100		SP3154	土師器	皿	(7.6)	0.9	(6.2)	やや良	やや良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 14C
238	100		SP3159	土師器	皿（杯）	(11.6)	［3.5］	－	やや粗	良	内面：黄灰色 2.5Y6/1 外面：灰黄色 2.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	
239	100		SP3161	陶器	甕	－	［6.1］	－	やや良	良	内面：灰色 5Y6/1 外面：褐灰色 7.5YR5/1	板ナデ、ヨコナデ ハケ後ナデ	常滑焼か
240	100		SP3162	土師器	皿	(5.8)	1.3	(3.0)	精良	良	内外面：淡黄色 2.5Y8/3	回転ナデ 回転ナデ	北島編年（大内ⅢＡ３式） ～ 15C 後
241	100		SP3174	瓦質土器	鍋（足鍋）	口縁部 ［3.3］	脚部 ［6.6］	脚部径 3.0	やや良	良	内面：暗灰色 N3/ 外面：黒色 2.5Y2/1	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ 口縁部ヨコナデ、胴部指オサエ	岩崎編年（Ⅲ型式新） 15C ～
242	100	52	SP3179	瓦質土器	羽釜	－	［2.8］	－	やや良	やや良	内面：灰色 5Y5/1 外面：灰白色 5Y7/1	ハケ 鍔部ヨコナデ、ハケ後ナデ	13C 後～ 14C 前
243	100	52	SP3184	土師器	皿	11.45	2.15	5.5	やや良	やや良	内外面：灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部糸切り後ナデ 北島編年（大内ⅢＢ式） ～ 15C 後
244	100		SP3197	土師器	杯	－	［1.2］	－	精良	良	内面：淡橙色 5YR8/4 外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ　底面回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
245	100	52	SP3207	土師器	皿	7.4	2.0	5.2	やや良	やや良	内面：橙色 7.5YR7/6 外面：橙色 7.5YR7/6 灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 内外面とも中心部にくぼみ
246	100		SP3212	瓦質土器	擂鉢	－	［6.0］	－	やや粗	不良	内外面：灰色 N5/ 胎土：灰白色 5Y8/1	ヨコナデ ヨコナデ、指オサエ、ナデ	内面オにロシ目（単位５条）
247	100	52	SP3225	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	［11.2］	－	やや良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 5Y5/1	口縁部～胴部ナデ、底部ハケ 口縁部～頸部ナデ、胴部下半指オサエ、底部ナデ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
248	100		SP3227	土師器	皿	(7.6)	1.0	(6.0)	精良	良	内外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
249	100	52	SP3250	土師器	皿	(10.8)	2.6	(5.0)	やや良	やや良	内外面：灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部外面に板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ１式） ～ 15C 中
250	100	53	SP3259	瓦質土器	擂鉢	－	［6.3］	－	やや良	良	内面：灰色 N6/	ハケ、ヨコナデ ヨコナデ、指オサエ、ナデ、ハケ	内面にオロシ目（単位５条）
251	100		SP3272	土師器	皿	(20.0)	［2.9］	－	精良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/2 外面：灰黄褐色 10YR5/2	回転ナデ 回転ナデ	口唇面取り 北島編年（大内ⅢＡ１式） ～ 15C 中

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
252	100		SP3272	土師器	皿	(6.2)	1.1	(3.6)	精良	やや良	内外面：灰白色 10YR8/1	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切りか
253	100		SP3272	瓦質土器	足鍋脚部	－	[6.8]	－	やや良	やや良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 N5/	口縁部ナデ、ハケ 口縁部ナデ、ハケ後ナデ	岩崎編年（Ⅲ型式新） 15C ～
254	100		SP3272	瓦質土器	鍋脚部	－	[11.0]	－	やや良	やや良	内胴底：にぶい黄褐色 10YR5/3 脚：橙色 5YR6/6	胴底ナデ 指オサエ	岩崎編年（Ⅲ型式新） 15C ～
255	100		SP3276	瓦質土器	鍋	－	[6.4]	－	精良	良	内面：灰色 5Y4/1 外面：黒色 10YR2/1	口縁部ナデ、ハケ後ナデ 口縁部ナデ、ハケ後ナデ	14C ～ 15C 初
256	100		SP3279	瓦質土器	鍋（足鍋）	－	[10.0]	－	精良	良	内面：暗灰色 N3/ 外面：灰色 N4/	ヨコ方向のハケ後ナデ 口縁部ヨコナデ、タテ方向のハケ、底部格子目タタキ	岩崎編年（Ⅳ型式） ～ 16C
257	100		SP3279	瓦質土器	擂鉢	－	[3.1]	－	やや良	やや良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 N5/	ナデ 口縁部ナデ、胴部ハケ後ナデか	内面にオロシ目（単位７条）
258	101	53	SP3280	土師器	皿	(10.9)	2.1	(5.0)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅢＡ式） ～ 15C 後
259	101		SP3293	土師器	皿（杯）	－	[1.0]	－	精良	良	内面：灰白色 10YR8/2 外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ、底面回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕
262	101	53	SP3296	瓦質土器	把手付鍋（足鍋）	－	[6.3]	－	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 5Y4/1	ハケ ハケ後ナデ　把手部分ナデ	岩崎編年（ⅥＢ型式） 16C
263	101		SP3298	瓦質土器	鍋（足鍋）	(28.0)	[6.7]	－	やや良	やや良	内面：黄灰色 2.5Y6/1 外面：黒褐色 2.5Y3/1	口縁部ナデ、ハケ後ナデ、指オサエ 口縁部ナデ、ハケ後ナデ、指オサエ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式新） 15C ～
265	101	53	SP3340	土師質土器	羽釜	－	[3.2]	－	やや良	やや良	内面：灰黄褐色 10YR6/2 外面：にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ ナデ	13C ～ 14C 前
266	101	53	SP3367	瓦質土器	鍋（足鍋）	(22.6)	[11.0]	－	やや良	良	内面：灰色 N7/ 外面：灰色 N4/	口縁部～頸部ハケ後ヨコナデ、体部ヨコ方向のハケ 口縁部～体部指オサエ、ヨコナデ、底部格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（ＶＡもしくはＶＢ型式） 16C 後～
267	101	53	SP3375	土師器	皿	(6.0)	[1.1]	3.9	やや良	やや良	内外面：灰白色 10YR8/2	摩滅のため調整不明瞭 摩滅のため調整不明瞭	底部回転糸切り後板目圧痕 見込に凹線１条　北島編年（大内ⅢＡ式） ～ 15C 後
268	101	53	SP3381	陶器	皿	(12.2)	[3.0]	－	精良	やや良	釉：灰白色 5Y8/2 胎土：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ、ケズリ	
269	101	53	SP3393	瓦質土器	焙烙	－	[6.0]	－	精良	良	内面：灰色 5Y5/1 外面：灰色 N4/	指オサエ、ヨコハケ、ナデ ナデ、指オサエ	
270	101		SP3393	瓦質土器	甕	－	[8.4]	－	やや粗	やや良	内面：灰色 5Y4/1 外面：にぶい黄橙色 10YR6/4	ヨコナデ、指オサエ ヨコナデ、格子目タタキ	
271	101	53	SP3397	瓦質土器	壺	－	[6.7]	(14.4)	やや粗	不良	内面：灰黄褐色 10YR4/2 外面：黄灰色 2.5Y4/1 胎土：灰白色 5Y8/1	指オサエ、摩滅のため不明瞭 タテハケ後ナデ、ミガキか	内面被熱　外面煤付着
272	101	53	SP3397	瓦質土器	足鍋	(28.8)	[9.5]	－	粗	やや良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/3 外面：灰黄褐色 10YR5/2	ヨコナデ、一部ハケ ヨコナデ、ナデ、指オサエ、ハケ	外面被熱　内面煤付着 岩崎編年（Ⅲ型式） 15C
273	102	53	SP3427	土師器	杯（鉢）	(22.4)	4.9	(11.4)	やや良	良	内面：灰黄褐色 10YR5/2 外面：褐灰色 10YR4/1	回転ナデ 口縁部～体部回転ナデ	底部外面に板目圧痕明瞭
274	102		SP3427	土師器	鍋（足鍋）	－	[4.4]	－	やや粗	やや良	内外面：にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ後ナデ、ヨコナデか ヨコナデか、指オサエ後ナデ	岩崎編年（Ⅰ～Ⅱ型式） 14C 中～後
275	102		SP3444	瓦質土器	甕	－	[8.7]	－	やや良	やや良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 5Y5/1 胎土：灰白色 2.5Y8/1	ヨコナデ ヨコナデ、格子目タタキ	被熱
276	102	53	SP3452	土師器	皿	(6.0)	1.1	(4.4)	やや良	良	内外面：橙色 5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後ナデ
277	102		SP3452	土師質土器	鍋	－	[4.8]	－	粗	やや良	内面：浅黄橙色 10YR8/4 外面：浅黄橙色 10YR8/3	ヨコナデ、ナデ 指オサエ後ナデ	外面煤付着
278	102		SP3455	土師質土器	鍋	－	[4.5]	－	やや粗	不良	内面：灰白色 5Y8/1 外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	摩滅 指オサエ	
279	102	53	SP3471	土師器	皿	(7.8)	1.0	(5.8)	やや良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/3 外面：にぶい黄橙色 7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
280	102		SP3473	土師器	皿	(7.8)	1.3	(4.2)	やや粗	やや良	内面：にぶい黄橙色 10YR7/4 外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	摩滅 摩滅	
281	102		SP3496	土師器	椀	－	[1.8]	(6.2)	やや粗	不良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	摩滅 摩滅	
282	102	53	SP3496	土師器	皿	(7.9)	1.2	5.6	やや良	不良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 外面：浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
283	102	53	SP3496	土師器	皿	(7.8)	1.1	5.2	やや粗	良	内面：橙色 2.5YR6/8 外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
284	102	53	SP3498	土師器	皿	(7.6)	1.3	(5.8)	粗	不良	内面：にぶい橙色 7.5YR7/4 外面：橙色 7.5YR6/6	回転ナデ 摩滅、オサエ	底部回転糸切り
285	102	53	SP3506	瓦質土器	羽釜	－	［2.5］	－	やや良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 N5/	ヨコハケ、ヨコナデ ヨコナデ	
286	102		SP3511	土師器	皿	－	［0.7］	(3.2)	精良	やや良	内外面：灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕有す
287	102	53	SP3511	青磁	椀	－	［1.3］	高台 5.9	精良	良	胎土：灰白色 N8/ 釉：オリーブ灰色 2.5GY6/1	ヘラケズリ	見込みに印花文 14C 後～ 15C
288	102	54	SP3530	土製品	管状土錘	径 3.3	長さ 5.4	孔径 1.9	粗	やや良	内面：黄灰色 2.5Y6/1 外面：灰黄色 2.5Y7/2	摩滅のため調整不明瞭	
289	102	54	SP3530	土製品	管状土錘	径 3.2	長さ 5.0	孔径 1.8	粗	やや良	内面：灰黄色 2.5Y7/2 外面：灰黄色 2.5Y7/2 黄灰色 2.5Y5/1	摩滅のため調整不明瞭	
290	102	54	SP3530	土製品	管状土錘	径 3.0	長さ 5.1	孔径 1.9	粗	やや良	内外面：灰白色 2.5Y8/2	摩滅のため調整不明瞭	
291	102	54	SP3530	土製品	管状土錘	径 3.0	長さ 4.7	孔径 1.9	粗	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：灰白色 5Y7/1	摩滅のため調整不明瞭	
292	102		SP3537	土師器	椀	―	［0.7］	(6.8)	やや粗	やや稜	内面：にぶい黄橙色 10YR6/3 外面：にぶい黄橙色 10YR7/4	摩滅のため調整不明瞭	
293	102		SP3543	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［7.0］	－	やや良	やや良	内外面：暗灰色 N3/ 胎土：灰白色 2.5Y8/1	ヨコナデ、一部ハケか ヨコナデ、指オサエ	
294	102	53	SP3563	土師器	椀	(16.6)	5.1	(6.2)	やや良	やや良	内外面：灰白色 10YR8/2	ヨコナデ、ミガキ 指オサエ	内面被熱 13C 後～ 14C 前
295	102	54	SP3563	青磁	椀	－	［2.2］	－	精良	良	釉：灰オリーブ色 7.5Y6/2 胎土：灰白色 5Y7/1	ナデか ケズリ	同安窯　櫛描文 大宰府編年Ⅰ類　12C 後～
296	102		SP3577	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［8.7］	－	粗	やや良	内面：灰色 N4/ 外面：暗灰色 N3/ 胎土：浅黄橙色 10YR8/3	ヨコナデ ヨコナデ、指オサエか	外面煤付着 岩崎編年（Ⅴ型式）　16C ～
297	102	54	SP3581	土師器	皿	(12.0)	2.0	5.4	やや良	やや良	内面：褐灰色 10YR6/1 外面：灰黄褐色 10YR6/2	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り後板目圧痕　見込に沈線１条　北島編年（大内Ⅴ）　16C 後～
298	102		SP3583	土師器	皿	－	［1.2］	5.1	やや良	やや良	内面：灰白色 10YR8/2 外面：灰黄色 2.5Y7/2	摩滅 回転ナデ	底部外面に板目圧痕　見込に凹線１条
299	102	54	SP3583	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(23.6)	［5.8］	－	粗	やや良	内外面：灰色 N4/ 胎土：2.5Y8/1	ヨコナデ、指オサエ、ナデ ヨコナデ	岩崎編年（Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 前
300	102	54	SP3600	土師器	托か	－	［4.8］	脚部径 10.6	やや良	やや良	内外面：橙色 7.5YR7/6	受部ナデ ナデ	13C 後～
301	102	54	SP3611	瓦質土器	湯釜 吊手部	－	［4.2］	残幅 (5.7)	やや良	良	内外面：暗灰色 N3/	ヨコ方向のナデ 指オサエ	
302	103		SP3631	土師器	皿	－	［0.9］	(5.0)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
303	103		SP3631	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［7.4］	－	精良	良	内外面：暗灰色 N3/	ハケ後ヨコナデ 口縁部ヨコナデ、指オサエ	岩崎編年（Ⅱ～Ⅲ型式古） 14C 後～ 15C 初
304	103	54	SP3632	瓦質土器	羽釜	(28.6)	［6.9］	－	精良	良	内面：暗灰色 N3/ 外面：灰色 5Y4/1	ヨコ方向のハケ ヨコナデ、タテ方向のハケ後指オサエ	13C ～ 14C 前
305	103	54	SP3639	土師器	皿	(11.4)	2.3	(5.4)	やや良	良	内面：浅黄色 2.5Y7/3 外面：灰黄色 2.5Y6/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 内面一部に煤付着 北島編年（大内ⅣＡ１式） ～ 16C 初
306	103	54	SP3655	土師器	皿	(10.6)	2.1	(5.0)	やや粗	良	内面：体部灰黄色　底部にぶい橙色 7.5YR7/3 外面：灰黄色 2.5Y6/1	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕 北島編年（大内ⅣＡ１式） ～ 16C 初
307	103	54	SP3655	陶器	天目椀	(12.6)	4.6	－	精良	良	生地：灰白色 7.5Y7/1 釉 内外面：黒色 N2/		内外面に黒釉
308	103		SP3665	瓦質土器	羽釜	－	［2.3］	－	やや良	良	内外面：灰色 N4/	ヨコナデ ヨコナデ	13C 後～ 14C 前
309	103	54	SP3670	瓦質土器	鍋	(28.2)	［8.7］	－	やや良	良	内面：灰黄褐色 10YR6/2 外面：灰黄褐色 10YR5/2	ヨコナデ 口縁部～胴部ヨコナデ、胴部下指オサエ後ナデ、底部格子目タタキ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅱ～Ⅲ型式） 14C 後～ 15C 前
310	103	54	SP3685	土師器	杯	－	［2.4］	(7.8)	精良	良	内面：浅黄橙色 10YR8/3 外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	体部内面に赤色塗彩（淡赤橙色 2.5Y7/4）　底部回転糸切り　13C ～ 14C 前
311	104	55	表土除去時	瓦質土器	擂鉢	(24.6)	［7.5］	－	精良	良	内面：灰色 N6/ 外面：にぶい黄橙色 10YR7/2	ハケ ハケ後ナデ、指オサエ	内面にオロシ目（単位９条） 16C 後～末
312	104	55	遺物包含層	瓦質土器	鍋 （足鍋）	－	［9.1］	－	やや良	やや良	内外面：黄灰色 2.5Y5/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	外面口縁下に印花文

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
313	104	55	遺構検出	陶器	皿	－	［1.8］	4.5	やや良	やや良	胎土：黄灰色 釉：白	不明	全釉　内面目跡残る　底部ケズリ出し高台
314	104	55	遺構検出 （上段）	陶器	椀	(8.6)	3.3	3.2	精良	良	胎土：白 釉：乳白色	回転ナデ 回転ナデ	底部ケズリ出し高台　内外面施釉　内面全釉見込目跡2点　底部露胎
315	104		表面 採集	土製品	管状土錘	縦 7.0	横 ［3.5］	孔径 1.9	精良	良	内外面：灰色 N5/	ナデ、指オサエ	瓦質　15C～16C
316	104	55	調査区東端壁下トレンチ	土製品	管状土錘	縦 4.4	横 1.0	孔径 0.4	精良	良	外面：暗青灰色 5PB4/1	ナデ、指オサエ	瓦質　15C～16C
320	106	55	谷状地形 内　下層 （TR301）	須恵器	杯蓋	11.4	3.45	－	精良	良	内面：黄灰色 2.5Y6/1 外面：黄灰色 2.5Y5/1	回転ナデ、天井部回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ、天井部ヘラケズリ	口縁部の焼け歪み大 田辺編年 TK209 型式 ６C 末～７C 初
321	106	55	谷状地形 内　下層 （TR301）	須恵器	杯身	(11.1)	3.6	(7.8)	精良	良	内外面：灰色 N6/	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り 田辺編年 TK209 ～ 217 型式 ６C 末～７C 前
322	106		谷状地形 内　下層 （TR301）	須恵器	杯身	(10.8)	［3.7］	(6.8)	精良	良	内面：灰色 N4/ 外面：灰色 N5/	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り 田辺編年 TK209 ～ 217 型式 ６C 末～７C 前
323	106		谷状地形 内　下層 （TR301）	須恵器	杯身	－	3.05	－	精良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR6/4 外面：にぶい橙色 7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り 田辺編年 TK209 ～ 217 型式 ６C 末～７C 前
324	106	55	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	鉢	(13.4)	［5.2］	－	やや良	やや良	内面：橙色 7.5YR6/8 外面：明褐色 7.5YR5/6	器面剥離につき不明 ハケ後ナデ	
325	106	55	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	高杯	－	［4.7］	－	やや良	やや良	内外面：赤褐色 5YR4/6	ヘラケズリ ヘラケズリ	脚部面取り ７C ～８C
326	106	55	谷状地形 内　下層 （TR301）	須恵器	壺	(15.0)	［3.9］	－	精良	良	内外面：灰白色 2.5Y7/1	口縁部回転ヨコナデ、回転ナデ後ヨコナデ 口縁部回転ヨコナデ、回転ナデ、ハケか後ナデ	
327	106		谷状地形 内　下層 （TR301）	須恵器	壺	－	［4.6］	－	やや良	良	内外面：灰色 N5/	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り ６C 後～７C 前
328	106	55	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甕	(17.0)	［5.2］	－	やや良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR6/3 外面：にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ、指オサエ ハケ後ナデ	～６C
329	106	55	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甕	(17.0)	［5.1］	－	やや良	良	内面：にぶい黄橙色 10YR6/3 外面：にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ、ハケ後指オサエ 口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ	６C 後～
330	106	56	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甕	(16.7)	［5.7］	－	粗	良	内面：にぶい橙色 7.5YR6/4 断面：橙色 7.5YR6/6 外面：橙色 7.5YR6/6	指オサエ、ナデ、ヨコナデ ハケ後ナデ、ヨコナデ	6C 後～
331	106	56	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甕	(16.0)	［6.6］	－	やや良	良	内面：黒褐色 10YR3/2 外面：にぶい黄橙色 10YR6/4	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	６C 後～
332	106	56	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甕	(15.0)	［8.0］	－	やや良	やや良	内面：橙色 7.5YR6/6 黒変有り 外面：にぶい赤褐色 5YR4/4	ハケ後ナデ、指オサエ ハケ	
333	106	56	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甕	(15.8)	［9.7］	－	やや粗	やや良	内面：黒褐色 10YR3/1 外面：灰黄褐色 10YR4/2	ナデ、指オサエ 器面の剥離のため不明	
334	106	56	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甕	(16.7)	29.5	－	やや粗	良	内面：橙色 5YR6/6 断面：灰黄褐色 10YR6/2 外面：橙色 7.5YR6/6	ハケ後ナデ、ヨコナデ ハケ、ヨコナデ	底部外面に焼成破裂痕 ６C 後～
335	106	56	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	甑	(12.0)	［9.1］	－	やや良	良	内面：にぶい橙色 7.5YR6/4 外面：にぶい褐色 7.5YR5/4	ハケ後ナデ ハケ、指オサエ	外面に黒斑有す ６C ～７C
336	106	56	谷状地形 内　下層 （TR301）	土師器	把手付甕（甑）	－	［4.7］	－	やや粗	やや良	内外面：橙色 5YR6/6	ハケ後ナデ 指オサエ	６C ～７C
338	107	56	谷状地形 内　下層 （TR302）	須恵器	杯蓋	－	3.3	(15.7)	精良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 N5/	回転ナデ 上位回転ヘラケズリ、中位下位回転ナデ	摘みあり ８C 前～中
339	107	56	谷状地形 内　下層	土師器	甑	－	［9.6］	－	やや良	良	内外面：にぶい橙色 7.5YR7/4	ハケ後ナデ ハケ	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）					
340	107		谷状地形内　上層	土師器	杯	(11.6)	3.8	(5.9)	精良	良	内面：橙色 5YR6/6 外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 14C
341	107		谷状地形内　上層	土師器	皿	6.8	1.25	4.2	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕
342	107	57	谷状地形内　上層	土師器	皿	6.4	0.95	4.2	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後板目圧痕
343	107	57	谷状地形内　上層（表土除去時）	青磁	皿	―	[1.9]	4.7	精良	良	内面：明オリーブ灰 5GY7/1 外面		龍泉窯系 大宰府編年Ｉ－１ｂ類 12 後～
344	107	57	谷状地形内　上層（TR301・302）	瓦質土器	鍋（足鍋）	(26.6)	[8.3]	-	精良	やや良	内外面：褐灰色 7.5YR5/1	ナデ 下位タタキ	岩崎編年（Ⅲ型式）15C
345	107		谷状地形内　上層（TR301・302）	瓦質土器	鍋（足鍋）	(32.6)	[9.7]	-	精良	良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 N4/	ハケ ナデ、指オサエ、下位タタキ	岩崎編年（ⅥA 新型式） 16C 後半～末
346	107		谷状地形内　上層	瓦質土器	鍋（足鍋）	(40.1)	[8.7]	-	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 断面：灰白色 2.5Y8/2 外面：褐灰色 10YR4/1	ハケ後ナデ、ヨコナデ ハケ後ナデ、ヨコナデ	外面煤付着 岩崎編年（Ⅲ新型式） 15C ～
347	107	57	谷状地形内　上層	瓦質土器	足鍋	(38.4)	12.0	-	やや良	やや良	内面：灰色 N4/ 断面：にぶい橙色 7.5YR7/3 外面：灰色 N4/	ナデ、ヨコナデ 指オサエ後ナデ、ヨコナデ、格子目タタキ後ナデ	印花文　底部二次被熱
348	108	57	谷状地形内　上層	瓦質土器	鍋	(27.6)	[7.8]	-	やや良	良	内面：黄灰色 2.5Y5/1 外面：黒色 N2/	粗いヨコ方向のハケ ナデ	外面口縁部に印花文 外面に煤付着
349	108		谷状地形内　上層（TR302）	瓦質土器	火鉢	-	[8.0]	-	精良	良	内面：灰色 5Y4/1 外面：灰黄褐色 10YR4/2	ハケ後ナデ、ヘラミガキ ナデ	外面に印花文
350	108		谷状地形内　上層	瓦質土器	擂鉢	-	[5.8]	-	やや良	やや良	内外面：暗灰色 N3/	ナデ 指オサエ後ナデ	内面にオロシ目（単位６条以上）
351	108	57	谷状地形内　上層（TR301・302）	瓦質土器	擂鉢	-	[7.3]	(12.4)	やや良	良	内外面：灰白色 2.5Y8/1	ハケ ナデ、指オサエ	内面にオロシ目（単位５条） 底部外面に板目圧痕有す
352	108		谷状地形内　上層（TR301・302）	瓦質土器	擂鉢	-	[1.0]	-	精良	やや良	内面：灰色 N6/ 外面：灰色 N5/	ハケ 指オサエ、ナデ	内面にオロシ目（単位５条） 底部外面に板目圧痕
355	109	57	土器集中範囲①	土師器	皿	(11.0)	1.5	(6.0)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　底部外面に板目圧痕　北島編年（ⅣＢ２式）　～16C 中
356	109	58	土器集中範囲①	土師器	皿	(6.8)	1.2	(4.6)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（ⅣＢ２式）　～16C 中
357	109	58	土器集中範囲①	土師器	皿	6.5	1.0	4.3	精良	良	内外面：灰黄色 2.5Y7/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（ⅣＢ２式）　～16C 中
358	109	58	土器集中範囲①	土師器	皿	6.3	1.2	4.0	精良	良	内外面：浅黄橙色 7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　内外面に炭化物付着　北島編年（ⅣＢ２式）　～16C 中
359	109	58	土器集中範囲①	土師器	皿	(5.4)	0.7	(4.2)	精良	良	内外面：橙色 5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　北島編年（ⅣＢ２式）　～16C 中
360	109		土器集中範囲②	土師器	皿	(13.7)	2.7	(6.4)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（ⅢＢ式）　～15C 後
361	109		土器集中範囲②	土師器	皿	-	[2.0]	6.1	やや良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕 北島編年（ⅢＢ式）　～15C 後
362	109	58	土器集中範囲②	土師器	皿	(11.4)	1.7	5.5	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕 北島編年（ⅢＢ式）　～15C 後
363	109	58	土器集中範囲②	土師器	皿	10.3	2.0	5.1	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕 北島編年（ⅢＢ式）　～15C 後
364	109	58	土器集中範囲②	土師器	皿	10.2	2.3	5.0	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ、見込回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　北島編年（ⅢＢ式）　～15C 後
365	109	58	土器集中範囲②	土師器	皿	10.0	1.5	5.3	精良	良	内外面：にぶい黄橙色 10YR7/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕　器形歪み　北島編年（ⅢＢ式）　～15C 後
366	109	58	土器集中範囲②	土師器	皿	8.7	2.0	4.6	精良	良	内外面：灰白色 2.5YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	北島編年（ⅢＢ式）　～15C 後

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	主な調整（内） （外）	備考
						口径 （復元値）	器高 ［残存値］	底径 （復元値）					
367	109		土器集中範囲②	土師器	皿	(8.2)	1.8	(4.2)	精良	良	内外面：灰白色 10YR8/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（ⅢB式）～15C後
368	109	58	土器集中範囲②	土師器	皿	(7.4)	1.4	(3.7)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 北島編年（ⅢB式）～15C後
369	109	58	土器集中範囲②	土師器	皿	(6.4)	1.0	(3.6)	精良	良	内外面：浅黄橙色 10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り　板目圧痕 北島編年（ⅢB式）～15C後
370	109	58	土器集中範囲②	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(29.6)	[8.9]	-	やや良	やや良	内外面：オリーブ黒色 5Y3/1	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、指オサエ	岩崎編年（ⅥA新型式） 16C後
371	109	58	土器集中範囲②	瓦質土器	鍋 （足鍋）	(30.0)	[6.7]	-	精良	やや良	内外面：灰色 N4/	ハケ後ナデ ハケ後ナデ、ミガキ	外面口縁部に印花文

引用文献

岩崎仁志 1999「足鍋再考」『陶塤』第 12 号（財）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター

北島大輔 2010「大内式の設定　－中世山口における遺物編年の細分と再編－」『大内氏館跡 XI』山口市教育委員会　175 ～ 258 頁

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV　－陶磁器分類編－』

第 26 表　下瑞光寺地区（２区）出土石器・石製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			重さ（g）	石材・材料	備考
						長さ ［残存値］	幅 ［残存値］	厚さ ［残存値］			
40	82	45	SE304	石製品	石臼	径 27.9	-	7.65	6000	安山岩	四熊ヶ岳産　7分画
41	83	45	SE304	石製品	石臼	径 29.8	-	12.15	5100	安山岩	四熊ヶ岳産　推定6分画　廃棄時に意図的に分割
166	94	50	SD301	石製品	石臼	径 [34.0]	-	11.1	3981	安山岩	
167	94	50	SD301	石製品	石臼	径 [28.0]	-	[13.2]	3748	花崗岩	
187	97	51	SD301・303	石製品	砥石	[8.0]	[7.6]	[2.2]	159	凝灰岩	中砥　四面使用か
317	104	55	中央谷筋	石器	石匙	6.2	3.5	0.95	22.8	安山岩	横型石匙　刃部の調整は丁寧　ツマミ部は左部のみ打ち欠いて形成しており右部には自然面が残る　裏面は剥離形成
337	106	56	谷状地形内　上層（TR301）	石製品	滑石製模造品	5.0	3.0	0.85	19.6	滑石	盾形　有孔（両面から穿孔）

第 27 表　下瑞光地区（２区）出土金属製品観察一覧表

NO.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			重さ（g）	備考
						長さ ［残存値］	幅 ［残存値］	厚さ ［残存値］		
24	78		SE302	鉄製品	刀子か	2.1	[5.0]	0.5	16.7	
54	85	46	ST301	鉄製品	鉄釘	3.5	0.6	0.3	5.0	
55	85	46	ST301	鉄製品	鉄釘	[2.5]	1.0	0.3	3.7	
56	85	46	ST301	鉄製品	鉄釘	[3.7]	0.4	0.3	4.6	
57	85	46	ST301	鉄製品	鉄釘	[2.6]	0.4	0.3	2.1	
58	85	46	ST301	鉄製品	鉄釘	[2.6]	0.6	0.4	6.0	
59	85	46	ST301	鉄製品	鉄釘	[1.8]	0.5	0.3	5.1	
60	85	46	ST301	鉄製品	鉄釘	[1.9]	0.4	0.3	1.3	
168	94	50	SD301	銅製品	銅銭	径 2.45	-	0.1	1.6	咸平元寶　998 年初鋳
188	97		SD301・303	鉄製品	鉄釘	2.6	0.35	0.4	1.5	
260	101		SP3293	鉄製品	剣か	[5.25]	3.5	0.75	22.9	
261	101		SP3293	鉄製品	不明	[4.5]	1.15	0.9	10.6	
264	101		SP3302	鉄製品	鉄釘	[5.4]	[0.7]	[0.6]	7.7	
318	104	55	南側段上遺物包含層	鉄製品	刀子	[9.5]	1.2	0.2	10	
319	104		遺物包含層	鉄製品	鉄釘	5.0	0.4	0.35	4.8	
353	108	57	谷状地形内　上層（TR302）	鉄製品	包丁	[22.65+4.9]	[5.5]	0.25	209	
354	108	57	谷状地形内　上層（TR302）	鉄製品	鉄鎌	[6.2+2.2]	[3.2]	[0.4]	26	

Ⅵ　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

下津令遺跡（防府市大字台道地内）は、三方を山に囲まれた谷に形成された段丘上に位置する。これまでの発掘調査により、古墳時代から中世の集落跡に伴う遺構等が検出されている。

今回の分析調査では、沖ノ下２地区、下瑞光寺地区（１区）および下瑞光寺地区（２区）において、遺構の年代情報を得ることを目的として、遺構出土木材・炭化材について放射性炭素年代測定を実施する。同時に樹種同定も実施し、当該期の木材利用に関する情報を得る。また、下瑞光寺地区（２区）で検出された土坑墓における遺体埋納の可能性を検討するために土壌理化学分析を実施する。

２　各調査区の放射性炭素年代測定・樹種同定

（１）　試料

各調査区における調査遺構および出土木材・炭化材試料の一覧を第 28 表に示す。

沖ノ下２地区の試料は、木炭焼成坑（SK111）、井戸（SE101・103）、溝（SD106）、柱穴（SP1020・1080）、柵列（SA102）の柱穴から出土した木材・炭化材８点である。放射性炭素年代測定は全点、樹種同定は６点が対象である。

第 28 表　年代測定・樹種同定資料一覧

地区	遺構名	遺構の性格	年代所見	状態	木取り	樹皮	年輪数	AMS試料採取位置	備考	AMS番号	樹種同定番号
沖ノ下2地区	SK111	木炭焼成坑	古代～中世	炭化材	半裁状	無	2年	全量		1	1
	SK111床面	木炭焼成坑	古代～中世	炭化材	半裁状	無	4年	全量		2	2
	SE101	井戸	中世	生木	破片	無	―	半割		3	3
	SE103	井戸	中世	生木	板目状	有	―	全量		4	4
	SD106	溝	中世	炭化材	破片	無	2年	全量		5	5
	SP1080	柱穴	中世	炭化材	ミカン割状	無	5年	全量		6	6
	SA102 (SP1003)	柵列の柱穴	中世	炭化材	ミカン割状	無	3年	全量		7	―
	SP1020	柱穴	中世	炭化材	微細片(塊状)	無	―	全量		8	―
下瑞光寺地区（１区）	SI201 カマド	竪穴建物	古墳後期	炭化材	芯持材	無	10年以上	全量	保存悪い	1	1
	SE201	井戸	中世	生木	破片	無	―	塗膜を外した全量	漆塗有	2	2
	SK214	土坑	中世	炭化材	ミカン割状	有	16年	最外7年分		3	3
	SK218	土坑	中世	炭化材	破片	無	5年	外3年分		4	―
	SK236	木炭焼成坑	古代	炭化材	板目状	無	4年	半割	SI201を切る	5	4
	SK237	土坑	古代	炭化材	板目状	無	8年	半割		6	5
	SK241	土坑	中世	生木	破片	無	―	塗膜を外した全量	漆塗有	7	6
	SX208	性格不明遺構	古代	炭化材	角棒状	無	7年	全量		8	―
下瑞光寺地区（２区）	SK302	土坑	中世	炭質物	―	―	―	全量		1	1
	SK304	土坑	中世	炭化材	分割状	無	4年	半割		2	2
	SK305	土坑	中世	炭化材	分割状	無	5年	半割		3	3
	SE304	井戸	中世	炭化物	―	―	―	全量	土器付着炭化物	4	―
	SE302	井戸	中世	炭化物	―	―	―	全量	土器付着炭化物	5	―
	SK336	土坑	中世	炭化材	破片	―	―	半割		6	4
	SK337	土坑	古代	炭化材	破片	無	4年	全量		7	5
	SK343	土坑	中世	炭化材	分割状	無	15年以上	外6-7年		8	6
	土器集中範囲①	遺物包含層	中世	炭化材	破片	無	不明	全量	元は炭化材	9	7
	土器集中範囲②	遺物包含層	中世	炭化材	柾目状	無	7年	外3年		10	8

下瑞光寺地区（１区）の試料は、竪穴建物（SI201)、井戸（SE201)、土坑（SK214・218・237・241)、木炭焼成坑（SK236)、性格不明遺構（SX208）から出土した木材・炭化材８点である。放射性炭素年代測定は全点、樹種同定は６点が対象である。

下瑞光寺地区（２区）の試料は、井戸（SE302・304)、土坑（SK302・304・305・336・337・343)、および遺物包含層（土器集中範囲①・②）から出土した炭化材・土器付着炭化物など 10 点である。放射性炭素年代測定は全点、樹種同定は土器付着炭化物を除く 8 点が対象である。

なお、年代測定結果を解釈する上で樹種が重要となることもあるため、各地点の樹種同定対象外の試料のうち、木材・炭化材については樹種同定も併せて実施する。

（２） 分析方法

①放射性炭素年代測定

測定試料に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HC1 により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1 によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理：AAA 処理)。

試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いてδ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.10（Copyright 1986-2016 M Stuiver and PJ Reimer）を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。いずれも北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2σは真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範

囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

②樹種同定

生木は、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、自然乾燥させた後、３断面の割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やRichter 他（2006）を参考にする。

以下に調査区別に結果および考察を述べる。

（３）沖ノ下２地区

①放射性炭素年代測定の結果

測定結果および暦年較正結果を第29表、第110図に示す。同位体効果の補正を実施した測定結果は、SK111 木炭焼成坑 AMS 番号１が 1,520 ± 30yrBP、SK111 木炭焼成坑 AMS 番号２が 1,540 ± 20yrBP、SE101 井戸 AMS 番号３が 380 ± 20yrBP、SE103 井戸 AMS 番号４が 370 ± 20yrBP、SD106 溝 AMS 番号５が 1,620 ± 30yrBP、SP1080AMS 番号６が 610 ± 20yrBP、SA102 柵列の柱穴（SP1003）AMS 番号７が 480 ± 20yrBP 、柱穴 SP1020AMS 番号８が 810 ± 20yrBP を示す。

測定誤差を２σで計算した暦年較正結果（確率１位）は、SK111 木炭焼成坑 AMS 番号１が cal AD 529 ～ 606、SK111 木炭焼成坑 AMS 番号２が cal AD 504 ～ 585、SE101 井戸 AMS 番号３が cal AD 1,448 ～ 1,523、SE103 井戸 AMS 番号４が cal AD 1,448 ～ 1,523、SD106 溝 AMS 番号５が cal AD 383 ～ 475、SP1080AMS 番号６が cal AD 1,297 ～ 1,374、SA102 柵列の柱穴（SP1003）AMS 番号７が cal AD 1,414 ～ 1,446、SP1020AMS 番号８が cal AD 1,184 ～ 1,267 を示す。

②放射性炭素年代測定の考察

年代測定を実施した木材・炭化材が出土した遺構の考古年代は、SK111 が古代～中世、その他が中世とされている。

遺構別にみると、SK111 は炭化材２点について測定を実施、補正年代が 1,520 ± 30yrBP と 1,540 ± 20yrBP で近似した値が得られた。暦年較正結果の確率１位の年代値は、６世紀～７世紀初頭を示している。本遺構の考古年代は古代～中世と推定されていることから、やや古い年代を示していることになる。ただし測定対象が、いずれも樹皮の無い炭化材であることから、年輪の古木効果により、実際の年代より古い年代を示している可能性があり、遺構の下限年代として認識しておく必要がある。

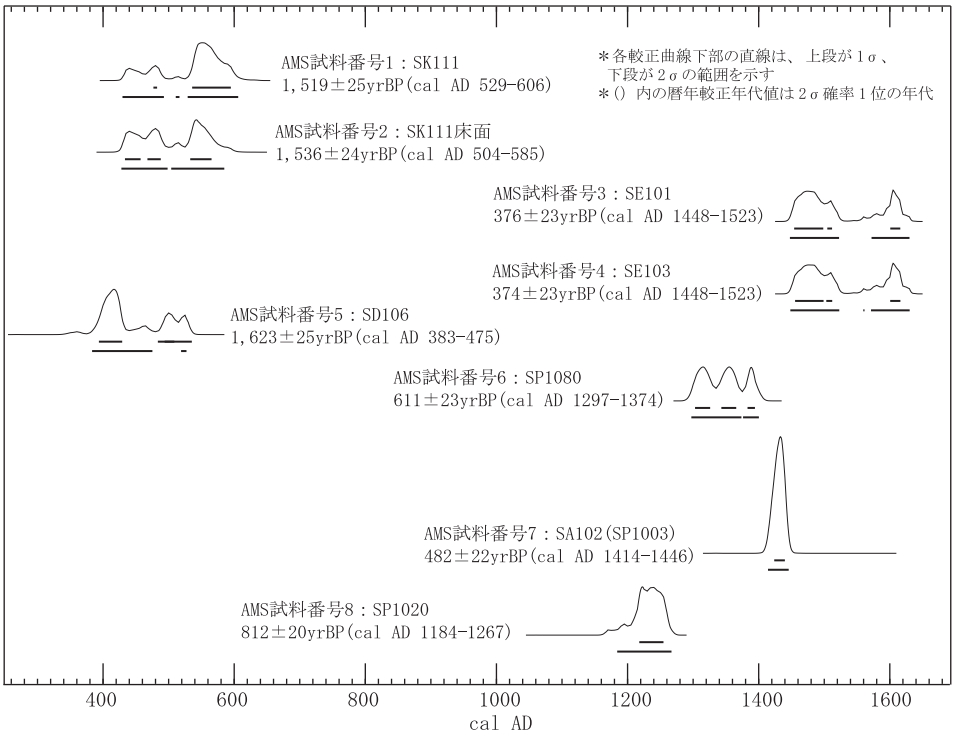
中世の井戸とされる SE101 と SE103 の木材は、SE101 が 380 ± 20yrBP、SE103 が 370 ± 20yrBP とほぼ一致する年代を示した。確率１位の暦年構成結果は 15 世紀～ 16 世紀初頭を示しており、調査時の所見とも調和的である。

SD106 溝から出土した炭化材は、補正年代が 1,620 ± 30yrBP、暦年較正結果は４世紀後半～５世

第 29 表　沖ノ下２地区の放射性炭素年代測定および暦年較正結果

AMS番号	遺構名	種類	年代所見	処理方法	測定年代 yrBP	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) yrBP	暦年較正結果				Code No.
								誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
1	SK111	炭化材	古代～中世	AAA	1,540±20	-26.44±0.56	1,520±30 (1,519±25)	σ	cal AD 477 - cal AD 482	cal BP 1,473 - 1,468	0.051	IAAA-161521
									cal AD 536 - cal AD 595	cal BP 1,414 - 1,355	0.949	
								2σ	cal AD 430 - cal AD 493	cal BP 1,520 - 1,457	0.256	
									cal AD 511 - cal AD 517	cal BP 1,439 - 1,433	0.009	
									cal AD 529 - cal AD 606	cal BP 1,421 - 1,344	0.735	
2	SK111 床面	炭化材	古代～中世	AAA	1,550±20	-25.79±0.58	1,540±20 (1,536±24)	σ	cal AD 433 - cal AD 457	cal BP 1,517 - 1,493	0.267	IAAA-161522
									cal AD 468 - cal AD 488	cal BP 1,482 - 1,462	0.244	
									cal AD 533 - cal AD 565	cal BP 1,417 - 1,385	0.489	
								2σ	cal AD 428 - cal AD 498	cal BP 1,522 - 1,452	0.491	
									cal AD 504 - cal AD 585	cal BP 1,446 - 1,365	0.509	
3	SE101	生木	中世	AAA	420±20	-27.65±0.33	380±20 (376±23)	σ	cal AD 1,454 - cal AD 1,498	cal BP 496 - 452	0.691	IAAA-161523
									cal AD 1,505 - cal AD 1,512	cal BP 445 - 438	0.081	
									cal AD 1,601 - cal AD 1,616	cal BP 349 - 334	0.228	
								2σ	cal AD 1,448 - cal AD 1,523	cal BP 502 - 427	0.684	
									cal AD 1,572 - cal AD 1,630	cal BP 378 - 320	0.316	
4	SE103	生木	中世	AAA	410±20	-27.09±0.43	370±20 (374±23)	σ	cal AD 1,456 - cal AD 1,499	cal BP 494 - 451	0.651	IAAA-161524
									cal AD 1,503 - cal AD 1,512	cal BP 447 - 438	0.106	
									cal AD 1,601 - cal AD 1,616	cal BP 349 - 334	0.243	
								2σ	cal AD 1,448 - cal AD 1,523	cal BP 502 - 427	0.662	
									cal AD 1,560 - cal AD 1,561	cal BP 390 - 389	0.004	
									cal AD 1,571 - cal AD 1,630	cal BP 379 - 320	0.334	
5	SD106	炭化材	中世	AAA	1,640±20	-25.92±0.54	1,620±30 (1,623±25)	σ	cal AD 394 - cal AD 429	cal BP 1,556 - 1,521	0.743	IAAA-161525
									cal AD 494 - cal AD 509	cal BP 1,456 - 1,441	0.172	
									cal AD 519 - cal AD 527	cal BP 1,431 - 1,423	0.085	
								2σ	cal AD 383 - cal AD 475	cal BP 1,567 - 1,475	0.686	
									cal AD 484 - cal AD 535	cal BP 1,466 - 1,415	0.314	
6	SP1080	炭化材	中世	AAA	630±20	-26.13±0.38	610±20 (611±23)	σ	cal AD 1,303 - cal AD 1,326	cal BP 647 - 624	0.405	IAAA-161526
									cal AD 1,343 - cal AD 1,366	cal BP 607 - 584	0.391	
									cal AD 1,383 - cal AD 1,394	cal BP 567 - 556	0.204	
								2σ	cal AD 1,297 - cal AD 1,374	cal BP 653 - 576	0.779	
									cal AD 1,376 - cal AD 1,400	cal BP 574 - 550	0.221	
7	SA102 (SP1003)	炭化材	中世	AAA	490±20	-25.77±0.36	480±20 (482±22)	σ	cal AD 1,424 - cal AD 1,440	cal BP 526 - 510	1.000	IAAA-161527
								2σ	cal AD 1,414 - cal AD 1,446	cal BP 536 - 504	1.000	
8	SP1020	炭化材	中世	AAA	780±20	-23.27±0.32	810±20 (812±20)	σ	cal AD 1,218 - cal AD 1,255	cal BP 732 - 695	1.000	IAAA-161528
								2σ	cal AD 1,184 - cal AD 1,267	cal BP 766 - 683	1.000	

1)処理方法のAAAは、酸処理ーアルカリ処理ー酸処理を示す。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1（Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第 110 図　沖ノ下２地区における暦年較正結果の比較

紀を示している。本遺構の考古年代は中世と推定されていることから、14C 年代値は古い年代を示していることになる。炭化材の樹種は二次林の代表的な樹種であるマツ属複維管束亜属であり、樹皮が残っていないことを考慮しても、単なる古木効果で 800 年以上の年代差が生じたとは考えにくい。

今回の調査区に隣接する沖ノ下１区では、５世紀前半の SI02 カマドとその近辺の炭化材の年代測定が実施されており、今回の結果と類似する値が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2014）。また、今回の調査結果でも、SK111 木炭焼成坑の炭化材が同一樹種で、近似する年代値を示している。これらのことを踏まえると、溝内から出土した炭化材は何らかの過程を経て再堆積した、古い年代をもつ炭化材の可能性がある。

SP1080 柱穴の炭化材は、補正年代で 610 ± 20BP、暦年較正結果で calAD 1,297 ～ 1,374 を示し、中世の 13 世紀末～ 14 世紀代頃の年代を示している。SP1020 柱穴の炭化材は 810 ± 20yrBP を示し、12 世紀末～ 13 世紀中葉頃の年代を示し、各柱穴の考古年代は中世であることから、調和的な結果といえる。

柵列 SA102 を構成する柱穴 SP1003 から出土した炭化材は、480 ± 20yrBP を示し、15 世紀前～中葉頃を示している。

③樹種同定の結果

樹種同定結果を第 30 表に示す。樹種同定試料のうち樹種同定番号４試料以外は同一樹種からなり、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。なお、樹種同定番号４は針葉樹の樹皮であり、木部細胞が観察できないため、種類は不明である。また、AMS 試料のうち、AMS 番号７はマツ属複維管束亜属、AMS 番号８は、微細な針葉樹片が塊状になったものであり、組織の観察ができないために種類は不明である。マツ属複維管束亜属の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１～ 15 細胞高。

④樹種同定の考察

試料は、古代～中世の木炭焼成坑（SK111）から出土した炭化材、中世の井戸（SE101・103）から出土した木材、中世の溝（SD106）の炭化材、中世の柱穴（SP1080）の炭化材である。これらの木材・

第 30 表　沖ノ下２地区の樹種同定結果

番号	遺構名	遺構の性格	年代所見	状態	木取り	種類
樹種1	SK111	木炭焼成坑	古代～中世	炭化材	半裁状	マツ属複維管束亜属
樹種2	SK111床面	木炭焼成坑	古代～中世	炭化材	半裁状	マツ属複維管束亜属
樹種3	SE101	井戸	中世	生木	―	マツ属複維管束亜属
樹種4	SE103	井戸	中世	生木	―	針葉樹の樹皮
樹種5	SD106	溝	中世	炭化材	破片	マツ属複維管束亜属
樹種6	SP1080	柱穴	中世	炭化材	ミカン割状	マツ属複維管束亜属
AMS7	SA102(SP1003)	柵列の柱穴	中世	炭化材	ミカン割状	マツ属複維管束亜属
AMS8	SP1020	柱穴	中世	炭化材	ミカン割状	不明(針葉樹片を含む微細な炭化物塊)

炭化材は、針葉樹の樹皮１点を除く５点がいずれもマツ属複維管束亜属に同定された。マツ属複維管束亜属は、本州ではアカマツまたはクロマツである。アカマツとクロマツは、二次林や海岸林等に生育する常緑高木であり、木材は針葉樹としては重硬な部類に入り、強度と保存性が高い。また、松脂を多く含み、燃焼性も高い。

遺構別にみると、木炭焼成坑（SK111）の炭化材は、床面等から出土しており、いずれも半裁状を呈する。出土状況から、焼成時の燃料材あるいは焼成された木炭の一部と考えられる。いずれの場合もマツ属複維管束亜属の燃焼性を考慮した木材利用と考えられる。とくに木炭（マツ炭）は、火持ちは悪いが、高い火力が得られることから、民俗事例ではクリ炭と共に鍛冶に利用される（岸本・杉浦,1980）。木炭焼成坑の炭化材が焼成された木炭の一部とすれば、本遺跡周辺でも鍛冶燃料材にマツ炭を利用したこと等が考えられる。

井戸（SE101）の木材は、用途等の詳細が不明であるが、マツ属複維管束亜属が強度と保存性に優れていることから、井戸の部材などに利用された可能性も考えられる。この点は、各資料の出土状況、形状、木取り等も合わせて検討したい。なお、SE103 は針葉樹の樹皮で、種類は不明であるが、外観の特徴からはスギやヒノキ等の薄い樹皮ではなく、マツ属等の硬く厚い樹皮と考えられる。

溝（SD106）の炭化材については、炭化した状態で遺構内から出土しており、何らかの火を伴う活動で火を受けて炭化したことが推定されるが、用途等の詳細は不明である。他の遺構出土材と同じマツ属複維管束亜属であり、本遺跡でマツ属複維管束亜属が多量に利用されていた一端を示す資料として注目される。

柱穴（SP1080）の炭化材は、ミカン割状で、柱材の一部の可能性がある。柱材とすれば、強度や保存性を考慮した木材利用と考えられる。

（４）下瑞光寺地区（１区）

①放射性炭素年代測定の結果

下瑞光寺地区（１区）の測定結果および暦年較正結果を第 31 表、第 111 図に示す。同位体効果の補正を実施した測定結果は、SI201 竪穴建物のカマド AMS 番号１が 1,480 ± 30yrBP、SE201 井戸 AMS 番号２が 420 ± 20yrBP、SK214 土坑 AMS 番号３が 390 ± 20yrBP、SK218 土坑 AMS 番号４が 1,220 ± 20yrBP、SK236 木炭焼成坑 AMS 番号５が 1,440 ± 30yrBP、SK237 土坑 AMS 番号６が 1,410 ± 30yrBP、SK241 土坑 AMS 番号７が 490 ± 20yrBP、SX208 性格不明遺構 AMS 番号８が 1,480 ± 20yrBP を示す。

また、測定誤差を２σで計算した暦年較正結果（確率１位）は、SI201 竪穴建物のカマド AMS 番号１が calAD 545 ～ 637、SE201 井戸 AMS 番号２が calAD 1,433 ～ 1,488、SK214 土坑 AMS 番号３が calAD 1,442 ～ 1,520、SK218 土坑 AMS 番号４が calAD 765 ～ 883、SK236 木炭焼成坑 AMS 番号５が calAD 573 ～ 651、SK237 土坑 AMS 番号６が calAD 599 ～ 660、SK241 土坑 AMS 番号７が calAD 1,411 ～ 1,444、SX208 性格不明遺構 AMS 番号８が calAD 544 ～ 634 である。

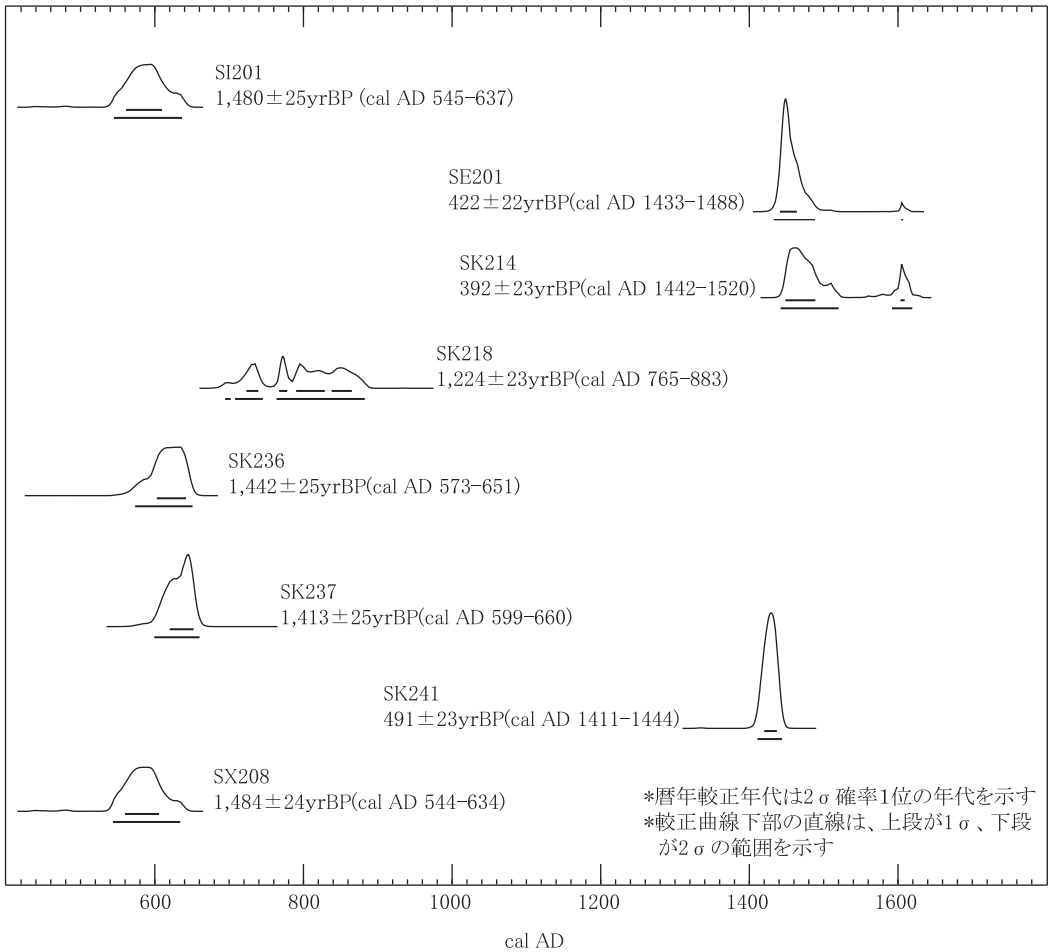
②放射性炭素年代測定の考察

放射性炭素年代測定を実施した木材・炭化材が出土した遺構は、SI201 竪穴建物が古墳時代後

第 31 表　下瑞光寺地区（１区）の放射性炭素年代測定および暦年較正結果

AMS番号	遺構名	種類	年代所見	処理方法	測定年代 yrBP	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) yrBP	暦年較正結果 誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	Code No.
1	SI201 カマド	炭化材	古墳後期	AAA	1,490±20	-25.73±0.55	1,480±30	σ	cal AD 561 - cal AD 610	cal BP 1,389 - 1,340	1.000	IAAA-161529
							(1,480±25)	2σ	cal AD 545 - cal AD 637	cal BP 1,405 - 1,313	1.000	
2	SE201	生木	中世	AAA	460±20	-27.40±0.37	420±20	σ	cal AD 1,441 - cal AD 1,464	cal BP 509 - 486	1.000	IAAA-161530
							(422±22)	2σ	cal AD 1,433 - cal AD 1,488	cal BP 517 - 462	0.994	
									cal AD 1,604 - cal AD 1,607	cal BP 346 - 343	0.006	
3	SK214	炭化材	中世	AAA	400±20	-25.69±0.47	390±20	σ	cal AD 1,448 - cal AD 1,489	cal BP 502 - 461	0.907	IAAA-161531
							(392±23)		cal AD 1,603 - cal AD 1,609	cal BP 347 - 341	0.093	
								2σ	cal AD 1,442 - cal AD 1,520	cal BP 508 - 430	0.834	
									cal AD 1,592 - cal AD 1,619	cal BP 358 - 331	0.166	
4	SK218	炭化材	中世	AAA	1,260±20	-27.02±0.50	1,220±20	σ	cal AD 723 - cal AD 739	cal BP 1,227 - 1,211	0.184	IAAA-161632
							(1,224±23)		cal AD 767 - cal AD 778	cal BP 1,183 - 1,172	0.150	
									cal AD 790 - cal AD 829	cal BP 1,160 - 1,121	0.383	
									cal AD 838 - cal AD 865	cal BP 1,112 - 1,085	0.283	
								2σ	cal AD 695 - cal AD 702	cal BP 1,255 - 1,248	0.017	
									cal AD 708 - cal AD 745	cal BP 1,242 - 1,205	0.211	
									cal AD 765 - cal AD 883	cal BP 1,185 - 1,067	0.772	
5	SK236	炭化材	古代	AAA	1,470±20	-26.46±0.49	1,440±30	σ	cal AD 603 - cal AD 642	cal BP 1,347 - 1,308	1.000	IAAA-161533
							(1,442±25)	2σ	cal AD 573 - cal AD 651	cal BP 1,377 - 1,299	1.000	
6	SK237	炭化材	古代	AaA	1,450±20	-27.47±0.59	1,410±30	σ	cal AD 620 - cal AD 652	cal BP 1,330 - 1,298	1.000	IAAA-161534
							(1,413±25)	2σ	cal AD 599 - cal AD 660	cal BP 1,351 - 1,290	1.000	
7	SK241	生木	中世	AAA	530±20	-27.09±0.36	490±20	σ	cal AD 1,420 - cal AD 1,437	cal BP 530 - 513	1.000	IAAA-161535
							(491±23)	2σ	cal AD 1,411 - cal AD 1,444	cal BP 539 - 506	1.000	
8	SX208	炭化材	古代	AAA	1,530±20	-27.69±0.44	1,480±20	σ	cal AD 560 - cal AD 606	cal BP 1,390 - 1,344	1.000	IAAA-161536
							(1,484±24)	2σ	cal AD 544 - cal AD 634	cal BP 1,406 - 1,316	1.000	

1)処理方法のAAAは、酸処理ーアルカリ処理ー酸処理を示す。アルカリ濃度が1Mに達しなかった場合はAaAと表記している。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1（Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第 111 図　下瑞光寺地区（１区）における暦年較正結果の比較

期、SK236 木炭焼成坑、SK237 土坑、SX208 性格不明遺構が古代、SE201 井戸、SK214・SK218 土坑、SK241 土坑は中世とされる。

SI201 竪穴建物のカマドから出土した炭化材は芯持材で、樹皮は残っていないものの、状況から小径木と考えられることから、得られた年代値は燃料材として利用された年代を示している可能性が高い。年代測定および暦年較正結果は、6 世紀後半～ 7 世紀前半頃を示しており、考古年代とも整合的である。

SK236 木炭焼成坑は、SI201 住居を切って構築されており、SI201 より後世の遺構であることが確認されている。年代測定および暦年較正の結果をみると、６～７世紀の年代範囲を示し、SI201 とほぼ同時期か若干新しい年代を示しており、調査成果と同調的である。炭化材は、板目状を呈しており、樹皮が残っていないことから、年輪の古木効果により、実際の伐採・使用年代よりも古い時期を示している可能性がある。樹種は二次林の構成種であるクリに同定され、樹皮が残っていないことを考慮しても、古木効果で大幅に古い年代を示しているとは考えにくい。そのため、SK236 は SI201 が廃絶後、それほど時間を置かずに構築された遺構の可能性がある。その他、SK218 土坑が８～９世紀、SK237 土坑・SX208 性格不明土坑が６～７世紀の年代を示している。

中世の遺構の年代測定結果をみると、SE201 井戸・SK214 土坑・SK241 土坑が 15 ～ 16 世紀、を示している。

15 ～ 16 世紀代を示した遺構のうち、SK214 土坑の炭化材は樹皮が残っており、最外年輪を含む 7 年分を測定している。測定結果は、年代所見である中世の範囲にあり、所見とも整合的である。一方、SE201 井戸と SK241 土坑は、試料に漆が塗られており、漆器容器の一部と考えられる。全体の木取りと採取位置の詳細が不明であるが、漆器容器は製作過程で白太（辺材）を切除することも多い。また、最外年輪が高台や口縁部等、壊れやすい位置になることが多い。これらの点から、測定結果は実際の伐採・使用年代と若干の開きが生じている可能性がある。

SE201 井戸と SK241 井戸の暦年代は、中世の範囲にあり、調査所見とも整合的であるが、実際の使用年代は得られた値よりも若干新しい可能性がある。

③樹種同定の結果

樹種同定結果を第 32 表に示す。木材・炭化材は、広葉樹４分類群（クリ・モクレン属・ツバキ属近似種・モチノキ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 15 細胞高。

・モクレン属（Magnolia） モクレン科

散孔材で、道管は単独または２～４個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～ 40 細胞高。

・ツバキ属近似種（cf. Camellia） ツバキ科

散孔材であるが、保存状態が悪く道管配列の詳細は不明である。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対

列～階段状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高で、結晶細胞が認められる。結晶細胞が認められることからツバキ属の可能性があるが、道管配列が観察できないために近似種としている。

・モチノキ属（Ilex）　モチノキ科

散孔材で、道管は単独または２～６個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～５細胞幅、１～40細胞高。

④樹種同定の考察

木材・炭化材が出土した遺構は、SI201が古墳時代後期、SK236・SK237土坑、SX208性格不明遺構が古代、SE201井戸、SK214・SK218・SK241土坑、が中世とされる。これらの木材・炭化材は、広葉樹４種類に同定された。各種類の材質等についてみると、クリは二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。モクレン属は、二次林、河畔・渓谷等に生育する落葉高木で、木材は軽軟な部類に入り、強度と保存性は低い。ツバキ属（近似種）は、暖温帯性常緑広葉樹林中に生育する常緑小高木で、木材は重硬・緻密で強度が高い。モチノキ属は、常緑性と落葉性があり、低木から高木まで含まれる。木材は比較的重硬・緻密で強度が高い。

時期別・遺構別にみると、古墳時代後期のSI201竪穴建物のカマドから出土した炭化材がツバキ属近似種に同定された。カマドから出土している状況や、芯持材で比較的小径木と考えられることから、炭化材は燃料材の可能性がある。ツバキ属は、沿海地の林内に普通に見られる種類であり、周囲に生育していた樹木を燃料材として利用した可能性がある。

古代とされるSK236木炭焼成坑は、古墳時代後期のSI201竪穴建物を切って構築されている。炭化材は木炭焼成時の燃料材あるいは焼成された木炭の一部と考えられる。炭化材は、クリに同定され、比較的強度の高い木材が利用されている。なお、クリを焼成すると、柔らかくて燃焼性の高い木炭になり、民俗事例ではマツ炭と共に鍛冶燃料材に使用される（岸本・杉浦，1980）。炭化材が焼成された木炭の一部とすれば、燃焼性の高い木炭を焼成していたことになる。当該期における周辺地域での鉄造りの状況等も含めた検討が望まれる。

中世の井戸SE201と土坑SK241から出土した木片は、漆塗膜が認められることから漆器と考えられるが、器種等の詳細は不明である。SE201井戸出土漆器がクリ、SK241土坑出土漆器がモクレン属に同定され、２種類の利用が確認できる。重硬な材質のクリと、軽軟な材質のモクレン属では、材質・加工性が全く異なるが、全国的には共に挽物の漆器容器に利用例が確認できる種類である（伊東・山田，2012）。今回の結果から、本遺跡でもクリやモクレン属の漆器容器が利用されていたことが推定される。

第32表　下瑞光寺地区（１区）の樹種同定結果

番号	遺構名	遺構の性格	器種等	年代所見	状態	木取り	種類	備考
樹種1	SI201 カマド	竪穴建物		古墳後期	炭化材	芯持材	ツバキ属近似種	保存悪い
樹種2	SE201	井戸	漆器	中世	生木	破片	クリ	漆塗
樹種3	SK214	土坑		中世	炭化材	ミカン割状	モチノキ属	
AMS4	SK218	土坑		中世	炭化材	破片	クリ	
樹種4	SK236	木炭焼成坑		古代	炭化材	板目状	クリ	
樹種5	SK237	土坑		古代	炭化材	板目状	クリ	
樹種6	SK241	土坑	漆器	中世	生木	破片	モクレン属	漆塗
AMS8	SX208	性格不明遺構		古代	炭化材	角棒状	クリ	

古代・中世の土坑から出土した炭化材は、SK214 土坑がモチノキ属、SK237 土坑がクリであり、遺構によって樹種が異なるが、共に強度の高い木材を利用している点では共通する。樹種の違いが目的・用途の違いを反映している可能性もあるが。この点については遺構内での種類構成、遺構の形態別の比較等が必要である。

（５）下瑞光寺地区（２区）

①放射性炭素年代測定の結果

下瑞光寺地区（２区）の測定結果および暦年較正結果を第 33 表、第 112 図に示す。同位体効果の補正を実施した測定結果は、SK302 土坑 AMS 番号１が 670 ± 20yrBP、SK304 土坑 AMS 番号２が 480 ± 20yrBP、SK305 土坑 AMS 番号３が 500 ± 20yrBP、SE304 井戸 AMS 番号４が 360 ± 20yrBP、SE302 井戸 AMS 番号５が 650 ± 20yrBP、SK336 土坑 AMS 番号６が 350 ± 20yrBP、SK337 土坑 AMS 番号７が 1,340 ± 20yrBP、SK343 土坑 AMS 番号８が 670 ± 20yrBP、土器集中範囲① AMS 番号９が 530 ± 20yrBP、土器集中範囲② AMS 番号 10 が 480 ± 20yrBP を示す。

また、測定誤差を 2 σで計算した暦年較正結果(確率１位)は、SK302 土坑 AMS 番号１が calAD 1,277 ～ 1,312、SK304 土坑 AMS 番号２が calAD 1,414 ～ 1,445、SK305 土坑 AMS 番号３が calAD 1,409 ～ 1,442、SE304 井戸 AMS 番号４が calAD 1,554 ～ 1,633、SE302 井戸 AMS 番号５が calAD 1,349 ～ 1,391、SK336 土坑 AMS 番号６が calAD 1,544 ～ 1,634、SK337 土坑 AMS 番号７が calAD 646 ～ 691、SK343 土坑 AMS 番号８が calAD 1,279 ～ 1,313、土器集中範囲① AMS 番号９が calAD 1,395 ～ 1,436、土器集中範囲② AMS 番号 10 が calAD 1,413 ～ 1,446 である。

②放射性炭素年代測定の考察

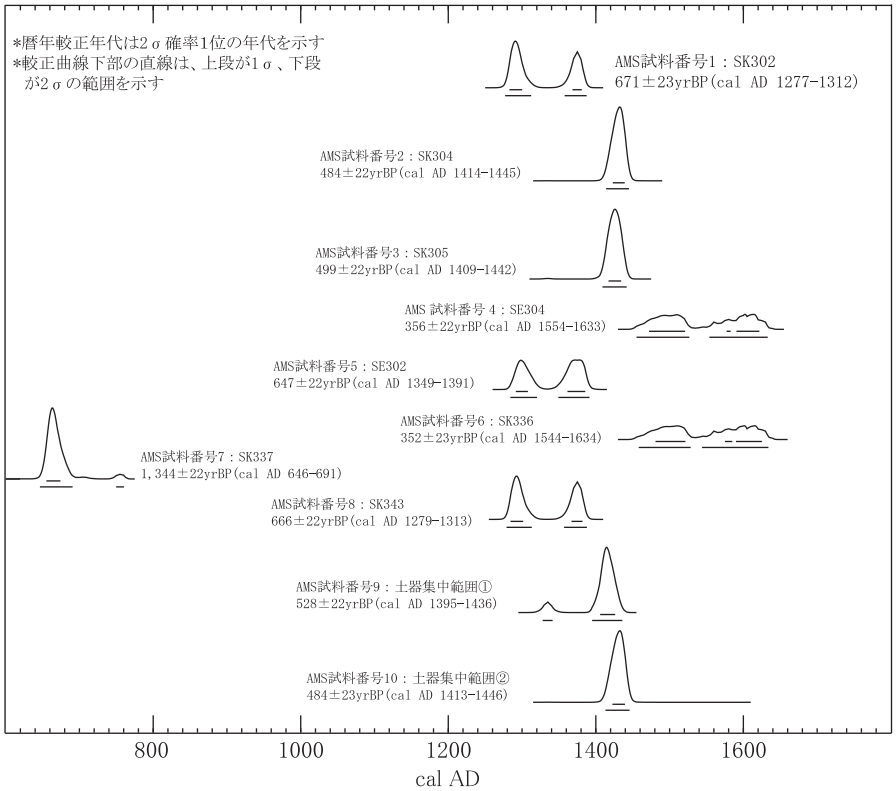
放射性炭素年代測定を実施した遺構および土器集中範囲の考古年代は、SK337 土坑が古代、その他は全て中世と考えられている。上記した年代測定結果をみると、SK337 土坑以外の年代値は、概ね中世の範囲に収まるが、SK302・SK343 土坑が 13 世紀後半～ 14 世紀初頭、SE302 井戸が 14 世紀後半、SK304 土坑・SK305 土坑・土器集中範囲①と土器集中範囲②が 14 世紀末～ 15 世紀前半、SE304 井戸・SK336 土坑が 16 世紀中葉～ 17 世紀前葉を示しており、年代値に差が生じていることが認識される。この差は、調査した遺構の時期差を反映している可能性があり、そうだとすると複数の時期の遺構が混在していることになる。ただし、調査対象の炭片はいずれも樹皮が残っておらず、炭質物が塊状になった試料もあるなど、測定結果の評価にあたっては、古木効果などを考慮して、下限年代として認識しておく必要がある。

一方、SK337 土坑の炭化材は 7 世紀中葉～後葉を示しており、上記の遺構とは明らかに異なる年代値を示している。測定に用いた炭化材はクリの破片で、樹皮が残っていないことから、年輪の古木効果で実際よりも古い値を示している可能性があるが、それを考慮しても古い年代を示している。これは、SK337 土坑が上記の中世の遺構よりも古い時期に構築された遺構である可能性、遺構内に取り込まれている炭片が古い時期の炭化材片の再堆積である可能性などが考えられる。この点については、遺構埋土の状況や成因に基づく炭片のタフォノミーを踏まえた検討が課題である。

第 33 表　下瑞光寺地区（２区）の放射性炭素年代測定および暦年較正結果

AMS番号	遺構名	種類	年代所見	処理方法	測定年代 yrBP	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) yrBP	暦年較正結果					Code No.
								誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比		
1	SK302	炭質物	中世	AaA	720±20	-27.67±0.31	670±20 (671±23)	σ	cal AD 1,283 - cal AD 1,300	cal BP 667 - 650	0.645		IAAA-161537
									cal AD 1,368 - cal AD 1,381	cal BP 582 - 569	0.355		
								2σ	cal AD 1,277 - cal AD 1,312	cal BP 673 - 638	0.590		
									cal AD 1,358 - cal AD 1,388	cal BP 592 - 562	0.410		
2	SK304	炭化材	中世	AAA	500±20	-26.22±0.37	480±20 (484±22)	σ	cal AD 1,423 - cal AD 1,439	cal BP 527 - 511	1.000		IAAA-161538
								2σ	cal AD 1,414 - cal AD 1,445	cal BP 536 - 505	1.000		
3	SK305	炭化材	中世	AAA	540±20	-27.31±0.37	500±20 (499±22)	σ	cal AD 1,417 - cal AD 1,434	cal BP 533 - 516	1.000		IAAA-161539
								2σ	cal AD 1,409 - cal AD 1,442	cal BP 541 - 508	1.000		
4	SE304	炭化物	中世	AaA	350±20	-24.80±0.25	360±20 (356±22)	σ	cal AD 1,472 - cal AD 1,521	cal BP 478 - 429	0.579		IAAA-161540
									cal AD 1,577 - cal AD 1,583	cal BP 373 - 367	0.044		
									cal AD 1,591 - cal AD 1,622	cal BP 359 - 328	0.377		
								2σ	cal AD 1,455 - cal AD 1,527	cal BP 495 - 423	0.497		
									cal AD 1,554 - cal AD 1,633	cal BP 396 - 317	0.508		
5	SE302	炭化物	中世	AaA	670±20	-26.27±0.30	650±20 (647±22)	σ	cal AD 1,292 - cal AD 1,308	cal BP 658 - 642	0.386		IAAA-161541
									cal AD 1,362 - cal AD 1,386	cal BP 588 - 564	0.614		
								2σ	cal AD 1,284 - cal AD 1,320	cal BP 666 - 630	0.432		
									cal AD 1,349 - cal AD 1,391	cal BP 601 - 559	0.568		
6	SK336	炭化材	中世	AAA	410±20	-28.31±0.51	350±20 (352±23)	σ	cal AD 1,481 - cal AD 1,521	cal BP 469 - 429	0.495		IAAA-161542
									cal AD 1,575 - cal AD 1,585	cal BP 375 - 365	0.090		
									cal AD 1,590 - cal AD 1,625	cal BP 360 - 325	0.416		
								2σ	cal AD 1,458 - cal AD 1,529	cal BP 492 - 421	0.458		
									cal AD 1,544 - cal AD 1,634	cal BP 406 - 316	0.542		
7	SK337	炭化材	古代	AAA	1,390±20	-27.86±0.43	1,340±20 (1,344±22)	σ	cal AD 655 - cal AD 674	cal BP 1,295 - 1,276	1.000		IAAA-161543
								2σ	cal AD 646 - cal AD 691	cal BP 1,304 - 1,259	0.971		
									cal AD 750 - cal AD 760	cal BP 1,200 - 1,190	0.029		
8	SK343	炭化材	中世	AAA	680±20	-25.87±0.38	670±20 (666±22)	σ	cal AD 1,284 - cal AD 1,302	cal BP 666 - 648	0.573		IAAA-161544
									cal AD 1,367 - cal AD 1,383	cal BP 583 - 567	0.427		
								2σ	cal AD 1,279 - cal AD 1,313	cal BP 671 - 637	0.549		
									cal AD 1,357 - cal AD 1,388	cal BP 593 - 562	0.451		
9	土器集中範囲①	炭化材	中世	AaA	540±20	-25.79±0.38	530±20 (528±22)	σ	cal AD 1,406 - cal AD 1,426	cal BP 544 - 524	1.000		IAAA-161545
								2σ	cal AD 1,328 - cal AD 1,341	cal BP 622 - 609	0.074		
									cal AD 1,395 - cal AD 1,436	cal BP 555 - 514	0.926		
10	土器集中範囲②	炭化材	中世	AAA	510±20	-26.79±0.43	480±20 (484±23)	σ	cal AD 1,423 - cal AD 1,440	cal BP 527 - 510	1.000		IAAA-161546
								2σ	cal AD 1,413 - cal AD 1,446	cal BP 537 - 504	1.000		

1)処理方法のAAAは、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。アルカリ濃度が1Mに達しなかった場合はAaAと表記している。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1 (Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第 112 図　下瑞光寺地区（２区）における暦年較正結果の比較

③樹種同定の結果

樹種同定結果を第34表に示す。木材・炭化材は、広葉樹３分類群（ヤマモモ・コナラ属アカガシ亜属・クリ）とイネ科タケ亜科に同定された。樹種同定番号１は微細な炭質物が塊状に固まったものであり、炭化材ではないため、不明とした。また、樹種同定番号７は、繊維の痕跡が確認でき、元は炭化材であったと考えられるが、保存状態が極めて悪く、断面で組織配列が全く観察できないため、種類不明である。同定された各分類群のうち、先述したクリ以外の解剖学的特徴等を記す

・ヤマモモ（Myrica rubra Sieb. et Zucc.） ヤマモモ科ヤマモモ属

散孔材で、道管は単独または２～４個が複して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は、階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～30細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis） ブナ科

放射孔材で、道管は単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

原生木部の小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

④樹種同定の考察

調査遺構から出土した木材・炭化材は、上記したようにヤマモモ、コナラ属アカガシ亜属、クリ、イネ科タケ亜科の合計４種類に同定された。各種類の材質等についてみると、常緑広葉樹のヤマモモは比較的重硬・緻密で強度が高い材質、暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成種となる常緑高木となるアカガシ亜属は、重硬で強度が高い材質、クリは先述したように重硬で強度と耐朽性が高い材質、タケ亜科は比較的靭性があり、強度や耐水性が高い材質を有する。

上記したように各遺構の木材・炭化材の年代値は一様でなく年代差が生じている。得られた年代値と樹種の関係を見ると、７世紀代を示す結果が得られたSK337土坑の炭化材はクリ、13～14世紀を示す年代値が得られたSK343土坑の炭化材はヤマモモ、15世紀代を示す結果が得られたSK304土坑・SK305土坑・土器集中範囲②の炭化材はアカガシ亜属、16～17世紀を示す年代が得られたSK336土坑の炭化材はタケ亜科と、点数は少ないものの、年代値別に種類が異なっている傾向がうかがえる。この傾向が普遍的であるか否かは、調査した遺構内の全ての炭化材の種類構成を明らかにするなど、資料の蓄積をもって検証していく必要があり、調査地域における時期別の木材利用の変化や周辺植生の変化を把握する上で有効な課題と認識される。

第34表　下瑞光寺地区（２区）の樹種同定結果

番号	遺構名	遺構の性格	年代所見	状態	木取り	種類
樹種1	SK302	土坑	中世	炭質物	―	不明（微細な炭化物塊）
樹種2	SK304	土坑	中世	炭化材	分割状	コナラ属アカガシ亜属
樹種3	SK305	土坑	中世	炭化材	分割状	コナラ属アカガシ亜属
樹種4	SK336	土坑	中世	炭化材	破片	イネ科タケ亜科
樹種5	SK337	土坑	古代	炭化材	破片	クリ
樹種6	SK343	土坑	中世	炭化材	分割状	ヤマモモ
樹種7	土器集中範囲①	遺物包含層	中世	炭化材	破片	不明（組織観察不可）
樹種8	土器集中範囲②	遺物包含層	中世	炭化材	柾目状	コナラ属アカガシ亜属

また同定された樹種の生態性をみると、ヤマモモが暖地の沿岸域に生育する常緑高木、アカガシ亜属は常緑広葉樹林の主要構成要素となる常緑高木である。クリは先述したように二次林の代表的な樹種であり、イネ科タケ亜科も開けた場所に分布する種類が多い。中世の頃の調査区周辺の植生については不明な点が多いが、本遺跡が位置する沿岸部にはヤマモモやアカガシ亜属などの常緑広葉樹が分布する領域や、クリなどが分布する二次林などの領域が存在した可能性が示唆される。

３　下瑞光寺地区（２区）の土壌理化学分析

（１）試料

中世の土坑墓 ST301 における遺体埋納の有無に関する情報を得ることを目的として、遺構埋土下層から採取した２点（試料番号１・２）、遺構外から採取された対象試料２点（試料番号３・４）について、全炭素、リン酸・カルシウム含量を測定する。

（２）分析方法

全炭素は乾式燃焼法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法でそれぞれ行った（土壌標準分析・測定法委員会 , 1986、土壌環境分析法編集委員会 , 1997）。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して２mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で４時間乾燥し、分析試料水分を求める。

全炭素

粉砕土試料を 0.1000 g ～ 2.0000 g を石英ボートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製 CN コーダーである。分析値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量を（T-C 乾土 %）求める。

リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO ３）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO ４）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P ２０５）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P ２０５mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

（３）結果及び考察

土壌化学分析結果を第 35 表に示す。

全炭素は ST301 遺構で 0.18-0.23%、遺構外で 0.10-0.18% とやや差異があり、ST301 遺構で多い。全リン酸は、ST301 遺構で 1.22-1.75mg/g、遺構外で 0.37-0.65mg/g と差異がある。全カルシウムは

第 35 表　土壌理化学分析結果

遺構名	番号	層位	土色		土性	全炭素 (%)	全ﾘﾝ酸 (mg/g)	全ｶﾙｼｳﾑ (mg/g)	備考
ST301	1	下層	2.5Y6/2	灰黄	HC	0.23	1.75	1.72	土坑墓
	2	下層	2.5Y5/3	黄褐	HC	0.18	1.22	1.39	土坑墓
ST301 遺構外	3		2.5Y6/3	にぶい黄	SL	0.18	0.65	1.22	自然層
	4		2.5Y6/4	にぶい黄	SL	0.10	0.37	0.82	自然層

1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

2)土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジー学会編，1997）の野外土性による。

SL･･･砂壌土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）

HC･･･重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

ST301 遺構で 1.39-1.72mg/g、遺構外で 0.82-1.22mg/g と差異があり、リン酸と同様の傾向である。全炭素量は僅かな差であるが、全リン酸は炭素の差異に比べ明瞭である。

一般的に炭素含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、その炭素の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、炭素含量に大きく影響を与えているとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen,1983;Bolt･Bruggenwert,1980；川崎ほか，1991；天野ほか，1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g（川崎ほか，1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では 6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1 ～ 50mg/g（藤貫，1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回の調査では、全リン酸・全カルシウムの天然賦存量を超える特徴的な値は検出されなかった。よって、ST301 遺構が土坑墓として利用された可能性を積極的に支持することは難しい。ただし、上述したように、成分が流亡した可能性が挙げられ、さらに、全炭素量とリン酸量の関係を検討すると、土坑墓と考えられる ST301 遺構では、自然層とされる遺構外試料に比べ、リン酸が多く保持されていると捉えられる。また、カルシウムも同様の傾向であることから、遺体埋納等の人為的な影響が考えられる。

今後、多項目の実施により再検証・総合解析することが望まれる。

引用文献

林　昭三,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編）,2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社,449p.

岸本定吉・杉浦銀治,1980, 日曜炭やき師入門．総合科学出版,250p.

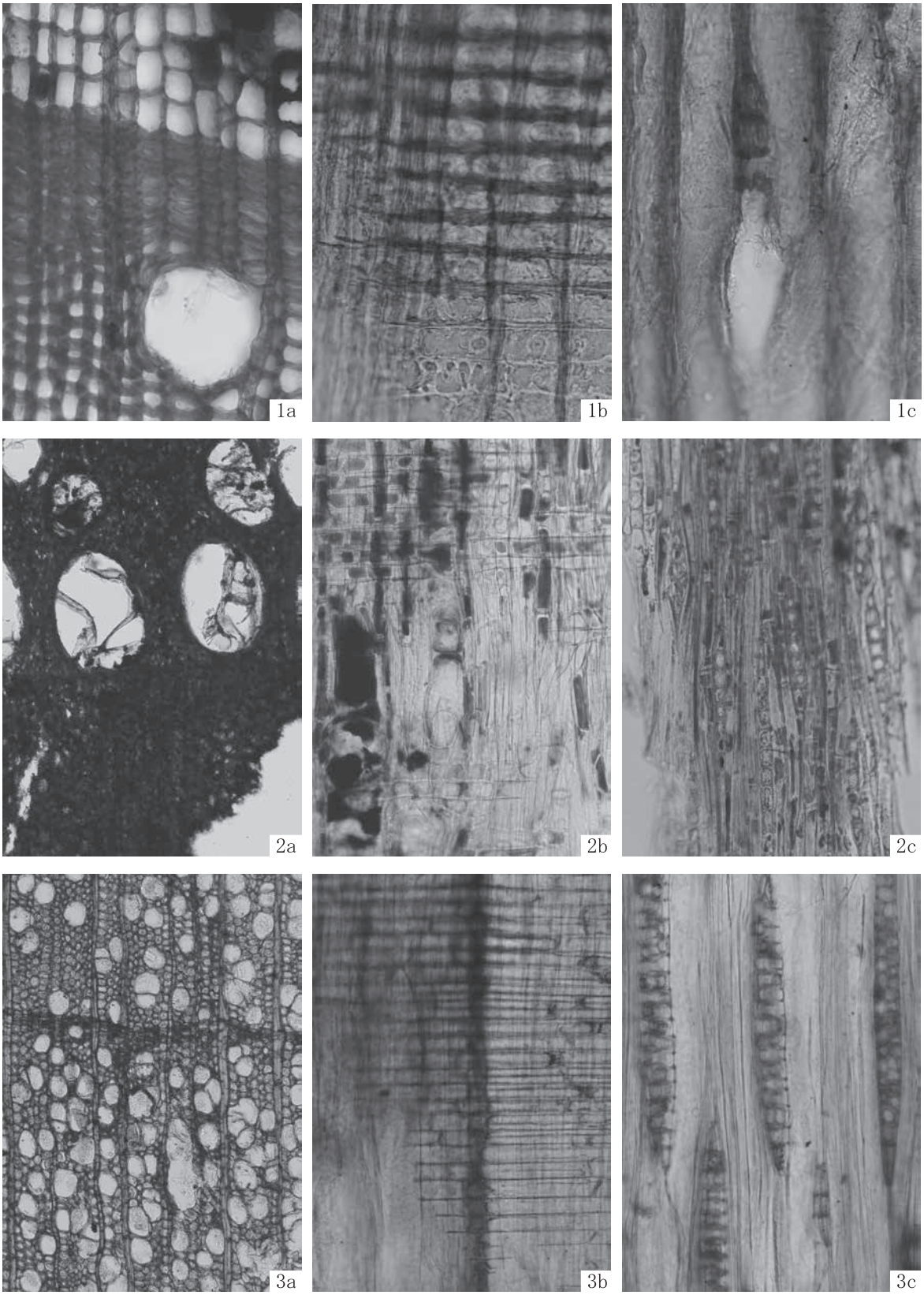
パリノ・サーヴェイ株式会社,2014, 下津令遺跡発掘調査に伴う放射性炭素年代測定．「下津令遺跡1（沖ノ下1地区・西尾崎1地区)」, 山口県埋蔵文化財センター調査報告第86集, 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター・防府市教育委員会,53-56.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫,1982, 図説木材組織．地球社,176p.

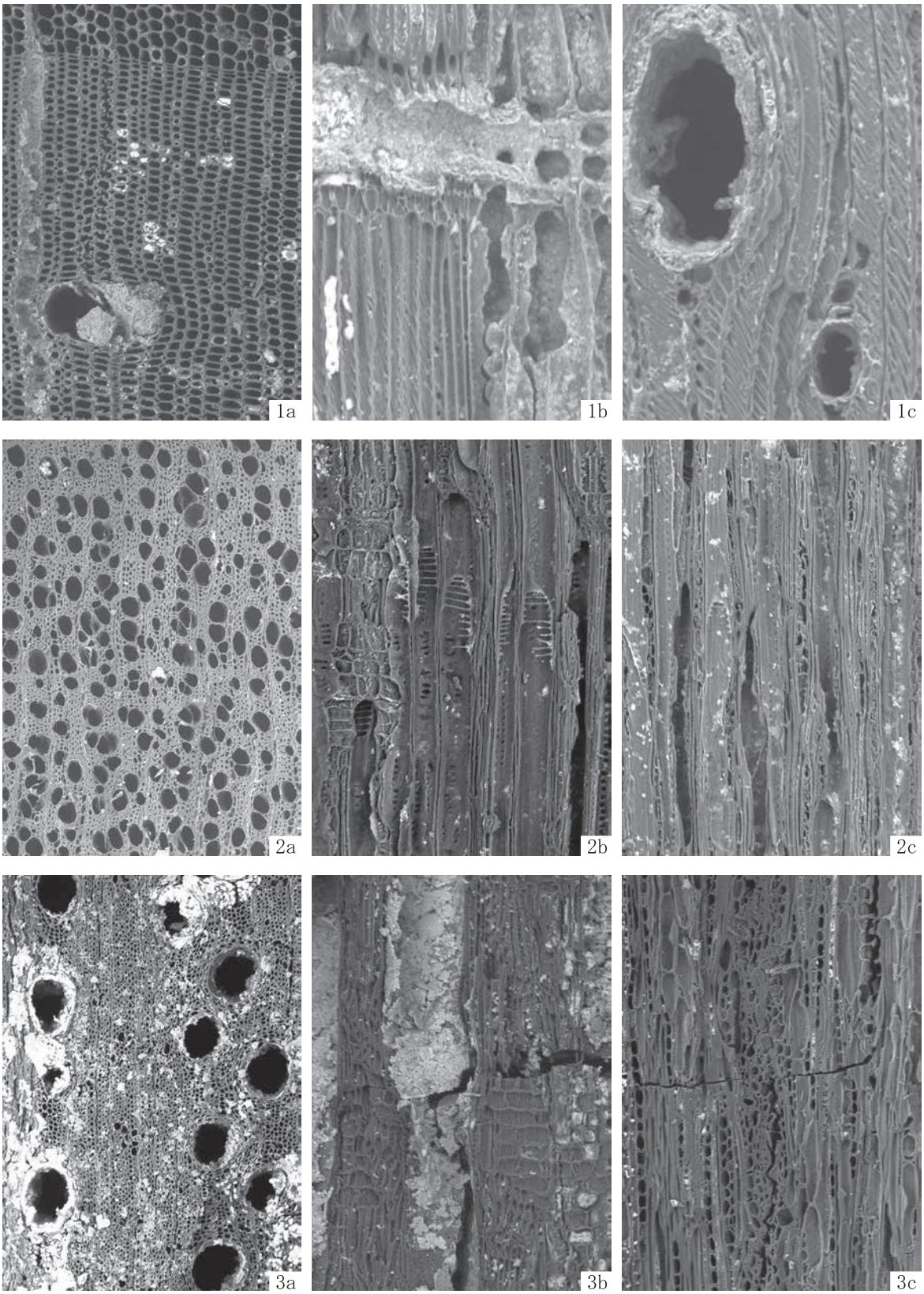
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998, 広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. マツ属複維管束亜属(沖ノ下2地区;SE101)
2. クリ(下瑞光寺地区(1区);SE201)
3. モクレン属(下瑞光寺地区(1区);SK241)
　a：木口，b：柾目，c：板目

100μm:2-3a
100μm:1a, 2-3b, c
100μm:1b, c

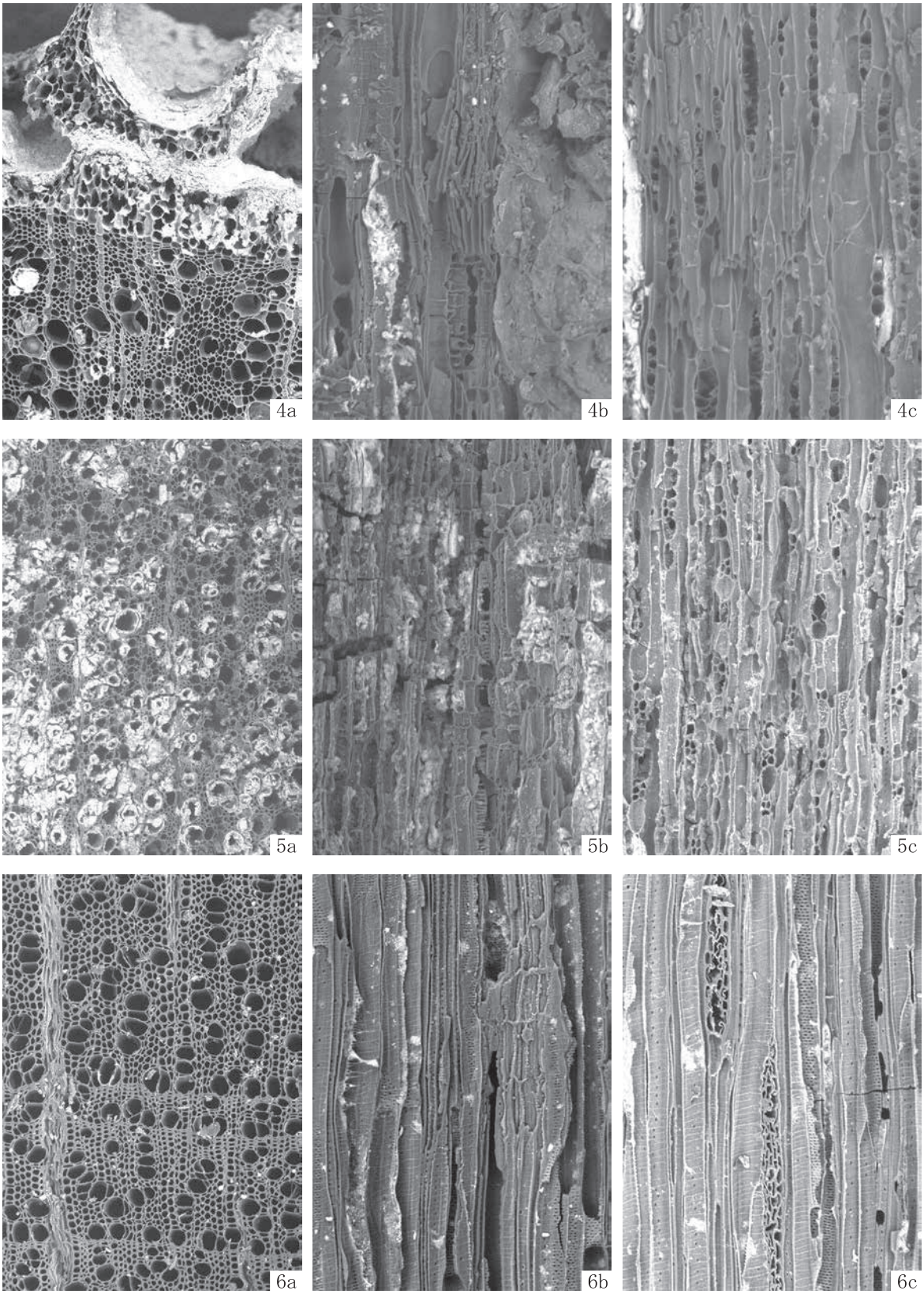
第 113 図　木材図版



1. マツ属複維管束亜属(沖ノ下2地区;SK111)
2. ヤマモモ(下瑞光寺地区(2区);SK343)
3. コナラ属アカガシ亜属(下瑞光寺地区(2区);SK304)
　a：木口，b：柾目，c：板目

100μm:2-3a
100μm:1a, 2-3b, c
100μm:1b, c

第114図　炭木材図版（1）



4. クリ(下瑞光寺地区(1区);SK236)
5. ツバキ属近似種(下瑞光寺地区(1区);SI201カマド)
6. モチノキ属(下瑞光寺地区(1区);SK214)
　a：木口，b：柾目，c：板目

100μm:a
100μm:b, c

第115図　炭木材図版（2）

Ⅵ　総　括

１　はじめに

平成 28 年度の下津令遺跡では、沖ノ下２地区（745 ㎡）、下瑞光寺地区（5,817 ㎡）の２地区、合計 6,562 ㎡の調査を実施した。その結果、古墳時代から中世に至る多くの遺構・遺物を検出した。

下津令遺跡のこれまで４か年におよぶ計 10 地区の調査では、古墳時代の竪穴建物を中心とする集落、奈良・平安時代から中世の掘立柱建物で構成された集落などを確認した。下津令遺跡の範囲は広く、亀尾山から延びる丘陵上とその谷部や沖積地をも含み、平成 27 年度の西柿ノ木地区の調査では沖積地においても室町時代の集落が確認され、広い範囲で各時代にわたる土地利用痕跡が明らかとなった。ここでは、今年度調査の沖ノ下２地区・下瑞光寺地区の調査成果をまとめ、４か年の下津令遺跡の調査によって得られた成果について述べてみたい。

２　沖ノ下２地区

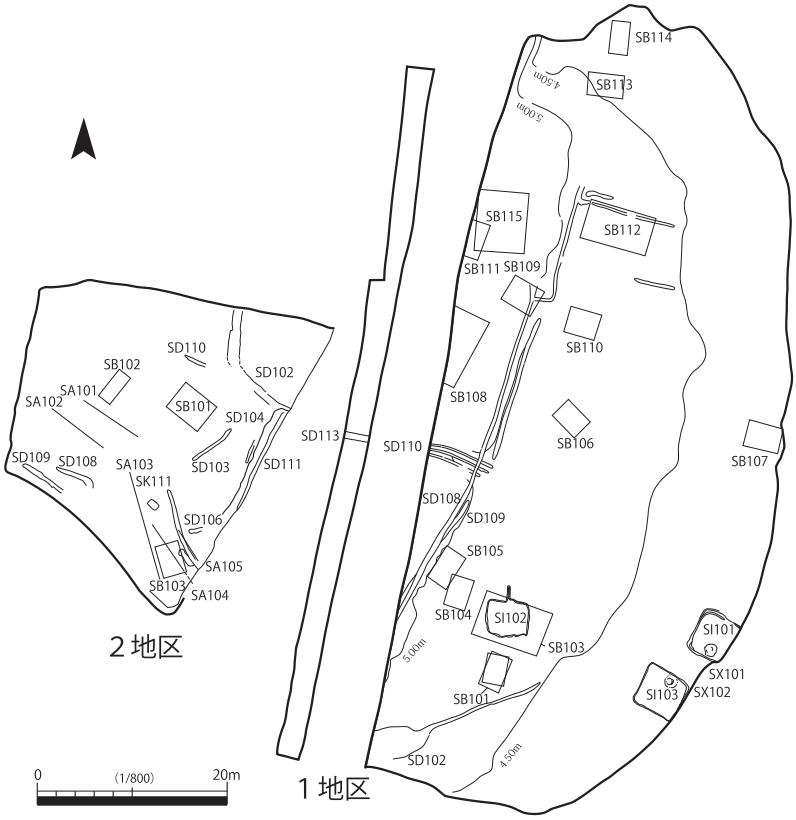
沖ノ下２地区は標高約 5.5 ～ 6.0 ｍの丘陵上、東側先端部に位置する。検出された遺構は古墳時代の土坑１基、中世の掘立柱建物３棟、柵列５列、井戸４基、土坑 12 基、溝 11 条などを確認した（第 116 図）。出土遺物は須恵器、瓦質土器、陶器、木製品などである。検出された遺構・遺物から室町時代後半に集落が営まれたと推定される。掘立柱建物３棟とそれに隣接する柵列については、それぞれがほぼ同じ軸向きであり、同時に存続していたものと想定される。

木炭焼成坑と考えられる土坑（SK111）については、放射性炭素年代測定（AMS 法）では５～６世紀の暦年較正結果が得られており、沖ノ下１地区で調査された竪穴建物（SI102）とほぼ同年代と推定される。樹種はマツ属であり、高い火力が得られることから民俗事例では鍛冶に利用されることもあり、鍛冶燃料材としての木炭焼成坑であった可能性が高い。

東側に隣接する平成 25 年度に調査された沖ノ下１地区は、標高約 4.4 ～ 5.6 ｍとさらに一段低く、丘陵の縁辺部である。沖ノ下１地区では、古墳時代前・中期の竪穴建物３棟、中世後半の掘立柱建物を中心とする集落が確認されている（第 116 図）。沖ノ下２地区の調査により、中世集落についてはその範囲がさらに西側へと広がることが明らかとなった。その中でも、掘立柱建物は沖ノ下１地区で 15 棟、２地区で３棟と合計 18 棟が確認され、高い分布密度を示す。その他、掘立柱建物と柵列や溝の軸向きについては、異なる主軸方位のものが混在することから、中世から近世初頭にかけての幅広い時期にわたって集落の変遷があったと想定される。溝については、現段階では何らかの区画、あるいは道路と考えておきたい。

古墳時代と中世の間の奈良・平安時代の遺構が確認されていない点について考えてみたい。北側の西尾崎地区では古代の遺構・遺物が確認されており、沖ノ下地区は標高４～６ｍと下津令遺跡内では最も標高が低い点から、平安海進期の海水準上昇の影響があった可能性がある。沖ノ下地区は、古墳時代には安定した海岸沿いの住環境であり、海辺の立地で漁労活動などに適していたものと推定される。その後、平安海進期の海水準の上昇変動により、海岸線が変化したため海岸線により近くなり、

居住に適さなくなった可能性がある。その後、中世以降に海水準が再び安定し、陸化するとともに土地利用が再開されたと想定される。平安海進期の海水準上昇期には、より内陸の西尾崎地区などに生活の拠点が移ったものと考えられる。



第116図　沖ノ下１・２地区主要遺構配置図

３　下瑞光寺地区

下瑞光寺地区は、標高約7.3～11.7ｍの丘陵上に位置し、調査区が東西に分かれることから、西側を１区、東側を２区としている（第117図）。検出された遺構は、竪穴建物１棟、掘立柱建物６棟、柵列１列、井戸８基、墓２基、土坑77基、溝30条、性格不明遺構９基、柱穴である（第117図）。調査区が東西に分かれ、その間に谷地形が存在し、１区南東側には傾斜地の一部に遺物包含層が堆積して埋没谷を形成しており、さらに２区内北側には小規模な埋没谷があり、調査区の立地は東の沖積低地へ向かう丘陵端部にあたる。そのため、調査区は全体的に西から東へと緩やかに標高が下がる傾斜地形となる。

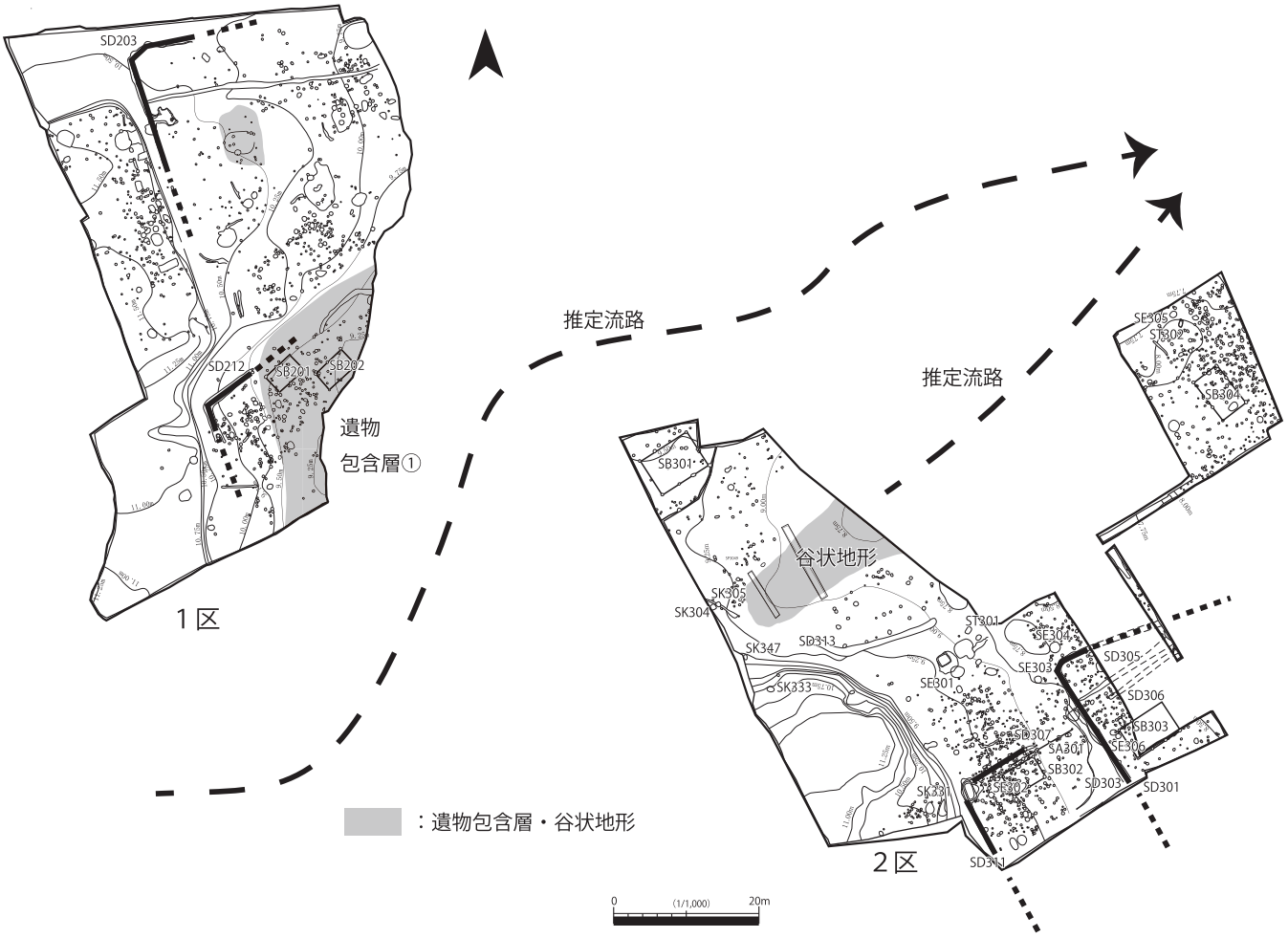
１区では、古墳時代後半の竪穴建物と土坑、中世の掘立柱建物、井戸、土坑、溝などが検出された。２区では古代の井戸、中世の掘立柱建物、柵列、墓、井戸、土坑、溝などが検出された。

１区の竪穴建物は一辺約4.6ｍの方形で４本主柱穴と北カマドをもち、標高約10.2mに位置している。出土遺物と放射性炭素年代測定（AMS法）により、古墳時代後期、６世紀後半～７世紀前半の年代が推定される。平成27年度に調査された、北側に隣接する西柿ノ木地区において古墳時代の

竪穴建物３棟（SI201 ～ 203）が検出されており、時期は３世紀後半（SI201）・5 世紀（SI202）・6 世紀後半（SI203）と幅広く、古墳時代前期から後期を通して、当地区を含めた丘陵上から沖積低地に至る広い範囲に集落が展開していたと考えられる。下瑞光寺地区の竪穴建物（標高約 10.2m）と同時期の SI203 が検出された標高は約 8.0m とさらに低く、沖積低地上に建てられており、丘陵上から沖積低地に至る広い範囲を活動の場としていたことが明らかとなった。平成 26 年度に調査された南側の向条谷地区でも、５世紀前半と推定される竪穴建物が１棟調査されており、その床面の標高は約 6.8 ｍである。そのため、２区の調査範囲内では今回は古墳時代の遺構は検出されなかったが、集落の範囲内に含まれると推定される。隣接する西柿ノ木地区、向条谷地区の様相から、標高７～ 10m 前後の丘陵上から沖積低地に至る広い範囲に古墳時代の集落が形成されていたと考えられる。前述の沖ノ下１地区の竪穴建物の標高は約４～５m とさらに一段低い丘陵面となる。

平安時代の遺構として、２区南東部で１基の井戸（SE306）が検出された。平安時代の遺構はこの井戸１基のみで、土師器甕や須恵器杯などの平安時代の遺物が含まれる。南側に位置する向条谷地区（平成 26 年度調査）でも平安時代の炉や区画と考えられる溝が調査されており、古墳時代の集落立地と同様に、標高 10m 未満の地域に平安時代の集落が展開したと考えられる。

中世の遺構分布については、その遺構分布範囲は１・２区全域に及ぶ。両区の南西側に遺構が希



第 117 図　下瑞光寺地区遺構配置図

薄な地域が認められるが、水田利用のために後世に削平を受けた可能性が高い。また、１区においては、低地へ向かう斜面部分にも掘立柱建物を中心とした遺構が多く存在し、古墳時代には利用されてこなかった土地が利用されはじめる様子が確認できる。掘立柱建物や柱穴の分布をみると、１・２区ともに多いが、２区の南側と東側に建物とそれに付随すると考えられる柱穴が集中する。また、１区では掘立柱建物・井戸・溝・土坑が中心であったが、２区では特に南東部でそれら遺構の分布密度が増し、墓と推定される土坑など、その種類も増える。また、直線、あるいはＬ字状に屈曲する溝と、それらの建物・柵列などの遺構の軸向きが合うことから、区画溝内に建物やそれぞれ遺構が計画的に配置されていたと考えられる。

出土遺物は、両区とも土師器・瓦質土器を中心に 14 世紀後半から 16 世紀の遺物が多数出土した。１区では、南側の遺物包含層①に近い SP2251 から象嵌青磁（第 49 図　88）、遺物包含層からは茶臼、五輪塔の水輪、井戸（SE201）から木製品の漆器椀などが出土している。２区では、土坑（SK304 ・305）に一括廃棄された土師器皿や、SK336 の朝鮮陶器瓶（徳利）（第 90 図　132）、SK347 の茶壷（第 93 図　159・160）などが特徴的である。下瑞光寺地区の北側約 100m に下山ノ口遺跡が所在し、中世末から近世の積石基壇と、それをとりまく蔵骨器を主体とする墓群が調査され、多数の五輪塔が基壇の一部として出土している。下瑞光寺地区でも同様に五輪塔の水輪が出土していることから、調査区に隣接する西側に中世の墓域が形成されていたものと推定される。

下瑞光寺地区の字名である、「瑞光寺」について触れておきたい。『防長風土注進案』（山口県文書館 1964）には、楞厳寺（りょうごんじ）山の山頂にあった楞厳寺と同時期に廃寺になったと記載され、それは豊臣秀吉の九州進発の頃（九州平定と推定され、天正 14・15 年、1586・87 年）と伝えている。瑞光寺の位置についてのそれ以上の詳しい記載はみられず、大道地区のどこかに所在していたことしか明らかではない。しかし、字名に瑞光寺という地名が残されていることから、下瑞光寺地区の上手、調査区に近い山手（西側）に瑞光寺が所在していた可能性は非常に高いといえる。

今回出土した特徴的な遺物から、その所有者像を考えてみたい。象嵌青磁や朝鮮陶器瓶などの舶載陶磁、茶壷や茶臼といった威信財と考えられる遺物が出土しており、土師器の一括廃棄などもみられる。その時期は 14 世紀後半から 16 世紀と幅広く、所有者といった個人的な特定はできないので、所有者階層といった視点で考えてみたい。それらの舶載陶磁器を所有し、茶を嗜む階層としては、武士階層あるいは寺院勢力などが想定され、出土遺物からは一般の集落とは異なる集団の存在が考えられる。それら出土遺物の多くは遺物包含層に含まれていたものなど、山手（西側）から遺構の廃絶とともに流れ落ちてきたと想定されることから、現時点では調査区に近い西側丘陵上に有力者層の拠点が存在した可能性が指摘できる。

２区の南側には、山手（西側）へと上る坂道が現存する（第 118 図）。その先に瑞光寺があったとすると、２区を含めた瑞光寺へ至る道を中心とした、門前町屋的な空間の広がりを想定することも可能である。２区の南東側にさらに集落が広がっており、溝で区画された間口方向は、南や東の道路側と推定され、現代の地割りにほぼ等しい。今回調査した範囲には井戸や大形の方形土坑、土坑墓が存在することから考えても、２区南東部は溝で区画された敷地内の裏手にあたる可能性が高い。

４　下津令遺跡（平成 25 ～ 28 年度）の成果

4 か年におよぶ 10 か所の調査（第 36 表）により、下津令遺跡について明らかになったことをまとめてみたい。

遺跡は古墳時代から奈良・平安時代、中世から近世に至るまで断続的に営まれた集落遺跡であることが明らかとなった（第 118 図）。調査の総面積は約３万㎡を超える広さだが、面的な広がりをもった調査成果ではないために、集落範囲については、各時期ともに不明である。

各時期ごとの遺構分布をみると、古墳時代には下津令遺跡のほぼ全域に集落が展開するが、西尾崎地区や下瑞光寺地区（２区）では遺構が確認されていない。

次の古代、奈良・平安時代に至ると、最も標高が低く海岸沿いとなる南側の沖ノ下１・２地区では遺構がみられなくなるが、北側の地区の大半に集落が広がる。このことについては、前述の平安海進期の海水準の上昇変動が影響したものと考えられる。北側の毛無尾地区では、９世紀後半～ 10 世紀に位置づけられる京都系緑釉陶器や東海系灰釉陶器が遺物包含層から出土している。これらの陶器は役所や寺院、官人の居宅などで出土することが多く、毛無尾地区周辺に平安時代の有力者層が存在したことが推定される。

さらに、中世に至ると 10 か所の調査地区全域に集落が展開し、活発な活動をしていることがわかる。しかし、その詳細をみると鎌倉時代には、西尾崎１地区、向条谷地区で遺構がみられるが、その他の地区ではみられない。このことから、平安時代には沖ノ下１・２地区を除く北側全域に集落が展開していたが、鎌倉時代に至ると西尾崎１地区・向条谷地区を中心に集落が再編成され、室町時代には再び下津令遺跡全域に集落範囲が広がっていった変遷が考えられる。

このように各時期ごとに分布密度は異なり、集落の中心域は時期ごとに移りながらも、古墳時代

第 36 表　下津令遺跡各地区の存続期間

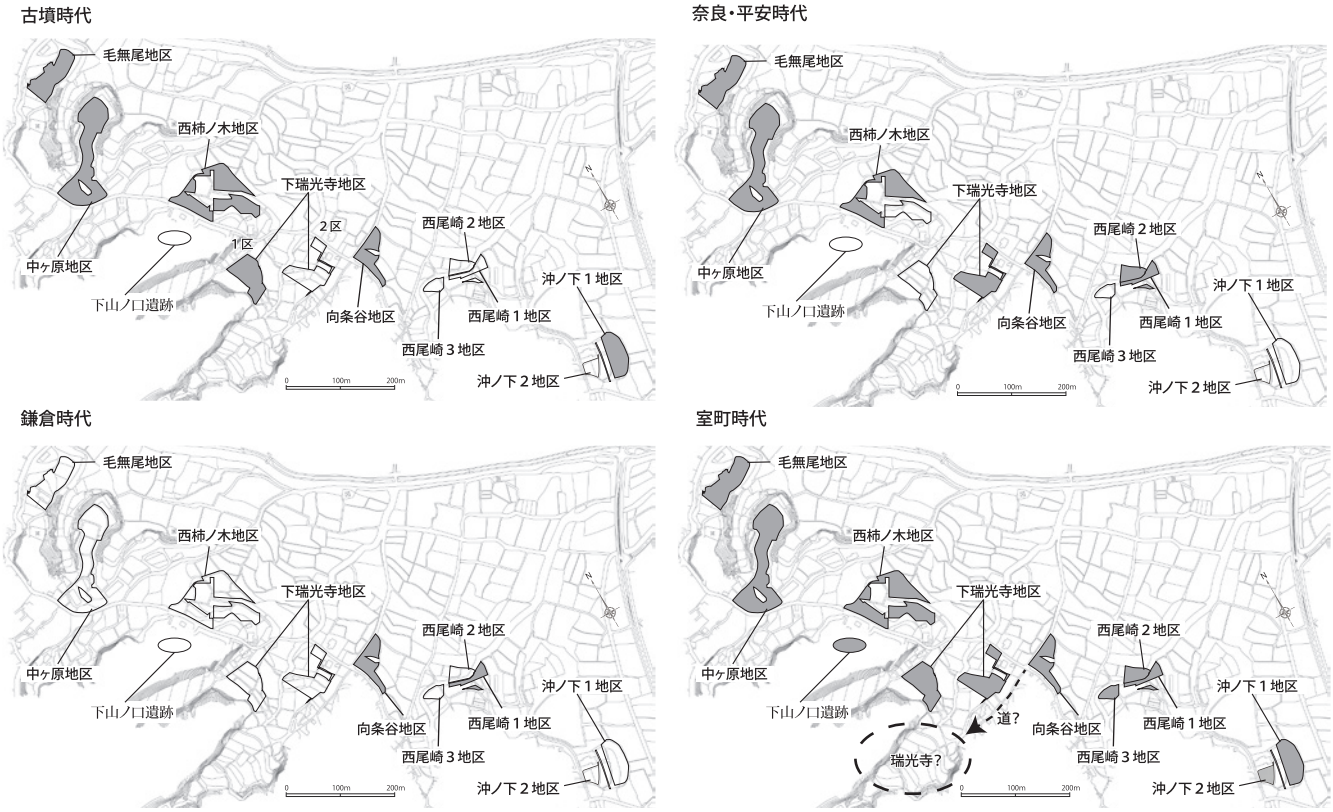
調査区	調査面積（㎡）	立　地	標　高（m）	時　代						
				古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山・江戸
沖ノ下１地区	2,812	丘陵上	4.4 ～ 5.6							
沖ノ下２地区	745	丘陵上	5.5 ～ 6.0							
西尾崎１地区	1,144	丘陵上	5.5 ～ 8.0							
西尾崎２・３地区	1,808	丘陵上	6.0 ～ 7.5							
向条谷地区	2,160	谷縁辺～丘陵上	5.7 ～ 7.3							
下瑞光寺地区	5,817	谷縁辺～丘陵上	7.3 ～ 11.7							
西柿ノ木地区	5,492	沖積地・丘陵上	8.0 ～ 14.0							
中ヶ原地区	7,513	丘陵上	15.7 ～ 24.3							
毛無尾地区	3,368	丘陵上	13.0 ～ 17.3							

以降の人々の生活が営まれていたことが想定される。古墳時代以前では、縄文時代の打製石斧や石鏃などの石器や、石器製作の際の剥片石器が多く出土し、中ヶ原地区では落とし穴と推定される遺構も検出されていることから、縄文時代は狩猟・漁労の場であったことが確認されているが、居住に関する遺構はみつかっていない。

古墳時代には、竪穴建物を中心に集落が形成されたことが明らかとなった。４か年・10か所の調査のうち６か所で13棟の竪穴建物が調査された（第37表）。その時期は古墳時代の前期から後期までと幅広いが、前・中・後期で大別すると、前期には沖ノ下１地区、西柿ノ木地区といった沖積低地に近い丘陵縁辺に立地し、中期に至ると向条谷地区、中ヶ原地区、毛無尾地区とその範囲が広がり、丘陵奥地の標高の高い地域へと進出する。しかし、後期には下瑞光寺地区、西柿ノ木地区へとその範囲は狭くなったようにみえる。これは、面的な調査ではないことに起因する可能性があり、現段階の傾向として捉えておきたい。

古代における下津令遺跡の特色として、前述の毛無尾地区の９世紀以降の施釉陶器・灰釉陶器の出土から、役人などの有力者層の存在が推定されるが、その他にも鉄・銅製品の鋳造の可能性もあげられる。西尾崎地区では奈良時代末から平安時代初頭にかけての炉跡が検出され、分析の結果銅製品の鋳造を行っていた可能性が指摘されている。さらに、西柿ノ木地区では平安時代後期と推定される炉跡と関連遺構群が検出されており、鉄製品の鋳造が行われた可能性が指摘されているなど、古代には銅・鉄製品の鋳造が行われていたことが明らかとなった。

鎌倉時代については、遺物は各地区全般から出土しているが、遺構については前述のように西尾崎



第118図　下津令遺跡の時期別遺構分布図

１地区、向条谷地区の狭い範囲に限定される。未調査区域に鎌倉時代の集落が存在する可能性があるが、平安時代と室町時代の集落変遷範囲はほぼ重なることから、その可能性は低いものと考えておきたい。

室町時代には、掘立柱建物を中心に、多くの遺構・遺物が検出される。これまで利用されてこなかった西柿ノ木地区の沖積低地なども含めて、大規模な土地利用の様相が明らかとなった。

「下津令」という地名は平安・鎌倉時代、南北朝期の文献にはみられないが、「令」と付くことから、公領である国衙領の系譜をひくものと考えられている（防府市史編纂委員会 2004）。応永９年（1402）に「吉敷郡下津令大海村」といった記載がみられることから、15 世紀には下津令という地名が成立していたと考えられる。その他にも、大内氏の所領となっていた下津令で塩の生産が行われ、大内盛見が塩を寄進したことなどが記録に残っている。今回の４か年にわたる発掘調査で明らかになりつつある室町時代の集落が、それらの時期に該当するものと想定される。

平安時代後期以降の下津令は、国衙領として、国衙に近い「津」、つまり港としての機能を持っていたと推定される。また、毛無尾地区で出土した緑釉・灰釉陶器などの出土遺物から、平安時代には有力者層が存在したことや、銅・鉄製品を製作していたことが明らかとなった。中世の集落規模や、製塩による経済活動などの様相から、有力者層が存在したと推定される都市的機能を備えた地域であったことが示された。

また、一連の室町時代の文献史料からは、下津令一帯が大内氏と関連の深い地域であったことも示されている。下津令遺跡で出土した遺構・遺物はそれらの平安時代以降の活動を示しており、調査成果によって、地域の歴史の一端を明らかにすることができたといえよう。

第 37 表　下津令遺跡で検出された古墳時代の竪穴建物一覧

調査区	遺構名	報告書記載時期	時期	前期	中期	後期	床面標高（m）	備考
沖ノ下１地区	SI101	前期	前期	■			3.80	４本主柱・屋内SX
	SI102	中期	中期		■		4.80	２本主柱・カマド
	SI103	前期	前期	■			4.10	４本主柱・屋内SX
沖ノ下２地区	－							未検出
西尾崎１地区	－							未検出
西尾崎２・３地区	－							未検出
向条谷地区	SI401	５世紀前半	中期		■		6.70	２本主柱
下瑞光寺地区	SI201	後期	後期			■	10.10	４本主柱・カマド
西柿ノ木地区	SI201	３世紀後半	前期	■			12.40	４本主柱
	SI202	５世紀後半	中期		■		12.60	２本主柱・カマド
	SI203	６世紀中～後半	後期			■	8.00	４本主柱・カマド
中ヶ原地区	SI601	５世紀前半	中期		■		18.30	４本主柱
	SI602	５世紀前半	中期		■		17.80	
	SI603	５世紀前半	中期		■		17.80	SI602より新
毛無尾地区	SI101	古墳時代	中期	■			12.80	SI102と同時期？
	SI102	前期末～中期	中期	■			13.30	２本主柱？

引用・参考文献

岩崎仁志 1999「足鍋再考」『陶塤』第 12 号（財）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター

北島大輔 2010「大内式の設定－中世山口における遺物編年の細分と再編－」『大内氏館跡XI』山口市教育委員会

公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター他 2014『下津令遺跡１』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 86 集

公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター他 2015『下津令遺跡２』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 90 集

公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター他 2016『下津令遺跡３』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 93 集

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園考古学クラブ

防府市教育委員会 2001『井上山経塚・下山ノ口遺跡発掘調査報告』防府市埋蔵文化財調査報告 0111

防府市史編纂委員会 2004『防府市史』通史Ｉ原始・古代・中世

防府市史編纂委員会 2000『防府市史』史料Ｉ

山口県文書館 1964『防長風土注進案』第 14 巻　小郡宰判

沖ノ下２地区図版

沖ノ下２地区遠景（南東上空から）

１　沖ノ下2地区遠景（北東上空から）

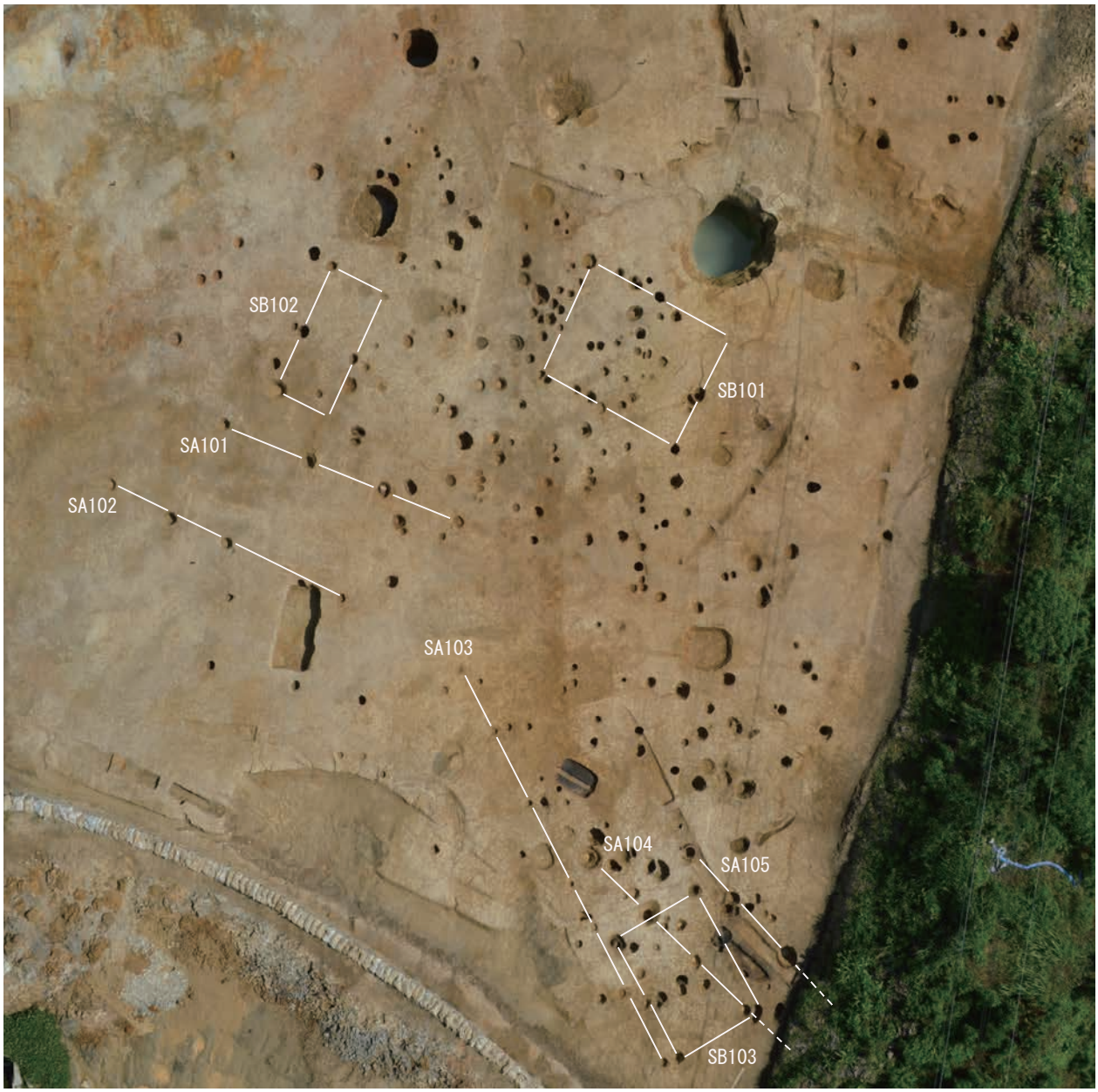
２　沖ノ下2地区全景（西上空から）

１　壁面①土層断面状況（東から）

２　壁面②土層断面状況（東から）

３　壁面③土層断面状況（南から）

４　壁面④土層断面状況（南から）



５　SB101 ～ 103、SA101 ～ 105 完掘状況（南上空から）

１　SE101 置石出土状況（南から）

２　SE102 掘込状況（南から）

３　SE103 土層断面状況（南から）

４　SE103 完掘状況（南から）

５　SK103 遺物・石出土状況（南から）

１　SK101 完掘状況（東から）

２　SK108 土層断面状況（北西から）

３　SK109 土層断面状況（西から）

４　SK111 土層断面状況（南西から）

５　SK111 炭層断面状況（南西から）

６　SK111 完掘状況（南西から）

７　SD102 土層断面・遺物出土状況（南から）

８　SD109 土層断面状況（南東から）

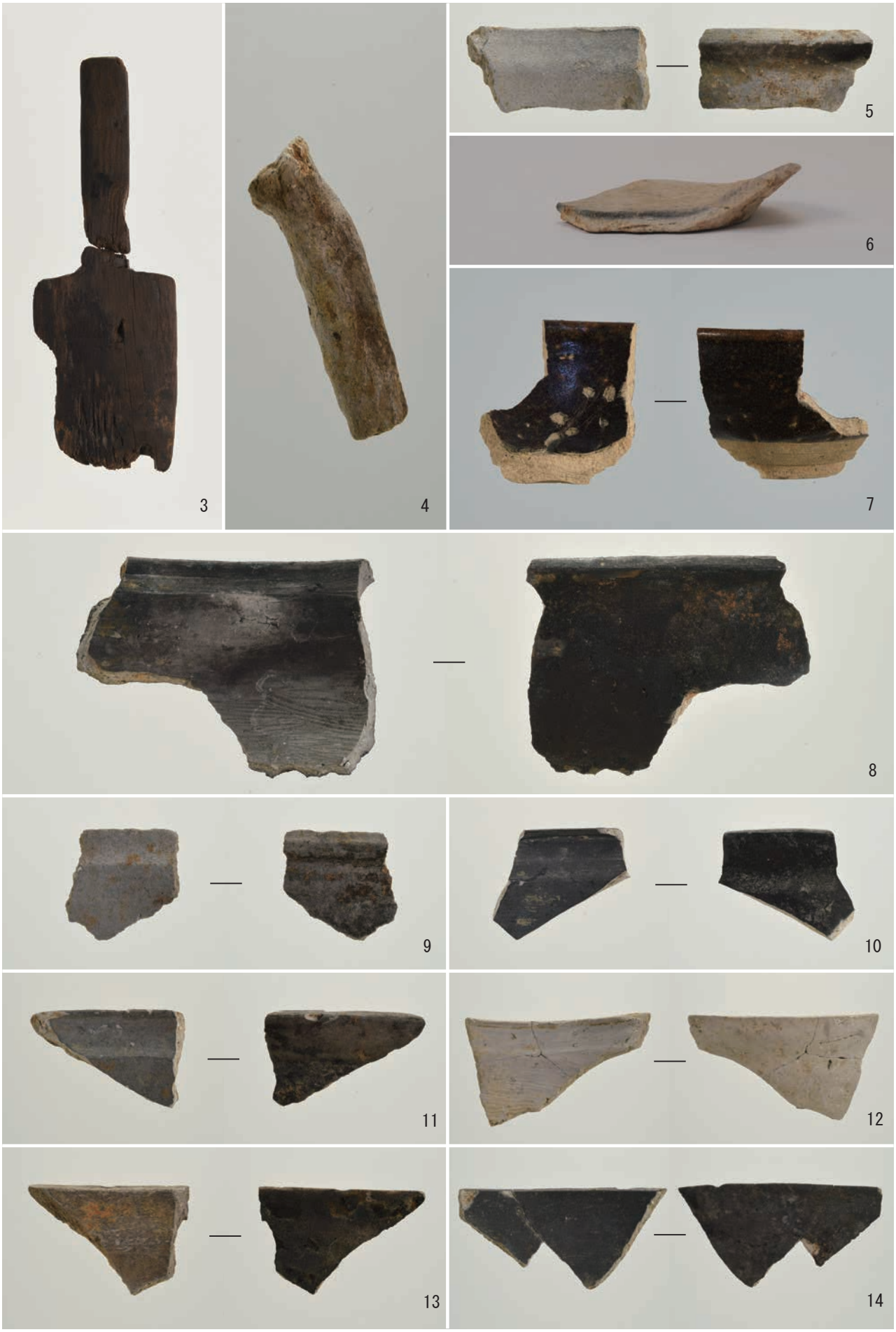
１　SP1014 遺物出土状況（西から）

２　SP1015 遺物出土状況（西から）

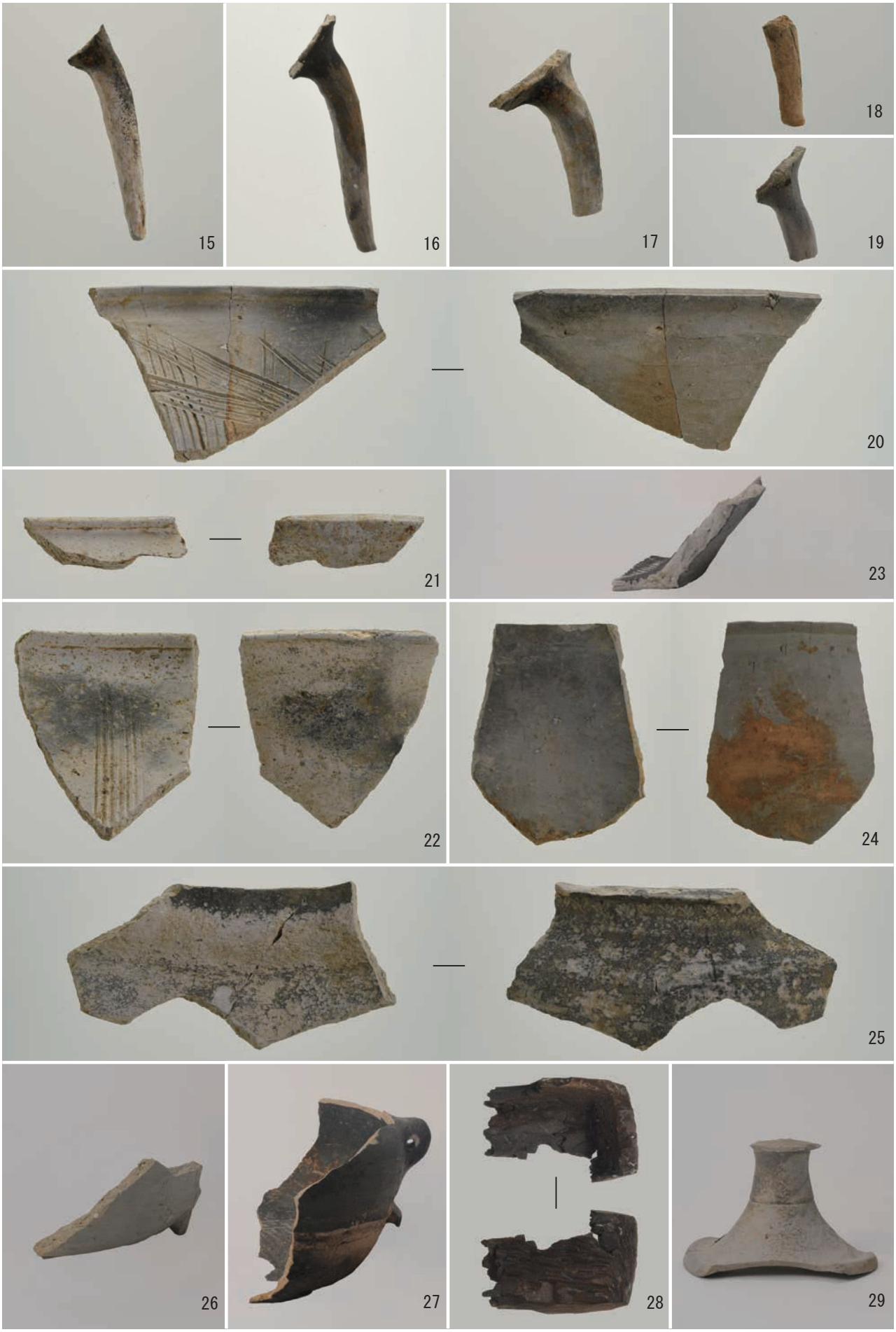
３　SP1069 土層断面状況（西から）

４　SP1070 遺物出土状況（南西から）

５　SP1071 遺物出土状況（東から）



沖ノ下2地区出土遺物（1）



沖ノ下2地区出土遺物（2）

沖ノ下2地区出土遺物（3）

下瑞光寺地区（１区）図版

下瑞光寺地区（1区）遠景（北東上空から）

１　下瑞光寺地区（1区）全景（東上空から）

２　下瑞光寺地区（1区）近景（東上空から）

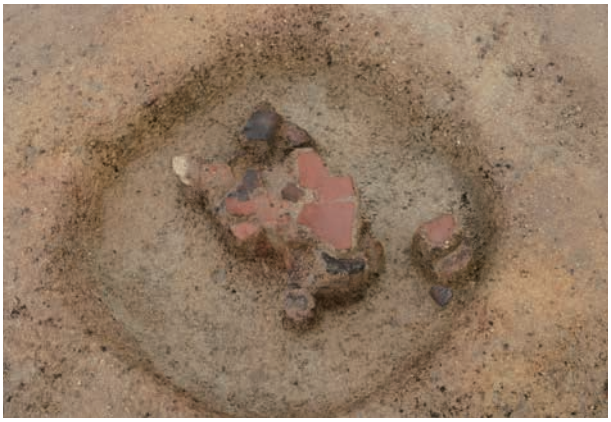
１　西壁面土層断面状況（東から）

２　SI201 カマド検出状況（南から）

３　SI201 検出状況（南から）

４　SK229 遺物出土状況（南から）

５　SP2237 遺物出土状況（南から）



１　SK221 遺物出土状況（東から）

２　SK230 遺物出土状況（北から）

３　SP2184 遺物出土状況（東から）

４　SP2204 遺物出土状況（南東から）

５　SP2239 遺物出土状況（東から）

1　SE201 完掘状況（南から）

2　SE202 掘込状況（南から）

3　SK202 遺物出土状況（北から）

4　SK202 遺物出土状況（南から）

5　SK203 遺物出土状況（北西から）

１　SK212 遺物出土状況（北から）

２　SK214、SX203 完掘状況（南から）

３　SK217 遺物出土状況（北から）

４　SK241 漆器椀出土状況（北から）

５　SK234 石塊出土状況（南から）

1　SD212 遺物出土状況（南西から）

2　SD212 遺物出土状況（北西から）

3　SD212 土層断面状況（北東から）

4　SP2084 遺物出土状況（西から）

5　SP2101 遺物出土状況（南西から）

1　SP2085 遺物出土状況（東から）

2　SP2022 遺物出土状況（東から）

3　SP2110 遺物出土状況（北西から）

4　SP2142 遺物出土状況（南西から）

5　SP2143 遺物出土状況（南から）

1　SP2168 遺物出土状況（南から）

2　SP2182 遺物出土状況（南から）

3　SP2183 遺物出土状況（北から）

4　SP2216 遺物出土状況（南から）

5　SP2265 遺物出土状況（南から）

1　SP2262 遺物出土状況（西から）

2　SX202 遺物出土状況（南東から）

１　SX204 遺物出土状況（東から）

２　SX205 遺物出土状況（北東から）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（1）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（2）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（3）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（4）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（5）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（6）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（7）

下瑞光寺地区（1区）出土遺物（8）

下瑞光寺地区（２区）図版

下瑞光寺地区（2区）遠景（北東上空から）

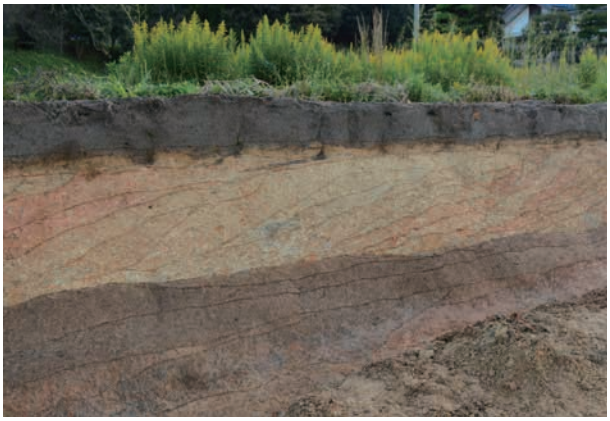
１　下瑞光寺地区（2区）全景（北東上空から）

２　下瑞光寺地区（2区）全景（東上空から）

１　下瑞光寺地区（2区）西側調査区近景（北東上空から）

２　下瑞光寺地区（2区）東側調査区近景（北東上空から）

１　西側調査区壁面①土層断面状況（西から）


２　西側調査区壁面①土層断面状況（東から）

３　西側調査区壁面②土層断面状況（南西から）

４　西側調査区壁面②土層断面状況（西から）

５　東側調査区壁面③土層断面状況（北から）

６　東側調査区壁面③土層断面状況（西から）

７　SE306 土層断面状況（南から）

８　SE306 完掘状況（南から）

1　SB301 完掘状況（西から）

2　SB302・303、SA301 完掘状況（北東上空から）

3　SB304 完掘状況（北東上空から）

1　SE302 遺物出土状況（南から）

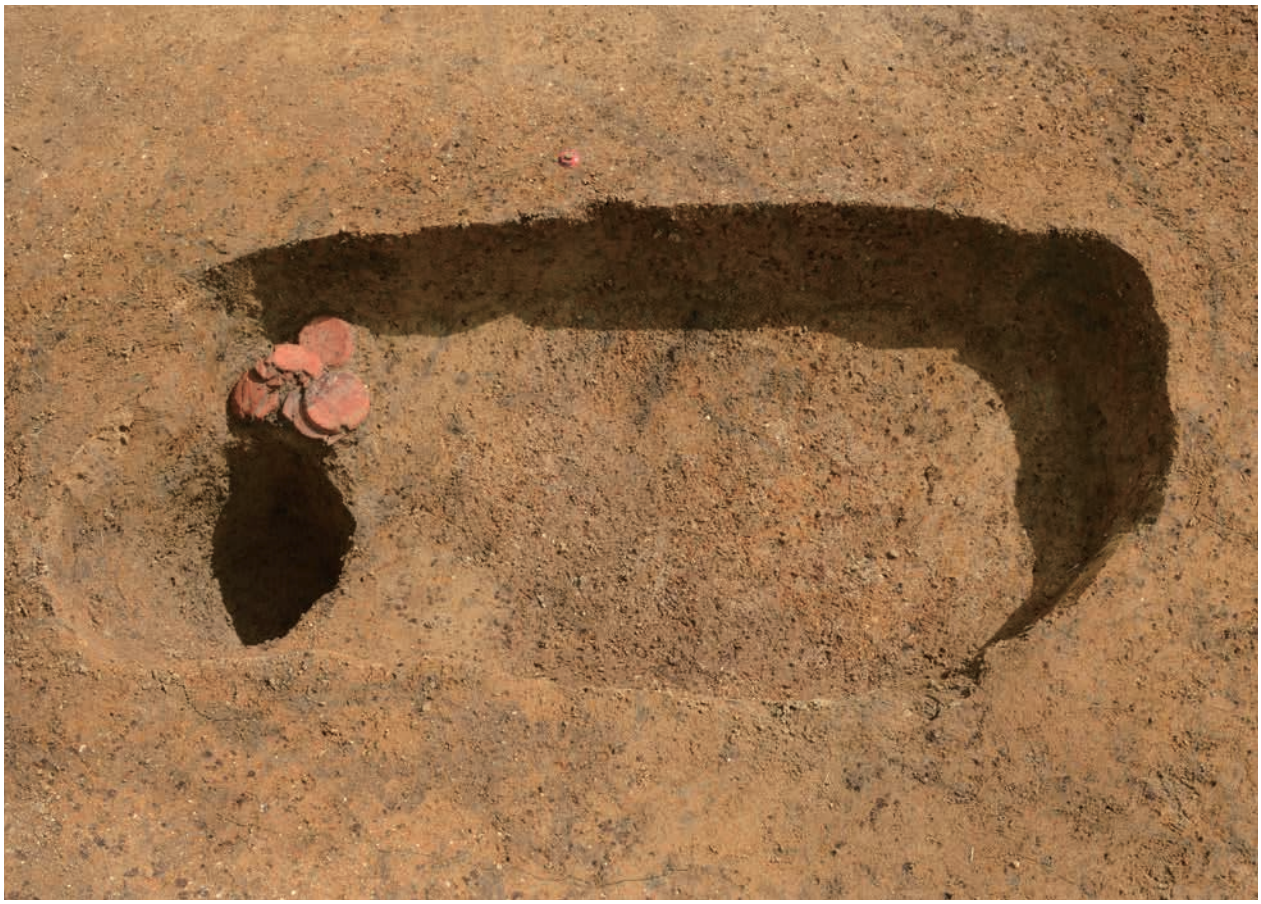
2　SE302 完掘状況（南から）

3　SE305 遺物出土状況（東から）

4　SE301 掘込状況（南西から）

5　SE304 遺物出土状況（南から）

1　ST301 遺物出土状況（東から）



2　ST302 遺物出土状況（西から）

1　SK304・305 遺物出土状況（南から）

2　SK304 遺物出土状況（東から）

3　SK305 土層断面・遺物出土状況（北西から）

4　SK305 遺物出土状況（東から）

5　SK305 遺物出土状況（北から）

1　SK301 土層断面状況（南から）

2　SK302 土層断面状況（南から）

3　SK303 土層断面状況（南から）

4　SK303 遺物出土状況（南から）

5　SK306 土層断面状況（南西から）

6　SK306 遺物出土状況（南西から）

7　SK313 土層断面状況（北から）

8　SK314 遺物出土状況（南から）

1　SK324 石塊出土状況（西から）

2　SK320 土層断面状況（西から）

3　SK325 土層断面状況（南東から）

4　SK329 土層断面状況（南東から）

5　SK331 土層断面状況（東から）

1　SK332 石塊・遺物出土状況（南から）

2　SK334 石塊・遺物出土状況（南から）

3　SK343 完掘状況（西から）

4　SK347 遺物出土状況（北から）

5　SK347 遺物出土状況（東から）

１　SK336 石塊・遺物出土状況（南から）

２　SK336 石塊・遺物出土状況（東から）

３　SK336 完掘状況（南から）

1　SD301・303 土層断面状況（東から）

2　SD303 土層断面状況（南東から）

3　SD301 遺物出土状況（東から）

4　SD301 遺物出土状況（南東から）

5　SD301 遺物出土状況（南から）

6　SD303 遺物出土状況（南から）

1　SD305・306 土層断面状況（西から）

2　SD307 土層断面状況（東から）

3　SD312 土層断面状況（東から）

4　SD313 土層断面状況（東から）

5　SP3014 遺物出土状況（東から）

6　SP3015 遺物出土状況（南西から）

7　SP3027 遺物出土状況（南東から）

1　SP3184 遺物出土状況（東から）

2　SP3184 遺物出土状況（北から）

3　SP3197 遺物出土状況（東から）

4　SP3250 遺物出土状況（南から）

5　SP3296 遺物出土状況（北から）

1　SP3367 遺物出土状況（南から）

2　SP3670 遺物出土状況（西から）

3　SP3600 遺物出土状況（北から）

4　SP3600 遺物出土状況（北から）

5　SP3530 遺物出土状況（南から）

１　谷状地形全景（東上空から）

２　谷状地形 TR301 土層断面状況（北東から）

３　谷状地形 TR301 土層断面状況（南東から）

４　谷状地形 TR302 土層断面状況（北東から）

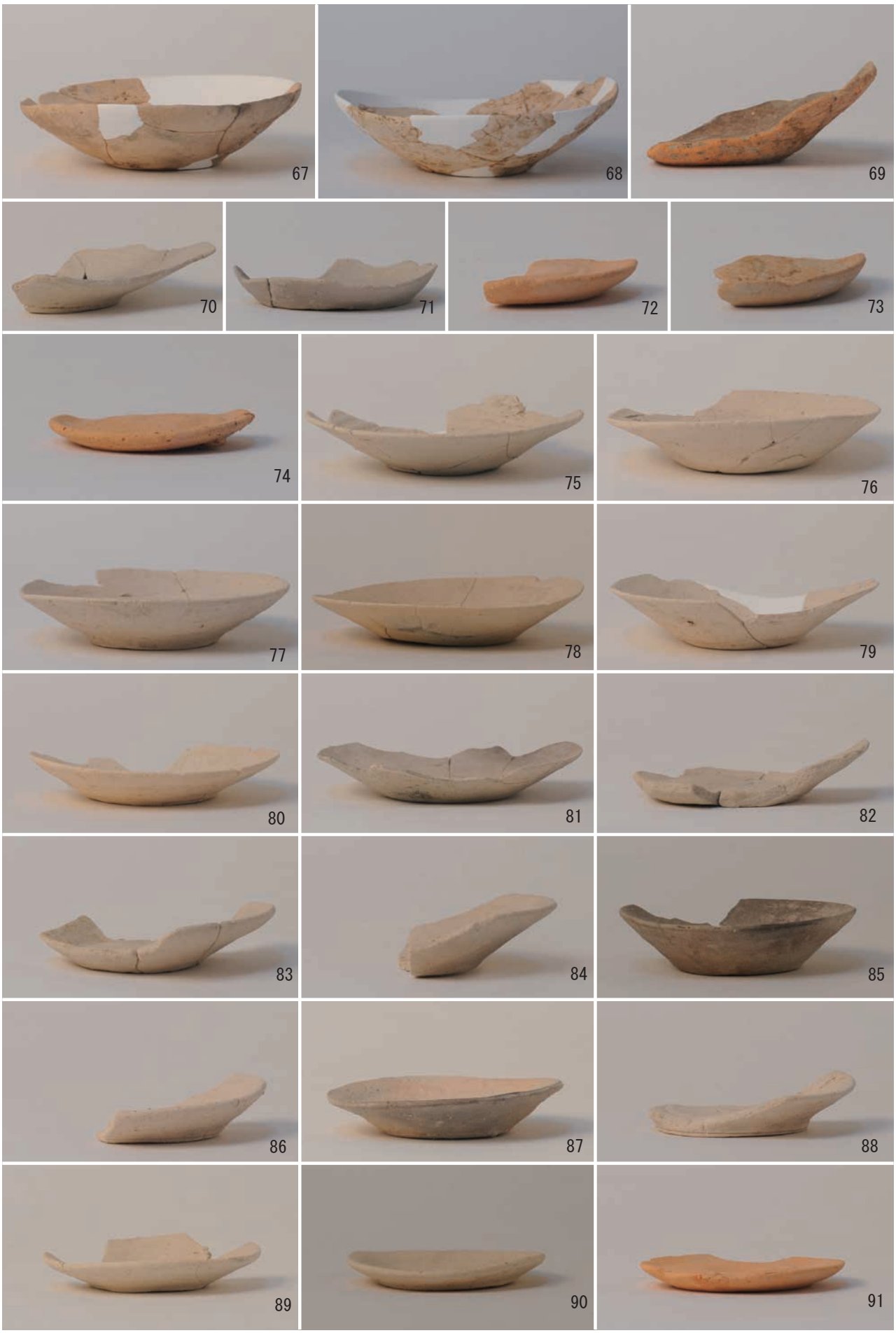
５　谷状地形 TR302 土層断面状況（南東から）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（1）

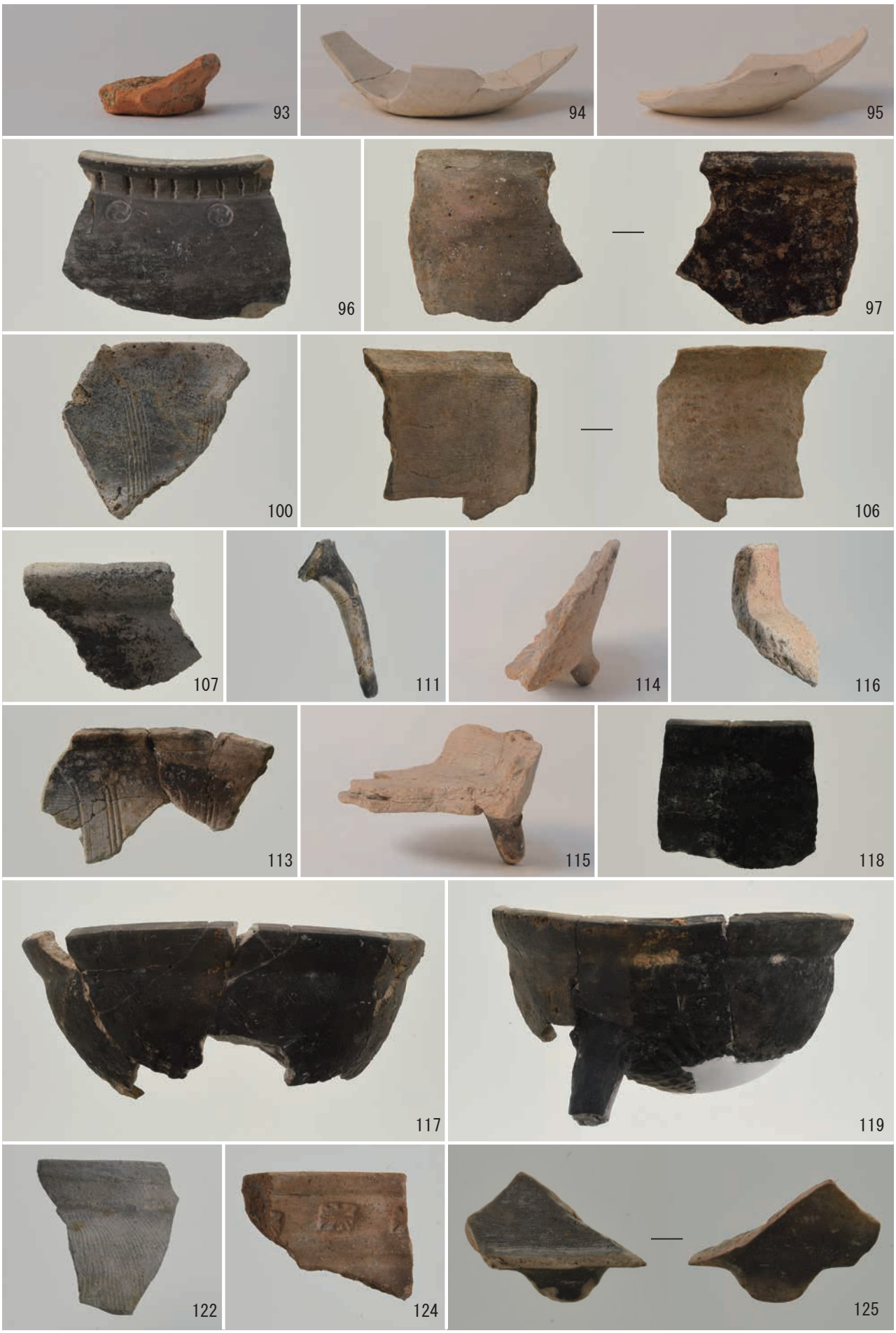
下瑞光寺地区（2区）出土遺物（2）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（3）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（4）



下瑞光寺地区（2区）出土遺物（5）



下瑞光寺地区（2区）出土遺物（6）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（7）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（8）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（9）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（10）

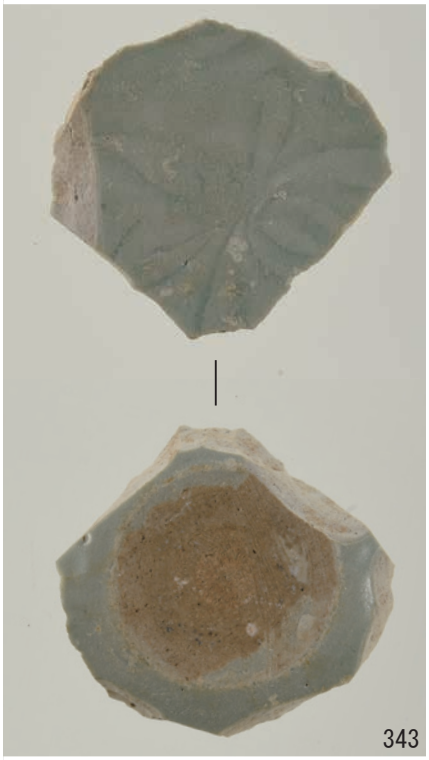
下瑞光寺地区（2区）出土遺物（11）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（12）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（13）

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（14）

342


343

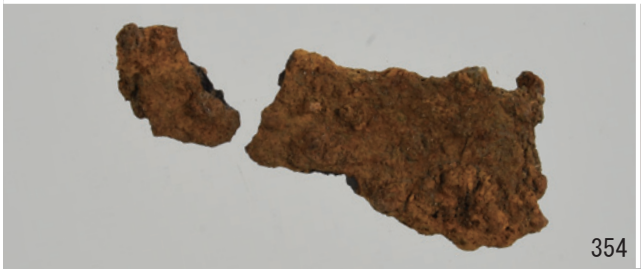
345

347

348

351

353


354

355

下瑞光寺地区（2区）出土遺物（15）

356
357
358
359
362
363
364
365
366
368
369
370
371

報　告　書　抄　録

ふりがな	しもつりょういせき４（おきのした２ちく、しもずいこうじちく）	
書名	下津令遺跡４（沖ノ下２地区、下瑞光寺地区）	
副書名		
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	
シリーズ番号	第98集	
編集著者名	宮下孝優　上山佳彦　井上広之　西尾健司 中里伸明	杉原和惠
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	防府市教育委員会
所在地	〒753-0073	〒747-0808
	山口県山口市春日町3番22号	山口県防府市桑山２丁目１番１号
	TEL 083-923-1060	TEL 0835-25-2532
発行年月日	西暦2017年3月24日（平成29年3月24日）	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下津令遺跡（沖ノ下２地区）	山口県防府市大字台道	352063		34°　02′　54″	131°　28′　40″	20160425 ～ 20160713	745㎡	ほ場整備
下津令遺跡（下瑞光寺地区）	山口県防府市大字台道	352063		34°　03′　08″	131°　28′　26″	20160502 ～ 20161031	5,817㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下津令遺跡（沖ノ下２地区）	集落	古墳～中世	掘立柱建物３棟、柵列５列、井戸４基、土坑13基、溝11条、柱穴約260個	土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、木製品	掘立柱建物で構成される中世の集落を検出
下津令遺跡（下瑞光寺地区）	集落	古墳～古代・中世	竪穴建物１棟、掘立柱建物６棟、柵列１列、井戸８基、墓２基、土坑77基、溝30条、性格不明遺構９基、柱穴約2,390個	土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、輸入陶器、刀子、鉄釘、滑石製模造品、土製支脚	古墳時代後期の竪穴建物１棟 中世の掘立柱建物、井戸、墓、土坑、溝などで構成される中世集落を検出 象嵌青磁や朝鮮陶器瓶等が出土

要約

下津令遺跡沖ノ下２地区は、中世を主体とする集落跡である。掘立柱建物、柵列、井戸、溝からは須恵器、瓦質土器が出土した。平成25年度調査の沖ノ下１地区の西側に隣接しており、中世集落の範囲がさらに西側へ展開していることが明らかとなった。

下瑞光寺地区は、古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。古墳時代の竪穴建物から土師器やカマドに設置された土製支脚が出土したほか、平安時代の井戸から須恵器、中世の掘立柱建物や遺物包含層から瓦質土器、輸入陶磁器などが出土した。

竪穴建物１棟はカマドをもち、出土遺物から古墳時代後期と推定される。古代では、井戸と炭化物を含む土坑を確認した。中世では、室町時代の掘立柱建物群を確認したほか、土坑墓２基を検出した。掘立柱建物・井戸・柱穴群は溝で区画された範囲内に分布が集中する。

出土遺物から、13世紀後半から16世紀に至る中世の幅広い時期にわたって集落が存続していたことが明らかとなった。象嵌青磁や朝鮮陶器瓶、茶壺や茶臼などの威信財と考えられる遺物も含まれていた。

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第98集

下津令遺跡４

2017年３月24日

編集・発行　公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号
防府市教育委員会
〒747-0808　山口県防府市桑山２丁目１番１号

印　　刷　山口印刷工業株式会社
〒753-0043　山口県山口市宮島町５番11号